

清朝の
史跡を
めぐって

II

アムール 流域篇



細谷 良夫 編著

序文

細谷 良夫

漢族の歴史の舞台となった大河といえば、北の黄河と南の長江が挙げられよう。一方、秦王朝による漢土の統一によって開始される漢族の歴代王朝と、遼王朝の漢土支配に始まり、金、元、清王朝へと続く非漢族の王朝との境は万里長城とされる。そして長城の内側（南）は華、外側（北）は夷の世界であり、境界を為す長城の外側は一括して辺境とみなされる。漢土を中軸に据えた視点からすれば、アムール川・黒龍江⁽¹⁾は辺境を流れる大河に過ぎないのであろうが、東北アジアを基盤として形成された非漢族の政権、とりわけ後金国・清朝政権を検討しようとする視点に立つならば、それとは別の観点が浮かび上がってくる。

すなわち遼河流域で建国した清朝は黒龍江の支流である松花江流域の満洲族を組み入れ、やがて黒龍江本流に居住する諸民族のみならず、中流域に北から流入する精奇里江（ゼーヤ川）流域の人々をも新満洲として政権内部に組み込んでいった歴史がある。さらに清朝政権は黒龍江流域に侵出してきたロシアとアルバジン（雅克薩）などの地で抗争し、その結果、黒龍江の全流域を支配領域としたが、清朝末期にはヨーロッパ勢力の侵出に抗しきれないまま、黒龍江左岸と烏蘇里江（ウスリ川）右岸、ハバロフスク以北の黒龍江流域がロシアの支配下に置かれることとなった。このような歴史を念頭に置く限り、黒龍江を漢土辺境の大河と看過することはできない。

清朝史研究の一環として、1986年に清朝政権発祥の地であるヘトゥ・アラ城を訪れて以来、毎年のように清朝政権の基盤となった中国東北部で、今も残されている城址遺跡や満洲族の中核をなした建州女直と海西女直、そしてその周辺に位置付けられ新満洲と総称されるソロン、そしてダウール（達斡爾）、エヴェンキ（鄂温克）、オロチョン（鄂倫春）、ヘジェン（赫哲）等の人々を探訪し続けてきた。この過程で、遼寧省を貫通する遼河流域に育まれた建州、イェヘ・グルン（葉赫国）の歴史と文化は、吉林省と黒龍江省を横断する松花江流域にあったウラ・グルン（烏拉国）のそれとは相違すること、遼河流域の文化はむしろ黄河流域の文化と相似していて、松花江流域の文化とは相違するのではないかと考えはじめた。そしてその違いを確かめようと、松花江の支流である嫩江へ、さらには黒龍江流域の黒河や愛琿へ足を伸ばしたのである。

このような踏査の延長線上に、嫩江や松花江、そして黒龍江・アムール川の踏査が浮かび上がってくる。黒龍江・アムール川をめぐるのは、黒龍江城のあった瑗琿のみならず、清とロシアが対立抗争したフマル（呼瑪爾）やアルバジン（雅克薩）、その抗争をめぐる両国が会談したアムール川の上流シルカ川にあるネルチンスク（尼布楚）、さらにはその条約によって清口の国境とされた黒龍江左岸と、レナ川流域を分ける外興安嶺スタノヴォ

(1) 中国とロシアの国境を流れるこの川をめぐる、ロシアではアムール川、中国では黒龍江と呼称が相違する。以下ではロシアを中心にする場合はアムール川、中国を中心にする場合は黒龍江と称し、両国にまたがり併称する必要のある時は、主体となる国の呼称を先に示している。

イ山脈など、アムール川流域には訪れたい地域が数多くある。しかし黒龍江・アムール川が中国とソ連の国境、中ソの対立線として厳存し、今なお黒龍江上の数多くの島（中州）が両国の係争地のまま残されている以上⁽²⁾、踏査は望むべくして行えない課題であった。しかし中国の現代化の進展、ソ連の崩壊とロシア連邦の成立などにともなう国際情勢の変動が味方したのであろうか、2000年から2005年に至るまでの間、アムール川の最上流にあるネルチンスクからアムール川の最下流にあるニコラエフスク・ナ・アムーレまでの地域に、数年かけて足を踏み入れ、その地の史跡を探訪することが出来た。

本書は、このような踏査記録を「アムール川・黒龍江流域篇」と題してまとめたものであるが、その内容はロシア領内のアムール川本流を訪ねた、細谷良夫、柳澤明の記録を中心とするものであり、併せて、アムール川探訪の前史をなす黒龍江流域をめぐる1990年から1995年の踏査記録の中から、黒龍江・アムール川、そしてウスリ川に関連する記録、そして2011年に実施されたアムール川流域ならびにサハリンの調査に関する加藤直人の記録も併せて収録した⁽³⁾。なお、本書の主要部分については、東北学院大学アジア流域文化研究所『アジア流域文化論研究』に掲載されたものであり、同研究所の許可をいただき、加筆訂正の上転載した。同研究所に感謝する次第である。

以下に各論の題目、そこに赴いた年月、既に報じたことのあるものについては、原掲の誌名を記しておく。

第1章：齊齊哈爾と黒河（1990年8月）

細谷良夫：書き下ろし

第2章：大興安嶺地区に暮らす人々（1993年8月）

細谷良夫：書き下ろし

第3章：黒龍江、ウスリ川沿岸調査（1995年8～9月）

細谷良夫：書き下ろし

第4章：アムール川下流域の旅（2000年8月）

原掲：細谷良夫「黒龍江アムール川下流域の旅」

『満族史研究通信』第10号、2001年4月

第5章：ゼーヤ川とブレヤ川、ブラゴヴェシチェンスク周辺の探訪（2003年8月）

原掲：細谷良夫「ゼーヤ川とブレヤ川、ブラゴヴェシチェンスク周辺の探訪」

『アジア流域文化論研究』IV、2008年3月

第6章：アムール上流域調査—アルバジンとスタノヴォイ山脈—（2004年8月）

原掲：柳澤明「2004年夏アムール紀行—アルバジンとスタノヴォイ山脈—」

『満族史研究』第4号、2005年6月

第7章：ザバイカル調査—ネルチンスクとウラン・ウデー（2005年8月）

原掲：柳澤明「2005年夏ザバイカル紀行—ネルチンスクとウラン・ウデー—」

『満族史研究』第5号、2006年9月

第8章：ブラゴヴェシチェンスクの鐘—江東六十四屯の遺物をめぐって—

原掲：加藤直人「瑯珲条約をめぐる露清関係—江東六十四屯の遺物をめぐって—」

(2) ロシアと中国の国境線としてのアムール川・黒龍江とウスリ川・烏蘇里江を現地調査した優れた報告として、岩下明裕『中・ロ国境4000キロ』（角川書店、角川選書351、2003年）がある。

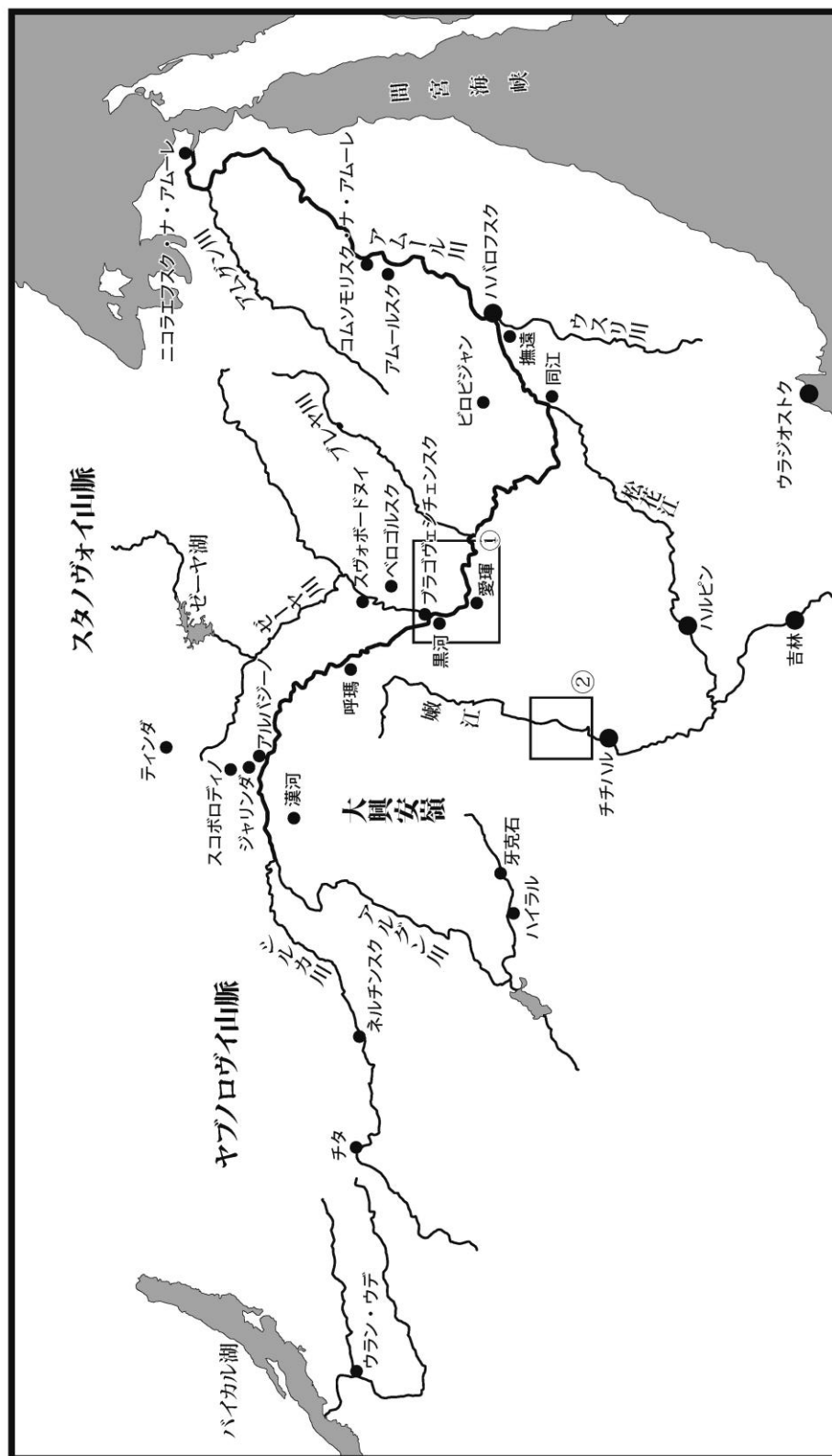
(3) 当地に赴いた1990～95年と現在では、ここ30年の間急速な変貌を遂げる中国の今を考えると、現地の状況がまったく変わってしまったことは十分に考えられる。史跡を含めた以前の状況を伝えることにも意味があるので、当時の記録を記した。

『日本大学文理学部人文科学研究所紀要』第 69 号、2005 年
第 9 章：アムール河口からサハリンへ（2011 年 8 月）
加藤直人：書き下ろし

なお、各論に掲載した写真、地図、作図などは、特に断りのない限り各論の執筆者が撮影、作図したものである。

《附記》

本書の編者である細谷良夫先生には、2021 年 6 月 23 日、道山に帰された。最後まで本書の刊行を気にかけられ、細かい指示も頂戴して編輯作業をすすめていた中でのことであった。本書は、その細谷良夫先生の指示にしたがい、加藤直人（日本大学名誉教授）、柳澤明（早稲田大学文学学術院教授）、そして松重充浩（日本大学文理学部教授）が編輯補助を行って完成したものである。ただ、何か誤り等がある場合は、加藤以下の責任である。また刊行にあたっては、東洋文庫研究部會谷佳光主幹研究員、相原佳之研究員より多大なご援助をいただいた。また、本書のレイアウト、校正、図版作成・整理等については、日本大学文理学部臨時職員である園川直美氏の全面的なご支援を得た。ここに記して感謝の意を表したい。



アムール川・黒龍江流域略図

※拡大図①：第1章 17 頁、拡大図②：第2章 36 頁参照

目次

序文	i
目次	vi
第 1 章 齊齊哈爾と黒河（1990 年 8 月）	1
第 2 章 大興安嶺地区に暮らす人々（1993 年 8 月）	29
第 3 章 黒龍江、ウスリ川沿岸調査（1995 年 8～9 月）	55
第 4 章 アムール川下流域の旅（2000 年 8 月）	83
第 5 章 ゼーヤ川とブレヤ川、ブラゴヴェシチェンスク周辺の探訪（2003 年 8 月） ..	109
第 6 章 アムール上流域調査 ―アルバジンとスタノヴォイ山脈―（2004 年 8 月） ..	125
第 7 章 ザバイカル調査 ―ネルチンスクとウラン・ウデー（2005 年 8 月）	143
第 8 章 ブラゴヴェシチェンスクの鐘―江東六十四屯の遺物をめぐって―	165
第 9 章 アムール河口からサハリンへ（2011 年 8 月）	169

黒龍江省地図



第1章

齊齊哈爾と黒河（1990年8月）

はじめに

細谷のほか、松村潤（日本大学。所属は当時。以下同じ）、中見立夫（東京外国語大学）、加藤直人（日本大学）、王禹浪（哈爾濱市社会科学院）、呉文銜（北方文物雜誌社）、曲守成（北方文物雜誌社）、馬名超（哈爾濱師範大学）が参加した。今回の調査目的は、黒龍江省における清朝史跡および歴史資料保管状況の確認と、富裕県三家子、黒河地域に暮らす満洲語を保持する人々の現状について記録することである。

1990年8月8日

10時35分、定刻を15分ほど遅れ、北京空港を離陸。11時51分、哈爾濱空港に着陸。

空港へは北方文物雜誌社の呉文銜氏などが出迎えてくれる。この度の調査にあたって哈爾濱師範大学の馬名超教授が通訳をつとめていただけることになる。馬先生は、この地域における民間文学研究の第一人者である。

昼食後、未開放地域への入境申請や滞在日程の調整を行う。今回の調査は、北方文物雜誌社、黒龍江省文化局等の協力をいただいております、呉文銜氏らと綿密な打合せをした。

1 哈爾濱の研究機関

◆黒龍江省博物館

14時半から黒龍江省博物館を訪問する。黒龍江省博物館保管部主任傅文江氏と同副主任賈鳳改氏の出迎えを受ける。同博物館では、資金難で展示スペースが閉鎖中のため、保管倉庫の一室で同館の概略説明を聞く。それは以下のとおりである。

博物館の建物は1980年以前のものであり、修理が必要であるが資金不足から進展していない。博物館は自然博物館を基礎として発足し、1930年代には奥田通栄氏が館長を勤め、烏居龍蔵氏も訪れている。

本館は、自然部門と歴史部門とに大別される。展示品は、①自然標本（マンモスの標本が代表的）、②歴史文物（アヘン戦争以前）、③芸術関係に分けられる。歴史文物では、1988年に発掘した金代の完顔氏墓の副葬品もここに収蔵されている。清代の収蔵品も多い（満族関係のものかどうかは不明）。

なお、傅主任は錫伯族であるが、錫伯名は不明であり、福州から哈爾濱に移住した経歴を持つとのことであった。

概略の説明の後、本博物館の収蔵品を代表する銅鏡と銅印を見る。

銅鏡

「双魚紋銅鏡」（阿城出土）

「仙鶴人物鏡」（阿城出土）

「蔵文銅鏡」(清初)

銅印

「管轄科爾沁右翼郭爾羅斯后旗札薩克之印」康熙二十五年四月（印面は蒙文と満文で官職名を記し、康熙二十五年四月の年記がある）。上側面に「dorolon i jurgan araha」とある。

「黒龍江正黄旗満洲第二佐領図記 sahaliyan ulai gulu suwayan manju jai nirui temgetu」側面「乾字一万三千六百九十七号 禮部造 dorolon i jurgan araha 乾隆三十二年十一月」（同所：第 21 号）

「黒龍江鑲白旗満洲第一佐領図記」（同所：第 22 号）

「黒龍江正黄旗索倫第三佐領図記 sahaliyan solon ilaci nirui temgetu」（同所：第 23 号）

「遼東路転運司之印」（金・大安元年〈1209 年〉九月）

「副統之印」（金・貞祐五年〈1217 年〉）

「奪與古阿鄰謀克之印」（東夏・蒲鮮万奴により頒発されたものか。天泰七年〈1221 年〉十二月 小府監造）

新満洲佐領の印やジャサクの印は珍しい。これらの銅印は、すでに黒龍江省文物考古隊編『黒龍江古代官印集』（黒龍江人民出版社、1981 年）に詳細に報告されている。

続いて完顔晏墓の副葬品を見る。

金代齊国王墓副葬品

1988 年 5 月に発掘された夫妻合葬墓は、その副葬品に「太尉儀同三司事齊国王」の墨書木牌、「太尉開府儀同三司事齊国王」の銀銘牌が出土したことから金代齊国王完顔晏夫妻の墓と推定されている。博物館に保管されている同墓の副葬品の中で、定温室に保管されている男性「八層十七件」、女性「九層十六件」の着衣類を見たが、これらの衣類のほとんどは土中で腐乱、変色することなく、錦糸の縫い取りが施されるなどの見事なものである。北方民族独自の服装様式も見受けられるというこれらの衣類は、金代文化のレベルの高さと独自性を示している。また、同墓発掘の詳細な状況は考古研究所でも聞くことができたが、黒龍江省文物考古研究所「黒龍江阿城巨源金代齊国王墓発掘簡報」（『考古』1989 年第 10 期）に報告がある。

ただ、博物館の地下の保管倉庫は、空調設備があるとはいえ、文物保管に適切な施設とはいえないものであった。倉庫内には木製の簞笥状の戸棚が作られ、その引き出しの中に、墓の副葬品である衣類が絹布で挟まれて保管されている。担当者も今後の保存が心配であるという。

8 月 9 日

◆黒龍江省檔案館

8 時 40 分、出発。黒龍江省檔案館に向かう。盛彦檔案局長と檔案局第二処長申氏（中国政治史）などが出迎えてくれる。所蔵檔案の概略を聞いた後、檔案庫に入れてもらい、康熙二十三年檔案＝「奏摺の副本」などを見る。檔案を実見した後、さらに話を聞く。

盛氏による黒龍江省檔案館の概略は、以下のとおりである（王文義氏が補足）。

檔案館設立の過程と所蔵檔案の概略

①1957 年に開館の準備を始め、1964 年に正式に開館した。

②三中全会による檔案法以後に方針が変更された。檔案法に基づき整理・分類を行い、

学者に開放する方針であるが、整理は歴史的な原因で進んでいない。開放部分は全体の三分の一程度である。

- ③最近二年間に外国人の来訪が頻繁である。（全7回で、うち日本人は3回目）
- ④檔案資料総数 35 万件冊。1945 年以前の檔案 20 万件冊、史料 2 万冊。清代檔案、1945 年以前の檔案・史料の三分の一程度。黒龍江將軍衙門檔案は 43,000 件冊。半分は満文檔案、残りは満漢合璧と漢文檔案である。年代の最も古い檔案は、康熙二十三年の檔案である（將軍衙門設立の翌年からある）。康熙二十二年、二十六年、二十八年檔案は存在しないが、その理由は不明。但し、康熙二十二年に黒龍江將軍衙門が設立されたのでこの年の檔案がないことは不思議ではない。

黒龍江將軍衙門檔案を中心とする所蔵檔案の経緯

黒龍江將軍衙門檔案は、1900 年（光緒二十六年）義和団事件の際、ロシアが接收した。1956 年、ソ連が返還して北京の中国第一歴史檔案館に保管され、1972 年、光緒二十六年以前の檔案は、東北檔案館に保管された。1975 年、東北檔案館（遼寧省檔案館）から本館に省関係檔案が返還された。遼寧省檔案館から返還された檔案も相当に混乱している。愛琿条約にまつわる檔案など、全中国に関係する檔案もある。39～40 万件が本館に移送されたが、三姓檔案や双城堡檔案は未だ返還されていない。本館に到着後、黒龍江省各県に係わる檔案は、関係各県の檔案館に返還した。黒龍江將軍衙門檔案本体は、1985 年、北京の中国第一歴史檔案館から返却されたが、一部分はまだ北京にある。

ロシア接收の檔案は接收期間にロシア、ソ連が檔案を整理している。即ち、年代と機構（戸司、兵司など）ごとに 1 冊 1 件としロシア語の目録が作成された。満文檔案はロシアに満文を解説するものが少ないためか、檔案の表題・目録部分による整理で簡単な目録にとどまっている。

具体的には「中国ロシアの交渉関係の処置」「官員履歴冊」などの表題を整理しているが、そのため「右司来文」「左司来文」など内容が不明の目録にとどまっている。

ロシア、ソ連でも破損修理を実施しており、檔案各冊を裏打ちし、一冊ごとにハードカバーされていた。

中東鉄路の檔案もあり、現在整理編纂中である。満洲国時代の檔案はいちばん不完全である。康德十二年八月以後の国務院による檔案焼却命令が影響したかもしれない。

光緒二十六年以後の 1,628 件は、將軍衙門自身の檔案で、来文檔、行文檔ではない。これによって、光緒三十三年、宣統三年の黒龍江行省公署設置に伴う官制、行政改革の様相が明らかになる。

整理の現状と今後の方針

歴史資料、情報源となるように鋭意整理中である。以前は満文解読可能なものが 2 人いた。その後、中央民族学院から 2 人が派遣された。黒龍江省社会科学院歴史研究所、満語研究所の助力を得て整理してきた。所蔵量と整理量を考えると全部の整理に 1,000 年が必要（2 人で 1 日 1,400 文字の史料を整理することを基準）となる。

以上から詳細な目録提供は不可能である。未整理檔案の閲覧は例外的な措置で、檔案を整理し出版した段階で閲覧に提供する。また、日本所在の関連史料を調査したい希望がある。歴史檔案は積極的に開放したい。計画としては以下の三段階を考えている。

第一段階：目録作成

第二段階：研究価値のある満文檔案の翻訳と出版

第三段階：漢文檔案の出版

黒龍江省檔案館で実見した檔案とその分類記号

康熙二十三年檔案＝「奏摺の副本」など。

檔案分類の形式は以下の三項目で整理されている。

全宗号（分類 93 種類）

目録（朝代別：「康熙」が 1 番）

番号（整理番号）例：「20（全宗号）、1（「康熙」）、……」

◆黒龍江省満語研究所

13 時半、出発。哈爾濱市人民政府の一角にある「黒龍江省満語研究所」を訪問し、その設立由来や活動状況を聞く。所長以下、4 人の小さな研究所である。以下は、現地で確認した同所に関わる事項である。

スタッフ

所長：劉景憲（劉佳氏）

所員：黄錫恵＝助理研究員（黄佳氏）

趙阿平（女性）＝助理研究員（伊爾根覺羅氏・正白旗満洲）

艶平（女性）＝助理研究員（不在）

その他、事務職員が 2 人いる。以前は全 7 人であったが、元の穆曄駿所長が死亡して、後に欠員補充はしていない。

研究所の目的と活動概要

① 消滅しつつある満語の保存と研究

1986、87 年に中央民族学院少数民族系言語研究所と共に嫩江江岸の「三家子」や黒龍江江岸で満語口語を調査した。この結果、録音テープ 50 巻と文字記録を採集した。また、現在『黒龍江満語』を編纂中である。

口語と文語（書面語）は明らかに相違する。また、口語の発音研究を実施中。

② 機関誌『満語研究』（双季刊）の発刊（1985 年創刊）

③ 満語に併せたトゥングース語（ヘジェン、オロチョン、シベ、エヴェンキ語）研究

国内、外の満語研究との交流を実施する。また、口語と文語の語音、文法、単語の規則性比較研究を行っている。文法研究を行っているのは、所長以外の 3 人で、所長は、満洲地名研究を行っている。

④ 黒龍江省檔案館の檔案翻訳

黒龍江省檔案館に満語研究所、黒龍江社会科学院歴史研究所、黒龍江省民族委員会民族研究所の所員が協力し、満文檔案の翻訳作業を行っている。

⑤ 哈爾濱市の満洲族幹部の養成

黒龍江省民族および宗教委員会？に初級 2 クラス、中級 4 クラスの合計 6 クラスの満語教室を開催中である。初級クラスは、発音と満洲文字の書写法中心（4 ヶ月コース）、中級クラスは、文法中心（12 ヶ月コース）である。

⑥ 設立の由来

旧所長の穆曄駿氏は黒龍江省人民政府社会科学研究所の主任であり、清末に金州副都統を務めた穆隆阿の子孫である。彼はそのため黒龍江地区の満語の普遍性と満洲

民族文化の重要性に着目し、さらに満文檔案の存在を評価して社会科学院と党校に働きかけて研究所を設立した

⑦ 発音と満洲語の現状

富裕県三家子では 50～55 歳の人で計喜生、孟憲振の母親、趙金純（彼は満洲語を指導中）などは会話が可能である。その他、愛琿県の藍旗屯、孫吳県の四季屯で口語がそのまま生き残っている。口語と文語の発音はかなり相違し、ū はユー、ユウオ、オと発音し、akū はアコと発音する。また š は r に近い音になる。

所員の趙阿平氏は、覺羅姓の中でも筆者がもっとも興味を有する伊爾根覺羅姓である。ただ、満洲国時代に編纂した家譜などは文化大革命で焼却してしまい、同氏の先祖は清代に北京から金州に移住したこと、そして乾隆九年に「双城堡二十四屯」に屯墾したことが伝えられているのみであり、ここに至る経緯はまったく不明だという。折角、難解な伊爾根覺羅姓の由来が聞き出せるかと思ったが残念な結果であった。

また、劉氏が従事した『崇徳三年檔』について、これ以後の檔案出版の予定を訊ねたが、こちらに来てから『同書』の編纂にはタッチしていないので、詳細は不明とのことであった。ただ、『崇徳三年檔』の原本は中国第一歴史檔案館にあり、北京図書館の青写真本は原本の複写であるという。16 時過ぎに辞去し、今日の予定を終了。

8 月 10 日

朝、歩いて黒龍江省文物考古研究所に行く。同所の十数人のスタッフは若々しく活気にあふれている。以下は、その概要である。

◆黒龍江省文物考古研究所 概略

朱国忱副所長の説明によれば、黒龍江省博物館考古部が発展して考古工作隊と合体し、1985 年に現在の組織となった。副研究員 4 人、助理研究員 8 人を含む 45 人で構成されている。陰徳明所長、朱国忱副所長、張泰湘、譚英杰副研究員などから「重点作業」「最近の発掘状況」「金代阿城齊国墓の発掘状況」「黒龍江地域の文化系統」などについて聞いた。

重点作業

① 金代墓の発掘と整理、②黒龍江沿岸の発掘調査、③中ソ合同の水庫建設に伴う発掘調査の 3 項目である。

最近の発掘

① 「白金宝文化」

60 年代に発掘したが、上層は青銅器が出土する戦国晩期であり、下層は魚骨、動物骨が出土する新石器早期である。

② 「扶余系文化」

房屋、柱穴を伴う住居址を発掘したが、それと共に羊、鹿、駱駝などの動物模様のある土器、棒器、石器、青銅器が出土した。定住と農業に特徴があり、「索離文化」に接続すると推定される。

なお、吉林省の研究者は「西团山文化」を「扶余系文化」と考えているが、これは肯定し得ないという。

③ 「平洋文化」

遊牧文化に属し、2箇所 の墓葬を発掘した。

④ 「八里溝文化」

松花江嫩江流域の遊牧文化に属し、「白金宝文化」と関連すると推定される。

⑤ 「二克浅文化」

墓地を発掘したが、年代の下がった遊牧系文化で、「白金宝文化」の地方的文化の可能性もある。

さらに、黒龍江省は生女真の活動範囲であり、「三姓遺址」や「鄂多里遺跡」なども考古学的検証が可能であるとの言及があった。

金代阿城齐国王墓

同墓は、黒龍江省阿城市巨源郷城子村で農民の家屋新築に伴い発見されたものであり、同研究所が中心になって発掘を行った。発掘状況を記録編集したビデオを視聴しながら説明を聞いた。大定初年の墓葬と推定した根拠は、墓から出土した「開府儀同三司事齐国王……」の木牌と「太尉開府……」の銀牌からである。ミイラ状となった夫妻の遺体は、哈爾濱医科大学の手で保存され、研究が行われている。夫妻の着衣の上には、男衣に「梵字」とも推定される模様が、女衣には「齊」字、「押記」と推定される模様が描かれていて、これらについては研究中である。

8月11日

◆北方文物雑誌社との懇談会

8時55分から、北方文物雑誌社で、懇談会に参加する。雑誌社の概要、および『北方文物』に関する説明があり、同社所属の研究者から、黒龍江省在住の「少数民族」の現状について報告がある。10時半、懇談会が終わる。同社社長の呉文衡氏によると、この雑誌社のビル（博物館の裏手に接続している）は、1904年建築のモスクワ商場であり、1923年に写真展を開催。東省文物研究会が設置され、1928年東省特別区、31年満洲東省特別区、その後、満洲国科学院哈爾濱分院、50年に新中国建国にともない、現状に変更したものとのこと。ロシア語の新聞を多数所蔵しているという。

13時9分、特快に乗り哈爾濱駅を出発する。安達付近から茫漠たる平原をほぼ北西に走る。大慶に近くなると「叩頭機」（原油汲み上げ機を現地ではこう呼ぶ）で石油を汲み上げている光景がほぼ1時間は続く。ドルベト蒙古族自治县付近からは鶴の生息する自然保護区で、沼沢地が続く。いずれにしろただひたすら平らな光景である。

定刻に齊齊哈爾駅に到着。鶴城賓館へ投宿。夕食後に王文化局長と打ち合わせを行う。当地では、齊齊哈爾文化駅の傅惟光氏が全てを手配してくれることとなる。

2 齊齊哈爾の清朝史跡とダウール族

8月12日

早朝から激しい雨。8時3分、出発。昂昂溪遺跡に向かう。齊齊哈爾の町から南下し、濱洲線（旧中東鉄道）を越えて梅里斯区内に入る。区の人民政府に到着する。

◆昂昂溪遺跡

雨は激しくなったが、9時ごろ担当者と同行のジープと共に出発。濱洲線沿いに西に走

り、嫩江を渡る直前のあたり、道の両側に遺跡がある。

9時42分、昂昂溪遺跡に到着する【写真1-1】。嫩江左岸にある氾濫平原の中にA、B、C、D地点の遺跡がみられる。当日は嫩江の増水の影響で、記念石碑があるD地点にはジープが入れず、鉄路と公路の間にあるA地点と貝塚を見学した。

10時19分、遺跡観察を終わり、梅里斯区へ戻る。10時24分、梅里斯区文化館（標高340m。以下、括弧内の数字+mは標高を表す。ただこの数値は、簡易な器機の測定によるもので、あくまでも目安と考えてほしい）へ到着。30分ほど待って、薛文化局長と当地区長の案内を受け、嫩江西岸沿いに北上する。彼らは、8月14日から「黒龍江民族学会」が開催され、18日にはダウール族の民族運動会があるのでぜひ出席するようにとすすめられる。やがて、大齊齊哈爾、小齊齊哈爾の付近に出る。

◆梅里斯区

「梅里斯」とはダウール語で氷を意味する「メスル」に由来し、「メスル」起源の地名は黒龍江省内に3箇所ある。梅里斯区一帯は「精奇里姓」（金姓）が創始した村であるが、この精奇里は黒龍江の支流の精奇里江を指すものである。精奇里姓が梅里斯を創始したことは、彼等が黒龍江から南下して来た事実を示し、その南下の時期は17世紀末と推定されているとのことである。

梅里斯区のダウール族

嫩江流域のダウール族は「莽格吐」を中心に古い文化層を保存している。梅里斯区所管の2郷14村に1万人のダウール族が居住しているが、この人口数は黒龍江省内ダウール族人口の3分の1、全国ダウール族人口の4分の1を占める。梅里斯区人口の30%はダウール族で、ダウール族が村内人口の90%を占める村も4、5村あり、東哈雅村には300戸2千人以上のダウール族が居住している。1960年代に少数民族が圧迫された結果、梅里斯区のダウール族は内蒙古やフルンブイルなどに親族を頼って移住したが、近年の少数民族政策の変化と牧畜を中心にした牧農併用生産という合理的生産手段の採用によって、彼等は旧来の居住地である梅里斯区に戻って来たので、近年になって人口が急激に増加している。

梅里斯区の満族

区内には6千人の満族が居住し二つの「満族居住区」があり、この満族居住区は黒龍江省満語研究所劉景憲氏が調査している。なお、この外に二つの「朝鮮族居住区」と一つの「回族居住区」があるという。

◆齊齊哈

梅里斯区文化局薛局長から、この地域の地名由来について、次のような説明があった。

齊齊哈付近の地名

齊齊哈は現在の「齊齊哈爾市梅里斯区梅里斯郷齊齊哈村」であり、近くには齊齊哈村と行政単位としては平行的関係にある「齊齊哈爾市梅里斯区梅里斯郷西哈雅村」と「同東哈雅屯」があり、「齊齊哈」と「東、西哈雅村」の関係は、古くから「東哈雅西哈雅、中間夾個齊齊哈」と称されているという【写真1-2】。

齊齊哈と齊齊哈爾

「10万分の1」地図に、嫩江右岸に地名のある大、小齊齊哈付近が現在の齊齊哈爾の由

来となった「齊齊哈」であり、「チチハ」はダウール語で「良い牧場」という意味で、近年では「天然牧場」と翻訳しているとのことである。

元来の齊齊哈爾は齊齊哈に柵で囲まれた駅舎が設置されていたものであるが、この駅舎が一夜の大風で木柵ごと嫩江を越えた現在の齊齊哈爾に吹き飛ばされ、それ以後に駅舎は齊齊哈爾に移動したという伝説があり、この故事を「風剔卜魁（奎）」というとのことである。この伝説は、始めは嫩江右岸の齊齊哈がダウール族の居住地として栄え、清朝の松嫩平原支配に伴い、拠点が嫩江左岸に移動したことを示すもののようである。

雨の中をダウール族の民家を撮影して齊齊哈爾の町へ戻る。12時過ぎに到着する。午後は、齊齊哈爾市文物管理站傅惟光氏の案内で、齊齊哈爾旧城を見る。

◆齊齊哈爾旧城

概要

齊齊哈爾城は内城と外城で構成されている。内城壁は磚で外城壁は土で築かれていたとのことであるが、共に残存していない。内城は1辺300mときわめて狭いものであり、外城も外城壁があった場所を示してもらったが、内城壁から500m程外側にあったようで、全体が小規模な城である。

將軍の私宅であったという「大人府」の一郭に旧来の建築が一部分残存している。ただ、齊齊哈爾市の史跡に詳しい傅氏に史跡の概況を地図に描いていただいたが、「將軍府」「大人府」「副都統衙門」の位置関係は明瞭には把握し得なかった【写真1-3】。また、その折に氏が持参した『黒龍江省齊齊哈爾市地名録』には同市史跡の概略が記されているようであり参考になりそうであるが、將軍府や副都統衙門は載せられていないらしい。これらの建築遺址については齊齊哈爾市図書館蔵『龍城旧聞節刊』が参考になるであろうという。

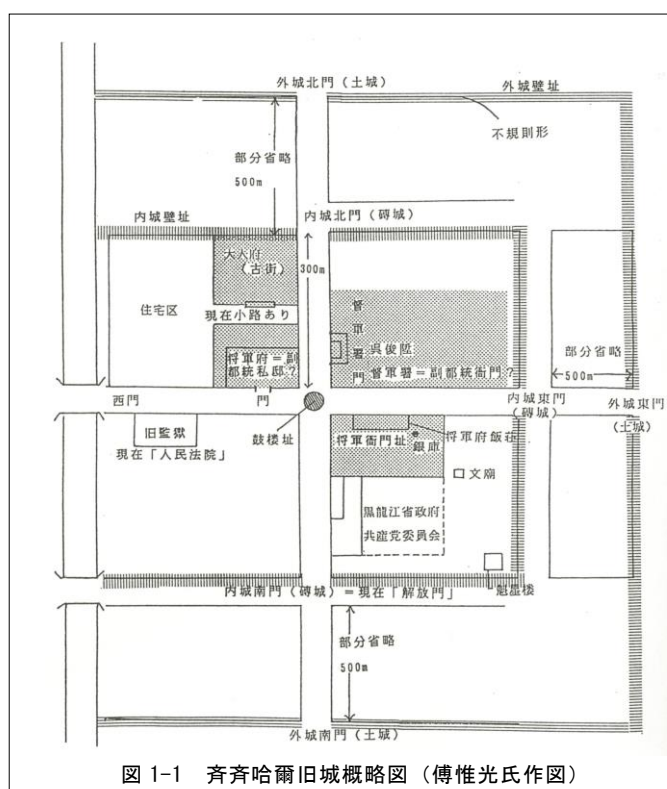


図 1-1 齊齊哈爾旧城概略図（傅惟光氏作図）

旧監獄

現在の「齊齊哈爾市中級人民法院」のある場所が旧監獄とのことであるが、どの時代の監獄であるか不明のままである。

將軍府遺址

市の中心部の交差点角にあったというが、建物などは何も残存しない。「將軍府」があったという場所には「將軍府飯莊」の看板を掲げた店があり【写真1-4】、昔を偲ばせている。

「将軍府飯荘」の裏手にある石造りの建物は旧城の「銀庫」であったとのことである。

将軍府があったとい
う左手奥にある一棟が
「孔子廟」である。付近
には孔子廟にちなむ
「文廟胡同／32」と記
された地名表示が見受
けられた。



将軍府と道路を挟んだ向かいにあり、ここは後に呉俊陞の「督軍署」となったとのことである。しかし「副都統衙門」は大人府の私宅と同じ場所であるとの説明もあり明瞭ではない。

交差点を挟んで将軍府の対角にあり、昔を偲ばせる門が残存している。敷地の内部には古い建物群があり、ここは「古街」と呼ぶとのことである。当地の枯れかけた太い古木は、清朝時代からここにあるという。大人府は将軍の私宅との説明であるが、副都統の公私宅のようでもあり十分確認していない。

齊齊哈爾の清真寺は、ト奎清真寺と呼ばれ、壮大な規模を有している【写真 1-5】。康熙二十三年（1684 年）の創建に係わり、黒龍江省級文物保護単位となっている。三層の漢式ミナレットを備えた建物群は修復されている。たまたま寺内の黒板を見ると「熱烈歡迎雲南代表団」と記されていた。中国国内のイスラーム教徒同士間の広範囲な交流を示している。

清末の黒龍江将軍程徳全にちなむ公園で、園内には、清末愛琿生まれの黒龍江将軍壽山を祭った壽山祠【写真 1-6】があり、半分折損した壽山の石碑が建っている。また、関帝廟【写真 1-7】もここに「移築」されているが、いずれも新しいもので、文化財的な価値は少ない。

8月13日

◆齊齊哈爾市立図書館

9時5分、齊齊哈爾市立図書館へ。古籍部門は一般部門と別に龍沙公園の中にある。王館長は本来古籍整理の専門家であるが、今日は不在であった。館内で館長代理から説明を聞く。内容は以下のとおりである。

本館は1906年に開館した。黒龍江省内で一番古い公共図書館であり、全国でも湖南、浙江、湖北省立図書館に続く古い市立図書館である。1945年以来発展を重ねた。1949年から54年は黒龍江省人民図書館、1954年に省が合併し、以後は齊齊哈爾市立図書館となる。蔵書数95万冊内古籍は11万冊で、10部門に分かれる。古籍特蔵部には善本珍本が500種余り保管され、国家級の善本は300種5,000冊が所蔵されている。本館の蔵書は図書館設立とともに購入、交換、あるいは収集したものであり、なかには個人蔵書をまとめて受け入れたものもあるが、特定の蔵書群等を引き継いだものではない。

特蔵部は余り利用されていないが、目録カードもある。光緒二十六年の事件（義和団事件）でロシアに掠奪されたことは明らかで、本来はもっと多かったと思われる。

また、劇本「龍沙劍伝奇」を1978年に発見した。

説明を受けたのち、古籍部門のカードを検し、2件の満文写本を見出す。

○240—91「黒龍江各地官員職銜冊」満文 清抄本 6冊

これは、齊齊哈爾、愛琿、墨爾根等の職員の設定、給与などを乾隆から道光十三年まで記録したもの。

○260—71「黒龍江事宜」光緒二十二年 紅格本 抄本 4冊

各冊に満文タイトルがある。内容は設定、給与などが記されている。

他に、『依蘭県志・琿琿県志・樺川県志』（上・下）民国九、十二年刊、油印本が参考図書で展示されていた。また、『東北地方文献』長春市図書館、1984年10月、も気になった。

齊齊哈爾市図書館での調査を終え、富裕県に出発するまでの時間を利用して、旧街に入ってもらい、昨日見た將軍府、將軍衙門を地図と対照して確認する。

3 富裕県三家子の満族

◆富裕県

齊齊哈爾駅へ行き、16時6分発の列車（普快）に乗る。17時10分、富裕駅に着く。齊齊哈爾の傅惟光氏も同行してくれる。駅の東側にある北原賓館に入ると、当地の人民政府、文化局の関係者の来訪を受ける。

夕食後、鄭化寧氏（富裕県老幹部局）から呉三桂にまつわる以下のような話を聞く。

ここは嫩江流域の牧畜生産の拠点である。三藩の乱の平定後に、呉三桂配下の壮丁は富裕を中心に駅丁として使用された。このためこの地方には現在でも雲南、貴州の服装や習慣が残っており、言語も相違する。また、この地方には「呉三桂伝説」もある。しかし、呉三桂が雲南で鑄造した「昭武通宝」や、「官印」などは発見されていない。

また、当地人民代表の姜氏によれば、富裕と呉三桂との関係について、『北方文化』誌に論文があり、当地にこのような部落は4つ確認できるという。ただ、彼も呉三桂鑄造の銭はまだ見つかっていないという話であった。

8月14日

◆富裕県三家子

7時16分、宿舎（310m）を出発して、泥濘の道を飛ばす。大登科、小登科を經由して、8時10分、三家子（300m）に到着する【写真1-8】。かなり大きな村である。三家子村民委員会事務所には「富裕県／友誼達満柯民族郷／三家子村民委員会」という看板が掲げられている。すなわち、このあたりはダウール族、満族、そして柯尔克孜族の「民族」聯合郷のようであるが、当日はそのことに気付かず、友誼郷の具体的な状況について確認することができなかった。

小学校校長の計春生、村長の計双柱両氏に説明を受ける。以下はその内容である。

三家子村概況

三家子村の概況⁽¹⁾であるが、人口1,070人。満族は65%。満語をしゃべる人は満族の40%であるが、レベルは低い。伝統的な満語を話せるのは40%中の30%で、残りの10%は子供の時から習った学習満洲語である。なお、彼等は満語会話を行うが、文字を書くこと、文字を読むことはしないようで、黒龍江省満語研究所で教育を受けた計春生氏が村で唯一読み、書き、そして話すことができる人であるという。

三家子の村の起源は護城部隊で、サブス（薩布素）が派遣した齊齊哈爾水師營と一緒に派遣された子孫である。この地は、齊齊哈爾將軍府を取り巻く100里周辺に設けた部隊で、康熙二十二年に駐屯を開始した。康熙三十八年に、薩布素によって派遣された軍隊が駐屯した。

以上はこの校長である計春生氏の話であるが、ところどころ見解が相違するようで、彼らの間で議論が始まる始末であった。嫩江の岸（現在の三家子村から西北に7華里）＝イラン・ボー ilan boo（満洲語で「三軒の家」の意）が本来の駐屯地であったという話もあった。

また、正旗は旧満洲で鑲旗は新満洲であり、また、隨旗も新満洲という。この新旧満洲の間には風俗、習慣、信仰の差はまったくないが、旧来の住地の違いから「香碗」だけがそれぞれ相違する、という情報も得た。

三家子の満族諸姓

三家子の満族には6姓があり、姓ごとに八旗の所属旗と新・旧満洲に分かれている。これには相当の異論があり、細谷、松村が室内で計春生氏の説明を聞いている間に加藤は外で村民から異論の聞き取りを行った⁽²⁾。

計氏の説明では、以下のとおりである。

- ①計姓 正黄旗の旧満洲で吉林「長白山頭道湖」出身で、「満・漢文家譜」を所有している。
- ②孟姓 鑲黄旗に属するが隨旗であり新満洲である。
- ③関姓 正黄旗に属する旧満洲である。
- ④呉姓 正藍旗に属し、「大登科」のダウール村に移住した。
- ⑤富姓 正黄旗に属する。
- ⑥自姓 満族であるかどうかは不明で、錫伯族か赫哲族の可能性もある。

(1) 三家子村の満族の状況については、金啓琮『満族的歴史与生活』（黒龍江人民出版社、1981年2月）を併せ参照されたい。

(2) 加藤直人「富裕県三家子村調査記録」『満族史研究通信』創刊号、1991年11月、参照。

以上の説明を得たが、説明の最中に姓と旗属が確かではなかったので、改めて計氏に村の満族の姓を満文で書き、漢姓を加え、各姓の旗属、新旧満洲の区別などを書いてもらった。その結果は以下の通りである。

満文姓	漢文姓	旗色	新・旧満洲
gibuts'o 計布初	計	正黄旗	旧満洲
tookoro 托胡魯	陶	鑲黄旗	新満洲
mengcira 孟計来	孟	鑲黄旗	新満洲
guwalgiya 瓜爾加	関	正黄旗	旧満洲
烏魯木(斉)期	呉	正黄旗	旧満洲
aisin gioro 愛新覚羅	趙	正黄旗	旧満洲
fulgiya	富	?	

なお、上記は計氏が書いてくれたものそのままであり、「烏魯木（斉）期姓」には満文姓の満文表記がなく、「fulgiya」姓には漢字表記がない。また、口頭の説明とも相違しているので、旗属と新旧満洲の区別は共に確かなものではない可能性がある。計氏によれば、「正旗」は旧満洲で、「鑲旗」は新満洲であり、「随旗」も新満洲である。新旧満洲の間に風俗、習慣、信仰の差は全くないが、旧来の住地の違いから「香碗」の供える数などが相違するという。

計姓家譜

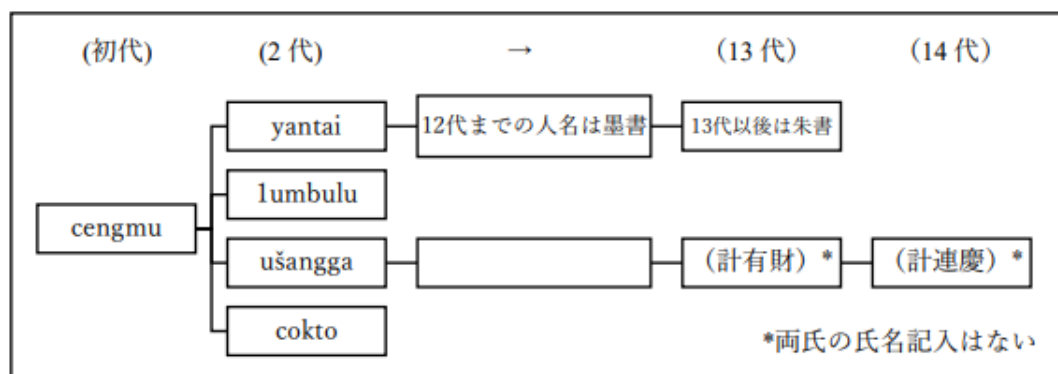
計姓に「満漢文家譜」が所蔵されているとのことなので、家譜の閲覧を希望した。交渉した結果、家譜の写真撮影をしないという条件で、文化大革命中の迫害に遭遇しながら保存されてきた計連慶氏【写真 1-9】所蔵の「計姓家譜」を閲覧することができた。

家譜のサイズは横 1m、縦 1.5m 程の高麗紙に書かれた「牌単」形式である。家譜は満文で記され、冒頭には道光十九年に家譜を作成した由来などが記されているが、汚れて読み取れない部分もある。

家譜所蔵者の計連慶氏は 2 代祖の「ušangga」の系譜に属する第 14 代孫であり、同氏は父親の計有財氏から家譜を伝えられたという。家譜の概要は以下のとおりである。

šanyan alin girin ula ci jihe/ doro eldengge juwan uyuci aniya
jakūci/ jalan siran faklaha (faksalaha?) juwe biyai orin buha?

「系図」



伝説

ここには、明との戦いで敗戦しそうな時に、ゴシン（狗神＝犬の魚）が現れて、それによって助かった。そのため陶姓はゴシンと魚を供えるという伝説があり、今も木で作った魚を供え、ゴシンは家の屋根の二櫨子（桁）に供えるが、今はまったくない。

ムクンダ、ガシャンダ、そしてシャマン

ムクンダ mukūn (i) da（族長）は数年前に死亡して今は存在しない。即ち、陶姓は八旗の統制外にあり、陶姓だけで一部落を形成していたので、この部落を治めるために、清朝では馬三匹を賜予し、ムクンダを陶姓に世襲させるという特別政策で待遇した。このような政策は、清代半ば（乾隆）から光緒年間まで続いた。その他、陶姓以外にもムクンダはいるが、それは世襲ではない、ガシャンダ gašan (i) da（村長）はいない。ガシャンダとは別に輩ごとに指導者を選んでいた（もしかするとムクンダとガシャンダが混同されている可能性もある……筆者）。また、シャマンは以前にいたが、亡くなった。

◆満洲語使用の実態

話を聞いた後、同村内における満洲語の保持概況の調査を行う。まず孟兆坤氏（81歳）【写真 1-10】のところに行く。かれは正黄旗だという。ただ、老齢のせいか余り話さない。家には竈が3つありそれがオンドルになっている【写真 1-11】。この竈を漆喰で白くしておくのが満族の習慣という。

続いて不明氏の家。ここの老人（女性）は、満洲語を話してくれるが、聞き取れない。字は書くことができず、会話のみ可能とのこと。彼女によれば、新中国になり、満洲語の使用が馬鹿にされて廃れたという。

三家子の満洲語教科書

三家子村で使用されている満洲語教科書（複写）の提供を受けた。その概要は、以下のとおりである。

表紙：manju gisun i tacibure bithe jai debtelin（満語教材「試用本」）

奥付：bithe toktoho erin／1987 ci aniya duin biya／manju hergen／第一冊（奥付の満文は右から左に書写され、表紙満文と奥付漢文に相違がある）

表紙：manju gisun i tacibure bithe jai debtelin（満語教材「試用本」）

奥付：bithe banjibume／toktoho erin／1988ci aniya ice biya／manju hergen／第二冊

11時11分、三家子村を辞去し、帰路につく。12時半ごろ、北原賓館に帰る。

◆富裕県図書館展示室

展示があるということで県の図書館に行く。ここで若干の文物を見る。ここに「將軍墓地の石碑」という写真が展示されていたが、現物は農民が破壊したとのこと。

齊齊哈爾に帰るべく富裕駅に行く。駅前には馬車とジープが並んでおり、これらがタクシー一代わりとのことである。嫩江平原の道がいかによくないかが理解できる。

富裕からの快車は、定刻より少し出発が遅れたが、1時間足らずで齊齊哈爾へ到着する。ホテルまでの途上、現地の清真寺に寄る。齊齊哈爾滞在中に我々のために走り回ってくれた傅惟光氏に感謝を込めて夕食をともにする。

8月15日

7時、齊齊哈爾駅に向かう。乗車した8時20分発40次特快は、齊齊哈爾以後、大慶のみに停車する特急で、東ドイツ製の快適な車両であった。往路より30分ほど早く、12時6分、哈爾濱駅に到着する。昼食後、民族博物館（孔子廟）へ行く。

◆黒龍江省民族博物館（孔子廟）

去年は未完成であった文廟は、右側の一角を除きほとんど修復が完成し、大殿では孔子の一生とその価値を掲示している。批孔時代には考えられなかったことであろう。民族博物館は昨年とほとんど同様の展示であり、今後に拡大する予定との話もあった。この哈爾濱文廟の建設は比較的新しく、1926年のことである。大成門内側には張作霖の「文廟建設石碑」がある。

◆哈爾濱市内の教会

大直街に「哈爾濱市基督教会」と「ロシア正教教会」が並んでいる。ロシア正教会には2人の神父がいて、200人の信者がいるとのことである。

◆中東鉄道鉄道庁

国際賓館の近くにある旧中東鉄道鉄道庁の建物は、現在、哈爾濱鉄路局となっている。

4 黒河周辺の清朝史跡と満洲語残存状況

8月16日

11時過ぎに哈爾濱空港に到着。12時11分、離陸。13時29分、黒河空港に到着。13時46分空港を出る。空港からの道は未舗装で、両側に白樺林のある野原の中の道を9km程走って、黒河～北安の道路と合流すると舗装道路となり、黒河の街へ入る。14時15分、友誼賓館へ到着。黒河周辺は、黒河文物管理站站長で黒河博物館副館長の張鵬氏に日程調整をお願いする。予定の打ち合わせを終了し、黒龍江（アムール川）を見に行く。この付近は川幅が比較的狭く、水量が多い上に流れは急である。その中で水泳を楽しんでいる人がたくさんいる。300mほど向こうの対岸はソ連領アムール州の州都ブラゴヴェシチェンスク市で、テレビ塔や観覧車のある遊園地、ナイター設備のある競技場が確認できた【写真1-12】。

黒河地方では愛琿の史跡踏査が主要な目的であったが、それとともに黒龍江省で松村潤氏が提唱している「清朝の開国説話は、東海フルハ部のブクリョンション説話から借りてきたものであり、説話の舞台となったブクリ山は、従来いわれている長白山ではなく、黒河周辺地域に求めるべきである」という説を検証することも大きな目的の一つであった。

8月17日

7時30分、ホテルを出発。20分ほどで黒河の港へ。ここからは黒龍江の定期船が発着するようである。また、貿易の拠点らしく港には沢山のソ連製化学肥料が山積みになっている。また、ソ連へ買い出しに行く人々は、お揃いの黒のジャンパーを着ている。このジャンパーは物々交換の商品だという。一日交代でソ連と中国の買い出し日があるとのこと。

暫く待って龍交号が接岸し、8時34分、出港する。黒河の街を過ぎると、すぐに大きな黒河島があり、ここが今後の貿易場所に予定されているという。暫くしてゼーヤ川の合流

点にさしかかる。ゼーヤ川は予想以上に広大な川で、少し上流に大橋がある【写真 1-13】。小興安嶺が低く見える中を一路愛琿⁽³⁾へと向かう。

途中に川岸にある鉄器時代の遺跡は、靺鞨の遺跡とのことであった。五道溝から四、三、二道溝の村を経て頭道溝に至る。これらは昔からある港であろう。頭道溝付近からは小興安嶺の山並みが一望でき、平野部には収穫後の野焼きの煙もたなびく。やがて愛琿の町が見え、10時15分上陸。港といっても栈橋はなく、細い梯子で下船する。

◆愛琿海関

愛琿埠頭に近い黒龍江に面した場所にある【写真 1-14】。「愛琿人民公社」の看板が掲げられ、現在は人民政府となっている。

◆愛琿清真寺

川辺には清真寺がある【写真 1-15】。同寺は、1903年の建築で、姚福升副都統時代のものという。ミナレットもない平屋で、ロシア風の窓飾りがあった。

◆愛琿歴史陳列館

博物館は小さいが、なかなかまとまっている【写真 1-16】。ここに「愛琿付近黒龍江兩岸村落示意图」と題された地図が掲示されていた。原地図は黒龍江省檔案館所蔵で、それに基づき愛琿付近の沿江村落等の位置をまとめたものである。原地図は愛琿城を中心として対岸にある「江東六十四屯」を含めた一帯が中国領土であることを申し立てるために、1913年に愛琿県から黒龍江省政府に提出したものであるという。この概略図には「博克里（ブクリ）山」の名が明記されている【写真 1-17】。

また、別に掲示されている「愛琿旧城概略図」は、『愛琿全図』（黒龍江省檔案館所蔵）に基づく地図で、この地図などを根拠として作製された愛琿の地理模型も展示されている【写真 1-18】。

また、この「愛琿旧城概略図」とは別に、1855年に当地を旅行したロシア人、マークの『アムール紀行』（Маак, Ричард Карлович: Путешествие на Амур, совершенное по распоряжению Сибирского отдела Императорского русского географического общества в 1855 г.）（『1855年にロシア帝国地理学会シベリア部門の命により行われたアムールへの旅行』、漢訳本はP. 馬克著、吉林省哲学社会科学研究所翻訳組訳『黒龍江旅行記』商務印書館、1977年）所収の「愛琿城概略図」も展示されているが、両者の間にはかなりの相違がある。

その他、同陳列館に展示されたものには、「sahaliyan ulai kubuhe suwayan ? ujui nirui temgetu」（黒龍江鑲黃旗第一佐領印）と刻字された印（展示説明では「謀魯堅謀克印」とされている）があった。また、展示室外には「大清同治十二？年六月？立／郭氏祖？」と刻されたものをはじめ、清代の墓石が3基置かれている。

併せて同館の敷地内には、すっかり修復された「魁星楼」が聳えている【写真 1-19】。魁星楼は、内部の階段で登ることができ、最上階からは黒龍江の素晴らしい眺望を楽しむことができる。

(3) この当時の地名は、元来は「愛琿 Aihun」、1956年から「愛琿」とされたが、ここでは人口に膾炙している「愛琿」と呼ぶことにする。現在の地名は、黒河市愛琿区愛琿鎮である。

◆愛琿旧城

愛琿旧城について、陳列館に展示された「愛琿旧城概略図」に添付されている解説などにに基づき、同館長時利海氏の説明を受ける。内城壁は東西、南北共に 1,000 m、外城壁は黒龍江に面した東側部分は築かれずに北、西、南側の 3 面に築かれていた。外城壁の全長は 5 km であり、外城壁の外側には黒龍江の河水を利用した護城河も設けられていた。文献には「内城五門、外城に門なし」とあるが、実際には内城に四門、外城は北側に三門、西と南に各一門の計五門である。また、愛琿城内城中央を南北に通じる道路沿いに商業地が設けられ、1900 年以前には商業地に 3,000 人余りの商人が居住していたとの記録もあるという。

内城中心部の十字路に「鐘楼」や「鼓楼」は設置されず、南門近くに鐘楼のみがあった。中心部十字路の北西角には「黒龍江将軍衙門」、東南角には「副都統衙門」があったとのことである。しかし、衙門址に赴いた時の説明では、交差点の東南角に将軍衙門と副都統衙門が隣接して建っていたといい、この両衙門の位置は、時氏の説明と現地説明、二つの愛琿旧城概略図の間に相違がある。何れが正しいものか確認していない。

◆ 滿族民家


次に、満族民家と称する家に行く【写真 1-20】。この家は、ロシア風の飾りを施された窓のある建物で、家の造りや内部の什器類に特に満族風と言える特徴は見受けられない。満族が居住した家という意味で「満族民家」と称するのかもしれない。陳列館ではこの家を買収し保存したいが、1 万円を要するのでまだ取得できていないとのことであった。

◆愛琿旧城内城壁跡

続いて内城壁の西北角にまわる。高さ 1 m、幅 3 m 程の土塁が西側と北側に続いて残存しているが、この土塁が内城壁址であるとのことである。

◆瑗瑁籍將軍墓地【写真 1-21】

愛琿鎮郊外の「南樹里」にある。上記の標示のある墓地は何度かの盗掘にあい、石碑も爆破されてしまったとのことで陵墓は残存していない。松林の中に何箇所かある土の盛り上がった場所が墓の遺址らしい。付近の松の古木が古くから変わらぬ場所であることを示すのみである。同地には、「清代琿琿籍將軍陵地」と題する説明板があり、それには、



清代自道光年間以來、璦琿籍人士德寧阿、布爾沙、富明阿、善慶、綽哈布、額爾根巴圖、克蒙額、托克湍、壽山等曾先後出任各地將軍。此地葬有部分璦琿籍將軍的陵墓。

◆副都統衙門址

瓊瑋副都統衙門があった
とされる内城中心部の十字

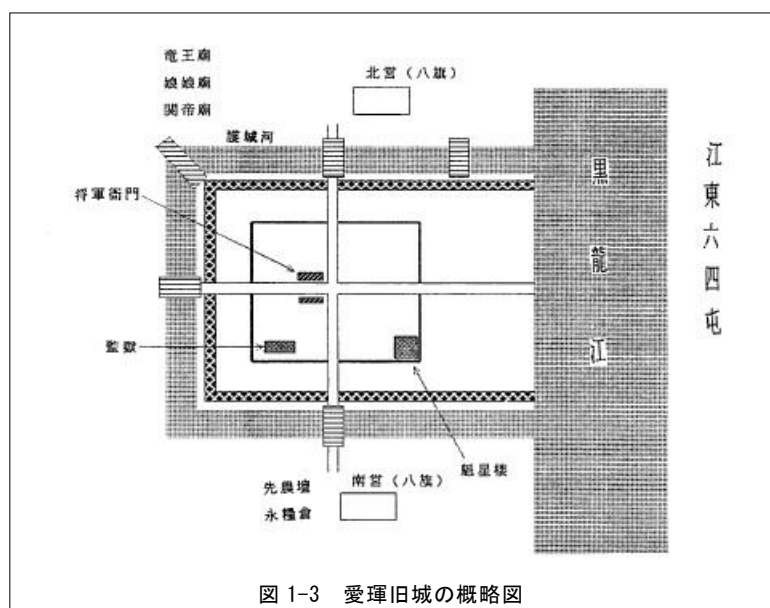


図 1-3 愛琿旧城の概略図

路の東南角には、現在、愛輝中学校が設けられている。同校教員の話では、黒龍江將軍衙門と瑗瑄副都統衙門は、東南角に隣接して建てられていたが、門は両者が共用していたとのことであり、將軍衙門と副都統衙門の位置は陳列館の時利海館長の説明とは相違している。

◆遼代墓群（黒龍江河畔所在）

16時35分、博物館を車で出発。黒河に向かう公路わき、黒龍江河畔の広い河岸段丘上に遼代の墓群があり、黒河市文化局、四嘉子郷人民政府の連名で1986年に出された「遼代古墓葬保護通告」が掲示されている。墓は全部で160基余りあり、その内40基の発掘調査を行って、文字のある土器や瑪瑙の馬具が出土したという。ただ、周辺の農民がここから砂を採るので、墓が掘り起こされ、実際、採砂したとおぼしきところには人骨や馬の骨が散乱している【写真1-22】。

愛輝の町は標高が高く、途中で小興安嶺の支脈を越えて、黒河に向かって下り、16時45分、ホテルに帰着した。

8月18日

8時出発。黒河から小興安嶺山中を走る北安への公路をたどる。途中から北安公路と分かれ、標高300mの峠を越えて坤河を渡り、黒龍江岸に近づくと「坤河達斡爾族満族自治郷」がある。ダウール語で「赤い岸」を意味するという「富拉爾基」や「小五家子」を経、「大五家子」集落のはずれに紅色辺疆農場がある。10時10分、同農場に到着する。黒河から紅色辺疆農場まで車で約2時間を経験した。

◆紅色辺疆農場【写真1-23】

農場は黒龍江岸から小興安嶺東側に続く緩傾斜地に広がる耕作地であり、本来、下放青年の労働農場、宿泊所であったという。当地の歴史・地理を記した『紅色辺疆農場史』（1987年3月刊）を編纂した呉文光氏（55歳）に話を聞く。彼は、もと新聞社勤務の知識人であり、当地の生まれで、この周辺地域のことに通曉している。呉氏が農場および地域の環境の説明と、実際に、三架山（当地の研究者が比定する「ブクリ山」）の案内をしていただく。なお、呉氏は満族であるが満語は全く知らないという。

以下は、呉文光氏の説明（一部『紅色辺疆農場史』より補う）である。

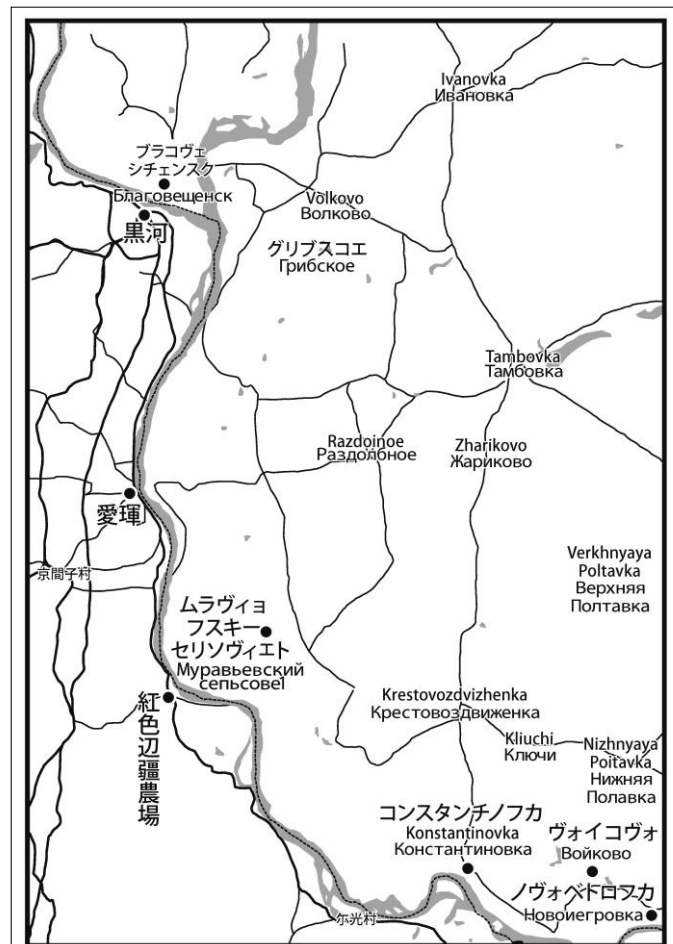


図1-4 本書IV頁拡大図①紅色辺疆農場周辺図

紅色辺疆農場付近の地形

当地の全体の地形は、黒龍江河畔から西および西北方向に向かって標高が高くなり、その最高点は 374 m に達し、南部に向かって低くなる。地形を大別すると次のように三分区される。

- ① 黒龍江に沿った平原区
- ② 山の前のゆるい丘陵区
- ③ 低山丘陵区

山脈は小興安嶺の支脈が区の西部を通り以下のような名称の山々がある。

「四連山」 348.2 m(地域の最高峰)	「三連山」 335 m
「潮水山」 323.7 m	「南潮水山」 321.4 m
「白金山」 323.7 m	「尖頂山」 313.4 m
「三架山」 251.6 m	「二架山」 286 m

農場の南の丘陵には 3 つのピークのある「山伏山」が見える。また、主要な河川は坤河と遜河の支流である 5 つの川である。

当地に暮らす人々

1) 満族

満族は旧満洲と新満洲に分かれる。旧満洲は女真族を指し、新満洲は清朝に帰属したダウール、蒙古、索倫（鄂温克）、鄂倫春などの民族を指す。これらの満族は康熙年間に寧古塔と吉林から移住した人々の子孫である。

呉文光氏が実際に調査したこの付近の満族は以下のようなものである。

① 呉姓＝旧満洲で正白旗

長白山から移動した者の子孫であり、記録には「祖輩哥三当兵過來時老大留吉林、老二留卜奎、老三巴塔来愛琿」とある。この一族は現在までに 19 輩を数えるに至っている。

② 富姓＝富察姓の旧満洲

寧古塔に居住していた 4 人の祖先の内の 1 人が康熙時代に愛琿に移住し、残りの 3 人は寧古塔に残った。現在までに 18 輩を数える。

③ 『民国九年愛琿県志』には、愛琿の満族として 25 姓が記録されているが、調査した結果、現在 17 姓が存在する。

なお、『農場史』にも 17 姓が存在すると記されているが、実際は、以下の 16 姓が記録されているのみである。また、漢族（字）姓は「姓」、満族姓は「氏」とあり、氏と姓の使い分けが行われている。

漢族姓	満族姓	漢族姓	満族姓
呉姓	呉了？氏	関姓	瓜爾佳氏
葛姓	葛哲勒氏	祁姓	祁他拉氏
孔姓	扣代氏	佟姓	図莫図氏
楊姓	尼瑪察氏	何姓	恒奇勒氏
于姓	依爾庫勒氏	寧姓	寧古塔氏
莫姓	莫棍氏	趙姓	祁業氏
白姓	巴林哈拉氏	錢姓	那拉氏
富氏	富察哈喇	倪姓	記載なし

2) ダウール族

一部のダウール族は清代には満語を使用したのが、辛亥革命以後になって漢語を使用し始めた。これらのダウール族は元来、黒龍江中流から下流域に居住していて、清朝は黒龍江中・下流域を索倫部と称し、彼等は清朝に進貢していた。順治初年になって黒龍江中・下流域のダウール族の一部は嫩江流域と黒龍江上・中流域、ゼーヤ河流域一帯に移動した。

1651年にロシア兵が侵入したので、1684年にダウール族の官兵1千人が吉林と寧古塔から愛琿に移住してロシアの侵入に備えた。

◆泡子沿

紅色辺疆農場をあとにして、南にある三架山に向かう。途中の村には、黒龍江から取水していた池である「泡子沿」がある。ここが、清朝発祥説話にある「ブルフリ湖」ではないと思われるが、この付近にこれより大きな湖はないとのことで立ち寄った。

◆三架山を中心とした伝承

民間伝承を調査している馬名超氏を通じて、泡子沿のある村の古老の呉連慶氏（ダウール族、72歳）から、三架山を中心とする伝承の聞き取りを行う。呉氏は以下のようなことを教えてくれる。

- ① 月牙泡という湖はこの付近にはない。
- ② 愛琿の南には泡子沿より大きな湖はない。
泡子沿は、現在は独立した池であるが、昔は黒龍江から取水していたので黒龍江と泡子沿は部分的につながっていた。
- ③ この村の南には「二架山」があり、この山の別名は「半拉哈達」（バラハダ）である。バラハダとは「半分持っていかれた山」という意味で、この名称はロシアの砲撃で山が崩されたことに由来する。
- ④ 「三架山」には「水池子」があるが、私は見たことがない。この水はどのような時でも涸れることがなく、冬中凍らないと言われている。
- ⑤ 水池子には「去兩個姑娘去撈魚去、撈出的是金魚」という伝承がある。
- ⑥ 「一架山」には、昔、廟があったし、三架山の前には「胡仙洞」があった。

◆三架山

14時17分、泡子沿のある村から車で三架山に向かい、14時49分、山麓（標高190m）に到着する【写真 1-24】。山麓からも道が通じているが、路肩の崩壊や陥没があり、車の通行は不可能とのことであったので、徒歩で山道を登る。この道路は日本時代の軍用道路で、その頃は黒龍江をめぐる軍事機密保護のため、村民の立ち入りは厳禁であったという。

山麓から高距110m余り登った地点が三架山であるが、丘陵状に続く山並みのために頂上がどこか不明瞭である。三架山を通過して一架山との峰まで行ったが、この峠から黒龍江と河畔に聳える「バラハダ」が遠望できる【写真 1-25】。ここから下車したところまで引き返し、15時58分、出発。このころから雨となる。

紅色辺疆農場に立ち寄り、案内していただいた呉、曾氏等と別れて帰路につく。18時近く、北安道路に入り、18時55分、賓館に到着する。夕食後、『黒河学刊』編集の陳会学氏を交えて当地の歴史に関する話をする。

5 ブクリ山はどこに

8月19日

◆黒河地区社会科学連合会との学術交流座談会

9時に車で黒河市博物館へ行く。ここで黒河地区社会科学連合会と学術交流座談会が開かれる。黒河側のメンバーは、同博物館副館長（黒河市文物管理站站長）の張鵬氏のほか、劉振和『黒河科技』主編、陳会学『黒河学刊』歴史編集、李栄齊齊哈爾市党校、黒河地区史志弁公室、郭世宏中共黒河地委党史委員会である。

座談会では、まず、松村氏が清朝開国説話とブクリ山に関する講演を行い、その後ブクリ山をめぐる意見交換が行われた。そこでは、以下のような話題が提供された。なお、社会科学連合会では、愛琿の歴史を中心とした『琿琿歴史論文集』（『黒河学刊』編集部、黒河区哲学社会科学連合会、1984年1月）を出版している。

ブクリ山の位置

劉振和氏は地理学の立場から、半分壊されて黒龍江に沈んだ「バラハダ」である可能性を指摘した。劉氏によれば、一架山には昔は池があり、一架山、二架山、三架山を「四季屯火山」と呼び、西太后は四季屯地方を煙草の産地として注目していた、「哈達沿」付近の「東山」には、古来「ブクリ山」と呼ばれている山があるが、この付近は長白山から続く火山帯で呼瑪県に連続する山脈である、『水道提綱』の記録を参照すべきであろう、ということであった。

一方、陳会学氏は、ブクリ山が「西岡子」にある可能性はなく、紅色辺疆農場と三架山は愛琿から75華里真南に位置していて文献上と一致する、『龍沙紀略』には、位置が記載されていないが『盛京通志』にはブクリ山の記録があり、『黒龍江輿地図』には山名の記載はないが、『康熙滿文地図』（金梁作成）と『戦跡輿図』には「ブクリ山」と「ブルフリ湖」の記載がある、したがって、1913年までの諸文献に見られるブクリ山の位置から判断すると、『盛京通志』の記載が正しく、三架山がブクリ山に相当する、との結論を示した。

結局、清朝発祥説話にあるブクリ山は、坤河と遼河の間にある山との結論にいたった。候補とされる三架山の景観として、江東六十四屯と黒龍江からそびえ立って見える山であり、山として崇拝されていた可能性もあるとの話も出た。松村潤氏は、この付近であることを確認できれば良いのであり、以後の詳細な調査は黒河の研究者に委ねたいと発言し、彼等も今後の重要な研究課題として受け止めているとの発言があった。

◆黒河市博物館

座談会終了後、同博物館内を見る。「革命展示室」（未見）と「一般展示室」に分かれているが、一般展示室は物産展示が中心で、歴史的な展示は全くなかった。

8月20日

◆清真寺

民国九年建造の丸太を組んだ建物であり、拝殿や漢式ミナレットなどの窓にはロシア風の飾りが施されている【写真 1-26】。拝殿には「旦古清真」や「首建宏功／中華民國九年九月」の扁額が掲げられている。アホン（阿訇）や礼拝者も見当たらずひっそりとしてい

る【写真 1-27】。

◆関帝廟

次いで、幸福郷に近い関帝廟へ行く【写真 1-28】。ここは荒れ果てて見る影もない。正門は取り壊され鐘楼と鼓楼は物置に使用され、大雄宝殿には人が居住しており、煙突が設置されている。その左奥には、以前は娘娘廟で、後に龍王廟となった建物があるが、ここにも人が住んでいる。ここでは以前「お札」を売っていたとのことである。

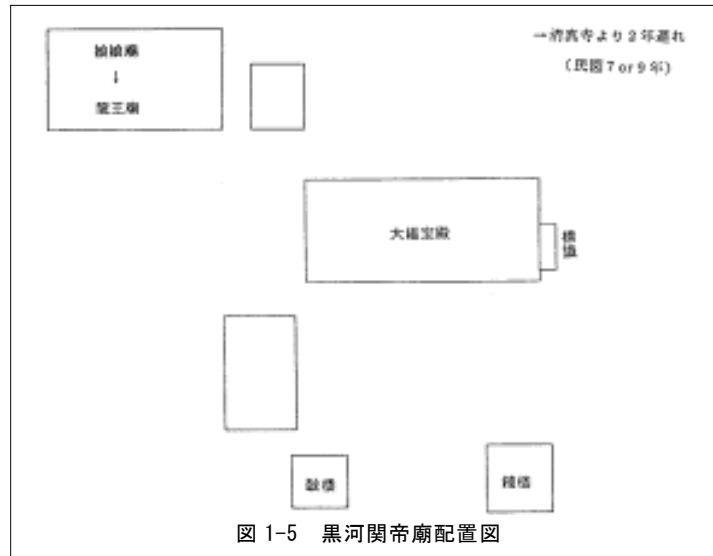


図 1-5 黒河関帝廟配置図

8月21日

黒河と哈爾濱を結ぶ飛行機は二日続きで欠航し、日程の都合で哈爾濱に飛行機で帰ることを断念する。親切にも黒河文物管理站が北安で開催される「遼金史討論会」に赴く黒河文化局のジープへの同乗を手配してくれたので、我々は北安まで行くことが可能となった。

14時52分、黒河（標高 290 m）を出発。黒河から小興安嶺山中を通じる未舗装の山道を走る。途中、孫呉を 16時28分（標高 480 m）に通過し、18時37分、小興安嶺と嫩江の分水嶺（標高 530 m）を越え、小興安嶺を縦断して、20時30分頃、北安（標高 390 m）に到着する。同区間にはまったく舗装道路がなく、雨のため道が荒れているが、それでも道の両わきに積み上げた泥で穴を埋めているため結構なスピードで飛ばす。

この経路は小興安嶺山中をほぼ東西に縦断しているので、思いがけずに小興安嶺の景観を楽しむことができた。山中は白樺林を中心にした疎林がほとんどであり、針葉樹は少ない。現在では針葉樹の原生林は小興安嶺にはほとんど残っていないとのことである。平野部は豊かな耕作地であり、一帯の農場と林場は国营入植が多いとのことである。

北安では、張氏や文化局長が泊まる賓館に我々も宿泊することができた。

8月21日

朝は、昨日途中で一緒になった黒河衛生局の人と話す。彼は戦前の国民学校の卒業ということで、片言の日本語をしゃべることができる。

ちょうど北安では、多くの「会議」が開催されており、車をチャーターすることは難しく、ようやく「天津大発」という 750cc の「軽自動車」を借り上げる。それに 6 人と荷物を詰め込み、9時30分、北安を出発。しばらくは鉄道に沿って行き黒河、哈爾濱国道に合流し、ここから舗装道路となる。ほぼ南にいくつかの県を横切っていく。松嫩平原は穀倉地帯であることがよく解る。ただ嫩江の流域に入ると、途端に湿原となりそこでは牛、馬、羊の放牧が行われている。青崗で昼食をとり、ガソリンの補給をする。途中、海西女直の本来の根拠地であったフランを通過するが、この辺りも豊かな様相である。揺られに揺られ、道路補修やトラックの横転で道が塞がれるなど、困難な状況を切り抜けて、17時51分（標高 240m）、哈爾濱の街に到着した。

（細谷良夫）



写真 1-1 昂昂溪遺跡



写真 1-2 東哈雅村遠望



写真 1-3 將軍府付近の状況



写真 1-4 將軍府飯荘



写真 1-5 卜奎清真寺



写真 1-6 壽公祠



写真 1-7 齊齊哈爾関帝廟



写真 1-8 三家子村付近の風景



写真 1-9 三家子村の計連慶氏



写真 1-10 聞き取りを行った孟兆坤氏



写真 1-11 三家子村の典型的な住居



写真 1-12 ブラゴヴェシチェンスクの街



写真 1-13 ゼーヤ川、上流に橋が見える



写真 1-14 まだ人民公社の表示が残っている愛琿海関



写真 1-15 ミナレットもなく、
倉庫のような愛琿清真寺



写真 1-16 愛琿歴史陳列館

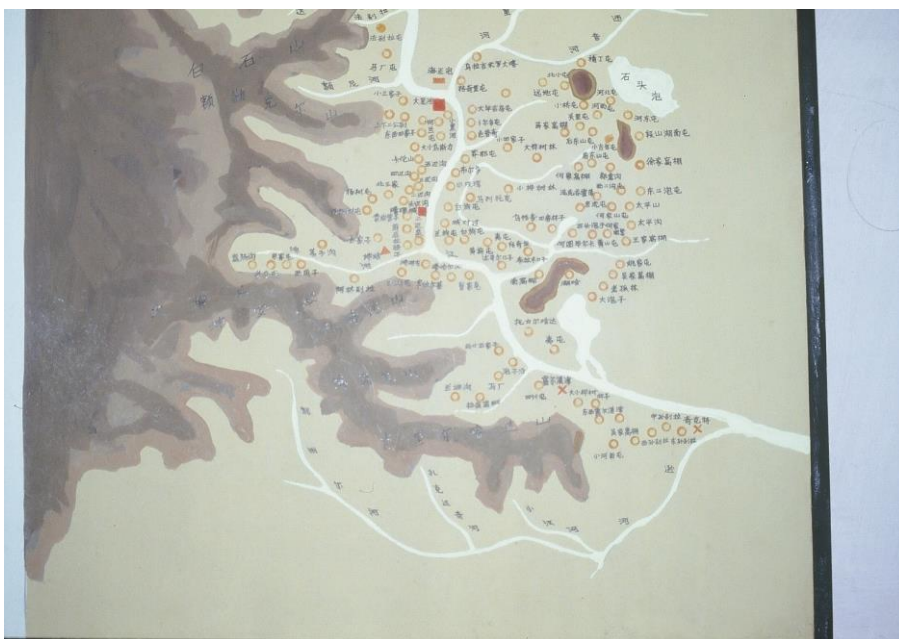


写真 1-17 黒河、愛琿、江東六十四屯付近の村落名が記された地図



写真 1-18 内城壁と外城壁のある愛琿城の模型
(1993年撮影)



写真 1-19 陳列館にある魁星楼



写真 1-20 満族民家と称せられる家



写真 1-21 今は林の中にある愛琿籍將軍墓地
(1993 年撮影)



写真 1-22 四嘉子郷卡倫山墓地に散乱する人骨



写真 1-23 紅色辺疆農場の看板



写真 1-24 三架山遠望



写真 1-25 山が半分崩れたというバラハダと黒龍江



写真 1-26 丸太造りの清真寺。後ろはミナレット



写真 1-27 清真寺に掲げられている匾額



写真 1-28 黒河関帝廟の大雄宝殿

第2章

大興安嶺地区に暮らす人々（1993年8月）

はじめに

参加者は、神田信夫（明治大学名誉教授、所属は当時のもの。以下同じ）、細谷良夫（東北学院大学）、加藤直人（日本大学）、中見立夫（東京外国語大学）、楠木賢道（筑波大学）、王禹浪（哈爾濱市社会科学院）、呉文銜、曲守成（北方文物雑誌社）であり、神田、中見は、黒河調査にて日程を終え、他の全員は、全行程参加した。

本調査の目的は、黒龍江將軍衙門が存在した、齊齊哈爾、墨爾根（嫩江）、そして琿琿における地理学的な差異、またそのもつ政治的意味に関する確認と、1992年に実施した、莫力達瓦達斡爾族自治旗における満洲語学習の実態調査の結果を踏まえ、さらに具体的な事例を調査しようとするものであった。

1 哈爾濱の研究機関再訪

1993年8月2日

◆黒龍江省檔案館

9時近く、黒龍江省檔案館へ向かう。檔案館館長の王桂英氏、二処処長李竺棟氏、二処副処長申国政氏、退休した白清文氏から以下の説明を聞く。

檔案の整理

1982年から整理を開始したが、歴史檔案は非常に多量である。1986年に、北京の中国第一檔案館から黒龍江將軍衙門檔案（行文檔）が返却された。すなわち、1900年以前の檔案は1900年～56年の間はロシア、ソ連に移管されていたが、その総件数は約4万件で満文檔案2万件を含んでいる。これらの檔案は康熙二十三年（1巻）【写真2-1】から始まり、初期の檔案は少なく後になるほど多量となる。総じて言えば、1800年以前の檔案は満文中心で、それ以後は満漢合璧檔案と満文檔案、漢文檔案が混在し、1875年以後になるとほとんどが漢文檔案となる。ソ連では部分的に満文檔案を年代別に整理したが、それは檔案に年代が明記されているものに限るもので、年代が明記されていない檔案は「年代不詳檔案」としている。副主任のほか、若手の3人が満文檔案を整理できるので、この4人でソ連の整理を再整理している。「案巻目録」は1997年までに整理をしたい。檔案はマイクロフィルム化中であり、『光緒年間黒龍江將軍衙門檔案』4冊のように整理（漢訳）が終了して出版したものについてはマイクロフィルム（複写本）で公開している。

ソ連が持っていた総件数は不明であり、それが中国（北京の中国第一歴史檔案館）へ返還された後に、中国第一歴史檔案館が整理しマイクロフィルム化し、その後に黒龍江檔案館へ返却された。琿春、阿勒楚喀副都統衙門檔案は、ソ連から中国第一歴史檔案館へ返還されたが、まだ黒龍江省檔案館へは戻ってきていない。黒龍江將軍衙門檔案は康熙二十六年～二十八年のネルチンスク条約にからむ檔案は欠けている。なお、

康熙二十七年は1件のみ残っているが、同年は黒龍江将軍が不在で副都統が管理していた関係で少ない。檔案の整理は「發文檔」と「収文檔」に分類し、兵司（八旗と吏司を含む）、刑司、礼司、戸司、工司の5司及び印務処に分けて整理している。1900年以後の檔案は光緒三十三年までの1万件があり、それ以後は黒龍江行省檔案が残存している。

同檔案館は、以前より開放され、満文檔案を中心とする10点あまりの資料を会議室にて見せてくれる。

◆黒龍江省文物考古学研究所

午後は1時半に出発して黒龍江省文物考古学研究所へ向かう。90年に訪問した場所とはまったく別の場所で、外見はアパートのような建物であり看板も出ていない。後に聞くと、文物をねらう泥棒が多いので看板などはいっさい出さないとのことである。ここの4階で同所員の説明を聞く。

4階の小さな展示室には様々な発掘品に混じって「エビラ」が陳列されている。比較的小型のもので、全長は50cmほどである。また所内の廊下には袋詰めの膨大な量の貨幣が未整理のままおかれている。その後は阿城完顔氏の墓の発掘、あるいは最近の各地の発掘を示すビデオをみるが、これら近年の金の遺跡調査を踏まえた新しい研究が必要であろうと考えさせられた。

8月3日

黒龍江省博物館へ行き、始めに館長と挨拶。その後は展示を見るが、さすがに遼・金時代の展示はそろっている。また、明代の紅夷炮【写真2-2】などもあり面白いが、時間の関係もあり、駆け足で歴史部門のみを見る。元時代の陶磁では、鈞（均）窯がいたって無造作に展示されている。あるいは黒龍江省で民間使用したものなのだろうか。

12時5分発の列車は、ほぼ1時間遅れで哈爾濱駅を出発する。松花江の増水はかなりのもの。大慶付近を中心に荒涼とした風景の中に、草を刈る人々や牛を追う人々、魚の囲いこみ網などどこかのんびりしている景色を楽しみながら過ごす。この風景も見慣れてきて余裕を持って観察できる。

予定より30分ほど遅れ、19時33分、齊齊哈爾駅に着く。同市図書館関係者と旧知の文化站傅惟光氏などの出迎えを受ける。

2 齊齊哈爾から嫩江へ

8月4日

◆齊齊哈爾市図書館

8時40分、齊齊哈爾市図書館へ向かう。まず新館で副館長の謝主任より以下のような概要説明を聞く。

齊齊哈爾市は黒龍江省の西部の文化中心であり、図書館も整備されている。図書館の敷地面積は6,800㎡で、新館と古籍部に分かれ、蔵書総数は103万冊、職員87名である。年間予算は70万元で、図書購入費は17万元。事業は11部門に分かれる。

続いて古籍部【写真2-3】へ行く。閲覧室には1909年の蔵書樓の絵が掛けられている。古籍書庫に入れてもらい、満文本を中心に調査する。書庫の中には、歴代の齊齊哈爾市図

書館蔵書の印影があるが、90年に聞いた館名のほかに龍江省立図書館、嫩江省立図書館、黒龍江省公署教育図書館などの名称があったことを知る。

初めは書庫の中で閲覧していたが、閲覧室に持ち出して良いとのことで、満文本10点あまりを出してもらう。中でも「文武官員所用補褂坐褥項冊満文 光緒拾七年拾壹月貳拾七日蒙文翻譯官同敖慶善 bithe coohai hafasa i baitalara sabirgi sektefun i hacin」「觀嫁聚吉凶日書満文 光緒十六年正月二十三日立 正黃旗協領同甫敖慶善誌」の二点に見られる「慶善」の名前はその他の書籍にも「黒龍江全省旗務處會辦慶善」「翻譯筆帖式慶善」等と見え、慶善に関わる蔵書を受け継いでいることが知られる。閲覧室でカードと図書を見る。

昼食後、14時に出発して、旧城の西門から入り鼓樓の十字路に出ると、將軍飯莊、銀庫の一角はまったく旧建築はなくなり、新しい建物が、また、督軍府の角は博物館が建築中であった【写真 2-4】。奥の吳俊陞私邸のみが残っている。ただ將軍府私邸の一角のみは従来のままであった。

その後は清真寺へ行く。1990年に見学したのは東寺であったが、東寺は山東、湖南人々が建立したもので、今回は、その奥にある西寺に向かった【写真 2-5】。西寺は西北地方の人が中心になり建築したものであり、東寺と西寺の間でしばしば争いがあったと聞いた。次いで寿公廟、関帝廟をまわる。

8月5日

9時半前に齊齊哈爾駅に到着。古蓮行きの硬臥車に乗り込む。嫩江左岸の湿地帯を北へ向かうが、この付近では既に牧草刈りが盛んで哈爾濱よりは北国であることを思わせる。やがて来ることになる訥河を過ぎて、ほぼ定刻に嫩江駅に到着。嫩江は予想のとおりの小さな町で、駅前には三輪タクシーが並んでいる程度であった。

◆嫩江駅⁽¹⁾

嫩江駅には嫩江文化站の人々が出迎えてくれて、駅前の大通りを西に直進して南に曲がり少し行った嫩江賓館（政府招待所）には15時過ぎに入る。

ここでは文化站関連の嫩江テレビ局張慶山氏が中心となり案内してくれる。当地の墨爾根副都統衙門や水師營跡の調査が可能かどうかたずねる。また『嫩江県誌』等を購入することができたので、嫩江地域のアウトラインを頭に入れる。夜、嫩江を紹介するビデオを見る。説明にあたった文化站副站長の手持ち資料を借り、この駅站官僚であったという「崔氏家譜」の一部分をメモする。

8月6日

出発前、崔氏が家譜系図を持参してきたので見せてもらう【写真 2-6】。日程では最初に崔氏の墓地を見ることになっているため、9時15分、出発。旧南門から齊齊哈爾へ向かう街道をしばらく南下して、東に向かい、前進村経由で10時に新顔駅に立ち寄る。さらに鉄道沿いに南下すると、林の中に墓地があった。泥濘でマイクロバスは動けず、同行者のジープに乗せてもらうことになる。

◆高峰林場の「森林風景地区」、崔枝蕃と麻力図の二つの墓

この一帯は高峰林場の「森林風景地区」であり、林の中には各所に相当多数の墓がある。

(1) 嫩江の調査については、王禹浪（楠木賢道訳）「嫩江県清代遺跡考察記録」『満族史研究通信』第3号、1993年12月、20～25頁）を参照。

その中でも崔氏一族の崔枝蕃と麻力図の二つの墓は廟門や石碑を備えた立派なものであったらしい。駅の役人の権力はかなりのものであったことを考えさせる墓地である。

二か所の墓を見ていると、2、3日前に盗掘があり、現場には弁髪や衣類があったとのことであった。そこで、その盗掘現場を見に行く。途中の家に寄ると、盗掘墓から出たという瓶を持っていたので、文化站はそれを接収した【写真 2-7】。墓から金銀類を盗んだのであろうか、かなり大掛かりな盗掘行為である。

崔氏墳墓の見学を終え、12 時 15 分、新顔駅の裏にある高峰林場に行き、崔氏墳墓の記載がある『高峰林場概要』をいただく。

◆墨爾根副都統衙門

一度、ホテルに立ち寄り、民国以降の衙門跡（現党委員会）、西門跡、清代の衙門跡（現第一小学校）【写真 2-8】、北西門を訪れる。北西門は斬首場でもあったらしいが、この先は嫩江河畔で、人々は水泳を楽しんでいる。

続いて北門跡に行く。ここは今でも内蒙古への門となっている。川沿いに高さ 1.5 m、幅 2 m ほどの城壁の跡が若干残っている。

時間がないと言われたが、嫩江にかかる浮き橋【写真 2-9】を渡って内蒙古に足跡を記す。続いて東門を経て嫩江上流の水師營跡を目指し北に向かう。

◆墨爾根水師營

墨爾根河を渡ると、すぐの道路左脇に墨爾根水師營の史跡標示【写真 2-10】がある。そこから南、嫩江を望む台地上のトウモロコシや人参の畑の中に、ほぼ四角の営跡が残っている【写真 2-11】。嫩江からかなり離れているが、交通は墨爾根河からの水路を利用したものであろうか。あるいは地元の案内者が『嫩江県志』の記述を基にして「本来の墨爾根副都統衙門は嫩江の右岸にあり、洪水で左岸に移された」（ただし右岸は内蒙古の領域であることもあって、旧衙門の位置はまったく不明）と考えていることに関係するのであろうか。何れにせよ、水師營跡は衙門が左岸に移ってからのものであろう。嫩江の河道の変遷を考慮して墨爾根副都統衙門所在地の比定を行う必要がある。

8 月 7 日

道路の具合や車の調達が不可能であれば、一度齊齊哈爾に戻り列車で北安經由黒河行きとなることも覚悟したが、昨日の手配の結果、道も問題なく、新しいマイクロバスの手配ができたので、旧来の駅路をたどりながら、直接黒河に向かうことができることになった。

8 時 17 分、宿泊した嫩江賓館（標高 210 m。以下、括弧内のメートル数字は標高を表す。ただ簡易型の器機による測定であるので、あくまでも目安としてほしい）を出発し、9 時 16 分（310 m）に科洛村を通過。小興安嶺のいくつかの峰を越えて走る。嫩江流域から黒龍江流域に入り、10 時 48 分、小興安嶺越えの最高点である大嶺（640 m）を通過する。この付近は清とロシアとの戦いがあった場所であり、また、日本敗戦当時に西崗駐屯軍が陣地を築いた戦略上の要地であったという。最初は西崗で食事の予定であったが、黒河は近いとのことで、そのまま走る。北安への道路合流点で給油し、黒河には、13 時 28 分（180 m）に到着した。

3 黒河再訪

◆黒河

黒河文化館を探すため、若干時間を費やしたが、13時35分（170m）、同館に着く。ただ、旧知の黒河文化駅の張鵬氏は、あいにく出張中で不在であった。

黒河の街は全体が建設ラッシュであり、1990年のころには目立っていたロシア風の窓のある旧来の建物はきわめて少なくなった。

8月8日

黒河は経済開発区だけにかかなりのインフレらしく、車のチャーターもままならない。ようやくゼーヤ河合流点付近までの船賃とセットということで、旧式のマイクロバスを調達し、愛琿へ向かう。

◆愛琿歴史陳列館⁽²⁾

近年、観光ルートに組み入れられたのか、愛琿歴史陳列館の前には観光バスが数台止まっている。魁星楼は修復中であり上ることができなかった。陳列館は変わっていなかったが、庭には以前なかった鐘や銅像が造られ、観光客で賑わっていた。陳列館を出るときに、以前陳列館館長であった時利海氏に会う。退職されたとのことであった。

ロシア人のイスラム教徒のために造られたという清真寺を経て、愛琿海関に行くが両者共に元のままである。文化館のオートバイに先導されながら、寿山をはじめとする愛琿籍将軍たちの墓へ行く【写真2-12】。ここは観光コースから外れているためか、ひっそりとしていて、以前と同じたたずまいであった。

愛琿の街に戻り、昼食後は遼金代の墓地に立ち寄って、黒河に戻る。関帝廟に向かうも大雨のため断念する。関帝廟付近は、多くの廟が集まっているので「東大廟」ともいうとのことであった。1990年の時にはひっそりとしていた関帝廟付近であるが、大黒河島への道路工事ですっかり変貌している。続いて道路脇にある清真寺へ立ち寄る【写真2-13】。ここは相変わらずひっそりとしている。

◆黒龍江

黒河船付場からゼーヤ河河口付近に至る船に乗り、雨上がりの黒龍江をすこし下る。はるか北にはこの後に調査に赴く呼瑪方面の山並みが光っている。17時過ぎに予定を終了し、黒龍江岸を少し歩く。途中で馬占山公館旧址という建物を見出す。18時半、この「公館」を利用した「将軍楼」なる食堂で夕食をとる【写真2-14】。

8月9日

◆黒河博物館

8時半、歩いて博物館へ向かう。以前『黒河学刊』の編集であった旧知の陳会学氏はここに移っている。紹介を受けた後に、博物館の裏手3階にある資料保管室に行く。小さな保管室には、サマンの衣服、清代の甲冑、オロチョンの神像25体などが様々な発掘品と共に置かれている。

(2) 1993年当時の地名は「愛輝」であったが、ここでは便宜上、歴史的に著名な「愛琿」であらわす。ちなみに現在の地名は、黒河市愛輝区愛琿鎮となった。

◆関帝廟

昨日、雨のため行けなかった「東大廟」へタクシーで向かう。中に入ると以前と変わっていない【写真 2-15】。ホテルに帰ると張鵬氏が来ている。呼瑪、黒河のオロチョン族関係の情報を聞く。今月 20 日過ぎに、オロチョン族の祭りがあること、また、黒河から呼瑪に出る途中にオロチョンがいるなどの情報を得る。また、当地の満洲語の保持状況についても確認した。以下は、その内容である。

黒河地区で満洲語が話されている場所、及び会話が可能な人

- 愛琿黄旗営子 孟銀秀
- 藍旗屯
- 大五家子 吳純有
- 蔵代鎮 吳丁祿
- 上馬厰
- 孫吳鎮
- 四季屯 吳七十八
- 宏偉村
- 北鎮村 富某氏

これで黒河での調査を終え、鉄路で哈爾濱へ戻ることになる。夜行列車に乗るために黒河駅へ向かう。観光地対応の特快旅遊列車とて、コンパートメントはすこぶる快適である。19 時 42 分、定刻に発車する

8 月 10 日

8 時 15 分、定刻より 10 分ほど遅れて哈爾濱駅に到着する。午後は、北方文物雜誌社関係者、文物管理委員会関係者と打合せをする。この哈爾濱で、神田、中見両氏は北京に戻ることになる。

8 月 11 日 哈爾濱 晴れ

◆満語研究所

8 時半に黒龍江省満語研究所へ行き、劉景憲、趙阿平氏らと会う。この研究所の概要、活動状況を聞く。現在は、劉所長以下、黄、呉、趙、黎の 5 名の研究員がいるとのこと。研究活動については、1990 年の報告に略同するが、機関誌『満語研究』が、現在まで 114 号を刊行したこと、『黒龍江満語＜3000 語＞』を編纂継続中であり、満語の活字は、省の党校印刷所で作成していることなど、新しい情報を得た。

8 月 12 日 哈爾濱、訥河 曇り雨

哈爾濱発 75 次特快は、定刻より遅れ 11 時 27 分に発車する。雨が続き、いたるところに洪水の被害が見られる。列車は齊齊哈爾から遅れが大きくなり、定刻より 1 時間半ほど遅延して訥河駅に到着する。当地の文物管理所の人がホームまで出迎えてくれる。訥河賓館にチェックインして、文物管理所所長と明日以降の日程の調整を行う。

4 莫力達瓦達斡爾族自治旗のダウール人と満洲語

8 月 13 日

ここ 1 カ月は雨続きであったというのが、運良く朝から晴れ始める。

8時15分、ジープに乗り訥河の町（標高240m）を出発して北へ向かい、清和郷人民政府へ行く。政府に挨拶をして、富源村の嫩江河畔へ行く。途中、洪水で道路が濁流に洗われている場所も通る。

◆富源村

富源村の入り口には樹齢200年というダウールの神木がある。50年代にダウール族は総じて嫩江対岸の内蒙古側に移動し、ここは漢族の村になったというが、垣根にはダウール様式が残存している。

村の奥は嫩江河畔で遮られる。この場所が昔の渡し場らしい。対岸は内蒙古の平原で、嫩江からそれほど遠くない場所にイルフリ山脈が連なっている。その中で一番高い標高400mのピークが神山であり、この山を龍頭にして腹にあたる部分に「將軍墓」がある。この一帯には今でもダウール族の墓地があるとのことである。彼らは常に西を神聖視しているという。

嫩江流域を一望できる平地からの標高25mほどのオボー山に上る。山の下は昔からの嫩江の渡し口とのことで、2隻の船がつながれ、魚釣りをしている老人がいる。見ていると馬を追い込んで泳いで川を渡らせている。対岸には大楊子に至る旧道が有とのこと。山頂から嫩江流域平原が一望でき、オボーの石積みの周囲には夏真っ盛りと桔梗や萩が咲き乱れている。

◆將軍墓

続いて村はずれの將軍墓へ。悪路のためジープも入れず。20分ほど歩いた路傍の藪の中に、亀趺と磨耗して文面の読めない碑文（50cm×170cm）がある。さらに10分ほど離れた畑の中には、墓地の門柱の土台石があり、付近には磚が散乱している。

車に戻り、帰る途中、畑の中にある遺跡を見学する。周りには旧石器が散乱している。13時頃に清和郷人民政府に帰着し、当地の文化站長に挨拶をする。

◆威遠將軍石碑

14時半近くに出発して光明村5隊後山にある「威遠將軍石碑」へ向かう。小高い丘の上には石碑【写真2-16】があり、亀趺と満漢文の碑文が裏返しとなって草むらに倒れている【写真2-17】。

次いで青銅器時代の遺跡を見る予定であったが、時間の関係で諦め、訥河へ戻る。

8月14日

今日から1晩泊まりでモリンドワ（莫力達瓦）、シワルト（西瓦爾圖）の満文調査となる。8時3分、今日と明日同行してくれる訥河文化站の2人とジープに乗り出発する。9時8分、嫩江河畔に到着する。この頃から一時的に雨が激しくなり、増水で浮橋は渡れず、渡し船を待つ。

◆モリンドワ（莫力達瓦）

10時8分、莫力達瓦文化局へ到着。同局の党書記（女性）が、外国人未開放地区、かつ黒龍江政府機関の紹介状が及ばない内蒙古自治区内の地方であるにもかかわらず、公安局の承諾に尽力してくれ、モリンドワ、シワルトへの立ち入り許可を得ることができた。昨

年に引き続いての調査となる⁽³⁾。

13時半にシワルトへ出発することにし、町の中を歩く。出発前に文化局長が来たので、シワルト行きのこと、さらに満文本があれば調査したいとのこと、この付近の満文碑文の調査をしたいとの意向を伝える。局長は協力を約束してくれるが、明日から国連援助による電気施設設置関係の式典があるとのことで、自治県招待所は満室、車も出払っていて十分なことはできないという。

結局、14時に文化局党書記が頼んでくれたかなり旧式のマイクロバスで、書記と去年も世話になった文物管理站職員の方々と一緒に出発。折から工事のため主要国道は通行不能で、長雨による泥濘が酷い迂回路を抜ける。公路に出るまで30分ほどかかってしまう。

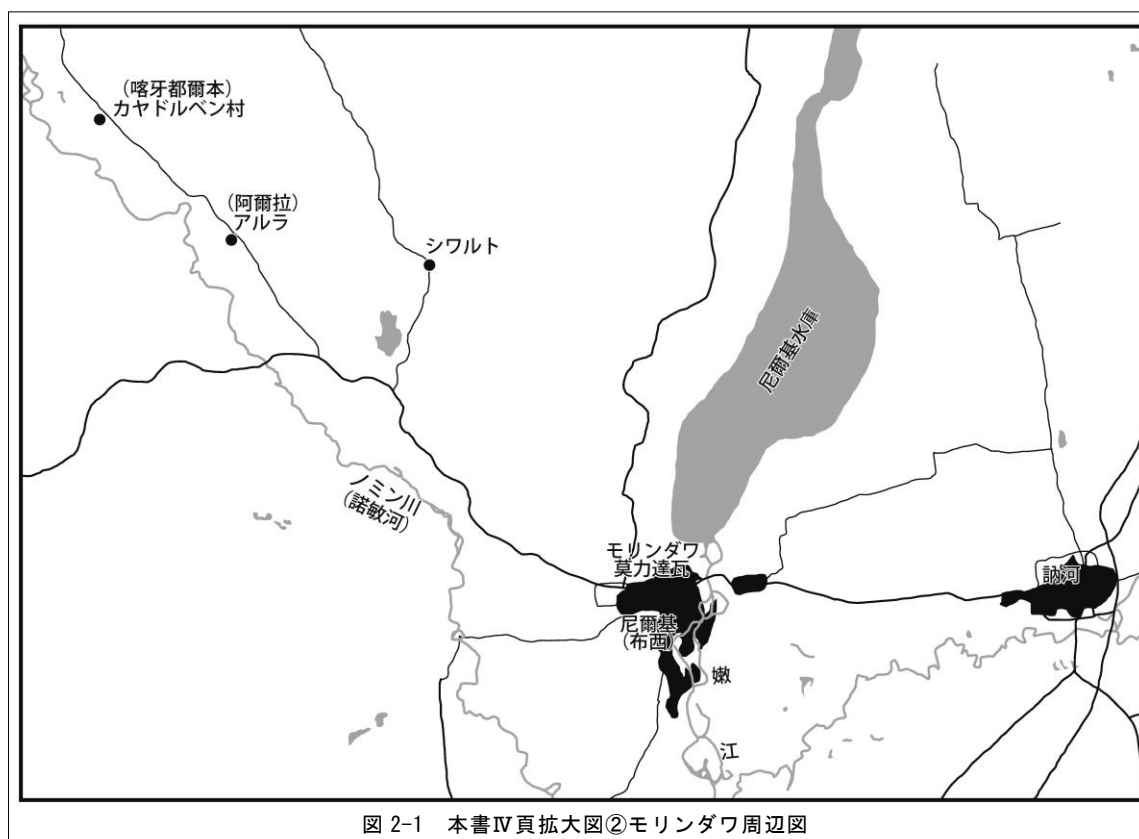


図 2-1 本書Ⅳ頁拡大図②モリンドワ周辺図

◆ノミン川（諾敏河）

北北西に向かい嫩江流域からノミン川（諾敏河）流域に至るが、平野のなかにある 3～40 m の丘を越えて走る。途中に金の長城がかなり明瞭に残っている場所があるが、帰りに見ることにしてシワルトへ向かう。ダムを回り込んで、15 時 39 分、西瓦爾図人民政府に到着【写真 2-18】。村の規模はそれほど大きくない。

◆シワルト

早速聞き込みを開始するが、ここで満文ができるという老人の次男が出てきて、老人はここから西のアルラ（阿爾拉）に付近に引っ越してしまったこと、その老人の持っていた満文本もアルラの方に移してしまに残っていない、また、シワルトには満文のできる人は

(3) 1992 年の調査については、細谷良夫「莫力達瓦達斡爾族自治旗図書館所蔵満文本一覧」『満族史研究通信』第 2 号、1992 年、17～20+1 頁、を参照。

いないという。

アルラはシワルトからそれほど遠くはないというので、今から立ち寄るとかなり遅くなりそうなのだが、この機会を逃すといつまた調査できるか分からないのでアルラへ向かうことを決める。幸い文化局の方々もいやな顔をせず同意してくれる。さっそく、老人の次男に紹介状を書いてもらい、16時40分に出発。再びダムに出て、ここから右に曲がり、阿栄旗の公路を走る。雨が続いた道はきわめて悪く、途中で雨の中道路管理者から走行チェックを受ける。

◆カヤドルベン村の満文本

シワルトでの説明とは相違して、シワルトから40～50km走り、アルラに着くと、老人はさらに西方のカヤドルベン（喀牙都爾本）村に住んでいるという。悪路の中をようやく同村に到着したが、村人のほとんどがダウール語の世界で、目的の家を探し当てるのに時間がかかってしまう。行きつ戻りつして、ようやく18時30分、ノミン川（諾敏河）支流で放牧をしている「老人」の長男の家に到着する。

そこで、シワルトにいた人の姉が結婚した夫の父親は、満洲語ができるし、満文本を持っているとの情報を得る。泥濘で車が動かなくなり、トラクターで引っ張ってもらうなどしながら、その老人の家を尋ねあてる。時間も遅くなったので、手分けして、一方では所蔵する本を見せてもらい【写真2-19】、一方では、彼が満洲語を修得した由来を聞きとった。最近はずっと停電続きとのことで、ローソクと持参の懐中電気を頼りに、満文本を調べる。本の端に書き込まれた文言から書写の由来を知ることができる。老人に調査が終わった本を読んでもらうと、まるで歌を歌うように満文を読み下した【写真2-20】。当地における満文習得の一端が知り得るなど、貴重な収穫を得た⁽⁴⁾。

21時17分、老人とその家族に別れを告げて出発する。機器の不具合や燃料切れ寸前という不安の中、車は真っ暗闇の中を薄暗いライトを点けて走る。シワルトとモリンダワ公路の合流点で給油をする。ここで森林の盗伐を防ぐ目的で駐在している少年自警団の検問を受ける。0時15分、ようやくホテルに到着する。

8月15日

9時30分より、莫力達瓦達斡爾族自治旗図書館【写真2-21】3階にある自治旗文物管理站へ行き、文物管理站が所蔵している満文本の調査をする。

◆莫力達瓦旗文物管理站所蔵の満文本

総てで20数冊があり、これらの本は図書館所蔵本と同系統で、同じような体裁で表紙を付け漢文題名を記入してあるものが多い。ただ、ダンボールに放り込んであり、一部は水をかぶるなど保存状況はきわめて悪い。手分けして表題を記録する。

◆西布特哈衙門

10時半過ぎ出発。悪路を抜けて111号公路に出る。嫩江左岸沿いの道を30分ほど北上し、西布特哈衙門跡【写真2-22】に着く。ここは1990年にも調査をしており、近くで見出した金代の石臼もそのまま残されていた。

11時半に同衙門跡を出発して、再び町へ戻りそのまま南に向かう。嫩江河畔の道から莫

(4) 以下、莫力達瓦における満洲語受容の問題については加藤直人「莫力達瓦達斡爾族自治旗の満文資料」『満族史研究通信』第3号、1993年12月、を参照。

丁河（どうやら農業用水路）沿いに東に数 100 m 入ったレンガ工場の裏手に道光五年の石碑などが倒れたままに散乱している。加藤直人氏によれば、満文と漢文が相違するという。文史資料に収録されていると考え、とくに記録しなかったのは失敗であった。また近くには農業用土採取のために掘り返した時に清代の墓を発掘し、その墓の中から多数の文物が発見されたとの話を聞いた。

◆老頭山（龍頭山）

昼食後、14 時半に出発して老頭山（龍頭山）へ。ここは船付場の真上で嫩江が一望できる場所で、遊覧地である。裏手の山道をたどりながら、この付近に放置されているはずの石碑を探す、一帯は大豆畑で、現地の人に尋ねても所在が確認できなかった。龍頭山から下りると、ちょうど渡し船が出るところであった【写真 2-23】。そのまま訥河に向かう。

◆東布特哈衙門跡

訥河に帰る途中、公路の右側（街の南側）にある東布特哈衙門跡（地名は訥河鎮東南街）に立ち寄る。ここは訥河駅跡の跡でもあるという。ただし大豆畑ばかりで跡はみられない。さらに近くの老人に聞くと、遺跡はもっと向こうであるともいう。ともあれ予定の史跡調査を終了して、16 時、ホテルに到着。

8 月 16 日

12 時 40 分、訥河駅から 377 列車に乗る。硬臥車の一コンパートメントを 4 人で占め、数日前に通った高峰林場の道や嫩江鉄橋を見ながら加格達奇へ向かう。終点に近づくと甘河がきれいな夕景色を見せる。定刻に昨年より少し肌寒い加格達奇駅に着く。

◆加格達奇

ホームには文化局副局長が出迎えてくれる。加格達奇は森林の街で、景気がよいのであろうか、駅も随分立派になっている。夕食後、調査の打ち合わせを行う。黒河での聞き込みの結果、調査対象として新たに加えた呼瑪と白銀納については、文物管理委員会からの紹介状に含まれていないだけに難しい可能性があるとのことであった。

5 大興安嶺地区に暮らす人々

8 月 17 日

朝、当地の文化局長の来訪を受ける。当初、同局には、今日阿里河に行く計画を立てていただいていたが、阿里河はすでに調査済みであることもあり遠慮して、日程調整にあてらることにする。

局長は、1963 年から阿里河などで 16 年、その後は加格達奇で仕事をしているとのこと、少数民族のことを良く知っている。彼の意見では十八站でオロチョンの人々に聞き取りができそうである。木奎には阿里河経由の道で面倒なく行けるといえるが、このオロチョン人はかなり移動しているようで、聞き取りができるかどうかは怪しいとのことであった。

そして、同局長から、①オロチョンの満文識者は、オロチョン民族の指導的役割を担う者で、現地から中央へ移動してしまい、現地には満文識者が少なくなっているとのこと、②「ソロン」（棲林）はそれに属する人々の自称ではなく、漢人などの外側からの呼称で

あること、また、③ダウール人はアンダ（anda=朋友の意であるが、転じて中央政府の威を借りて搾取する「姦商」の意となる）として嫌われている、などの興味深い情報を聞く。

局長をはじめとする加格達奇文化局の好意的な対応を受け、今後の日程を設定する。すなわち、漠河には外国人旅行団が入る関係があり、まず塔河に行き、塔河から十八站、白銀納、そして呼瑪に入り、塔河に戻って漠河に入る計画に同意する。結果、呼瑪で張鵬氏と合流して呼瑪から黒河へ出る当初の案を放棄することになる。張鵬氏との電話連絡の結果、呼瑪では白石拉子に行くと良いとのこと、また、オロチョン関係檔案が檔案館にあり、満文資料も見つけたとの情報を得る。

明日からの予定は未定なところはあるが、塔河、十八站、白銀納、呼瑪、漠河に立ち寄ること、26日の夜行列車で哈爾濱に帰ることを決定し、列車の手配を依頼する。

8月18日

8時半、加格達奇駅へ向かう。昨年に比べて、町同様、駅も奇麗になっている。西林吉行きの硬臥車に乗り込み、9時4分に発車。

◆塔河への道

興安嶺の山越えをして嫩江流域から黒龍江流域に出るだけにゆっくり上る。高地は目立って減り湿原と森林がきれいであり、峠らしい景観もなく峠を越えて黒龍江流域に入る。

14時28分定刻に塔河に到着すると、文化担当の副県長と副文化局長（共に女性）が正装して出迎えてくれるが、我々は調査用の服装で恐縮してしまう。街はずれの塔河賓館に到着し、挨拶した後に我々の目的を説明して協力を依頼する。今月25日にオロチョン定住40年の祭りが十八站であるので、ホテルも車も忙しいとのことであった。

◆オロチョン人

夕食後、当地の文化局幹事でオロチョンの民族習慣や伝説を採集している方から話を聞く。①当地は嫩江流域の人々とは別形態であり、②オロチョン語の通訳ができる人がいないので、採集した老人の話の整理ができていない、そして③十八站の責任者が佐領の後裔とのことで、その人から話を聞けばよいという貴重な情報を得る。

8月19日

早朝に起きてこれまでの記録整理。6時半、文化局副局長が来て当地の資料を貰う。7時に朝食を済ませ、7時50分出発（標高680m）するが、これからの通行許可書を公安で受け取り、十八站まで同行する県長をピックアップするなどして、記念式典のために道路工事をしている町を離れたのは8時20分をまわっていた。

大興安嶺高原の平原部分を東に走る十八站への道は悪くない。佐領がいたという永興を経由するこの道は昔の駅路との説明があるが、それはかなり疑わしい。塔河から30kmあまりの場所が塔河と十八站の境界であり、9時36分に十八站（標高640m）到着する。

◆十八站

福利院で郷長、文化站の説明を聞き、NHKの取材にも登場した関小雲氏の案内で80歳を超える佐領の子孫を訪ね、話を聞く【写真2-24】。オロチョン語を漢語に通訳してもらいながら、河の流域毎の支配体制を探るが、彼らにガシャン（gašan=郷村）の觀念がないのはちょっとした発見であった。今夜はオロチョンの踊りの夕べがあるので是非ここへ泊まれとの熱望を受ける【写真2-25】。

15 時から 90 歳になるオロチョンの老人（女性）からの聞き取りをし、さらにその後
1 人を尋ねる（白樺の丸木船を屋敷の中に置いていた【写真 2-26】）。

白銀納に明日の調査の打ち合わせに行ってくれていた文化局員が戻り、今後の調査について相談する。その結果、今夜当地に泊まると、明日の出発が遅くなり、支障が生じそうなので、今夜はオロチョン人の踊りを見た後、塔河へ帰ることにする。こちらの招待宴の形で夕食を済ませ、19 時半から「オロチョンの踊り」を見る。ただ、これは、民族舞踊というよりは、楽団付きのオロチョン族ダンスパーティであった。20 時過ぎまでいて、塔河に戻る。21 時半過ぎに帰着する。

8 月 20 日

早朝に県長の訪問を受ける。公安で通行許可証取得などの手続きを行い、出発を待つも、ガソリン不足とて、給油に時間がかかるらしく予定の時間になっても車が来ない。9 時になって出発するが、不足したフィルムを購入するなどして、町を出たのは 9 時 15 分をまわっている。昨日の道をたどって、10 時 20 分、十八站を通過し、そのまま一路白樺と落葉松の林を走って、11 時 10 分、白銀納（標高 590 m）に到着する。

◆白銀納

白銀納は、十八站より一回り小さな町である。昼食をとった村の文遠食堂で、オロチョン人（女性）から話を聞く。ただ、彼女は知識として学んだ話が多い。14 時過ぎから、今回の調査の主要目的である玉林氏に話を聞くため、彼の家に行く。玉林氏は、昼食後に道で見かけた猟銃をかついで通り過ぎた老人であった。家の周囲にはハンダハンの革が干してあり、土間には猟銃が立てかけられて、先ほど猟から帰ったばかりらしい。白銀納でも定住 40 周年の記念式典があり、オロチョンを代表する彼の家も参観の対象となるのだろうか、家の修理をしていて今散らかっており、息子の家で待っていてほしいとのことだったので、近くの家で待つ。

ほどなくして彼が来て、佐領にまつわる話を中心に聞き取りを行う【写真 2-27】。①彼は日本時代に満洲語と日本語を習ったが、漢語は習わなかったとのこと、②彼を含めて佐領の子孫に様々な昔話が残っていること、③この付近ではエヴェンキ（鄂温克）とオロチョン（鄂倫春）は同一氏族と考えている、等の興味深い話を聞く。

白銀納付近には、牧畜のための刈草も、農業のための耕作地もあまり見えない。これは、相変わらず狩猟を中心とした生活をする人々が多いせいであろうか。聞き取りでかなりの成果を上げたこと、そして、これから許可なしで呼瑪に入ることを考え、これ以上の聞き取りを諦めて、パオズ（狍子＝ノロ鹿）の肉を買い、16 時 15 分、白銀納を出発する。

これまでの塔河でチャーターした快適なマイクロバスとは相違し、白銀納からは旧式のマイクロバスに乗り、未舗装道路を呼瑪へ向かう。塔河からの連絡の結果、呼瑪からは記念式典関連の打合せも兼ねて、ジープで我々を迎えに来てくれたのだが、全員は乗り切れなかったため、白銀納でこのマイクロバスをチャーターすることになった。ただ、このバスの状態はきわめて悪く、爆音が耳をつくとともに、進行方向右側の窓はガラスもなかった。

17 時、興華（標高 590 m）を通過、この付近から村の周辺には畑が目立つ。途中で対向車に横すべりで接触したが、それが問題にもならなかったのには驚いた。やがて金山林場（日本時代に開発された）を通過する。

◆呼瑪

19時4分、呼瑪賓館（標高 510 m）に到着するが、停電で真っ暗である。真っ暗な街を歩いて夕食に行く。食堂に入り白銀納で買ってきた「新鮮な」パオズを調理してもらって食べるが、きわめて美味しかった。

8月21日

朝一番に李局長と王氏は到着の挨拶のために呼瑪県政府に出向いたが、未開放地にしかるべき紹介状なしで外国人を連れて来たことは好ましくなく「即刻退去するように」と言われたとのこと。李局長は加格達奇の上級役人の話を出して滞在許可を取ってきたという。このような状況では、新満洲佐領や満洲語の伝承の聞き取りなどは無理と判断する。

午前中、県長の相談役という方が来る。この「相談役」に清朝時代の呼瑪のこと、満文資料の残存状況などの概要を聞く手配を依頼する。また県志編纂者から資料を入手し、彼から話を聞くも参考にならない。当地ではガードが堅く仕事ができる見通しがたたない。明日中に塔河に引き上げ、漠河に向かうことに決定する。仕方なく、呼瑪の街を散策し【写真2-28】、次いで呼瑪爾戦争のあった呼瑪爾城へ出向くことにする。

◆呼瑪爾戦争と呼瑪城

14時、出発。呼瑪鎮から黒河公路を黒龍江に沿って黒河方面へ9 kmほど走った丘の上に呼瑪爾戦争の記念碑が建っている【写真2-29】。

ハバロフに代わってアムール川地区の指揮官となったステパノフは、順治十一年（1654年）にブラゴヴェシチェンスクから黒龍江を遡り、ウスチクマルスクすなわち呼瑪爾城で越冬した。清朝は固山額真明安達里を指揮官とする軍を派遣し、翌十二年三月、清軍は呼瑪爾城のロシア軍を攻撃、両者の間で激しい戦闘が行われた。清軍は呼瑪爾城を攻略できないままに撤兵、ステパノフも食糧不足などから呼瑪爾城から撤退してブラゴヴェシチェンスク方面へ戻ったという歴史がある。この戦いの記念碑には、当然のことではあるが、この地方の少数民族と共に侵略を撃退したことを誇り、以下のように記されている。

沙皇俄國侵略者斯捷潘諾夫匪幫於一六五三年在松花江上、被我清軍擊敗、逃至呼瑪爾河口、企圖頑抗、建立所謂呼瑪爾斯克。

清政府於一六五五年派兵部尚書都統明安達礼率軍抵達呼瑪爾河口、在附近小丘上安置火炮、猛烈轟擊敵堡在辺疆各族人民的積極配合下、將沙俄匪幫逐出中國領土、取得了反侵略戰爭的輝煌勝利。

呼瑪縣人民政府 一九八七年八月一日立

木柵で囲まれていたという呼瑪爾城は、呼瑪河が黒龍江へ合流する附近にあるとのことだが【写真2-30】、城へ通じる道はないとのこと。呼瑪河や呼瑪港と民国時代の建物を見て帰る【写真2-31】。

希望していた檔案館関係の情報も得られず、かつ、さまざまなツテを用いて「民族」調査の手配を試みるがうまく行かない。許可なしでの飛び込みではこれも仕方がないであろう。「相談役」と話し、彼からいくつか情報を得る。

8月22日

6時過ぎに荷物の整理を開始。「相談役」が来て、昨夜の説明の誤りを訂正してくれる。また、必ずまた呼瑪に來い、その折りには調査に同行すると言ってくれる。

8時10分、呼瑪（標高 260 m）を出発、今日は2つのグループに分け、私はラダ Lada のワゴンタイプに乗る。余裕があって快適。118 km走って白銀納を通過し、そのまま十八站

を通過する。十八站は定住記念祭の準備で車が多く、定住地帯のゲートの飾り付けも終わったようで、道路整備が行われている。十八站―呼瑪間は 258 km ある。途中から雨模様となり、雷雨の塔河には 12 時 17 分 (460 m) に到着した。

14 時、皆さんに別れを告げて塔河駅へ。ここでは西林吉行きの切符は取れないので、乗車してから列車長に交渉し、硬臥の 1 コンパートメントを獲得して座ることができた。列車は塔河を定刻に出発する。途中、ワラガン（瓦拉干）鎮付近を通過する。この一帯は山火事で焼けてしまったが、残った白樺の林が奇麗に立ち並ぶ。標高 750 m 程度の山を上り下りしながら少し秋の模様を見せる盤古を通過。このあたりから花も少なくなるのは夏が過ぎたからであろうか。また、この付近から山火事（1988 年）による立ち枯れが目立ち始める。時折降る雨は冷たい。

6 中国の北の果て

◆西林吉

定刻より 10 分ほど遅れ、20 時半に西林吉駅に着く。同じ列車には黒龍江に中露共同でダムを建設するための視察をするという人民解放軍の将軍が乗車していて、彼のために車がホームまで入っている。我々の車もホームまで入ってくれている。漠河県長と文化局局長の二人と、明日以後の打ち合わせを行う。

西林吉は、中国北端の街で、京大今西錦司隊による大興安嶺探検のベースであったことなどで著名であり、漢人が鄂倫春族のことを棲林集と称したことが、西林吉の名称となったようである。今西錦司によれば、チーリンジすなわち棲林集は、モーホ・オロチョンの集合地で、当時は漢人開拓者の 4 戸からなり、空き家 2 軒であったという（今西錦司編著『大興安嶺探検』朝日文庫版、1991 年、363-365 頁）。県長と局長から、今回の調査の目的について問われ、当地に暮らすオロチョン人の状況や、漠河における清朝関係史跡の確認であると答えた。幸い当地では『漠河県志』が出版されていたので、それを入手するとともに、同県志の主編者から清朝の遺跡の状況などを聞くことができたことになった。

県長は、明朝、車で十八站の記念式典に向かい、26 日に帰るという。高性能な車だと、ここから十八站まで 5 時間くらいで行くことができるらしい。

8 月 23 日 西林吉 曇り時々雨

西林吉は新しい街で、我々の目的はここから更に 80 km ほど北に位置し、黒龍江に面している漠河（元漠河村）を訪れることにある。漠河は今西錦司氏が指揮した大興安嶺探検の根拠地の一つであり、満洲国時代には黒河から漠河まで回航船も通っていた。この漠河も外国人立ち入りは歓迎されないので深追いはできないが、黒龍江アムール川、中露国境を無視して往来していた鄂倫春族をめぐる情報があればと考えていた。そして不可能であろうが、漠河で船に乗って下流にあるアルバジン（雅克薩）、あるいは上流のシルカ川（石勒喀河）とアルグン川（額爾古納河）の合流点などが見られればとの淡い期待を持っていたことも事実である。

9 時近く、漠河文化局の建物に併設された大興安嶺森林火災の記念館（現在の「大興安嶺五・六火災紀念館」の前身）に行き、写真展示を見る【写真 2-32】。四国の半分ほどの森林が 6 カ月近く燃え続けたというだけに、写真でも森林火災の物凄さがうかがわれる。今の西林吉の街は国連による森林火災の救援金で再建された街のようであるが、きれいな街並みが続いている。

◆漠河県志と民族関係調査資料

午後、宿舎に『漠河県志』が届けられる。この県志の大事年表などに目を通し、15時半から再び文化局へ行き、県志の編集に当たった人々に話を聞く。しかしながら、大半は既存の資料から得た知識で、現地で収集したものは少なく、残念ながらあまり参考にはならなかった。ただ、幸いなことに、森林火災で古い記録がかなり消失した中で、県志編纂室に民国時代の聞き取り調査の資料が所蔵されているとのことであった。その資料の閲覧を所望したところ、21時近くに県志編纂室主任が来られ、『漠河県志』用試行原稿に記された民国時代の民族調査の部分を見せていただけることになった。研究の参考となるところが大きいので複写を依頼する。

8月24日

西林吉を8時10分に出発、街を出ると森林火災で丸坊主になった山と所々に白樺が焼け残っている山中につけられた道を北へ走る【写真2-33】。8月が花盛りと聞いたが、すでにコケモモやブルーベリー（ドシ）の実が熟しているので、秋も近いのであろう。花はわずかに柳蘭が見える程度である。途中にある今でも砂金を採取している老金鉱は、清末にゴールドラッシュで賑わい、そのおかげで漠河も発展、一時は清朝とロシアの支配が及ばない独立地域であったらしい。ここを過ぎて森林保護と边防警察で通行許可書のチェックを受け【写真2-34】、10時40分、漠河に到着した。

◆漠河北極村

漠河人民政府の宿舎は、トイレも屋外の共用で、観光客を招くにしてはきわめて粗末である。北極村とは漠河のことであり、地図上の北極村と漠河は同じだと説明を受ける。また、漠河より北に烏蘇里村があるのではないかと質問してもその説明は要を得ない。

当初、この漠河で船をチャーターし、黒龍江を遡る予定を組んでいたが、一昨夜、我々と同時に西林吉に到着した将軍がロシアと共同で建設するダムの手配地視察のため、船を借り上げてしまい、期待していたシルカ川とアルグン川の合流点に行くことは不可能となった。

黒龍江河岸まで歩いていくと、ここには「北極村」という大きな石の標識が建っている【写真2-35】。このあたりは対岸までの距離も150m程度と狭いが、対岸のロシア領には人家も見えず、林と崖が続いている。

漠河には、白夜とオーロラを見に来る観光客が年間100人はいるといふ。ただ、西林吉の宿泊に際して記入を求められた宿舎の「外国人記録簿」を点検すると、4月から我々の来訪まで、イタリア1人（木材工場技師）、ロシア1人、台湾の夫婦など数人に過ぎず、西林吉に来た外国人が全員漠河に来たとしても観光地として成立していないと思われる。漠河のメインストリートは寂れ【写真2-36】、入り口に建っているホテルも開いている様子はない。

漠河では、観光地化のため、ここを北極村と名付けている。その名称の由来は、後述の漠河での聞き取りによると、1952年に黒龍江省長が船で黒龍江を巡察した折りに、馬札爾村のあたりで、ここは「中国の北が極まる場所」と呼んだところから始まったらしい。ただ、そこは廃村となり、そこに代わって漠河が北極村と称し、観光開発を促進しようとしているのである。黒龍江岸には「北極村」の標識が建てられ、郵便局では北極村記念メダルが売られている。

さて、この漠河北極村に清真寺が建っているのを見かけた。この建物は、黒河などにあ

った漢式の清真寺ではなく、対岸のロシアから来たロシア人イスラム教徒のものなのであろうか、洋館風の造りで、丸いドームの上には半月も飾られている【写真 2-37】。いずれにせよ中国で最も北に位置する清真寺であろう。

黒龍江の川岸、「港」というところに出てみると【写真 2-38】、対岸までの距離 200m 程度であろうか、きわめて狭く流れは早い【写真 2-39】。対岸にはイグナシノ Игнашино の聚落があるはずであるが、人家は見えぬ林と崖が続いている。漠河では 1958 年に大洪水があり、岸が 155 m も削られ人家や埠頭は全て流されてしまったので、今の埠頭などはその後で造りなおしたものである。清朝時代に漠河は呼瑪の管轄下にあり、卡倫が置かれていたので総兵衙門が設置されていたが、県衙やそれを囲む城壁はなかったという。

◆漠河での聞き取り

14 時半過ぎに、当地の古老人（王維〈漢族、72 歳〉、候志清〈漢族、73 歳〉）が来てくれる。王維氏は日本時代に警察官を、候志清氏は領事館？の運転手でフォードを運転していたとのことである。二人から聞き取った話は、以下のとおりである。

（王維氏、候志清氏）

漠河の街は 1958 年の水害で岸が 155 m も削られてしまい、古い町や港は全て水没してしまったので、古いものは何も残っていない。

清末の衙門（武衙門）と貿易の「広信公司」は同じ場所にあったが、民国 18 年にこの建物は消失してしまった。この場所に国民党が政府衙門を再建したが、清朝時代でも道光年代以前には漠河は呼瑪の管理下におかれていたので、総兵衙門があるのみで衙門はなく、漠河には城壁がなかった。

清末まで、漠河にはロシアからやってきたエヴェンキが多く、彼等はロシア語ができた。民国時代になるとオロチョンが多くなった。漢人はオロチョン人をシリンと呼び、エヴェンキを毛シリン（老毛子＝ロシアの言葉のできるシリン）と呼ぶ。ソロンはここにいないが、ソロンは黒河や愛琿付近にいるオロチョンとエヴェンキのことである。なお、ソロンの中にはダウールも含められる。ここではダウールはダフーリと言っている。

烏蘇里村は清代の重要な卡倫があった場所で、康熙年間にここの卡倫に烏蘇里という役人がいたことから村の名前になった。

北極村は、本来馬札爾村（マザールはイスラム聖者の廟）というが、人は住んでいない。北極村の名称の始まりは、1952 年に楊省長が船で黒龍江を巡察した折に、馬札爾村の場所に「中国の北が極まる場所」として、数個の石を置いた。その後部下がここを北極村と決めた。しかし、ここには人が住まず村にはならなかった。52 年に決めた北極村は廃村になり、結局、観光開発のために、漠河を北極村と称することとした。

村の入り口には観光客目当てに建てたという 2 階建のホテルがあるが、まったく放置されている。

15 時半過ぎに聞き取りを終了し、帰路につく。この頃から豪雨、小降りになった頃を見計らって西林吉へ向かったが、雨上がり風はもう肌寒く、野原にはブルーベリーが実っていて、ここが北に位置するを感じさせられた。

8 月 25 日

◆漠河

一日かけて今回の調査記録の整理を行い、お願いしていた資料の補充等を受ける。23 時、

駅に行き、23時6分発、快客376次列車に乗る。夏休み明けの時期であるのか結構混んでいる。

8月26日

明け方に目を覚ます。4枚も着ているのに朝方は寒い。黒龍江流域は10月になると冬になるとのことなので、もう季節は秋に入ったのであろう。8時頃に通過したあたり（標高790m）では少し紅葉が見える、と言っても赤茶けた紅葉である。黒龍江流域から嫩江流域へとなだらかな峠を越える。越えると河沿いの平原の広がりが広くなり、色々な花が目立つ。10時40分、定刻（10時25分）より遅れて加格達奇に到着。

同地では、世話になった文化局の方々と懇親を深める。彼らの話では、オロチョンの定住40周年記念行事は、8月23日に黒河と十八站で、それ以外の地方では24～26日の間に相継いで行われる、ただ、黒龍江省内では行われるが内蒙古自治区では、阿里河でも記念行事は行われないという。その後、加格達奇駅に向かい、19時59分発の特快74列車に乗り込む。

7 阿城、双城

8月27日

定刻の8時31分より20分ほど遅れて哈爾濱到着。市内のホテルで休息をとり、15時半、阿城へ向かう。哈爾濱から高速道路を25分ほど走り、阿城に到着する。阿城で「第一回国際金史学術研討会」への参加登録を行う⁽⁵⁾。夕食時には、李樹田、張碧波両氏、そして齊齊哈爾の胡紹増氏等、旧知の方々と挨拶を交わす。

8月28日

◆阿城市博物館

7時に食事。続いて阿城市博物館へ行く。観光開発のためであろうが、以前よりかなり整備されている。建物左側の空き地には、西南門にあったという扁額や民国？の科学碑文などが集められている。ここで阿城の清朝史跡の聞き込みを若干行う

10時から「国際金史学術研討会」の開幕式。「国際学会」ということで、私は国外専門家代表として正面に座らされる。この学会は上京に観光設備として宮殿一部の再建をするために阿城市が開催に力を入れたものらしい。14時から個別発表・討論が行われる。私は2番目に開幕講話を行い、その後は張碧波氏と一緒に主持人として7人の発表に関わる議事進行を担当する。17時前に個別発表が終了する。

8月29日

8時過ぎ、学会のエクスカージョンで金上京趾へ行く。先年訪れたときと余り変化はないが、天気が良いので正門である南門から入り、宮殿跡まで歩く。その後は阿骨打陵墓へ。以前倒れていた石碑は建て直されている。次いで亜溝に向かう。先年同様、石切り場から20分ほど徒歩で峠に登り、石刻された「武人像」【写真2-40】を見学する。ここも以前と変わりはない。

(5) この学会の内容については、楠木賢道「第一回国際金史学術研討会参加記」『満族史研究通信』第3号、1993年12月、59～60頁、参照

昼食後、14 時に出発して道教の霊場である松峰山へ向かう。ここも以前来たことがあり、山は登らず。16 時半に松峰山を出発し、阿城市に寄って荷物を積んで、哈爾濱に向かう。19 時半に到着する。

8 月 30 日

呼蘭に調査に行く予定であったが、車の都合で中止となり、記録の整理と、極楽寺など哈爾濱市内の史跡調査に変更する。

8 月 31 日

9 時 20 分、民族研究所へ向かう。渋滞により、黒龍江省民族研究所に到着したのは 10 時過ぎとなる。同研究所研究員の都氏（朝鮮族）、少布氏（蒙古族、チンギスハンの子孫）などから研究所の概要を聞く。

◆双城市図書館

14 時近く、ここから 35 km ほどの双城へ向かう。双城の東門【写真 2-41】は修復されているが、よく見ると、修復に際して以前の礎石の一部が用いられていることが判る。市の図書館、文化站を訪ねる。

図書館、文化站には満文資料があるかもしれないとのことで、図書館のカードを見せてもらおうとこの付近の家譜や、シリ・ママなどの写真記録があることに気付く。閲覧を依頼すると地契は現物複写でそのほかはカラー写真であった。新しいものもあるが、満文で書かれたものや、康熙六年（1667 年）の勅書らしきものもみられる。この付近では民間に資料が存在しているらしい。

以下は双城市図書館のメモ

東官鎮慶發村趙成金家の祖字的宗像 K-293、54 J

農豐鎮号家炉屯馬熙図家の譜書（満族）K-293、54 J

幸福郷中興村清代光緒五年双城居民為吉林將軍奕榕立的德政碑

樂群郷富志村満族海春財家満文譜単 K-293、54 J

樂群郷富志村満族薩克達氏譜書

樂群郷友好村赫崇貞材の手抄譜書（満族）K-293、54 J

同心郷富成村錫伯族・英玉供奉の宋喀巴仏像

聯興郷長生村趙庭煥家の詔書（康熙六年十一月二十六日）

嘉慶二十五年京旗人移民双城官撥物品名單的執照

乾光第碑文及家書手稿影印 104 頁 16 開

なお、『黒龍江省行政区画簡冊』（黒龍江省民政庁編、1991 年、哈爾濱地図出版社）によれば、農豐鎮は満族錫伯族鎮、幸福郷、樂群郷、同心郷、聯興郷は満族郷である。

17 時半に調査を終了し、帰路につく。18 時半過ぎ、哈爾濱に到着した。
以上をもって、1993 年度、黒龍江省および内蒙古自治区における調査を終了した。

（細谷良夫）

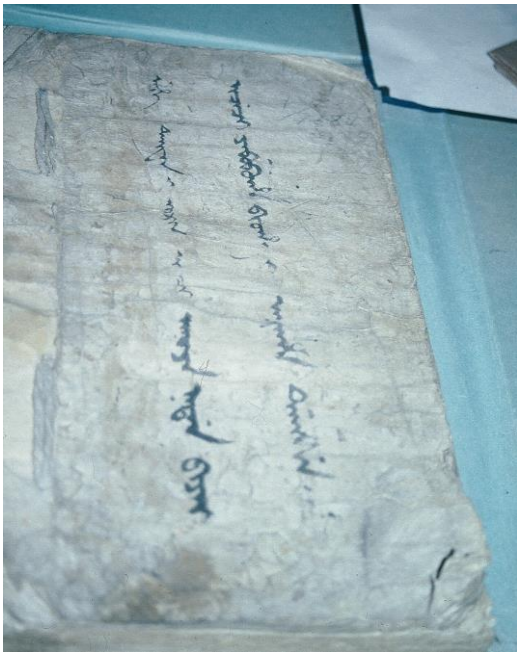


写真 2-1 康熙二十三年七月朔日起満行文文檔冊



写真 2-2 明崇禎六年の刻銘がある紅夷炮



写真 2-3 齊齊哈爾市図書館古籍部



写真 2-4 工事により一変した齊齊哈爾市街



写真 2-5 卜奎清真寺西寺



写真 2-6 崔氏家譜の一部



写真 2-7 盗掘墓から出たという瓶



写真 2-8 墨爾根副都統衙門跡



写真 2-9 嫩江にかかる浮橋



写真 2-10 墨爾根水師營の史跡標示



写真 2-11 水師營跡



写真 2-12 愛琿籍將軍たちの墓地にあった説明板



写真 2-13 ロシア風の窓を有する黒河清真寺



写真 2-14 食堂となっている馬占山公館旧址

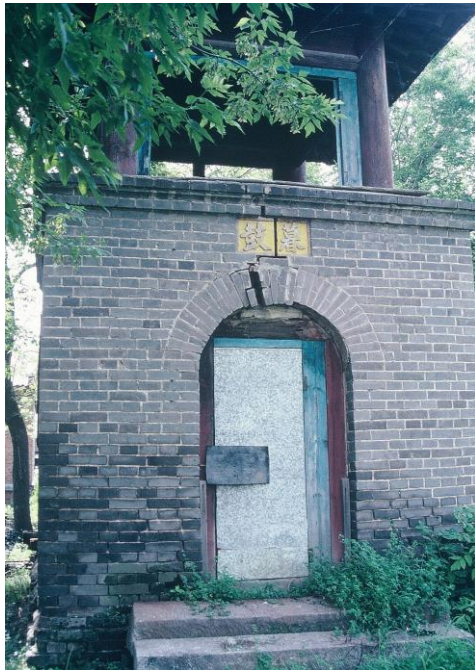


写真 2-15 関帝廟の鼓楼



写真 2-16 威遠將軍石碑の一部



写真 2-17 裏返しとなった石碑



写真 2-18 西瓦爾圖人民政府



写真 2-19 満洲語の本を持つ老人と保管箱



写真 2-20 三国演義の一節を読む老人



写真 2-21 莫力達瓦達斡爾族自治旗圖書館



写真 2-22 西布特哈衙門跡



写真 2-23 嫩江を渡るフェリー



写真 2-24 話を聞いた鄂倫春族の老人



写真 2-25 路上で見かけた木製のゆりかごを持つ女性



写真 2-26 白樺で作った丸木舟



写真 2-27 白銀納で話を聞いた玉林氏



写真 2-28 呼瑪の大通り



写真 2-29 呼瑪爾戦争記念碑



写真 2-30 呼瑪河上流を見る



写真 2-31 民国時代の建築だという

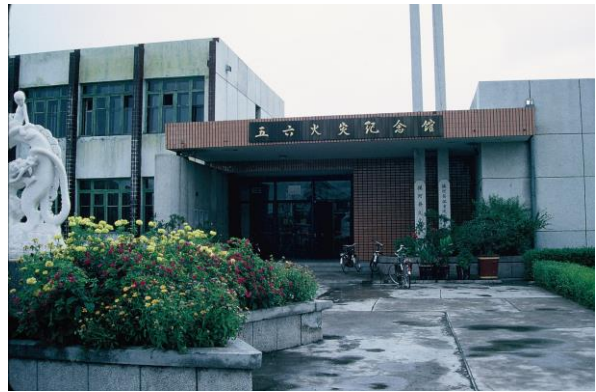


写真 2-32 森林火災記念館



写真 2-33 焼け残った白樺林写真



2-34 辺防警察のチェックゲート



写真 2-35 北極村の標識



写真 2-36 漠河のメインストリート



写真 2-37 漠河の清真寺



写真 2-38 漠河の埠頭には船が一艘停泊していた
左側はロシア

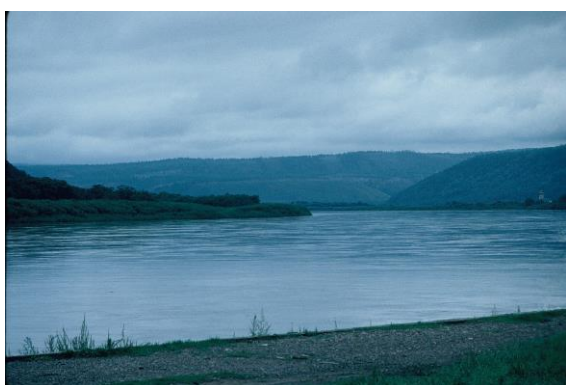


写真 2-39 漠河付近の黒龍江下流を見る



写真 2-40 垂溝石刻



写真 2-41 修復された双城の東門

第3章

黒龍江、ウスリ川沿岸調査（1995年8～9月）

はじめに

1995年8月から9月にかけて、黒龍江中流域ならびに烏蘇里江（ウスリ川）沿岸地域に暮らす赫哲族、満族の人々や遺跡等について調査する機会を得た、調査に参加したのは、筆者と江夏由樹（一橋大学⁽¹⁾）、加藤直人（日本大学）、そして王禹浪（哈爾濱市社会科学院地方史研究所）の4人である。

計画した踏査経路の概略は、哈爾濱を起点に松花江右岸の道を三姓に立ち寄り佳木斯へ、佳木斯から樺川、富錦を経由し松花江と黒龍江が合流する同江へ、同江から黒龍江の右岸を撫遠に至り、撫遠から烏蘇里江左岸を遡って興凱湖へ出て、その後は綏芬河、東寧を経て老爺嶺を越え琿春河流域へ、そして琿春へ至った後に図們江沿いに図們へ、そして延吉を経由して吉林へ、吉林から哈爾濱に戻るというものである。これまで東北各地で史跡と満族を尋ねてきたが、それはほとんどが建州女直や海西女直に連なる「旧満洲」所属の満族であり、これとは相違する存在の「新満洲」の居住した地域を訪れる機会はすくなかった。それ故、現在の赫哲族を含む新満洲の領域である黒龍江中下流域から烏蘇里江流域を訪れることは念願の一つであったが、この地帯は中ロ、中朝の国境地帯であること、交通がきわめて不便であることなどから実現は容易ではなかった。先に述べたように、幸い同行した王氏の協力に支えられ、ほぼ予定したコース通りにたどることができた。この点、王氏ならびに関係機関・各位に心より感謝するものである。

そして、この調査によって、我々はこれまで報告がほとんどない踏査経路の各地の現状、歴史的には新満洲に属したと考えられる赫哲族の民族郷である街津口赫哲族郷と四排赫哲族郷、哈爾濱郊外の双城市公正満族郷民旺村（正藍旗二屯）の満族と錫伯族の伝承、また琿春における満族の聞き取り調査の成果を報告することにする。

1 哈爾濱近郊の満族

8月23日

◆双城市公正満族郷民旺村（正藍旗二屯）

朝食後、哈爾濱市の南西郊外にある双城市公正満族郷民旺村（正藍旗二屯）（俗称、元宝城）に行く。村長関永濱氏の案内でこの満族村を調査する。双城駐屯の後裔の村で錫伯族もいるという。3軒の家を回り、フォト・ママ、シリ・ママ、家譜等の調査。村長の弟の家には遼金古城で発見されたという柱の礎石が置かれている【写真 3-1】。錫伯族の起源を金の完顔部、海西女直に求めるなど同村村長から興味深い話を聞くことができた。以下は、その調査内容である。

来歴

(1)所属はいずれも当時のもの。

この村の名は双城市公正満族郷民旺村（正藍旗二屯）で、俗称を元宝城という。この満族は遼寧省瓦房店（復州城）から嘉慶二十七年（嘉慶の年号に二十七年はないが、聞いたままに記録する）にそろって移動して、現在の双城市幸福満族郷（正白旗二屯）に居住し、その後に現在の正藍旗二屯に移住した。初めの移住では満族には40垧＝400畝と3牛、牛具、4戸で1盤展子＝石臼を与えられた。土地は一番よいところを分け与えられ、耕作しきれない周囲の余荒地を漢族に売り渡したので、周囲は漢族の土地になっていった。私は正白旗満洲の出身であり、老京旗＝老京は赫図アラを指す、赫図アラ旗である。これは復州以前の出身を示すものであろう。

双城市の満族は北京と遼寧から、錫伯族は吉林烏拉街から来たものであり、この満族には佟佳、関（グワルギヤ）、馬佳、索莫魯、齊佳、富察、那拉（納喇）、朗（ニオフル）の姓がある。

また、この村には“錫伯満洲”もいて、温、康、趙、那、穆、赫の姓がある。我々満族は建州女直の後裔と考えているが、錫伯満洲は海西女直の後裔と考えている。

習俗

正月に満族は餃子を食べて祝うが、錫伯族は餃子を食べず、夜の11時から“焼包袱”（「包袱」は着物を入れる、風呂敷または袋のこと。北京等において、この行事は、農曆の十月一日、すなわち冥陰節に行われるが、儀式用は大体紙で作られている…加藤）を行い、跪いて哭涙する。それは錫伯族が阿骨打の4番目の子供である金兀術 Uju（完顔宗弼＝魁首）の子孫であり、兀術は敗残の責任をとって正月に殺された「兀術在正月被迫害誤殺而死」という言い伝えがあり、彼の恨み「為兀術冤恨」に基づくものである。漢族は紙銭を焼いて祭るが、女真族は紙銭ではなく包袱を焼く。

満族と錫伯満洲には民間儀式である先祖の祭りで、満族はフォト・ママ fodo mama、錫伯満洲はシリ・ママ siri mama であり、両者の形が相違する。

今はそんなことはないが、昔はやはり満洲の方が錫伯より上位の存在であった。それは錫伯が満洲に征服された人々だからである。文革以前には錫伯族と満族の間の通婚は行われなかった。それ以外の漢・蒙・錫伯族の間には通婚が行われた。

同村の1軒の家には、穀物用の「升」が保存されていた。説明によると、この升は玉米と高粱は1升4斤、小米なら1升5斤に相当するという。関村長に満洲語の本や家譜のことを聞くと、昔はあったが文革時代にみんな焼いてしまった、私自身先頭に立って焼いたと朗らかに答えた。

2 哈爾濱から撫遠へ

8月24日、25日

◆松花江沿いの風景

チャーターした日産のRV車で哈爾濱を出発したのは、加藤直人、江夏由樹氏と案内役の王禹浪氏と細谷の4人、松花江右岸沿いの本来の道路が道路工事や衝突事故で通過できず、車ごと船で松花江を渡って左岸に出るというハプニングもあって、夜遅く佳木斯に着いた。翌25日、佳木斯を出発し樺川に至ると、この先は松花江右岸沿いの道で三江平原の一郭に入る。以前は荒野だったというが、今は田んぼを含む耕作地である。原野のなかを流れる小川に魚を捕る「迷魂場」が仕掛けられているが【写真3-2】、これはこの一帯が氾

濫平原であることをうかがわせよう。平原の中の小高い丘に城壁跡らしいものが見える霍里吉利古城は【写真 3-3】、遼、金、元時代三朝にわたる城であり、明代の衛所、清代の駅站であるというが、立ち寄る暇もなく同江へ向かった。

◆同江市街、同江赫哲族博物館

同江市内には中口間の国境貿易センターである「辺貿商城」があり【写真 3-4】、衣料品、靴、雑貨などがならんでいたが、休日のせいもあってか閑散としている。

同江の文化管理所は、1910年の建築で、英国の海関であった建物を利用しており、同江赫哲族博物館が併設されている【写真 3-5】。歴史部門の展示には、満漢文の「封賞董薩那父母的誥命冊」（嘉慶十六年十一月二十三日？）の写真、そして「哥札宋哥謀克之印」と「都元帥???所之印」と読める2つの金代の謀克印（解説では「満文印」としている）が陳列されている。佳木斯で同江には満文資料があると教えられたが、満文史料とはこの印のことらしい。出土場所などを尋ねても明らかではなかった。民族部門に展示されている赫哲族の烏拉草（保温に使われ東北三宝の一つに数えられる）を使った靴【写真 3-6】、鯉の皮を使った魚衣など初めて目にするものがある。

8月26日

◆同江から三江口へ

朝は寒いほど涼しい。今日の目的地である撫遠へ行く前に、松花江が黒龍江へ合流する地点の三江口を訪れる。地名は三江であるが実際は黒龍江と松花江二江の合流点であり、合流する地帯には中州があり、分流し入り組んでいるので、3つの流れに見えるのであろう。松花江の水は褐色がかっているが、黒龍江すなわち満洲語でサハリヤン・ウラ（黒い川）の名のとおり黒ずんでいて、両者の水の色ははっきり相違する【写真 3-7】。ここから黒龍江・アムール川が中口の国境となるためであろうか、同江の港には漁船と共に哨戒艇が繫留されている【写真 3-8】。同江から街津口へ向かう道は黒龍江沿いを走り、対岸はロシアである。ロシア語の道路標識もあり、国境監視塔も設置されていて、中口の国境であることを感じさせられる。

◆街津口

撫遠に行く途中、黒龍江岸にある街津口へ立ち寄る。ここは街津口赫哲族自治郷であり、「赫哲族」を観光の中心にしている土地である。赫哲酒家、赫哲族博物館【写真 3-9】、そしてホテルが併設されていた。

赫哲族博物館には、いわゆる「神様」【写真 3-10】、タマサイに似た首飾り【写真 3-11】、古銭などの出土品、赫哲族工芸品と称する魚骨を使った飾りものなどで、資料になるような展示は見当たらない。

黒龍江に面した街津口の船着き場には、漁民のエンジン付きボートが繫留されている【写真 3-12】。漁民は漢族と赫哲族の両方いるが、赫哲族の漁場には漢族は入れないとのことであった。船着き場の周辺には、遺跡調査がなされたのかどうかは不明であるが、土器の破片や石器などが散乱している。

撫遠へ街津口から東に2kmほどの所に「団結古城」、額図山北側には「勤得利古城」がある。両者共に金・元・明・清代の遺跡とのことであるが、立ち寄る時間はなかった。臨江附近から道路の左側には黒龍江本流が見え隠れする。三江平原もこの付近まで来ると耕作地は少なく湿性の原野が多くなる。濃橋鎮で烏蘇里江沿いの道に合流すると、これまでの悪路が嘘のように良くなる。どうやらソ連と緊張関係にあった当時の軍事道路のよ

うである。濃橋鎮から 25 km ほど北上すると、黒龍江に面し、ビルの立ち並ぶ撫遠の街が一望できる丘に到着、雨上がりの虹の下にある撫遠の街と黒龍江、そしてはるか先にはシベリアの平原を望む壮大な眺めが広がっていた【写真 3-13】。

8 月 27 日

◆黒龍江と烏蘇里江の合流点

撫遠の港には旅客船が繫留されているが、民間船はロシアの警備艇に拿捕される危険性が高く、使用されていないとのこと【写真 3-14】。我々は運良く武装警察巡邏隊の船に乗せてもらい、黒龍江本流を少し下ることができた。船は途中で停船してロシア側の船と交信し、許可を得て進む。20 分ほど下流に行くと、現在まだ帰属が確定されていないため「爭議島」とも称されている黒瞎子島（ポリショイ・ウスリースキー島）⁽²⁾ が見え【写真 3-15】、このあたりで引き返す。この島は清末からロシアが占有し、今はロシアの紅旗艦隊が駐屯していて、1 週間前にブラゴヴェシチェンスクからハバロフスクへ 4 隻の艦船が移動して来たという。1 時間足らずではあったが、船上から黒龍江の雄大な眺めを堪能することができた【写真 3-16】。

中国領の岸辺は、寒さのため成長しないという細い幹の白樺林が続き、あちこちで小舟が漁をしている。漁民はしばしば越境して漁を行い、問題を起こしているらしい。中口間の交流（貿易）は、ロシア側の船は金曜日にハバロフスクから撫遠に来て 2 泊して日曜日に帰るが、ロシア人は肉、野菜、果物、酒などの食料品を買っていくという。一方、中国側からは金、土曜日に撫遠からハバロフスク 1 日旅遊が行われているとのことであった。

◆烏蘇境

黒龍江は撫遠の下流で烏蘇里江と合流する。烏蘇里江の右岸はロシア領であるが、烏蘇里江本流全てが国境線となっているわけではない。まだ画定していないのではあろうが、現状では合流点の手前で烏蘇里江と黒龍江をつなぐ水路（撫遠と撫遠三角州を分ける水路）が中国とロシアの国境線となっている。この国境線である水路の間近にあるのが烏蘇鎮で、ここには軍が駐屯していて原則的に外国人は立ち入り禁止である。入れるかも知れないとの情報があり赴いてみると、やはりゲートがあり「軍人以外の進入禁止」の標識が立ち、中には国境監視塔もみられる【写真 3-17】。しかし中に観光客もいるようなので訊ねてみると、30 分程度なら入っても良いとの許可が出る。ゲート内に入り烏蘇里江岸に出て見ると、すぐ下流にはロシア領のカザケヴィチェヴォ Казакевичево の街が見える。烏蘇境から黒龍江合流点までの間には、砲台が備えられ国境警備が行われているので、ここから先、両江の本当の合流点まで行くことはできない。以前はここでも中口貿易を行っていたが、今はしていないとのことであった。

烏蘇里江に流れ込む小さな流れには、岸辺にたくさんの小舟が繫がれていて漁民が網の手入れをしている【写真 3-18】。

撫遠には訪れるべき博物館なども無く、撫遠一帯が太宗時代に清朝の支配下に入ったことを証する史跡や周辺諸民族を統治する拠点を意味する撫遠（綏遠）という名称に因む史跡も探し出せなかったが、今の中国では黒龍江の最も下流に位置する街を訪れることができたという満足感を得て、翌 28 日の朝、次の訪問地である四排赫哲族村に向かった。

(2) 黒瞎子島は上流にタラバーロフ島、下流にポリショイ・ウスリースキー島の二つに分かれているが、中国の地図では二つの島を合わせて、「撫遠三角州」と記している。

3 撫遠から琿春へ

8月28日

◆北大荒

6時55分、撫遠を出発。濃橋鎮を經由して寒葱溝を7時50分、前鋒農場を9時10分に通過する。前鋒農場から勝利農場まで25km（35km?）の標識がある。間もなく別拉洪河の支流を渡るが、この付近から前方に久しぶりに低い山脈（太平嶺）が見え始め何となくホッとする。道の両側は解放軍を基礎にした独立的な集団農場が広がり、いわゆる北大荒の地である。朝鮮戦争後の退役軍人対策でもあるこの地の開墾は困難を極めたが、現在では大学まで有し、かつ省の統括を直接受けない特殊な地域となっている。したがって、税金を省に納めていないためか、ナンバープレートがない車が目に付く。

9時50分にいくつかの支流と本流に別れた撓力河を渡り、10時10分、小佳河鎮を過ぎる。ここから東南に向かうが、悪路が続く、道に迷いながら東に迂回する新しい道路を走る。赫哲族郷である四排への分かれ道を通りすぎ、12時30分過ぎに饒河に到着する。

◆四排赫哲族村

14時30分、赫哲族村へ向かう。西林子まで15kmほど戻り東に6kmほど入った四排赫哲族村へ到着【写真3-19】する。四排赫哲族郷人民政府で聞き取りが可能な古老の家を教えてもらう。人民政府には赫哲族博物館が併設しており、展示物を見せてもらう。人民政府の紹介で博物館長が来てくれ、当地の古老の家に案内してもらう。

15時30分から工芸で名高い尤連仲氏（男性、77歳）【写真3-20】とその3番目の息子尤敏毅氏（43歳）から聞き取りを行う。ここには以前、中村和之氏（現函館工業高等専門学校）が訪ねてきて、彼と面識があるといい、中村氏の名刺を見せてもらう。以下は、その聞き取りの内容である。聞き取りには、四排文化站站長負傳占祥氏が同席した。

来歴

尤連仲は体を悪くし記憶が薄れているので、子息が補助した。連仲の来歴は連仲が7歳のとき、父は30年間住んだ富錦から宝清に移動しここには20年住んだ。1947年に饒河西林子に移り、57年から四排に遷って今に至っている。

生業

生活は昔から60年代までは狩猟と漁猟それに採集をしていた。ただ、我が家は祖父の代から木匠が得意で、祖父と父は木匠が大変上手であった。私はそれを受け継いで、1997年には中国社会科学院の劉忠波氏からそれが認められ、北京の民族文化宮で展覧会を行い大変に有名になった。日本、カナダでも名が知られ、多くの工芸品が買われてお礼に計算機、写真機、録音機などを貰った。日本人では中村和之氏が1991年7月10～20日頃に訪ねて話をした。

八旗

尤敏毅によると自らの旗属は鑲白旗であったとする。ただ、尤連仲が正白旗であると訂正した。新満洲と旧満州（イチエ・マンジュとフェ・マンジュ）の語は知っている。赫哲はみなフェ・マンジュ（旧満洲）に属する。

ロシアとの関係

羅刹（ロチャ）という言葉を知っているかとの問いに、それは知らないと敏毅が答

えたが、連仲はしばらく考えた後で、古い時代のロシア人のことで老毛子（1900年代のカザーク〈コサック〉が髭を生やしていたことに由来するという）と同じだと答えた。どうも昔はロシアと交易を行っていたらしい。

満洲語

満洲文字は父も祖父も富錦時代に勉強し、私も2年間勉強した。父や祖父は読めた。満洲語の本はどうやら持っていないらしい。

鄂倫春（オロチョン）との関係

鄂倫春とは住んでいる場所が違うので交流は少ない。狩猟で出合ったときに交流する程度であり、言葉も鄂倫春とは少し同じ言葉があるが通じない。

衣類

赫哲は政府の命令で狩猟ができなくなり漁猟のみになってしまったが、昔は両方やっていたし、衣類も毛皮で作っていた。決して魚衣だけではない。

赫哲族の「神様」【写真 3-21、22】

天神はすべての家ではなく、屯長の家にのみ置いてある。そして村の人々が結婚などの儀式を行うときは屯長の家から借り出し、終われば返す。癆病神は赫哲族が一番怖い結核の予防の神様で、これに罹らないためにどこの家にも置いてある。オチホ神は一般的な神様で、仕事のときなど何時も「神様、神様」と念じる。

赫哲語

赫哲語は四排で3、4人が話せる。

17時近くに辞去し、烏蘇里江河畔に出る。川幅は100m強で対岸のロシア領が間近に見える。17時半、ホテルに到着。

8月29日

4時半に起床して出発準備を済ませてから朝食。6時25分、出発。今日は完達山を越えて烏蘇里江上流域へ出る。

初めは西に走り、7時25分、永楽を通過する。ここから完達山中の道になり、標高で200mほど上ると、白樺が混じる森林の丘陵風の山中に入り、小さな起伏を越えて屈曲路を走る。車はほとんどなく、自転車、三輪バイク、徒歩の人のみである。途中で間違えて大通河に出る道に入ってしまう。馬車の老人に聞くと、この道を進めばまた饒河に戻ってしまうと教えられる。道路標識はほとんどなく、たまにあっても古いもので、今とは違っていたり、掠れて読めなかったりするものが多い。

下り道に入り、7時55分、五林洞を通過すると、七星泌河を越え饒河県から虎林県に入る。再び小さな丘陵を越えるが、この付近の烏蘇里江流域には日本軍のつくった対ソ防衛戦の地下壕があり、見学も可能だとのこと。ただ、先を急ぐ今は立ち寄る暇がない。小木河に8時50分に到着、山道上部から200mほど下ると、道はほぼ平坦となる。烏蘇里江の支流を越えて南下し、虎頭鎮と虎林の分岐に9時30分、到着。

◆烏蘇里江船上調査

戸川幸夫著『白色山塊』（毎日新聞社、1981年）を思い出しながら、港まで2kmの道をたどって埠頭に出る。撫遠や烏蘇境とは相違し、国境とはいえ、この埠頭には遊覧船が並ぶなどのんびりしている（当地の標高は80m）。ここで船上から当地の状況を知ることにする。中ソ紛争で有名になった珍宝島（ダマンスキー島）はここから十数km下流にあり、往復するには4、5時間かかるとのこと。時間的に無理であると断念し、この近辺の烏蘇里江沿岸の様子を見ることにする。585号に乗船して上流へ向かう。

船のガイドから、虎頭とこの付近は1945年の日ソ戦争、1968年の中ソ対立の戦場で、先の第二次世界大戦のとき、日本軍は敗戦を知らず、1年余り後まで戦った、ロシア側に集落が見えないが、かなり高い河岸段丘の上の林の向こう側に集落がある、などの話を聞く。

上流に向かうにつれて、ロシア領内にある会議場の中ロ会議が行われるときに登るための階段、ロシア漁民の漁撈を行うテント、そして中ロ両岸側ともに同様の航行標識などが目に付く。比較的中国側に沿って遡航しているとはいえ、ときにはロシア側に近づいたりしてどこが国境かわからないまま上流へ向かう【写真3-23】。おそらくこの付近から烏蘇里江となり、源流である松阿察河と穆稜河の合流点と思われる地点まで遡って引き返す。埠頭の近く、ロシア領側から合流する阿庫里河の河口付近には2隻のロシアの巡邏艇が泊まっていて、こちらが手を振ると同様に手を振って応えてくれる。

10時45分、出発。東風を11時35分に通過するが、ここには東に50kmで「口岸」の標識があり、新しい中ロをつなぐ国境橋がある。この国境貿易のためであろうか、この付近の虎林への道路標識はロシア語で記されている。

◆虎林

11時45分、虎林の街に到着する【写真3-24】。この付近から耕作地はトウモロコシの作付けが多くなり、通行量も多くなる。12時40分に出発。この度の旅行の最北端である撫遠（北緯48度50分）から虎林（同46度）へと南下したせいか、暑く感じる。14時30分、夕立があり道路の埃が鎮められた密山市に到着する。興凱賓館に投宿する。同ホテルでは会議が開催中であり、かつ貿易のためのロシアの大型トラックとそのドライバー等で混んでいる。

8月30日

◆興凱湖

5時起床、6時出発、途中で食事をすませ、6時30分、興凱湖へ向かう。7時30分、興凱湖郷を通過、やがて小興凱湖が左側に見える。小興凱湖沿いに左に回り込むと道は砂の道となり、この付近に新開渡遺跡とその石碑があるはずとのことで、探しながら進むが見つからない。8時20分、興凱湖と小興凱湖をつなぐ新開渡に到着。地図で確認していたが、予想に反してこの場所は5mほどの橋でつながっており、水門が設けられ、小興凱湖から興凱湖への水量を調節している。ここで興凱湖に降りてみるが、眼前の興凱湖は湖というよりは波も高く押し寄せるなど、全く「海」の様相【写真3-25】であり、その大きさに圧倒される。「海西女真」の「海」が興凱湖を指すという主張も、あながちおかしくはない情景である。20分ほどそこに滞在し、次いで、果たしてどこまで行けるのか不明であるが、地図上に記された龍王廟という場所へ向かう。道の右側は砂浜が続く。この付近にも新石器時代の遺跡が多数あるとのことである。

途中の興凱湖27隊にも水門があり、ここから先の車進入料20元を徴収される。古い地

図では興凱湖農場から興凱湖 15、13 隊經由で龍王廟へ行く道のみであるが、新しく湖岸沿いに道路ができています。あまり通っていない砂の道で凹凸が激しい。途中に監視塔と遮断機があったが、開いていたので、湖に沿って右に回り込みながら龍王廟へとたどる。烏蘇里江の水源になっているらしい橋を渡ると遮断機があり、今度は鍵がかかっている。やがてライフルを持った若い兵隊が来て、龍王廟駐屯地まで同行してくれる。

隊長とおぼしき責任者が出てきて、ここは外国人立入禁止区域であり、ここから先には入れないとのこと。中国人ならば更に数km先の国境近くまで行けるらしい。また、先日 3 人のライフルを持った脱走兵が出てまだ逮捕されておらず危険なこと、軍事施設なので兵舎側は撮影禁止等と言われる。烏蘇里江、松阿察河に流れ込む場所を見たかったがこれは断念せざるを得ない。

◆龍王廟

隊長に龍王廟のことを聞くと、龍王廟が何時からあるか知らないが、日本軍が駐屯していた時代からの地名であり、以前にあった龍王廟は水没してしまい、今は全く新しい龍王廟となっているとのこと（9 時 20 分～35 分）。

引き返して鍵を開けてもらい遮断機の外へ、橋で休憩して 10 時、帰路につく。10 km ほど行ったところで来るときは開いていた遮断機が閉まっている。どうやら我々が龍王廟兵舎まで入ってしまったので閉めたものらしい。監視の兵隊にドライバーが登記をすませて通過する。

それにしても、興凱湖東北部の一番先まで行けたのは幸運だった。11 時 10 分、「密山 90 km 龍王廟 25 km」の分岐標識をすぎ、来るときにはわからなかった「新開流遺址」と書かれた石製の標識を藪の中に発見する【写真 3-26】。今は草むらに覆われているので見つけづらいが、今でも道の周辺で土器の破片が見出せる。

◆密山から鶏西へ

13 時 10 分、平和郷で昼食。13 時 45 分に平和郷を出発すると密山は至近距離。14 時、給油を行い、密山市の西はずれを出発。この付近から舗装道路が続くが、舗装道路の壊れた部分には、補修代わりに泥が詰められている。凹凸が激しく、未舗装道路より始末が悪い。この付近にも遼、金、高句麗時代の遺跡があるという山を右に見ながら、鶏西や鶏東の地名の由来となった鶏冠山に向かって進む。16 時、鶏東鎮へ到着。有料道路を通過して 16 時 30 分、鶏西市内へ到着。

8 月 31 日

◆鶏西からの道

8 時 50 分、出発。鶏西市民政局局長と待ち合わせる。民政局に寄り鶏西市の紹介を受ける。民政局前では「障害者への教育普及を」と、聾啞者が楽隊活動を行っていた。

現在、鶏西から牡丹江へ抜ける高速道路を建設しており、市外に出るまでの道路が解りづらいと文化局長が途中まで同行してくれる。10 時 20 分、鶏西を出発、文化局長とは、11 時 5 分に別れるが、この付近から道路建設のため、至極悪路となる。道の両側には鶏東・西の特産である石炭の露天掘りが多数目に付くが、この露天掘りも个体企業で行われているとのこと。悪路を右往左往しながら、穆稜へ向かう。11 時 40 分、高速道路建設のため、道路脇にたまった水の排出用に道路全面が掘削され、車が進めなくなる箇所遭遇する。応急的に木材を渡し、何とか 12 時に通過することができた。12 時 5 分、梨樹に入る。「綏陽 90 km、八面通（穆稜）」の標示がある分岐点へ到着する。八面通方面は悪路が続くそう

なので、綏陽方面の道に入る。未舗装道路だが、初めは快適で、ドライバーは「ここまで13 kmを45分もかかった」と嘆いた悪路から解放され、今度は時速100 km近くで飛ばす。

◆老爺嶺

12時40分、風月橋林場（標高550 m）を通過すると、道は次第に高度を上げて老爺嶺の山中をたどり始め、最高点とおぼしき場所を13時15分に通過する。標高は930 mを示す。周囲は針葉樹と白樺林で肌寒い。なだらかな起伏が続き山頂付近にも湿原もある。思いがけない老爺嶺越えの風景は、まさにニコライ・バイコフの小説に描かれた世界の再現である。行き交う車も少なく、道路全体を占めるロシア製の巨大なブルドーザーが1台と、他は2、3台の車とすれちがったのみであった。赤い木の実も見える秋の老爺嶺は静寂で素晴らしいが、食堂どころか人家も無く、食事をする場所がないのには困った。峠を越えた東斜面に入ると岩石が目立つようになり、流れている川も日本の沢と似た清流である。

◆天橋野味餐厅

15時、突然、道路の左側に「天橋野味餐厅」という食堂が現れる。まさに宮沢賢治の『注文の多い料理店』のような登場の仕方であった。店名は「天橋嶺」にちなんだものであるというが、普通知られている「天橋嶺」とはかなり離れているような気がする。標高は、600 m。このような山奥で、かつ車通りもあまりないところに食堂があるとは驚きである。この店は「野味餐厅」の名のとおり、当地で捕れる鱒に似た魚「花里羹子」を売り物にしている、その魚と猪、キノコ、塩漬の蕨、タラの芽などを頼み、遅い昼食とする。自分自身に塩をもむことも、クリームを塗ることもなく、すべて美味しくいただいた。

16時30分、出発。ここからは車の通行が多いのか、しばらく悪路が続く。17時、双橋林場を通過するあたりから道路がよくなる。トンボが舞い、ススキが茂る秋の山が美しい。

◆綏芬河

17時50分、綏陽鎮に到着、ここで綏芬河と穆稜をつなぐ建設中の高速道路に入る。切り通し部分は未完成のまま普通道路として使用されている。やがて「綏芬河10 km、東寧44 km」の標識があり、ここから綏芬河までは高速道路で、10元の使用料をとられた。

10分ほどで綏芬河市内に入り、18時過ぎ、交通賓館に投宿する。今までの街とは相違し、辺境貿易の拠点らしい賑やかさがある。

9月1日

◆綏芬河国境

7時30分に出発、近くの店で朝食。綏芬河国境に行くが、遮断機のある検問所で「許可証」が必要と言われ、武装警察に行き、一回限り有効の辺境禁区「通行証」を1人2円で入手する。通行証の裏面には辺境管理規定を守り、国境関門と鉄条網を越えないこと、防火期間の野外喫煙を禁止すること、違反した場合は辺境管理条例で処罰するとのことが書かれている。この通行証を持参して検問所を通過。ここから国境までは立派な道で、道路の右側だけに鉄条網が張ってあるが、左側は荒野が続く。

◆綏芬河口岸

8時30分、綏芬河口岸に到着【写真3-27】。中国側の関門にはロシアに引き返すアメリカの中古と見られる大型トラックが数台待機して並んでいる。1台ずつ簡単な審査を受けて通過している様子。中国に入ってくるトラックは空、または廃材の鉄を積むものが多い。

観光客も多く、賑やかに写真を撮っている。9時30分に引き返すが、関門に近い道路際にはロシア語の看板を掲げた小店がならび、ロシア人が白酒を買っている。

市内に戻る途中のビル街は中ロ貿易のためのホテルや貿易センターだが、近年の貿易不振からか殆どが閉まっていてゴーストタウンの感じがする。一見する価値があるというので「貿易センター」に立ち寄るが、ロシアの物は毛皮製品やオモチャのみで中国製品が目立つのみであった。

◆綏芬河から東寧へ

9時40分に綏芬河を出発、高速道路で東寧へ向かう。料金所を出たところで左折、「東寧 44 km」の標識がある。手入れされた未舗装道路で、この道は高句麗時代から続く交通路であり、左右の山には高句麗、渤海の遺跡があるという。南天門から下り始めると東寧の平野。東寧は盆地で気候が温暖であり果物がよくとれる場所とのことである。

◆東寧市

10時30分、東寧市街に入る手前にある綏芬河の橋の取付け道路が工事中で、悪路を大きく迂回して市街に出る。11時、大通りにある「外運大厦」に行き投宿する。ここでたまたま旧知の黒龍江省文物考古研究所の張泰湘氏に出逢う。奇遇を喜び合うとともに、考古学の専門家である張先生に三岔口へと案内してもらうことになる。

◆卒賓府城址

13時に出発、三岔口への路上にある渤海の卒賓府に比定されている巨大な城址に立ち寄る。城跡の北東の角から城壁を歩いてみる。途中に壘門の跡も残っている。城内は民国時代から漢人の村として開発されてしまったが、民家の下には多くの遺跡があるとのことである。この場所は牡丹江と日本海を繋ぐと共に、琿春から北を繋ぐ南北東西の十字路に当たる交通の要衝でもあるらしい。城内を四分の一ほど周る。

◆東寧口岸

東に進み三岔口（八道溝村）に入ると舗装が跡切れ、朝鮮族が踊りの稽古をしている。国境近くになると再び舗装道路となり、道の両側にはロシア語・朝鮮語・漢語の看板の店が建ち並んでいる。ほどなく「東寧口岸」の国境検問所に着く【写真 3-28】。綏芬河口岸より閑散としている。国境検問所だけ見て引き返す。この八道溝に、元来の東寧衛が置かれていたらしい。

東寧に引き返す途中、団結遺跡を見学する予定であったが、事情により断念する。15時、ホテルに到着して今日の行動を終了する。

9月2日

◆泥凮の山道

朝、雨が激しく今日の行動が心配となる。現地の情報では老黒山から汪清に出て図們經由で琿春に行くのは、道が良いが時間がかかる、老黒山から太平嶺の山中を抜け琿春河上流に出て春化鎮に出る道は、悪路だが距離が短く、バスも8時間で走っているとのこと、春化經由の道をたどることに決定する。7時40分、東寧を出発する。

8時20分、神祠付近の綏芬河上流に架かる橋の上から団結遺跡を遠望する。このあたりにも高句麗山城があるとのこと。幸い雨も上がって曇り空となり、8時40分、老黒山鎮の手前を左折する。9時10分、南村を通過すると次第に山道になる。9時25分、四検。この

あたりから道が悪くなり始める。9時40分、道が分岐している。後続していた三輪バイクに乗る人に道をたずね、左折する。この辺りから道路拡張工事中で、泥濘の中には大きな石もあって、四輪でも進むのが困難となり、トラックも立ち往生している。9時55分、東寧で聞いた二検（標高 930 m）を通過する。

◆黒龍江省と吉林省の省境

10時、黒龍江省と吉林省の省境（標高 520 m）に到着する。本当にこの道をバスが走っているのかとたずねると、12時前にはバスが来るとの返事であった。この悪路をバスが走れるのかと驚かされる、省境は山の稜線上を走っていて、省境から南に緩く下り始めると吉林省で泥濘の道ではなくなるが、表面から 30 cm ぐらい腐れ雪のように固められていないので、ハンドルがとられ激しくスリップする。11時過ぎ、林場検査場を通過。この辺りから天気も良く日差しも強く、道もよくなりほっとする。越えてきた山脈を遠望しながら、琿春河上流を左に見て高度を下げ、11時45分に吉林省で最初の村を通過【写真 3-29】。そのあとに二つほど村を過ぎると春化鎮が見え始める。

12時、春化鎮（標高 380 m）に到着する【写真 3-30】。ここは朝鮮族の居住地域で看板も朝鮮語がめだつ。春化鎮で朝鮮風味の昼食をとる。老爺嶺の山道 50 km ほどを、2 時間ほどかけて抜けてきた計算となる、無事に山越えができたこと安堵する。12時55分、出発。琿春まで 95 km の野道を疾走する。遙か南に長白山山脈が見えてくる。14時30分、琿春市内【写真 3-31】に入り、琿春賓館に投宿する。

4 琿春周辺と満族の人々

◆琿春

今回の調査で、第1の山場が同江から撫遠まで、第2が撫遠から饒河まで、第3が興凱湖、第4が綏芬河から琿春と考えていたが、予想外の鶏西から綏芬河の悪路が加わった。これらの地点を全て無事故で通過できたことに感謝する。琿春から吉林へは距離はあっても完全舗装道路で問題はないという。「琿春」の街路標識が、ハングル、漢語、ロシア語と三カ国語で書かれているのは、当地が国境の町であることを感じさせる。

国境地帯に入るための許可を解放軍に取りに行く。ただ、朝鮮族自治州成立 30 周年記念で9月1日から5日までは休暇期間ということで、許可証の入手は明日となる。

9月3日

8時、人民解放軍琿春警備部に入境許可を取りに行く。30分ほどで許可証（100 元）を得る（ただ、グループに外国人が含まれることを確認し忘れたらしい）。

朝食を済ませ、9時20分、出発。東南に走り、琿春河に架かる橋（有料 5 元）を渡ると、外国との投資合作地区に入る。あまり活気はない。この道の終点が国境の長嶺子で、鉄道も引かれているが使用されておらず、中口の国境貿易所がある。途中から右折し泥道に入ると、草原の中に明代の西砲台（琿春から 10 km 地点）がある。版築で築いた高さ 6 m ほどの防護壁が残存している。周囲は約 300 m と推測される【写真 3-32】。

◆図們江

10時、砲台跡を出発。山を越えて（最高地点、標高 900 m）、敬信に降りると、右側に図們江が流れ、対岸は北朝鮮である。琿春から 53 km の標識の近くに国境地帯警備所があ

り、ライフルを持った兵隊がチェックをしている。今朝入手した許可証は中国人用であり、外国人はこれでは入れないという。仕方なく付近の写真だけを撮り、11時、警備所から引き返し、12時、琿春に帰着する。改めて警備部で申請を行い、朝の許可証に外国人3名を書き足してもらう。

夕方には入場できなくなるとのこと、14時40分、昼食をあわただしく済ませ、再び琿春を出発。16時、警備所に到着、今回は入ることができる。ここからすぐに図們江にかかる中朝を繋ぐ鉄橋がある。右側が図們江、左側はロシア領でロシア側には粗末な鉄条網がある。

67km地点にロシアから買ってつくったという図們江を埋め立てた堤防橋がある。これは陽関坪防川の堤防路で、図們江の氾濫でこの先に至る中国領が流失してしまい、ソ連の合意を得て1983年に完成したロシア領内の中国道路であるという【写真3-33】。これを過ぎると防川景区で、有名な「張鼓峰」はこの近くにある。景区旅遊費1人15元を支払い旅遊区に入るとその先は通行止めで、16時30分頃、監視塔と食堂がある場所に到着する。

◆国境

国境警備の軍人が出てきて説明してくれる。残念ながら外国人はロシア領と北朝鮮領にカメラを向けてはいけないとのこと。台地の展望台から図們江河口の湿原が広がり、15km先という日本海が見える。眼下にロシアと北朝鮮を結ぶ車・鉄道兼用の鉄橋がある【写真3-34】。鉄橋の形はロシアと北朝鮮で相違している。間近に見えるロシアの町はロシア側鉄道の最終駅でもあるハサン Хасанで、北朝鮮側は豆満江の工場地帯が見える。この二つの町が北朝鮮とロシアの貿易場所とのこと。広場には、江沢民の書いた「延辺軍区辺防団五連『守東北前哨、揚中華国威』1991年5月8日書」という、旅遊局が1993年8月25日に立てた碑文がある。また、中国はここから日本海までの土地をロシアから譲渡してもらうか、撫遠の黒瞎子島と交換する意向があるとのこと。

ここからの写真撮影はできないが、船で鉄橋付近まで行くことは可能で、中国側を撮影することもできるとの助言をもらう。景区入口には高速旅遊船の看板があり、川には4隻、陸にも2隻の船がある。16時55分頃から17時15分まで、口朝を繋ぐ鉄橋付近までその船で行く。こころなしか北朝鮮側はひっそりとしている。乗船場に戻り、半月のかかるススキの道を琿春に引き返す。夕日の中に長白山が見える。17時56分、警備所を通過し、19時、暗くなった琿春に到着する。夕食後、20時30分、ホテルに到着する。

9月4日

◆琿春副都統衙門

琿春市政府から東1kmほどのところにある副都統衙門があったという場所【写真3-35】に行き、近くの店で昔の副都統衙門のことを知っている人を尋ねたところ、付近に住む劉汝達氏（61歳）を紹介してくれた。衙門付近の小さな美容院に腰をかけて劉氏から旧衙門の話聞いた。聞き取りの結果は、以下のとおりである。

（劉汝達）

私は漢族であり、4歳の時に山東から琿春に移住してきた。今、琿春市人民病院の場所が琿春副都統衙門の在ったところで、住所は「靖和郷沿河委7組」である。副都統衙門の建物は「文革」中に壊し、それでも一部が残っていたが、1990年から93年にかけて道路の舗装工事が行われたときに全部壊されてしまい、今では何も残っていない。全て人民病院になってしまった。衙門跡の一角に残っている古い建物は、清末民初の建築であり、当時は「益和貨棧」であったが、民国時代には「団部」（何らか

の本部らしい）、日本時代には「海関」に使われ、その後は「田辺医院」となった。この劉汝達氏の紹介により、近くに住む満族の関作田氏（77歳）に聞き取りを行うことになった。劉氏によれば関氏はもと中学校の教員であり、日本語もできるとのことであったが、聞き取り中に日本語は全く話さなかった。

関作田の自宅に行き、関氏を中心に、友人の郎書紳氏（69歳）をまじえて、話を聞いた結果は以下のとおりである。

出自

（関作田）

先祖は長白山地区の「按出拉瓜尔加郭羅」の出自であり、順治年間に寧古塔に移住した。康熙五十三年に、寧古塔から琿春に移動した「正白旗」である。私の家は元来八棵樹村であり、1714年から10代がこの村に住んでいて、その後に琿春市内に移動した。祖父は「琿春副都統衙門世襲雲騎尉六品軍功」であった。先祖に「黒龍江將軍」「西安將軍」となって「傳將軍」（富將軍）と呼ばれた「傳僧徳」（富僧徳）がいる。乾隆年間に「京旗副都統」であった人である。一等、二等、三等侍衛は何人もいる。二等侍衛は義和団事件の時に同治（光緒？）帝を馬で承徳に逃した功績で「押馬大臣」を授けられた。私は、これまでも北京の檔案館に出向いて、先祖のことを檔案で調べたことがある。建州衛女直は、三姓の「馬大」から寧古塔にそして「幹母河＝会寧」に移動し、その後に蘇子河に行つて蘇子河女直と合流したものであろう。

（郎書紳）

私は「紐呼魯」氏で「鑲白旗」所属である。先祖は「東海」から来た、清朝皇帝に海産物を「貢納」する「東海女直」であり、琿春開拓を最初に行った一族である。先祖の1人は「総兵官」で「準噶爾戦争」で死んだ。死んだ後に皇帝から「夜明珠」を5個など様々な品物をもらい葬った。その墓は、「満洲国」時代の琿春政府の敷地、現在の「生産資料公司」の園内にある。

満洲語

（関作田）

私の祖父母は満洲語が半分くらいわかったし、祖父の父は完全にわかった。「家譜」や「満文書籍」は全部文革でなくなってしまった。現在の「漢語普通話」は満洲語混じりである。琿春には雍正年間に「官学」が始まり「八旗官学」と呼ばれたが、官学では満洲語と漢語の両方を教えていた。祖父は官学ではなく自宅で満洲語を勉強し、官学では漢語を勉強していた。「十二字頭」は知らないが、「二十六字頭」と「二十八字頭」は知っている。

満族の姓

（郎書紳）

琿春には楊泡満族郷と三家子満族郷があるが、西崴子郷にも満族がたくさん住んでいる。

（関作田）

琿春の満族は郎姓、関姓、鉄姓の三姓が多く大姓である。郎姓満族は「東海庫雅喇氏族＝明代の瓦爾喀」の出身であり、彼らは建州衛女直に属した「世襲臣丁打牲烏拉」であり、「打牲烏拉」は「イチェ・マンジュ（新満洲）」である。しかし、郎姓の人々は「イチェ・マンジュ」ではなく「世襲臣丁打牲烏拉」と自称している。関姓満族は「世襲臣丁打牲烏拉」ではなく、「世襲陳満洲 フェ・マンジュ」である。琿春の満

族の一部は三姓から来た「赫哲族」で、彼らも「イチュ・マンジュ」であり、「イチュ・マンジュ」とは、1644年の「満洲建国」以後に来帰した者を指す。

ロシア人の呼称

(関作田)

ロシア人のことを「羅刹」と呼ぶがその意味は「魔鬼」である⁽³⁾。

琿春とロシア

(郎書紳)

光緒二十六年には琿春城内に住んでいた。その時ロシア人が長嶺子から進入してきた。当時「東砲台」と「西砲台」があり、砲台には「德国」から買った「仏羅伯大炮」という大砲が6門あった。東砲台は「満族軍」が、西砲台は「蒙・漢軍旗」の「靖辺軍」が守っていた。

宗教と伝承

(関作田、郎書紳)

琿春の寺廟では「祿宝寺」が大きい。回教寺院は乾隆年間に寧古塔から清真寺を移して「北寺」を造ったのに始まり、回教内部の争いから「北寺」が分裂して、咸豊年間に琿春の南部に「南寺」が造られた。北寺のほうが大きかったが、現在では、北寺はなくなってしまった。満洲族が回教を信仰することは決してない。満族の信仰は「薩満」だけである。

「三仙女伝説」について、関氏は我々には三仙女伝説があり、その子孫がヌルハチであると言ひ、郎氏は、東海女直には、三仙女伝説はないと言う。

(郎書紳)

「東海女真」には「シリ・ママ」、「フォト・ママ」と言う言葉はなく、「祭ママ」と言う。東海女真の習慣では北炕の上に木匣を置き、その中に2人の女の人形（これが「祭ママ」である）2つの馬形を入れ、病氣や出産などの儀式ではこれを拝む。又、犬皮で作ったものを嫌い、「烏鴉」と「青鵲」は神様であり狩猟の対象としない。これらは以下の先祖の伝説に基づくものである。

伝説では満族の先祖は明代の「李成梁」の身の回りを世話する子供の「馬弁」であった。ある夜に突然、「李成梁」の足の裏に3個の黒子ホクロが見つかった。これを知った「馬弁」は私には7つのホクロがあると李將軍に見せると李將軍は大変驚いた。それは何ヶ月か前に、北京の「天象官」が東北の「白山黒水」で1人の「皇帝」が生まれた事を報告し、時の皇帝はこのたび生まれた「皇帝」を捜す命令を下していたからである。

李將軍は「馬弁」にはこの事を教えずに、金と「大青馬＝馬」をわたして、帰るのを渋った子供の「馬弁」をせき立てて家に逃げ帰らせた。家に帰る途中で、「大青馬」は人間の言葉で皇帝が捜しているので早く帰るようにと告げた。家に帰った子供は、そのことを母（「大ママ」と「アル＝二ママ」）に告げた。

一方、李將軍の配下の「文官」が子供が家に逃げ帰ったことを皇帝に報告したので、

(3) なお、この聞き取りの前、8月28日に四排赫哲族郷で赫哲族の尤連仲氏（77歳）から聞き取りを行ったが、尤氏に「羅刹と言う言葉を知っていますか」と問うと、同席していた息子の尤敏毅氏は「知らない」と答えたが、連仲氏はしばらく考えた後に「古い時代のロシア人のことで「老毛子」（1900年代のコサックが髭を生やしていたことに由来する）と同じだ」と答えている（本書59頁）。

李將軍は「騎弁」を子供の家に派遣した。「大青馬」は「騎弁」の蹄の音を聞いて騒ぎ立て、「ママ」は「大青馬」に子供を「二青馬」に荷物を載せて逃した。「騎弁」が逃げた子供を追いかけたので「大ママ」と「二ママ」は家を焼き払い自害してしまった。

「騎弁」は7日7夜子供を追いかけて、子供は「長白山」山中に逃げたが、食料は尽き馬も疲労から死んでしまった。冬の長白山の雪の上で気を失っている子供を「騎弁」が発見した。その時、「烏鴉」と「青鵲」が子供の上にとまったので、「騎弁」は子供が死んでしまったと思って引き返した。「烏鴉」と「青鵲」は口移しで子供に物を食べさせたので、子供は再び元気になり長白山中に入ってしまった。山中では虎や熊が出てきたが「大黃狗」が獣を追いかけて子供を助けた。「大黃狗」は子供が成長し死ぬまで仕えたので、死んだ後は一緒に葬られた。この伝説から「大ママ」、「二ママ」、「烏鴉」、「青鵲」、「大青馬」、「二青馬」、「大黃狗」を尊ぶのである。

昼食後、関作田氏の先祖が10代にわたり住んでいた八棵樹村を訪ね、ここで聞いた別の2カ所の村にも行った。

◆八棵樹村

村の満族の古老である郎保雲氏（75歳）と八棵樹村の雑貨店で出会い、その店の主人の郎学文氏（62歳）をまじえて話を聞いた。

（郎学文）

八棵樹村は三家子と同様に駅舎の村である。村の名前は村に「八棵樹」、すなわち八本の木があったことに由来するが、今は四本しか残っていないので「四棵樹」になってしまった。

次いで残った「木」の場所に案内してもらったが、郎学文氏の話では、木の北側の東側には関氏の、西側には郎氏の土地（旗地？）が広がっていたという。

（郎学文）

先祖に役人はいないが、家には「誥命」と「家譜」があった。だが文革で全部無くなってしまった。私は満文を全く知らないが、祖父母はよくできたし、母も少しできた。私の時代には漢語を使っていた。

（郎保雲）

八棵樹村の満族は昔から満文を知らない。昔は満文の書籍などがたくさんあったが、文革の最中に全て河の中に捨ててしまった。「哈達門」は、「馬滴達」と同様の満文の地名だが意味は分からない。

（郎学文）

この村には「三関、二郎、迨、塊、鉄」という呼び方があるが、これが代表的な満族の姓である。

続いて、八棵樹村から東北へ10kmほどのところにある哈達門村へ出向き、売店で老人の家に案内してもらう。

◆哈達門郷

村の入り口で出合った郎奎海氏（85歳）に話を聞くが、

先祖代々ここに住んでいて、哈達門が故郷である。鑲黄旗の満族であるが、満洲語

は全く知らない。哈達門の意味も知らない。
 ということで、これ以上の情報は得られなかった。案内してくれた婦人の父親が知っているかもしれないというので、哈達門郷の北約 4 kmにある太平村まで同行してもらう。

◆太平村

哈達門郷で太平村の鉄樹清氏（79 歳）宅を紹介してもらい、同村を訪ねて話を伺った。
 （鉄樹清）

私は「老満族」であるが、鉄姓一族からは一人の役人も出ていない。4 代前から農民であって、いつも他人の土地を耕作しているから、人々は鉄姓のことを「貧鉄」と呼ぶ。故郷は「栄安郷」であり、4 歳の時に太平村に移住した。太平村の満族と琿春の満族の間には何の関係もない。私は満洲語も知らないし、八旗の旗色も判らない。我々には満族独自の習慣はなく、朝鮮族や漢族と同じ習慣で過ごしている。「鉄姓」にシリ・ママもフォト・ママもない。

哈達門は元来、頭道溝と呼んでいた。ここを流れている川も頭道溝と言う。哈達門という呼び方は「満洲国」時代からであろう。「私たちの国」は「孫中山」によっておしまいになった。

結局、琿春副都統衙門とは無関係の満族がこの付近にいることが判っただけであったが、あるいはアハ身分の漢族旗人であったかも知れない。

一度琿春市内に戻り、16 時、琿春の南にある三家子満族郷古城村（屯）を目指す。市内を出ても舗装された良い道で、夕日に照らされた北朝鮮の山並みが美しい。この道は日本時代に作られた鉄橋で北朝鮮に通じており、国境に貿易場所もあるとのことであった。

三家子満族郷古城村（屯）に着き、村の中で古城村医療衛生所所長をつとめ、骨外傷科の名医という関吉勝氏（49 歳）を訪ねた。吉勝氏の自宅で話をうかがった後に、詳しいことは氏の父親の関慶瑞氏（66 歳）が知っているとのこと、病床にあった慶瑞氏を琿春駅前にある彼のアパートに訪ねて話をうかがった【写真 3-36】。

以下は、関吉勝氏と関慶瑞氏の聞き取りの内容である。

◆三家子満族郷古城村（屯）

（関吉勝）

古城村（屯）は昔の「温特赫部城」である。

出 自

（関吉勝）

私の先祖は遼南から来た「三関」の「頭関」（三つの関氏のなかで一番上に位置する）である。頭関は祖先の祭りであるママの時に、白布を吊す（「只掛白布簾」、「白掛提」）を行う。故郷の遼南を小雲南と呼んでいる。満族の姓と旗色は知らない。

我々は金兀術の後裔であり、琿春にある將軍墓は、我々の祖太爺の墓である。祖太爺は北京の護城將軍であったが、西太后は老人嫌いであったため、告老還郷、解田歸田されて琿春に帰ってきた。北京に鎮殿將軍と刻まれた太爺の石碑があるが、それは太爺が蒙古人よりも力の強い人で、宮殿の殿前にある石獅子を持ち上げて殿前將軍に封じられた事に由来する。それ以後、私の家は琿春で二百年くらい続いた。詳しい歴史は私の父の関慶瑞が知っている。なお、親族呼称の順序は、祖太爺→太爺→爺爺→父→自分である。

（関慶瑞）

私は「按出拉瓜尔加」出身の満族であり、故郷は斐優城と温特赫古城である。先祖はヌルハチの東征で、按出拉庫が征服された時に帰順して八旗に編入された。先祖の家族の一部は寧夏にも北京にもいる。祖先は海参崴＝ウラジオストクの人であると聞いているが、「家譜」の中には按出拉瓜尔加、今の二道白河の出身と書いてある。だから満族の姓は按出拉瓜尔加である。爺爺は琿春の正白旗であったが、同治九年の新編八旗制度で正藍旗に変わった。なお上三旗とはヌルハチ勃興の時の「三旗」を指し、これがやがて八旗となったものである。

祖太爺は、道光二十年に海参崴に住んでいたが、政府は一番力の強い者を北京に連れていき、その結果、西安將軍になった。祖太爺の綽名は、傅大力（富大力）であり、蒙古護軍統領になったのは蒙古人より力が強かったからである。

祖父が北京から琿春に帰り、祖父の代から古城村（屯）に住み始めた。私の太爺と祖太爺は西安將軍と黒龍江將軍をつとめ、祖太爺の傅僧徳（富僧徳）は『清史稿』の中に伝がある。道光十年頃に鑲黄旗蒙古八旗都統、黒龍江將軍になり、その後の道光年間に西安將軍となった。西安將軍時代に部下と地方官が誕生日祝いを贈ってくれたが、悪人などがそのことを皇帝に報告したので、祖太爺は西安將軍を罷免され北京に還った。今の北京軍区の軍人と同じである護軍統領となって北京で没した。祖太爺の家は北京の將軍府である。

太爺は祖太爺の職を世襲接班して鎮殿將軍となり、皇帝護身侍衛の職に就いた。同治（光緒？）時代の1900年に「八国聯軍」（八か国連合軍）が北京に入った時、同治（光緒？）皇帝を背負って承德に逃げたが、西太后はそれを誉めて一等護身侍衛に昇進した。義和団や起義で先祖の一族はたくさん死んだが、太爺の家族も何人か死んだ。それを見た爺爺は役人を辞めたくなくて「告老」したかったが西太后が許可しなかった。ある日、出動の途中にわざと落馬して負傷して告老に成功した。

同治（光緒？）六年、琿春に帰るため、家族を連れ馬と馬車で北京を出発したが、長城に着く前に馬賊の略奪にあい北京に戻った。このことを知った西太后は、四つの金の仏像（これは神様だから略奪されない）をくれたが、一つは北京に残る家族に渡して琿春に帰ってきた。琿春では、始めに馬川子一帯に住み、その後温特赫に移住した。だから馬川子の將軍墓は爺爺の墓である。

爺爺の所有地は古城村（屯）周辺にあったが、旗地ではなく関姓個人の土地である。

満洲語

（関慶瑞）

子供時代に学校ではなく祖父と母親から満洲語を習っていたが、今では殆ど覚えていない。家譜は全て満洲語で書かれていたが、文革の時に全てが無くなってしまった。ムクンダとは「家族長」を指す言葉である。

古城村の満族

（関慶瑞）

古城村（屯）の住民は琿春副都統時代から全て満族である。村の中の姓は、赫・関・郎の三姓である。この村は図們江口からのロシア・朝鮮の交易場があったために繁栄していた。村の中には道教の東華宮もあった。

5 琿春から哈爾濱へ

9月5日

9時出発、朝食後、川向こうの公園に展示されているはずの砲台発見の大砲を見に行くも、すでに文物管理所に移したということで存在しなかった。そこには、光緒十二年(1886年)七月に、ロシアと「清露琿春東界約(中俄琿春東界約)」を締結した都察院左副御史呉大澂の碑文があるのみであった【写真3-37】。

◆八連城

もう一度旧街をたどって琿春副都統衙門の正面付近に行き、写真撮影をする。10時20分、琿春市に別れを告げ、昨日の古城村(屯)への道を4km走り、何の表示もない畑の中の砂利道を西に入ると、八連城村の標識がある。そのまま村の中を進み八連城を捜すも所在がわからない。結局、村人に案内してもらい、八連城村の標識から左に入り、道の行き止まりにあった農家に車をおき、田圃の畔道を15分ほど歩いて城跡らしき場所に出た。八連城は現在解放軍の耕作地であるという。田圃の中に若干の城壁址らしい土盛りが残っているのみで遺跡表示も見当たらない【写真3-38】。農道には、渤海時代の瓦片が落ちており、ここで間違いないと推定される。八連城は、戦前に鳥山喜一、藤田亮策⁽⁴⁾などが発掘調査を行っており、場所の確認ができれば充分である。

11時50分、古城への舗装道路に入り、琿春に戻る。12時、琿春の町を離れ、図們江沿いに走る。対岸に北朝鮮の建物も間近に見える。13時20分、図們江市に到着して食事。食後、博物館へ行く。

◆図們市博物館と国門

図們市の博物館【写真3-39】はまだ開館していないが、資料室に入り見せてもらう。中に唐代と推定される高さ60cm余りの石仏があり、裏に「為時実家先祖代立古堤寺実秋穂」と刻されている【写真3-40】。この石仏は安山郷出土とのこと。

次いで、図們江の国境施設(国門)に立ち寄る【写真3-41】。以前はなかった観光設備と土産物屋ができています。ただ閑散としており、川の水量も少ない。

15時10分、図們江を出発、河沿いの完全舗装の道を快適に飛ばす。図們江から離れると、やがてガヤ河を渡り、この付近で東寧から来る道と合流する。図們江・延吉間は1988年に走った。17時、延吉市に到着。1988年にも宿泊した川沿いの白山賓館にチェックイン。ここまで来ると外国人・中国人別料金の制度はなくなり、誰でも1部屋600元となる。

9月6日

◆図們江から敦化へ

7時50分、出発。道路標識もなく吉林への道をまちがえる。ちょうどラッシュの時間にかかり、市外を出るのに時間がかってしまう。図們—哈爾濱街道に出ると、長春まで452kmの標識がある。この一帯は標識、看板共に朝鮮語優先で、漢族のドライバーには不親切である。老頭溝からは、泥道が6kmほど続く。老爺嶺の端であろう山道を上り下りしながら、9時5分、五虎嶺を通過。この付近は鉄道と道路が並行して走っている。ちょうど図們江—長春間の列車が走行中であり、それを追い越す。9時20分、安図を通過、1988年に

(4) 鳥山喜一・藤田亮策『満洲国古蹟古物調査報告 第三編 間島省古蹟調査報告』満洲帝国民生部、1942年。

来たときは田舎町であったが、今やビルの建ち並ぶ町へと変貌している。

やがて長白山登り口の別れ道を通る。「天池 200 km」の標識があり、「鄧小平 不登長白山終生遺憾」の横断幕が出ている。このあたりは図們江の上流にあたる・布尔哈通河（ブルガトゥ川）の流域。9時55分、ハルハ・アリンの峠を越えると牡丹江流域に入る。

10時15分、このあたりでは比較的大きな町である大石頭を通る、市場で混雑する町中をすり抜けるようにして走る。この付近では舗装道路の割れ目に土を詰めて修理しているが、何とも走りにくい。通行料5元の橋を渡り、10時40分、敦化に到着。同市博物館を探すが、市内入口近くの市立中医医院付近に移動したとのことであった。

◆敦化

敦化市の博物館は市中医医院のわきを入った路地の民家の一角にあり、民家と同じ造りのこぢんまりした建物で、何の表示もない。昼時なので館員は不在で中に入れない。土盛りに上り、塀越しに見ると石碑4本、石犬、レリーフなどが庭に飾ってある【写真3-42】。11時20分に出発、蛟河へ向かう。ここから長春へ352kmの標示。

再び山道をのぼる。標高は960mを示すが、白樺が目立ちはじめ寒い。12時15分、蛟河まで67kmの標識の峠では、標高1,000mを示す。このあたりが県境であろうか。ここから高度を急激に下げると松花江の流域に入る。河の流域は米、山畑はトウモロコシ、たまに煙草が植えられているが以前に比べてヒマワリが少ない。

13時30分、蛟河に到着。昼食を済ませ、15時に出発、標高は300m。吉林まで95kmの標識がある。蛟河からは平野部の舗装された平坦路となる。16時40分、永吉界の標識を見る。東豊の道端では3種類のスモモと林檎を売っている。

◆吉林市

龍潭山の麓を回り、増水している松花江を渡って、17時30分、川沿いに建つ吉林賓館に到着。最近起きた樺甸県の洪水の被害は予想以上に大きく、吉林市の手配をお願いした吉林師範学院の李樹田教授が関係する学校にも避難している人がいるという。当初、予定していた樺甸周辺の調査については、次年度以後に回さざるを得なくなる。明日は吉林市檔案館を調査することにする。

9月7日

◆吉林省檔案館

午前中、吉林市檔案館へ行く。檔案館は建物の5階にあり、李樹田先生の教え子の館長が不在であったことと、最近、通化檔案館で満洲国檔案の盗難事件があり、檔案閲覧の審査が厳しくなったということで、しばらく待たされる。幸い閲覧室に入れてもらったので、館員にここに置いてある檔案カードと目録は見てよいとの許可を得て、手分けして概要を把握する⁽⁵⁾。午後、我々4人で檔案館6階の立派な陳列室を見学する【写真3-43】。副館長は誥命以外の満文檔案はないと言っていたが、満文檔案を含め様々な檔案が陳列されている。ただし、満文が読めない人が展示したらしく満漢文が相違する2種類の檔案を一つの檔案として展示されている。

以下は、吉林市檔案館の副館長の説明である。

所蔵総件数は13万件で、その内歴史檔案は7万件である。民国時代の檔案より清代の檔案が多い。本檔案館の資料は、1966年以前に東北檔案館から吉林市檔案館に移管

(5) 江夏由樹「吉林省檔案館所蔵史料について」『満族史研究通信』第5号、1995年12月、を参照。

された。移管時の全宗（大項目分類）は33であったが、それを整理して、現在の全宗は22である。カードと目録冊があり、両者は混乱しているが、現在ある全宗分類及びカード、目録冊は、ともにこの檔案館で作成したものである。民事訴訟や土地に関する檔案が多いが、関連する檔案はまだ東北檔案館に残っている。また、永吉庁関係のものは吉林省檔案館にある。水師營、駐防營、吉林將軍関係も吉林省檔案館にある。満文資料は乾隆年間の誥命だけである。本館の閲覧手続きは、調査を実施しようとする30日以前に、調査の目的、事項、数量を明記し、利用者の身分と氏名及び調査する時期を申告すると閲覧許可が出る。

9月8日

7時半、荷物を整理し、8時5分、出発。ちょうどラッシュ時間の市内を抜けるのに時間がかかる。8時50分、榆樹への道に入り、大屯、北山を通過。この道でも交通警察が検問を行っている。9時15分、烏拉街への分岐点を通過。烏拉まで8kmとの道路標示がある。ここまでは通い慣れた道だが、ここから哈爾濱へは初めての経験。9時30分に大口欽という大きな村を通過する。ここは、舒蘭と榆樹（90km）分岐点となる。9時55分、白旗を通過する。明日は中秋節とて、町の通りに面した露店は大混雑である。

◆頭台村辺牆

10時10分、法特に到着。この付近に李澍田先生から教えていただいた「辺牆」があるはずなので、近くの店でその場所をたずねる。件の「辺牆」は、法特から東に入った頭台村にあるとのこと、法特の町中を右折する。鯉等の買い出しで大混雑している農業市場の露店の人混みをようやく通過して、辺牆の場所を聞きながら悪路を10kmほど走り、頭台村に入る。ここからさらに北に500mほど入ったトウモロコシ畑の中にある「溝」が辺牆跡とのことであった【写真3-44】。東に見える山の部分は版築で城壁を築き、平野部ではこのような溝を掘って辺牆にしているという。実際は自然河川と混在して、はっきりした区別が付き難い。李澍田先生が辺牆であると断言しているのには、何かの遺構か出土品等の根拠があるのであろう。

どうやら金代の遺構らしいが、金史の専門家である王禹浪氏は、この辺牆の西側すなわち法特等の側が関内であるという。ただ、どこを中心に内外と考えるかについては異論のあるところであろう。阿城の龍泉府を中心に考えれば、法特は辺牆外になるし、開封を中心に考えれば法特は辺牆内となる。金代の城壁や辺牆の中心をどこに位置づけるかは難しい問題である。ともあれ「溝」を掘った辺牆があることだけを確認して、11時に引き返す。

◆哈爾濱に戻る

11時30分、再び混雑する法特の農業市場を抜け、哈爾濱へ向かう街道に戻り、榆樹の町を目指す。この頃からせつかくの中秋節の天気が怪しくなってくる。12時10分、榆樹着。ここで昼食。14時5分、榆樹を出発、まもなく哈爾濱83km、長春144kmの標識のある、北京と哈爾濱を結ぶ102号線に入る。ほぼ高速道路並みの立派な道路で「魯」や「冀」のナンバープレートを付けた車が走っているのも幹線道路らしい光景である。

14時20分、拉林川を渡ると71kmで哈爾濱の表示、久しぶりの中央線がある道路だが牛も歩いているのは中国東北らしい。混雑する哈爾濱市内を抜け、16時50分、民族飯店に到着した。メーターは77,935kmを指し、今回の調査の全走行距離は4,035kmを数えていた。

（細谷良夫）



写真 3-1 個人宅に置かれた柱の礎石



写真 3-2 樺川付近の「迷魂場」



写真 3-3 霍里吉利古城の史跡表示



写真 3-4 同江の「中俄辺貿市場」



写真 3-5 同江市赫哲族博物館



写真 3-6 ウラ草を詰めた魚皮靴



写真 3-7 松花江と黒龍江で相違する水の色



写真 3-8 三江口の哨戒艇



写真 3-9 街津口赫哲族博物館



写真 3-10 街津口赫哲族博物館の展示 (1)



写真 3-11 街津口赫哲族博物館の展示 (2)



写真 3-12 街津口の赫哲族漁船



写真 3-13 撫遠の街と黒龍江



写真 3-14 撫遠の港と巡邏艇



写真 3-15 黒瞎子島付近に値泊するロシアの巡邏艇



写真 3-16 黒龍江上よりみた撫遠の街



写真 3-17 烏蘇境の監視塔



写真 3-18 小舟を繋ぎ網の手入れをする漁民



写真 3-19 四排赫哲族郷人民政府

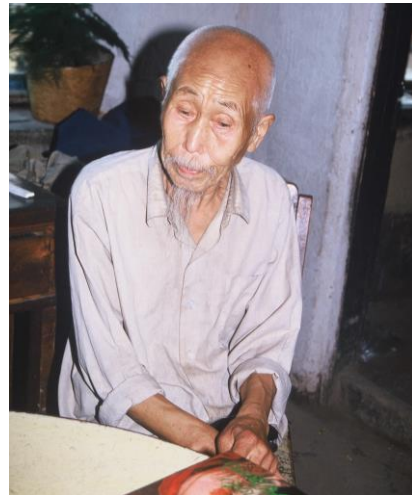


写真 3-20 尤連仲氏



写真 3-21 赫哲族の「神様」の図案(1)

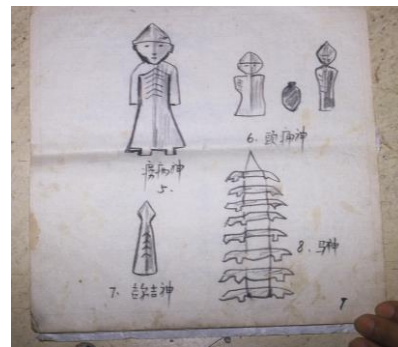


写真 3-22 赫哲族の「神様」の図案(2)



写真 3-23 船から眺める烏蘇里江沿岸とロシアの巡邏艇



写真 3-24 虎林の街路



写真 3-25 興凱湖はまさに海



写真 3-26 「新开流遗址」と書かれた標識



写真 3-27 綏芬河の国境ゲート



写真 3-28 東寧の国境ゲート



写真 3-29 省境越えの悪路



写真 3-30 たどり着いた春化の街



写真 3-31 琿春の街路



写真 3-32 明代の西砲台跡

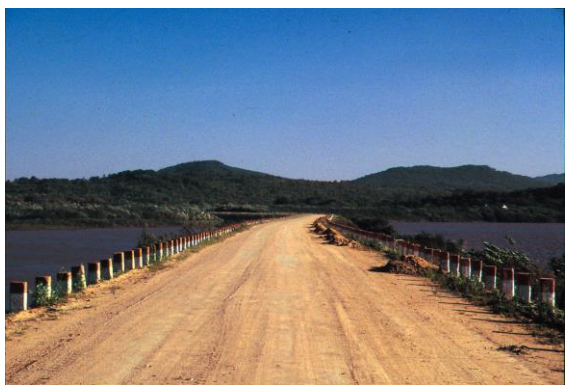


写真 3-33 国境の監視塔へ続く道



写真 3-34 ロシアと北朝鮮を結ぶ鉄橋



写真 3-35 琿春副都統衙門跡付近



写真 3-36 関慶瑞氏と
子息の関吉勝氏より聞き取り

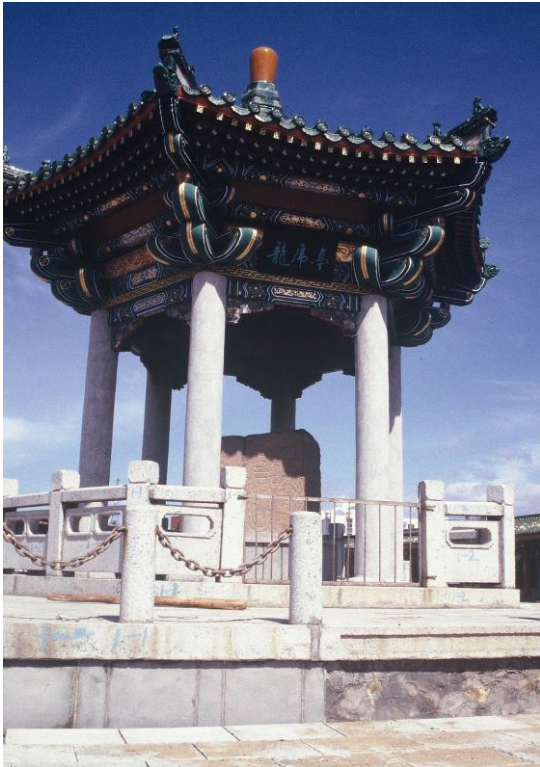


写真 3-37 呉大激筆の石碑



写真 3-38 八連城跡



写真 3-39 図們市博物館の入口

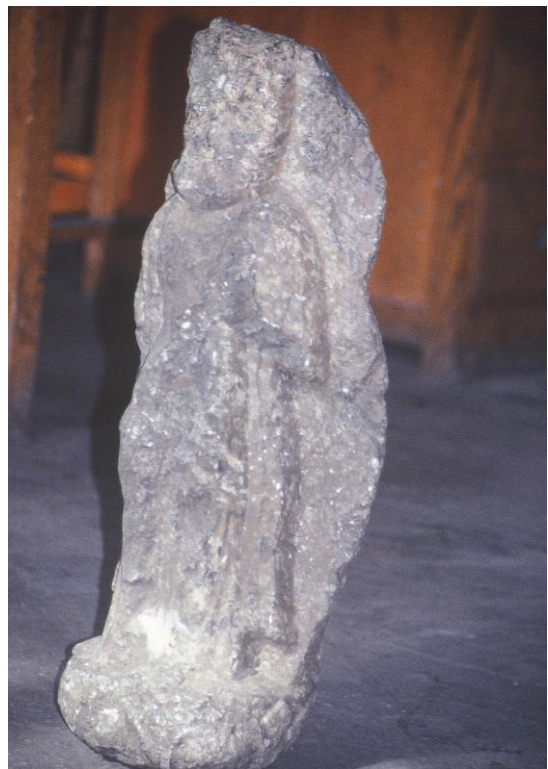


写真 3-40 図們市博物館保管の石仏



写真 3-41 図們の国境ゲート



写真 3-42 敦化市博物館の庭にたてられた石碑等



写真 3-43 吉林市檔案館陳列室



写真 3-44 頭台村の金代辺牆跡

第4章

アムール川下流域の旅（2000年8月）

はじめに

2000年8月1日～8日の間、ハバロフスクからニコラエフスク・ナ・アムールに至るアムール川を船で下り、ニコラエフスクから車でアムール川左岸河口部に近いオゼルパーフ村に赴き、沿海州の海岸から東に浮かぶサハリン島を遠望した。この間おおよそ1,000 km、大坊公民氏の通訳を頼りにした皮相的な観察にとどまるものではあるが、ハバロフスク以遠のアムール川下流域の様相を伝える記録は多くないので訪れた各地の様相を伝えておく。

1 旅立ちまで

ロシアになってからもインツーリストビザで訪問できる場所は、アムール川下流域についてはハバロフスク、コムソモリスク・ナ・アムール、ニコラエフスク・ナ・アムールの3か所に限られていて、それ以外の場所を訪れることは難しい。奴児干都司のあったとされるティルには、鉄道はもちろん通じていないし、町からも離れているようなので船で赴く以外になさそうである。はたしてアムール川を船でたどり各地を訪れることが許可されるのか、許可されても手が出せる料金で船をチャーターし得るのか、流域全体をガイドしてくれる適任者がいるかなどの難問がある。またこの地域の近年の情報を日本語で記しているのは、佐々木史郎氏の『北方から来た交易民』⁽¹⁾ ぐらいしか見当たらず、どこにどんな資料があるのかも詳しくわからない。しかし走り出さなければ実現は不可能である。最悪の場合インツーリストビザで立ち入れる上記の3か所を拠点に、可能な限り各地を回ればよいと割り切って計画に着手した。参加メンバーは十数年来の調査仲間である加藤直人（日本大学文理学部。所属はいずれも当時）、中見立夫（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所）、江夏由樹（一橋大学経済学研究科）の3人、それに今回は榎森進（東北学院大学文学部）と筆者が一関工業高等専門学校で教壇に立っていた時の山登りの教え子で山仲間の工業技術者でロシア語通訳を業とするテクノメート社長大坊公民氏の6人と決まった。大坊氏は仕事の拠点の一つハバロフスクを中心に情報を収集し、中見氏は旧知のラーリン氏からのルートを探るが、なかなか実現への具体策は進展しなかった。

6月になって極東総合大学のM. グリンツェヴィチ氏から「沿海州とハバロフスク州でこれまでに清代の貨幣や各種装飾品などが発見されたが、これらの品々はウラジオストク、ハバロフスク、ブラゴヴェシチェンスクの各博物館に保管、展示されていること、清代の石碑は発見されていないこと、明代の仏教寺院（永寧寺）の遺跡がアムール川下流のティルという名の断崖にあり、1990年代にロシア科学アカデミー極東支部の極東諸民族の歴史学・考古学・民族学研究所の研究員アルテームイエフ博士⁽²⁾が発掘調査したこと、遺跡から

(1) 日本放送出版協会、1996年。

(2) アルテームイエフ博士は2005年11月、札幌で開かれた国際シンポジウム「ヌルカン永寧寺碑文と中

持ち出した石碑はウラジオストクのアルセーニエフ記念国立極東総合博物館に展示されていること」などが伝えられてきた。

またハバロフスクには船を利用してアムール川流域を調査している考古学者がいるとの情報を得たが、やがてそのご当人であるコピチコ氏から、自分は「ハバロフスク教育大学で祖国史を担当する助教授で極東南部のロシア革命期までの古代史と考古学およびアムール川流域諸民族の研究をしていること、我々の計画に興味があり協力することが可能である」との連絡が入った。早速、大坊氏とコピチコ氏の間で連絡を開始してもらうと、我々の計画をインツーストビザで実施することには問題があり、有料ではあるがハバロフスク教育大学から招聘状を出すことが可能であるとの返事がきた。

さらに7月初めになって、定員は乗客7名で、乗組員2～4名、小さな台所とトイレ付きで、船内で食事をして宿泊することが可能な船があり、チャーター料金も我々が手の出せる金額であることが明らかになってきた。ただコピチコ氏は7月10日から8月末までアムール川下流域で発掘調査に従事する予定があり、我々がハバロフスクに赴く7月末はハバロフスクにはいないので、ハバロフスクでは中国語を勉強している息子をガイドに当て、氏の発掘現場で合流することも考えられるとの連絡があった。

これらの連絡は大坊氏がメールを駆使して行ったが、日本と相違して個人のアドレスを持たないメール連絡は容易ではなく、電話とファクスが必需品であったようである。ともあれハバロフスク教育大学からの招聘状を送ってもらってビザを取得し、船のチャーターも依頼した。現地に行ってみなければ不明のことが多いものの、アムール川下流域の各地を訪れる足となる船と、下流域を船で歩いているというコピチコ氏という適任の案内者を得て実現の第一歩を踏み出した。

7月20日に最後の打ち合わせを行い、変わりやすい天候に備えた雨具、馬も嫌がるほど大きな蚊やアブがいるという虫除け対策、医者頼めない船旅に備えた薬品類、緊急時の食料品などをそろえ、参考になりそうな間宮林蔵『東韃紀行』⁽³⁾や鳥居龍蔵「人類学人種学上より見た北東亜細亜」⁽⁴⁾、ONC50万分の1の地図などを準備した。

2 新潟からハバロフスクへ

7月28日

細谷は仙台を、大坊、加藤、中見、江夏は東京を出発して新潟駅で合流、薬品類の追加購入の後に新潟空港へ向かう。空港は夏休みに入ったため旅行客や墓参団で混んでいる。時には機内持ち込み分まで計量される厳しい携帯品の重量チェックがおこなわれていて、我々もオーバーチャージ料金を徴収された。15時40分にフライト、前線の影響で雲が多

世の東北アジア」の報告者として来日された。東北学院大学のアジア流域文化プロジェクトでも、2006年にアムール川流域をめぐるシンポジウムを企画していたので、札幌のシンポジウム会場で博士にお目にかかり、博士が手がけられたティルやアルバジンの発掘調査をめぐる報告をお願いし、快諾を得ると共に今後の研究交流をお約束して楽しみにしていた。しかし同年末、博士は不慮の災厄で急逝され我々の願いはかなわなかった。博士については、中村和之「国際シンポジウム〔ヌルカン永寧寺碑文と中世の東北アジア〕」(『満族史研究』第5号、2006年)を参照されたい。

(3) 満洲日日新聞社、1942年、のちに平凡社「東洋文庫」で再刊、1988年。

(4) 岡書院、1924年。のちに『鳥居龍蔵全集』第8巻、朝日新聞社、1976年所収。

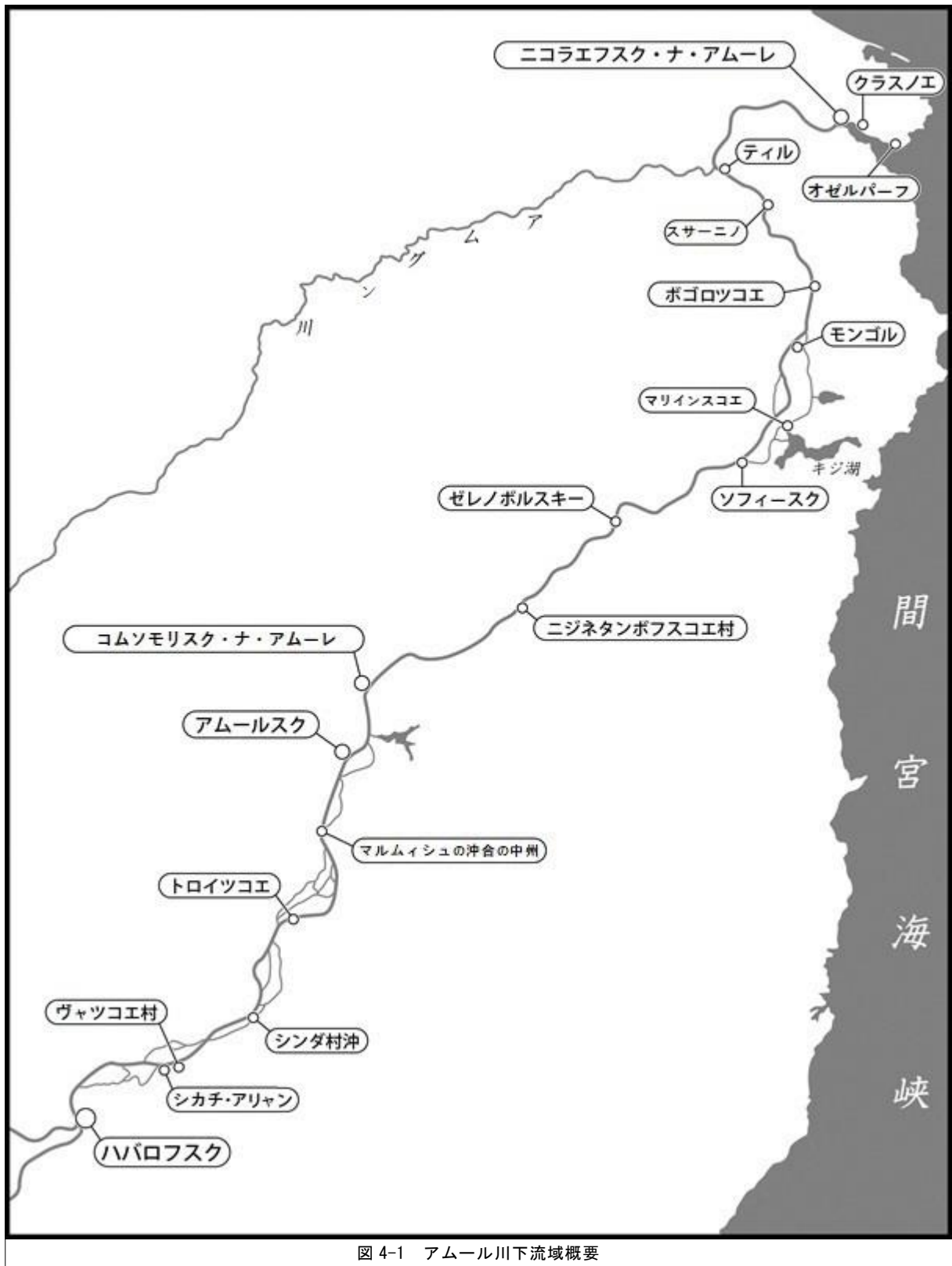


図 4-1 アムール川下流域概要

く沿海州の海岸線は見えないままに 17 時 20 分（時差 1 時間とサマータイム 1 時間で、現地時間は 19 時 20 分）に小雨のハバロフスク空港へ到着した。煩雑な入国審査、預託荷物が出てこない、また厳しいチェックの税関検査などのため外に出たのは 22 時近かった。

空港では、発掘現場にいたので不在といていたコピチコ氏自身が、奥様のスヴェトラーナさん（ハバロフスク鉄道学校の先生）、息子のニコライ君とその友人のアンドレ君を連れて迎えてくれた。そしてコピチコ氏自らの運転する車に乗り、氏が予約しておいてくれた州政府近くに位置するツェントラリナヤ・ホテルにチェックイン、遅い夕食（といってもここでは夜 10 時近くから夕食が始まるらしい）を共にしながら打ち合わせを行う。この旅行のガイドとして全てをゆだねた感のあるコピチコ氏は、自分の予定を変更し我々の案内に当たってくれるとのこと、さらに船内で食事を作るためにスヴェトラーナさんを同行させようとの申し出があり、懸案事項が次々に解決していった。

3 ハバロフスク

7 月 29 日～31 日

出発までの 3 日間は、チャーターした船の下見、チャーター料と燃料代の支払い、船に滞在する間の食糧の買い出しなどの準備に追われたが、その合間を利用していくつかの博物館を見学してアムール川下流域に関する知識を得ることとした。ホテルに近い書店で、ハバロフスクから間宮海峡にいたる「アムール川下流域地図」の水路図（10 万分の 1）⁽⁵⁾ が入手できたことは、この旅の大きな助けとなった。

◆ラドガ号

はじめに行ったのは調査に使用する船の確認である。使用すると意向をすでに伝えてあったが、1 週間あまり寝泊まりすることができるのか、準備すべき品は何かなどを確かめる必要がある。アムール川の一郭の運河に係留されていた全長 20 m ほどのラドガ号は、ペテルブルグで建造された科学アカデミー所有の鋼鉄船である。船長のペトロフ氏はすでに定年退職し、好きな時にのみ操船に従事しているという。出航してから気がついたことだが、ラドガ号を大事にしている船長は少しでも汚れるとすぐ掃除をし始める。おかげで終始清潔な環境で過ごすことができた。機関士のオフエグクセン氏は船長と似たような年齢であろうか、寡黙な人。2 人とも釣り好きの気のいい人で、狭い船内でも楽しく過ごすことができた【写真 4-1】。

2 人に挨拶して船内を案内してもらう。船首部分の甲板下に 6 人が寝る 2 段ベッドと中央にテーブルがしつらえられた 12 m²ほどの空間が我々の寝室兼居室、新品の毛布やシーツも用意されている。後部デッキにはビニールシートで屋根を張りその下にテーブルと椅子が並べられ、ここが食堂兼ミーティングの場である。少し狭いが目的のためには贅沢は言えない。この船を使用することを決定して、大坊氏の助言から今日明日の 2 日間は船室で殺虫剤を焚いておいてもらうことを依頼する。

船を見て街に戻った後は、船のチャーター料金の計算、燃料用の重油と発電機用の軽油などの必要量を計算し代価を算出する、ニコラエフスクから帰路に利用する飛行機代の計算などなど、全てがルーブル支払いなのでルーブル精算で必要なドルの両替を行うために銀行へ出向き、支払いの準備をする。コピチコ氏は、ニコラエフスクからハバロフスクへ

(5) АТЛАС Нижнего Амура, Хабаровск, 1994г.

戻ってくる時の飛行機やハバロフスクからウラジオストクへ向かう寝台列車の手配に奔走した。支払いとチケット購入に続いて、コックを担当するスヴェトラナさんと一緒に、船中で食べる主食と副食、果物、水、ビール、ウオッカなどに至るまでの食料品の購入などに走り回る。我々6人とコピチコ夫妻に船長と機関士の10人8日分となると、献立の作成から数量計算と買い付けは大仕事であった。

ともあれ足の確保すなわち旅の見通しがもっとも理想的な形で決まったことを喜ぶ。これから何が起きるか判らないのはいつでものこと、後はなるようにしかならないものと腹をくくるしかない。こんな状態の時に、日本領事館の水間副領事の来訪を受け、緊急の場合の助力をお願いできたのは心強いものがあつた。準備の合間に、博物館を中心としてハバロフスクの街を見学した。

◆極東美術館

極東美術館は帝政時代のホテルであり、サハリンへ赴く途中のチェーホフも宿泊したという重厚な建築物である。テラスからはゆったりと流れるアムール川の川面が見える。多数のアイコン、ロシア絵画、ヨーロッパ絵画が収集されていることで知られている美術館であるが、我々はコピチコ氏の教え子タチアナさんの説明で、ナナイ模様の衣装など民族部門を中心に展示を見る【写真4-2】。ここに展示されている、いわゆるサンタン（山丹）服【写真4-3】の所有者は、数代前にアイヌと混血したナナイ人であるとのことであつた。

◆考古学博物館

日本からの寄贈品もあるという展示は複製品も多いが、アムール川流域をめぐる出土品の展示はさすがに豊富である【写真4-4】。アムール川流域と周辺地域との関係については、サハリンを経由した日本との関係を強調するなど、オホーツク文化については示唆的な展示である。しかしアムール川流域と直接つながっている中国東北地域との関係については、沿海州に拡がる渤海の遺跡が中心であり、渤海の延長線上に女真を捉えているなど疑問を生じる展示も多い。また、現在ロシア領に暮らすナナイ人と中国領の赫哲族の関係などはまったく出てこない。このように自国の民族と歴史を独立的にとらえ、周辺地域との関係を見ようとしなない視点は、ロシアも中国も同じである。

◆ハバロフスク地方郷土誌博物館

自然史部門の見学に時間をとられてしまったが、民族歴史部門には、龍袍を模した清朝の官服様衣服【写真4-5】、裾に勲章のような金属の彫り物を飾ったサンタン服【写真4-6】、ハバロフスク地方に居住するナナイ人など諸民族の衣装、シャーマンの衣装や祭具など豊富な展示がある⁽⁶⁾。

資料室でサンタン服6枚を見せてもらう。ここには文字の書いてある資料もあり、読めないままに未整理になっているので見て欲しいといわれる。ただ、今日は日曜日で倉庫が開かないので出せないとのことであつた。8月9日にハバロフスクへ戻る予定であることを告げると、その時までには複写しておくといわれる。しかしながら、9日に同館を再訪した時には責任者が不在ということで、結局見ることはできなかった。

また、博物館の入り口には、金代完顔のものであるという石碑が置かれているが、半分崩壊しコンクリートで塗り込められ、碑文はまったく読めない状態である【写真4-7】。

(6) 次章「ゼーヤ川とブレヤ川、ブラゴヴェシチェンスク周辺の探訪」【写真5-3～7】を参照。

◆ハバロフスク市内

ハバロフスク駅前の広場には、この街を開いたハバロフの銅像が建てられている。また清朝最後の皇帝であった溥儀が抑留され過ごしていた建物（第 9 章【写真 9-2】参照）が残っているとのことであったが、これは見学する時間がなかった。

大坊氏の仕事相手であるアゼルバイジャン出身の 3 兄弟が経営する、①中国人主体の衣料品や食料品、雑貨などを売っているマーケット（我々も野菜や船中で使う中国製の魔法瓶を購入した）【写真 4-8】、②ロシア人主体の墓石まで売っているマーケット【写真 4-9】、③日本の中古車が並び、取り外されたドアなどの部品を売っている自動車マーケットなどを見学する。ロシア国内の複雑な流通経済の一端を感じさせられた。このような 3 日間を過ごした 31 日 21 時、所用で到着が遅れた榎森氏が合流して全員がそろった。

4 シカチ・アリャン、ヴァツコエ村を経てシンダ村の沖合の中州に停泊

8 月 1 日

曇り時々小雨後晴れ。ハバロフスクに残す荷物と積み込む荷物を分け埠頭まで運搬するなど早朝から出発準備に追われる。水上レストランもある埠頭でしばらく待つと、広大なアムール川の中では小さくて心細く見えるラドガ号【写真 4-10】が、小石の岸辺に着岸した。岸から棧橋代わりの板を渡って船によじ登り、多くの荷物を船内に運び込む。

10 時 40 分、小雨のハバロフスクを出航する。下流に向かうとアムール川を見下ろす右岸の台地にシベリア総督であったムラヴィヨフの銅像が見える。20 分ほどでアムール川の左岸と右岸を結ぶ 2 段に分かれた鉄橋（上が自動車道路で下がシベリア鉄道）をくぐる。折から長編成の貨物列車が鉄橋を通過していった。なお、全長 5,000 km 余りあるアムール川を跨ぐ橋は、今過ぎたハバロフスクのこの橋と後に赴くコムソモリスク・ナ・アムーレに架かる 2 本だけである。

13 時 30 分、中州に接岸する。コピチコ氏や船長はキノコ取りをし、スヴェトラーナさんの作ってくれた昼食を楽しみ休息する。1 時間ほどで出航。晴れてきたのでデッキで船長を交えコピチコ氏からアムール川の概要や旅程などを聞く。

◆アムール川下流域の概要

ハバロフスクから中継地となるコムソモリスクまでは 582 km、コムソモリスクからニコラエフスクまでは 375 km、ハバロフスクからニコラエフスクまでは 957 km あるという。水路地図を見ると水深 50 cm などの浅瀬も多く、航路標識を見ながら蛇行して進むので、実際はこれ以上の距離があるのであろう。

途中で通過する大きな街の人口は、ハバロフスクが 62 万人、コムソモリスクが 30 万人、アムールスクが 5.8 万人、ニコラエフスクは 3.6 万であり、途中で休養するとすれば行程の半分以上を進んだコムソモリスクがよいであろうとのことである。

ハバロフスク 60 万人の中で少数民族人口は以下のとおりである。

ナナイ族	15,000 人	エヴェンキ族	3,700 人
ウリチ族	2,700 人	ニヴフ（ニヴヒ）族	2,400 人
エヴェン族	1,900 人		

また、ロシアの人口構成は以下のとおりで意外に北方少数民族の構成比が高い。

ロシア人	86.4%	ウクライナ人	6.1%
北方少数民族	1.4%	白ロシア人	1.1%
タタール人	1.1%		

◆シカチ・アリヤンの石刻

15時30分、シカチ・アリヤン Сикачи-Алян (猪の湾) 近くの岸辺に接岸する。ただし浅瀬で岸に橋が渡らず靴を脱いで水の中に降り立った【写真 4-11】。ここには B.C.3000~1000 年の間に描かれたという岩絵がある。岩に彫り込まれた絵は水に濡らすと浮き上ってよく見える【写真 4-12】。動物や頭蓋骨 (敵の頭蓋骨を集めるとその霊が乗り移って強くなる) の言い伝えがある)、鹿の肋骨や内臓が描かれているが、このような図柄は古代ナナイ人の特徴であるという。水没しているものを含めれば 200 個あまりの石刻があるとのこと、付近には「この石刻はアムール川原住民すなわちナナイ人が書いたものであり、国家保存文物である」との標識が建てられていた。なおこの岩絵は鳥居龍蔵も見ていて、馴鹿と虎の岩絵の写真 2 枚を載せ、「ハバロフスク市より東方約二十里 (ワヤト村及びゴリド人部落セカチ・アリヤン村付近) アムール河岸の露出せる自然岩面に掘られたるもの」で、「人面は入れ墨を施し、その状我が国石器時代の土偶の面貌に酷似す」と記している⁽⁷⁾。

またこの近くにはコピチコ氏も発掘に参加した 12,000 年前の遺跡があり、遺跡から土器も出土しているという。

◆シカチ・アリヤン村

岩絵を見た後に出航。ここから 10 分ほど上流にあるナナイ人が 300 人ほど住んでいるシカチ・アリヤン村へ立ち寄る。ロシア教育科学省立小・中学校の博物館には、中国との交流を示す金代の鏡や中国銭が飾られ、ナナイ人のシンボルである龍、蛇、トカゲ、蛙の模様が描かれた絵や置物、安産を祈り出自地域を示す樹木を描いたサンタン服などの文物が展示されている。そして多数の文物がこの地域からハバロフスクの博物館に送られたとの説明がなされている。また、北海道の白老で開催された先住民祭りに参加したときの写真も飾られている。隣にある文化会館は旅行客が訪れると開かれるお土産ショップのようで、村人がそれぞれ出す小店ではナナイ模様の品々に混じって、乾隆銭も売っている。続いて子供たちによるナナイ人の伝承をかたどった 10 種類ほどのダンスが行われる。この村はナナイ文化の一つの拠点であると同時に、ハバロフスク郊外に位置することから、ナナイ文化の観光地となっている場所であることをうかがわせる。

19 時に出航。出発すると間もなく朝鮮民主主義人民共和国の前主席金日成が住み、現主席金成日が生まれたというヴァツコエ村を通過する。22 時、シンダ村沖の中州に停泊する。今日は午後から晴れ始め、見事な夕焼けが川面を照らしていた。

5 停泊地からトロイツコエ、入り江を経てマルムイシュの沖合の中州に停泊

8月2日

◆トロイツコエ村

晴れているが風があり肌寒い一日。7 時に出航。10 時にトロイツコエ村に到着し上陸する。トロイツコエ村は 19 世紀半ばにロシア人が開拓した村で、村名は「三位一体」に由来

(7)『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』「挿画説明 第 1 図、第 2 図」。

するもの。開拓時代からのものであるという建物が数軒残っていた。ここはナナイ人が居住する地域の中心地であり、ハバロフスクから一日で往復することが可能な場所にあるため、日本人を含めナナイ文化を研究する者がよく訪れる町であるという。この村に住むコピチコ氏の教え子のマクシム・ゲレデエイ氏に町を案内し説明してもらった。

入口に魔除けが飾られた博物館へ赴く。龍、蛇、トカゲ、蛙は水の世界のシンボルであり、虎は森の世界の王者であり、共にナナイ人の象徴であるというだけに、これらをモチーフにした模様が多数【写真 4-13】。また衣装の下部に施された樹木模様は、根は過去を、幹は現世を、枝から先は未来を表示するナナイ人の宇宙・天地観を表現しているという【写真 4-14】。ナナイ人をめぐるこのような展示品は、ほとんどが昨日訪れたシカチ・アリヤンの博物館と同じものであるが、ここの方が展示品は多い。

歴史世界の展示になると、中国の正史に出てくる黒水靺鞨の記述と 12 世紀の女真族の遺跡を直結させ、さらにはそれにナナイ人を被せて女真とナナイとの関係を強調している。また、ナナイ人の世界はモンゴル人の侵入によって破壊されたが、ロシア人によって文字を教えられたなどの乱暴な表現が多い。しかしこのようなことを、教えかつ理解している現実があるのであろう。

マクシム氏によると、祖父母の時代には中国領の松花江流域に位置する依蘭（三姓）⁽⁸⁾まで交易に出向いていたという。松花江流域に居住する赫哲族について尋ねると、赫哲族は（アムール川）上流のナナイ人のことであるという。またウリチ族はナナイ人の内紛からアムール川下流に移住した人々であり、ウリチ族もウデヘ族もナナイを自称するという。すなわち同氏は、彼等は全てナナイ族と同じ民族であるという一種のナナイナショナリズムともいえるべき考え方を有している。コピチコ氏は「マクシムは中国のナナイ（赫哲）とアムール川のナナイが同一であると主張するのみならず、アイヌも同族と考えている」と批判していたが、これはロシア人の立場からの考えであらう。ナナイ人の町であるトロイツコエの中心部には、祖国戦争の顕彰碑とレーニンの銅像が建っている【写真 4-15】。

入り江にて 3 時間半ほど過ごして乗船。明日訪れるアムールスクへの路程の関係で、途中の入り江で休養する。この停泊の間に、アムール川で振りたいと持参したルアー・ロッドで遊ぶ。釣果は 30 cm 余りのグラスノピョールカと 45 cm 余りのヴェルホグリヤードという魚が 1 匹ずつ、ペトロフ船長と競った釣りで、面目を保つことができた。オフエグクセン機関士は餌釣りで、トゲのある鯰のようなカサトカを釣り上げる。釣り上げた魚は全て翌日のスープの材料となって我々の胃袋におさまった。マルムイシュの沖合にある草刈り場となっている中州に停泊する。

6 停泊地からアムールスクを経てコムソモリスク・ナ・アムーレへ

8 月 3 日

7 時に出航。9 時前にアムールスクの埠頭に着岸する。ここは 1958 年に潜水艦の船体などを建造する軍需工業都市として開かれた街であり、最盛期には人口 6 万を数えたというが、今は閑散としていて朝から酒を飲んでいる人も目に入る。

(8) 清朝時代、三姓には三姓副都統衙門が置かれ、アムール川下流域を統括していた。

◆アムールスク地方誌博物館

アムールスク地方誌博物館は港から 20 分ほどのところにある。博物館には、12 世紀からの女真の遺物、永寧寺の瓦と磚【写真 4-16】など、中国東北部との関連や各地との交易を示す展示が少なくない。

その中で目に付いたのは、佐々木史郎氏がコムソモリスク博物館所蔵として紹介している⁽⁹⁾「ミォ」(廟)(信仰対象を図像として描いた布)と同じような 3 枚の「ミォ」である。氏の写真と同じような図柄の関帝を中心とするいわゆる関公廟のミォ【写真 4-17】、その他に満洲族風の髷を結った盤頭の女性が並ぶミォ【写真 4-18】、さらにナナイ人のシンボルである龍と蛇をあしらったナナイ的図柄のミォ【写真 4-19】が展示されている。

ミォとは別に、中国東北部では「貼」と称するという⁽¹⁰⁾祈願文を記した「幡」が展示されている。長さ 80cm、幅 60cm ほどの紅布に筆で「保佑一方」(この地域の繁栄を祈願する)と題して、「金花娘娘之山神」に「大江之民」が祈願することを記した貼【写真 4-20】、長さ 1m、幅 60cm ほどの白布に万年筆で「供奉」などの文字が記された貼【写真 4-21】、この 2 枚の貼は重ねて展示されている。なお、後述するように、記された文言こそ若干相違するものの、この 2 枚の貼とほぼ同様の貼がコムソモリスクの現代美術館にも所蔵されていた。

その他の展示では、19 世紀に伝えられたという日本的な模様の陶器【写真 4-22】⁽¹¹⁾、緑釉の片壺などが目に付いたが、これらは付近の出土品らしい。

◆コムソモリスク・ナ・アムーレ

12 時過ぎにコムソモリスクを目指してアムールスクを出航する。コムソモリスクに近づく、アムール川を跨ぐ 2 本の鉄橋の 1 本をくぐり【写真 4-23】、14 時、コムソモリスクの埠頭に着岸する。ここは航海の終点であるニコラエフスク・ナ・アムーレまでの中間地点に位置することと、第 2 シベリア鉄道(バイカル・アムール鉄道)が通っている都会でもあることから、コムソモリスクではホテルに宿泊することを希望する。コピチコ氏は同窓生であるというイリーナさんを通じてヴォスホード・ホテルを確保してくれた。

◆現代美術館

イリーナさんと館員のガリーナさんに案内されて現代美術館に赴く。折から開催しているナナイ人芸術家リュドミラ・パッサル⁽¹²⁾美術展では、ナナイ人のモチーフを題材にしたと思われる 3 つの太陽と龍をデザインした刺繍や白樺の切り絵などが飾られていた。2 階の踊り場には立派なサンタン服が展示されているが、これはコムソモリスクから上流に遡った地点で左岸に入ってくる支流にある湖の付近にあるコンドン村のシャーマンが着用していたものであるとのこと。3 階の収蔵庫に入れてもらって収蔵品の一部を見せてもらったが⁽¹³⁾、アムールスク博物館で見たものと同様の貼が 5 枚ある。長さ 70cm 幅 50cm の紅布に筆で記したものが 3 枚、白布に筆で記したものが 1 枚、万年筆で記したものが

(9) 佐々木史郎『北方から来た交易民』「第 1 章サンタン人とサンタン交易」で、サンタン人は神や精霊たちを画いたミォ(mio)と呼ばれる聖画像を持っていて、その中に関羽など中国由来の神々がいること、ミォという言葉が「廟」(miao)に由来すると考えられると記している。

(10) 大連大学教授王禹浪氏のご教示による。

(11) この陶器は、この付近に生活したあるいは抑留された日本人が所有していたものかも知れない。

(12) 1950 年生まれ、レニングラード教育大学芸術学部卒業。

(13) 現代美術館は撮影禁止でありカメラをフロントに預けていたが、この「貼」の撮影は特別に許可され、その時にカメラを持参していた江夏氏が撮影したのが【写真 4-24、25】である。

1 枚ある。5 枚の内の 1 枚は漢字を知らぬ人が書いたもののようで、書かれている内容がまったく文章になっていないが【写真 4-24】、4 枚は明らかに漢字を知っている人が書写したものである。1967 年に奉納した貼は、コンドン村で新年に飾っていたものであるという【写真 4-25】。この貼を奉納したコンドン村には、漢字を書けた人が 60 年代までいたとのことであった。

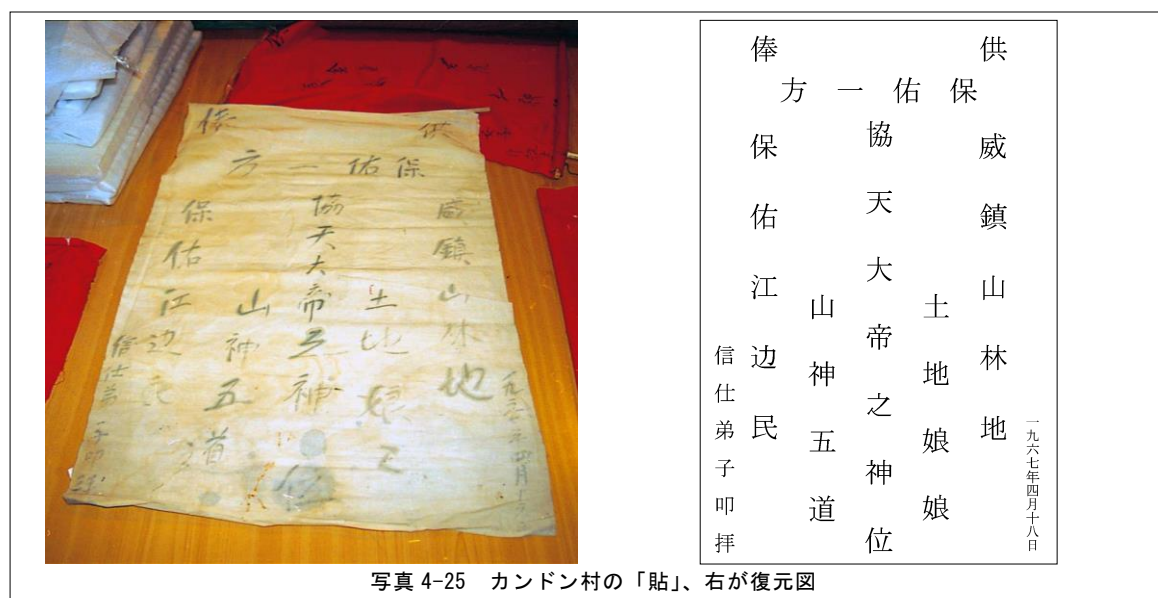


写真 4-25 カンドン村の「貼」、右が復元図

現代美術館を見た後に、宿泊荷物を持参してホテルに投宿。ただしホテルでは入浴施設が使えないとのことなので、町中のサウナ屋に立ち寄って 3 日ぶりに汗を流す。市内電車が走っている街を散策して、日本人抑留者の労働で造ったという煉瓦造りの建物、フルシチョフが住んでいたというアパート、市場などを見て回った。

7 ゼレノボルスキーの砂州で停泊

8 月 4 日

朝方は曇り後晴れ。コムソモリスク地方誌博物館を訪れる前に、現代美術館の近くにあったシベリア抑留者慰霊碑「鎮魂」に出向く。ロシア人母娘が水を掛け掃除をして花を手向けていた【写真 4-26】。

◆コムソモリスク地方誌博物館

コムソモリスク地方誌博物館は改修のため休館中であったが、コピチコ氏の尽力で歴史部門だけを見ることが特別に許可される。ここの展示でシャーマンがいて、貼を奉納していたコンドン村は、B.C.3000 年代の遺物が出土し、宋代の貨幣も発見されているなど、古くから交易が盛んな場所であったことを知った。

「満洲から伝えられた刀」と説明のある全長 75cm ほどの刀は、明らかに日本刀である。懐中電灯を照らして読みとった銘には「備州長船佑元」とある【写真 4-27】。所蔵品カードを調べてもらうが、そこには「博物館開館時にすでにあり、収集場所と由来は不明」と記されていて、サンタン交易の品なのか、ニコラエフスクなどに居住していた日本人の所持品なのか、抑留者の所持品であったのか、ソ連軍が満洲で没収したものかなどは特定で

きない。

シャーマンの木像にサンタン服の布地で作った着物を着せているのは【写真 4-28】、津軽の「おしら様」信仰を連想させる。

近現代部門の展示は 1932 年に始まるコムソモリスク市建設史で、これは同時に東部シベリア開拓史でもある。

◆コムソモリスクからゼレノボルスキーの砂州へ

晴れ。12 時過ぎにコムソモリスクを出航した後に、途中の村に立ち寄り水を補給する。ハバロフスクの中央公園の噴水も赤い水を吹き上げていたが、コムソモリスクも同じで水が悪いという。アムール川という大河の河岸でも澄んだ水が確保できる場所は限られているらしい。

コムソモリスクから下流に向かうにつれて、これまでの湖と見誤りかねないアムール川の水面の広がり、両岸が望めるほどに狭くなり、前方にシホテアリンの一角であろう標高 500m 程度の山々は見え始める。右岸にニジネタンボフスコエ村、シェレホヴォ村、ヤゴードニー村などを見ながら航行するが、切り出した材木の集積と積み出し港が目立つ。榎森氏によれば、このあたりは林蔵が訪れた満洲仮府のあった德楞（デレン）に近いはずであるが、船長の使っている航行水路地図にもデレンという地名はない。船長は、通称デリンスキーという中州に着岸する。その中州に上陸してみるが何もない。榎森氏は山に抱かれた平坦な広がりのある地形が林蔵の描写やそれに基づく先人の推定と似通っているの、このあたりがデレンであろうかと推定する。さらに航行を続け、ゼレノボルスキーと名付けられた大きな砂州の北端に停泊する。

8 ソフィースク、マリインスコエを通過してモンゴル手前の砂州に停泊

8月5日

晴れ。朝食をすませ、9時30分出航し、キジ湖を目指す。東側には広大な湿地帯が広がり、川幅は途方もなく広いが、水深はきわめて浅く、航路は限定されている。時には南下するなど広い河を蛇行しながら先に進む。このあたりはすでに林蔵によって報告されている場所であるので『東韃紀行』と照合するが、記述と合致する風景を見いだすことはできなかった。毛皮商人の名前に由来するツィンメルマノフカ村などの小さな集落を見ながら航行する。

◆キジ湖周辺

13時40分ころに、ニコラエフスクに次ぐ大きな街であったが、やがてハバロフスクにその地位を奪われたというソフィースクを通過するとキジ湖が近くなる。それと共に林蔵が「この日風烈しく起こりて波濤あらく」と記しているように風が強くなり波が舷側を叩く。キジ湖入り口は上流の方は深いが下流側は浅く、ボートでなければ湖には立ち入れないという【写真 4-29】。入り口付近からキジ湖を遠望して航行を続けると再び風が弱くなる。

アムール川をロシア側から開拓したネヴェリスコイとムラヴィヨフが会見したというマリインスコエを 16 時に通過。B.C.3000 年頃の遺跡があるというスチュー島を過ぎると再び風が強くなり波が高くなる。キジ湖周辺は航行の難所なのであろうか。マリインスコエから 6～8 km の場所に 1935 年頃まで満洲人が交易するデレンという集落があったらしい

が、今はその場所を特定することはできないとのことである。モンゴル（地名）の手前の中州に停泊するが、周囲でトロール漁を行っているためか、船長は船と中州をつなぐ棧橋をはずし、デッキの荷物を片づけ盗難を警戒している。

9 ボゴロツコエ、スサーニノを経てティルの見える中州で停泊

8月6日

曇り時々小雨、肌寒い。7時に出航。すぐにモンゴルの集落を通過する。左岸には電信柱が建ち電線が走っているが道は見えない。8時過ぎ、昔は缶詰工場が操業していて2万人余りが住んでいたが、今では5,000人ほどになってしまったというボゴロツコエに接岸する。

◆ボゴロツコエ博物館

今日は日曜日で博物館は休館日、コピチコ氏は開館してもらうために館長を探しに行ってくれる。船から10分ほど歩いて博物館に到着すると、野苺摘みに行くところだったという女性の館長がコピチコ氏と一緒にやって来て、扉を開け説明してくれる【写真4-30】。

ボゴロツコエは、ウリチ語でティンチェ（移動する人々）という名称だったが、1855年にイルクーツクのボゴロツコエ地区出身のロシア人が植民して来て今の名称となった。ロシア人が来て以来、狩猟犬を飼うウリチ人（狩猟）と鶏を飼うロシア人（農耕？）の間で対立が始まり、やがてウリチ人は対岸のウフタに移住してしまったとのことである。ウリチ人の全人口は3,000人だが、この地区には2,000人が住み、ボゴロツコエ村には240人がいる。ウリチ人とロシア人の混血も多いとのことである。

博物館には高床式の食料倉庫【写真4-31】、鮭の乾燥場、熊祭の小屋などを備えたウリチ人村の模型が展示されている。また、糸を紡ぐ糸車、お祓いの御幣【写真4-32】などが飾られていて、アイヌの村との相似が見て取れた。また12頭だての犬橇、幼児を入れるゆりかご【写真4-33】、ウリチ人の衣装の模様などは【写真4-34】、これまで見てきたナナイ人のものとはかなりの相違がある。

シャーマンは禁止されたので、今では90歳以上になる老婆が一人いるのみである。熊祭は、60年代までは山で捕獲した熊を使って祭っていたが、その後は途絶えてしまった、記録を残すため91年3月に、子熊を4年間飼育して古来の儀式通りに行ったことがあるが、以後はまったくやっていないという。

博物館を退出した後に河岸にあるオクラドニコフが発掘した25万年前の旧石器遺跡を見る。対岸にはウリチ人がここから移住したというウフタ村が見える。

◆スサーニノ

14時過ぎにボゴロツコエを出航する。川幅が狭くなり、岸には岩山も見える。水路地図によれば、この附近がアムール川下流域で川幅が最も狭い地帯。狭いとはいっても川幅は1km以上ある。川岸の所々に伐採の跡が見えるが、このような伐採跡と切り開かれた場所はロシア人が入植したが失敗して撤退した集落の跡であるという。やがて再び川幅が広くなる。川幅の広い本流に注ぎ込む支流には、水流がほとんどないままで合流する場合も少なくないようで、このような合流点は一帯が湿地帯となってしまう。この附近では、本流の川幅の大部分は湿地帯であり、実際に水の流れる部分はそれほど広くはない。アムール川下流域では、上流域とは相違して支流ごとの住み分けができるのはアムゲン川をは

じめとする大河に限られるのかも知れない。

やがてスサーニノに到着する。この港から約7km先にサナトリウムがあるという。スサーニノには船長の知り合いが住んでいるとのことなどで2時間ほど停泊する。この間ハバロフスク発コムソモリスク（ここで1泊する）経由ニコラエフスク行きの中水翼船が到着し【写真4-35】、20人ほどが降りてくる。本船はここで再び水を補給し、またコピチコ氏はイクラを買い付けて、18時10分、出航する。19時、遙か下流にティルの丘が見える中州につけて停泊。コピチコ氏が手に入れたイクラを贅沢に使った夕食を楽しむ。

10 停泊地からティルを経てニコラエフスク・ナ・アムール

8月7日

曇りのち晴れ。昨夜は雨が降り朝は肌寒い。ニコラエフスクは天気の悪い町といわれていたが、そこに近づいた前兆なのであろうか。7時に出航。50分ほどでティルの埠頭に接岸する。

◆ティルの丘 永寧寺跡

ティルは山に抱かれた狭い平坦地と台地があるのみで、一見したところ、ここに元の征東元帥府、明の奴兒干都司が置かれていたことは想像できない。アムール川の川岸には、昨日から見えていた川面から30mほど聳える崖が起立している。崖の上の台地に永寧寺の観音堂と石碑が建っていたという【写真4-36】。崖の上に登ってみると標高3~400mほどの丘陵から派出した尾根が断崖となってアムール川に落ち込み、急流が崖裾を洗い、渦を巻いて流れている。対岸（ティルから北西に当たる）にはアムゲン川の河口も間近に見える【写真4-37】。この附近におけるアムール川の水の流れている川幅は7~800m余りで、下流域でも川幅の狭い場所であろう。

丘陵の尾根の突端である崖の上は、上下2段に分かれた狭い台地で、上段に石碑が下段に建築物（観音堂？）があったとの説明である【写真4-38】。しかし1919年（大正八年）にここを訪れた鳥居龍蔵は、磚塔が建っていた頃に描かれたロシア人のスケッチを採集しているが、この絵では崖の中腹の岩棚のように狭い台地に磚塔が描かれ「昔時に於いては磚塔の側に観音堂及び永樂と宣徳の碑文二基が立ち居りしなり」と説明している。今見ている台地は、絵にあるような崖が2段になっている地形とは相違している。また鳥居龍蔵は観音堂のあった場所には今から「四十二、三年ほど前」に「ブラゴウエシチェンスクの製粉業者チーチャコフ」によって「丘陵の上にイナケンチスキーという寺院」が建てられていたことを記しているが⁽¹⁴⁾、そのロシア寺院は痕跡もなく説明にも出てこない。

台地の中央には大祖国戦争の時に使用したという古い大砲がアムール川に向けて据え付けられている。この砲台をはさんで5m四方の表土が乱暴に削られていて布目のある磚などが散乱しているが【写真4-39】、これがアルテミエフ氏の発掘した跡なのだろうか。

石碑は本来3本あり、運び出す時にその内の1本を川の中に落として行方不明になってしまった、石碑を落とした断崖の下は水深40m、加えて急流のため搜索は不可能なままに今に至っているという話を聞く。なおこのことは鳥居龍蔵も伝えているので、古くから言い伝えられてきたものであろう。

(14) 鳥居龍蔵「人類学人種学上より見た北東亜細亜」第8章の3「チール及びギリヤーク探検」及び挿画「第27図」。

◆ティルの聚落

ティルの町は山裾に張り付いた 100 戸足らずの集落で【写真 4-40】、住民は漁業を生業にしているようである。我々の船に干し魚を売りにやって来たモーターボートには、ナナイ人の老婦人とニヴフ人とネギダル人の青年の 3 人が乗り合わせていたが、彼等は親族だという。サハリンとの交易面からこの付近の住民に関心のある榎森氏は、片言の会話を交わし一緒に写真に収まっていた【写真 4-41】。

2 時間ほど滞在してティルの埠頭を出航する。途中の中州で昼食をとり、最終目的地のニコラエフスクを目指す。ニコラエフスクに近づくにつれて【写真 4-42】、気のせいか下流から潮が上ってくる気配が感じられ、ダーチャ（別荘）や小さな切り開き地が目立って多くなる。18 時、ニコラエフスク埠頭に接岸して 7 日間の船旅が終わる。ラドガ号は外洋航行の許可を得られないので、ニコラエフスク港から先のアムール川をたどることはできない。8 月 1 日から始まった船旅は、本日 7 日夕刻で終了することとなった。

◆ニコラエフスク・ナ・アムール

ニコラエフスク市は 1850 年にゲンナディー・ネヴェリスコイ提督によって建設されたアムール川岸第一の街であったが、1870～80 年の経済悪化に伴い軍隊はウラジオストクに、行政はハバロフスクに移ってしまってから衰退してしまったという。今日では漁業基地とそれに伴う造船所とパン工場が稼働するのみであり、最近は金の採掘も行われているという。我々日本人には 1920 年に尼港事件の起きた街として記憶されている。コピチコ氏がホテルを探してくれるが、8 月 13 日はニコラエフスク市開設 150 周年の記念日で、その祝典に備えた改修作業のためホテルは休業中であった。コピチコ氏はシャワーも使える医学看護学校の寮を利用する許可を得てくれたので、ここに宿泊することとなった。さしあたり宿泊用具だけ持参して学校寮に移動、スプリングの抜けたベッドは寝づらいが、船中の寝台よりは広く、熱いシャワーを使えるのは有り難かった。

11 ニコラエフスク そしてオゼルパーフへ

8 月 8 日

◆ニコラエフスク

快晴。8 日にわたってお世話になったラドガ号は、明日早朝に出航してハバロフスクへ回航するという。これまでの諸費用を精算し、もう使わなくなったテルモスや蚊取り線香、残った食料品などを整理して船長と機関士にお渡しする。この間、コピチコ氏はハバロフスクへの航空券の入手、ここで使用する車の手配などに飛び回ってくれる。

港でラドガ号の隣り合わせに繋留していた船は、キャビアを抱くチョウザメの密漁監視船であった。船の中には密漁人から没収したキャビア、チョウザメ、漁具などが置いてある。没収品のキャビアは街の市場に引き取られたようであるが、チョウザメの肉の一部は乗組員の食料となっている。乗組員と仲良くなった大坊氏がそのチョウザメ肉をもらってきたので、スヴェトラーナさんが料理して美味しいスープとステーキを堪能した【写真 4-43】。

11 時過ぎにマイクロバスで出発して、小さなニコラエフスクの街をまわる。尼港事件のおりにパルチザンに襲われ焼き払われてしまった日本領事館跡【写真 4-44】、街の中心部にある市役所とそのそばの旧島田商会の建物などを見学する。尼港事件当時の建築物はこれを含めて 3 軒のみとのことである。また北方民族文化センターに立ち寄る。ここは子供たちの教育機関であり、参考になるような展示物などは何もなかった。

◆オゼルパーフ

間宮海峡を望む海岸線へと赴く途中で、郊外の台地からニコラエフスクの街とアムール川を遠望した【写真 4-45】。ニヴフ人の村であるクラスノエを経由し、岬を横断して海岸にあるオゼルパーフへと向かう。その途中にある小川には多数の鱒が遡上していて、昔から鮭類が豊富な地帯であることをうかがわせる。峠を越え海岸線に下降する道から間宮海峡の先にサハリン島がくっきりと見える【写真 4-46】。14 時 20 分、海産物加工の村オゼルパーフの海岸に到着した。海岸から南にはアムール川の河口が大きく広がり【写真 4-47】、その彼方にサハリンが見える。澄んだ海辺に立ち、ハバロフスクから間宮海峡を望む海岸までの 8 日間 1,000km 余りの行程が終了した。

◆船旅の終わり

ニコラエフスクに戻った夜は世話になった船長とのさよならパーティ（機関士は盗難を警戒して船に当直）と榎森進氏 60 歳の誕生日パーティを休業中のホテルの食堂で開く。巧みな操船でアムール川の旅を満喫させてくれたペトロフ船長、普通は体験し得ない旅の実現に努力してくれた大坊氏、適切なガイドとアドバイスをしてくれたコピチコ氏、限られた食材でおいしい食事を作ってくれたスヴェトラーナさん、7 日に及ぶ狭い船室生活にもかかわらず常に和気あいあいであった仲間たちに感謝するパーティでもあった。席上、船長が「ブラゴヴェシチェンスク以北の操船は難しいが、この船でシルカ川まで遡ることができるぞ」と次への旅を誘う一言が記憶に残る一夜でもあった。

12 ニコラエフスク発ハバロフスク着、ウラジオストクを経て帰国

8 月 9 日～13 日

8 月 9 日早朝、ラドガ号はハバロフスクへの帰路に就いたが、直行するならば遡上であっても 3、4 日で到着するらしい。我々はニコラエフスク空港へ出向き、空路ハバロフスクに向かう。9 時 40 分に離陸し、11 時 20 分ハバロフスク空港に到着した。

10 日は今回見ていなかった軍事博物館や地方誌博物館を再訪する。コピチコ氏家族に見送られて、19 時 10 分発ウラジオストク行きのオケアン号に乗車し、翌 11 日 9 時頃にウラジオストクへ到着する。中見氏の手配により、極東大学考古学民俗学博物館、東洋学研究所と同研究所展示室、アルセーニフ博物館本館（地方誌博物館）などを訪れて 2 日間を過ごす。

8 月 13 日、ウラジオストク発新潟行きの航空機で帰国した。ここに 2 週間あまりのアムール川紀行が終了した。

◆永寧寺碑

アルセーニエフ記念国立極東総合博物館本館の 1 階正面に置かれていた永寧寺石碑について一言しておく【写真 4-48】。碑面はまったく読めないのも、その内容よりは大きさの印象である。ティルの断崖を実際に見た目からすると、この大きさの石碑が崖の上に建っていたとして、林蔵が「河岸高き処に黄土色の石碑二頭たつ」と記し、その後述を基にしたであろう「サンタコエ地図」には石碑 2 基が描かれているが、果たしてこの大きさでは、川面から見て色までも読みとれるほどははっきり見えたのであろうかとの疑問が生じた。

[補記]

脱稿した後に、註(2)に記したアルテームيوف博士によるティルの丘の史跡と永寧寺碑文をめぐる調査研究が、A. R.アルテームيوف著、菊池俊彦・中村和之監修、垣内あと訳『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』(北海道大学出版会、2008年2月)と題して刊行された。なお本書の監修者である菊池俊彦氏は、氏が訪れた2005年には、ティル村に上陸する許可が得られず、川面から遠望したと記していて、我々が上陸し写真撮影(写真4-37～写真4-40)ができたのは、なかなか得られない機会であったようである。

(細谷良夫)



写真 4-1 ラドガ号 船長とコピチコ氏



写真 4-2 ナナイの模様



写真 4-3 サントン服



写真 4-4 出土した土器群



写真 4-5 龍の模様がある服



写真 4-6 裾に金属の彫刻を縫い付けた服



写真 4-7 金代の石碑



写真 4-8 野菜と果物の店



写真 4-9 墓石を売る店



写真 4-10 ラドガ号がやって来た



写真 4-11 シカチ・アリヤンの石刻がある岸边



写真 4-12 骸骨の石刻



写真 4-13 ナナイのシンボルの木彫り動物



写真 4-14 ナナイのシンボルを模様にした衣装



写真 4-15 トロイツコエ村のレーニン像



写真 4-16 永寧寺出土の瓦



写真 4-17 関帝を中心とした関公廟のミョ



写真 4-18 盤頭の女性が並ぶミョ



写真 4-19 ナナイのシンボルを画いたミオ

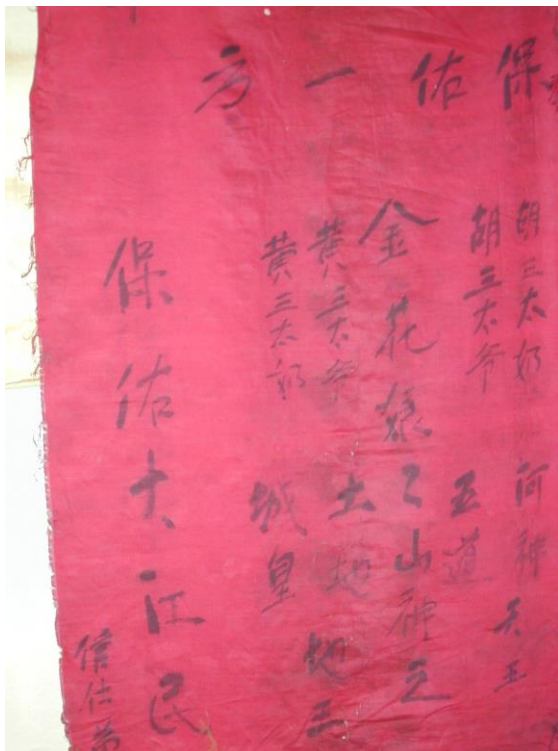


写真 4-20 毛筆で「保佑一方」と記された貼

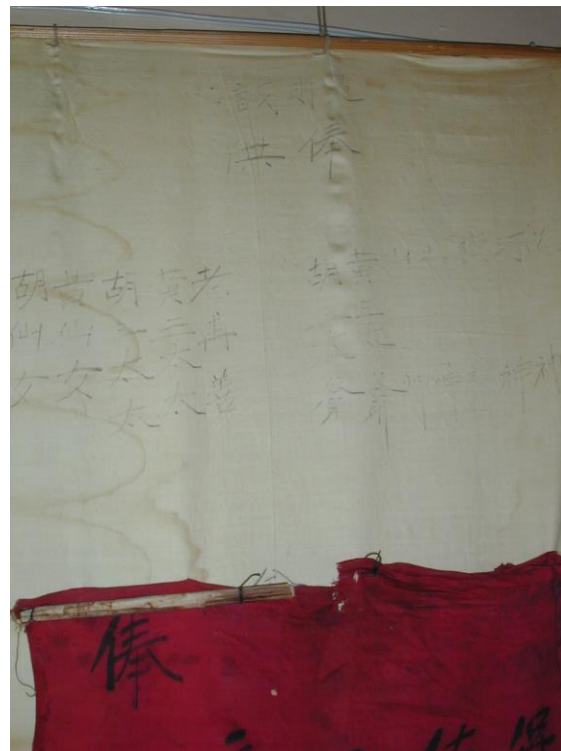


写真 4-21 「供奉」などの文字が見える貼



写真 4-22 日本の図柄の皿



写真 4-23 コムソモリスク附近 鉄橋が見える



写真 4-24 意味不明の漢字が記された「貼」

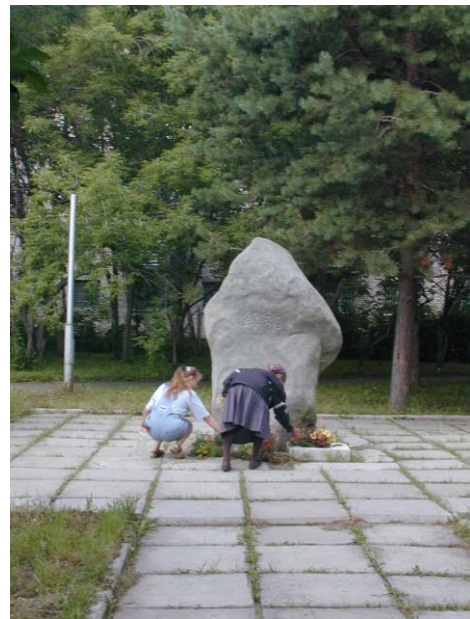


写真 4-26 シベリア抑留者慰霊碑「鎮魂」



写真 4-27 長船銘のある日本刀



写真 4-28 サンタン服の布地を纏った木の人形



写真 4-29 キジ湖の入口付近



写真 4-30 ボゴロツコエ博物館



写真 4-31 高床式倉庫も見えるウリチ人村の模型



写真 4-32 ウリチ人の「御幣」など



写真 4-33 ウリチ人のゆりかご



写真 4-34 ウリチ人の笠と衣装



写真 4-35 ハバロフスクとニコラエフスクを
結ぶ水中翼船



写真 4-36 アムール川から見たティルの丘



写真 4-37 丘の上から見たアムール川と
アムゲン川(右上)



写真 4-38 ティルの丘全景



写真 4-39 大砲附近の発掘跡



写真 4-40 ティルの聚落



写真 4-41 榎森進氏とニヴフ人とネギダル人の青年



写真 4-42 最終目的地ニコラエフスクの遠望



写真 4-43 船上の食事
コピチコ氏とスヴェトラナ夫人



写真 4-44 ニコラエフスクの目抜き通りにある
日本領事館跡



写真 4-45 ニコラエフスクの街とアムール川



写真 4-46 峠から見た間宮海峡とサハリン



写真 4-47 オゼルパーフの海岸とアムール川河口



写真 4-48 アルセーニフ博物館の永寧寺石碑

第5章

ゼーヤ川とブレヤ川、ブラゴヴェシチェンスク周辺の探訪 (2003年8月)

はじめに

2000年に実施したハバロフスク～ニコラエフスクに及ぶアムール川下流の探訪に続き、2003年には中流域に位置するアルバジンを訪れるべく準備していたのであるが、ガイド役である大坊公民氏や江夏由樹、加藤直人氏の日程が調整できないことなどから、1年延期して2004年に実施することとした。今年2003年に実施すべく、昨2002年8月にハバロフスクを訪れコピチコ氏と相談し準備していたが、不確定要素の多いロシアの旅行では、準備は何度重ねても重ねすぎることではない。2003年7月7日～18日の間、幸い時間に都合のついた大坊氏と二人で、アルバジン調査をめぐりコピチコ氏と再度協議を行った上でアルバジン探訪の拠点となるブラゴヴェシチェンスクまで出向くこととした。

1 ハバロフスク周辺

7月7日

雨の降りしきる新潟空港を出発、ロシア領に入ると夏空が広がり、アムール川流域にさしかかると森林火災の煙が見える。聞くところによれば4月に出火し未だ消えていないとのこと。以前、中国領の最北端にあたる黒龍江河畔の漠河に赴いた時、大興安嶺山麓で起きた森林火災の恐ろしさを伝える記念館を見学したことがあるが、後に述べるようにゼーヤ川河畔でも春に出火した森林火災の跡を実見した。

ハバロフスク空港でコピチコ氏に出迎えられたが、今年春から外国人は入国審査の時に書いた滞在証を添えて入国登録をすることが必要になったとのこと。コピチコ氏も初めての経験なので詳細は不明であるが、明日一日は必要であろうから明後日以後でなければ移動できないとのことを告げられる。入国登録は、ソ連解体とロシア共和国の誕生によって、ソ連時代には同国人であった人がロシア共和国となった今では外国人となる例が少なくなき、ロシア国内には新たに外国人となった人が無届けのまま多数いるので、このような人々を対象に登録をさせるものであるという。しかし同時に、中ロ国境に位置するハバロフスクやブラゴヴェシチェンスクでは、不法滞在の中国人も少なくなく、ここハバロフスクではむしろ中国人問題であるという。入国手続きが終わるまでの日時を来年の準備とハバロフスク博物館の再訪、アムール川沿いにあるノヴォトロイツコエ遺跡の発掘現場訪問などに当てた。

◆ノヴォトロイツコエ遺跡

7月9日

折悪しく激しく降り出した雨の中をハバロフスクから車で1時間、中国との国境まで20kmほどの所に位置するノヴォトロイツコエ村に至り、村はずれからアムール川の河岸段

丘にある発掘現場へと赴く。附近は大きな木が繁り鬱蒼とした林である。雨のため発掘は中止とて、発掘現場には行かず、彼らのキャンプ地で出土品を見せてもらい説明を聞いた。

発掘しているのはノヴォトロイツコエ 1 号～3 号遺跡のうちの 3 号遺跡で、昨年から調査を開始し、毎年ほぼ 1 か月間発掘作業を行っている。今年の出土品はすでにハバロフスクに運んでしまったので残っているのはほとんどないとのことであったが、当地にある大型のブレードや土器片を見せてもらった。【写真 5-1、5-2】

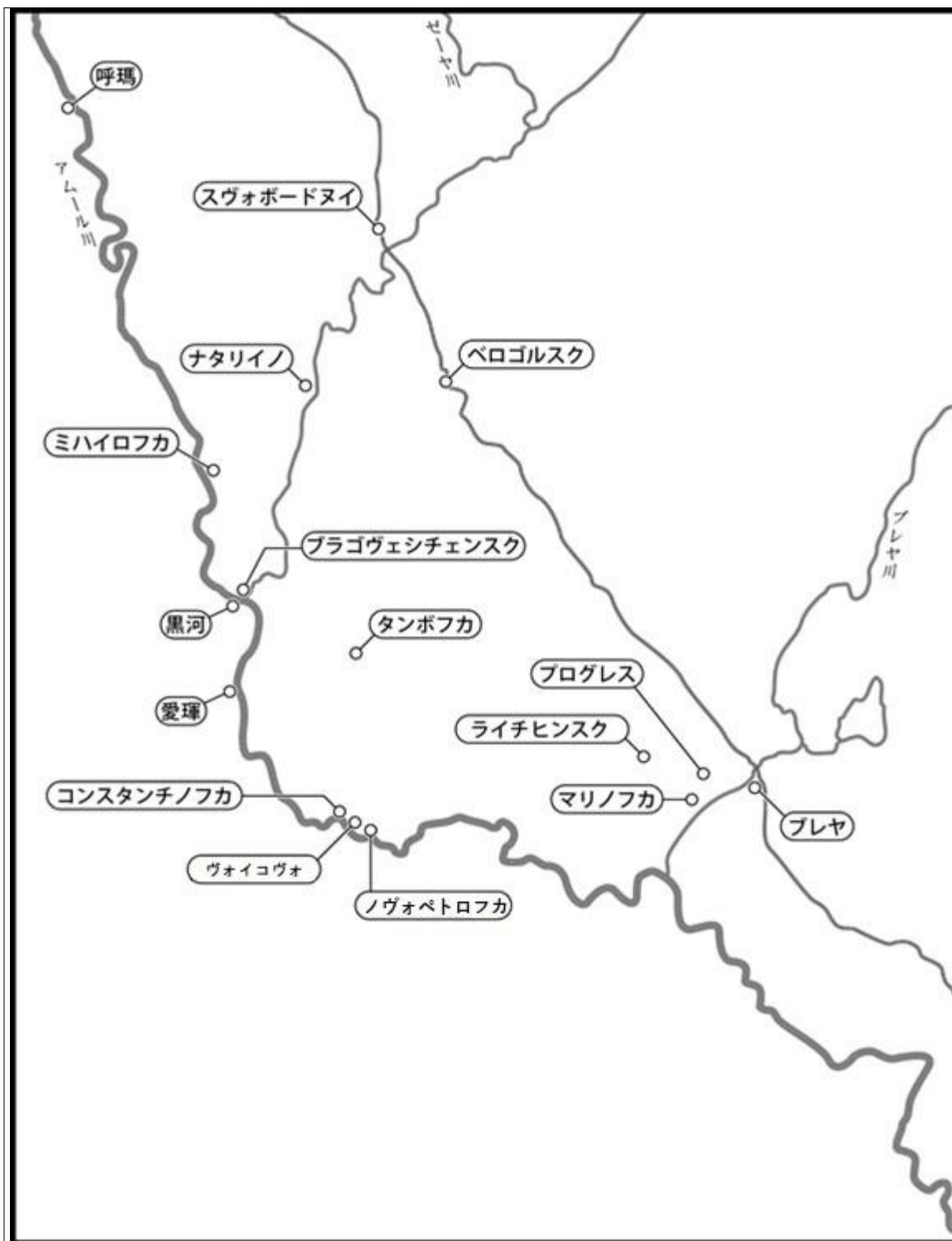


図 5-1 ブラゴヴェシチェンスク付近略図

考古学の知識に疎いので間違いがあるかもしれないが、以下のような説明であった。

ノヴォトロイツコエ遺跡は1万～1万2千年前の住居址であり、ここには狩猟採集生活をしていた人々が住んでいたようである。定住住居ではなかったため出土品が少なく、鏃は出土したが骨角器は見つかっていない。骨角器は腐って残存し得なかったのではないかと思われる。ブレードの大きさからみて、熊や鹿など大型獣を狩猟していたと考えられる。尖底土器ではなく平底土器と考えられる土器が出土したが、アムール川流域で土器が見つかったのはここが一番古いのではないか。また民族系統は不明であるがアムール基層文化に属する遺跡であろう。これに類する遺跡はアムール右岸に数十カ所あり、また中国領内を含むウスリ川（烏蘇里江）の川沿いにもある。

◆ハバロフスク地方郷土誌博物館

7月10日

コピチコ氏の所属するハバロフスク教育大学歴史学部長を表敬訪問する。近いうちに東北アジアを主題とする国際会議を開催するので出席するようにと要請される。その後は何度も訪れたハバロフスク郷土誌博物館を訪れ、有料ではあるが写真撮影の許可を得て、時間の許す限り、ナナイなどの衣装を写真に収めた【写真5-3、5-4、5-5、5-6、5-7】。

2 ハバロフスクからブラゴヴェシチェンスクへ

7月10日～11日

ハバロフの銅像が建つハバロフスク駅から、15時6分発のブラゴヴェシチェンスク行き列車に乗車する。発車するとすぐにアムール川を左岸へ渡り、まもなく昨年訪れたトゥングース川が流れるニコラエフカを通過するが、列車の窓からこのあたりがアムール川に沿った低湿地帯であることが見てとれる。ユダヤ自治州の州都ビロビジャンを過ぎるとアムール川の支流であるビラ川沿いとなり、コピチコ氏はビラ駅で名物のホッケの燻製を買ってくる。なぜこんな山の中で海の魚ホッケが名物なのか不明であるが、長道中の酒の肴には絶好であった。一帯は広漠とした原野が広がり、ところどころ菜園に囲まれた農家が点在するという光景が続く。

11日朝、ペロゴルスクでシベリア鉄道本線と別れ、ブラゴヴェシチェンスクへ至る支線に入る。ここから先はゼーヤ川流域からアムール左岸をつなぐ低湿地帯の流域平原にさしかかる。列車が急カーブを描いてゼーヤ川を右岸に渡ると、右側には低い山並みが続き、その山裾を川幅4、500mあろうゼーヤ川がゆったりと流れている。この山並みはブラゴヴェシチェンスクより上流のアムール川とゼーヤ川を別ける山並みであり、後日、ここにつけられた道をたどってペロゴルスクへと赴いた。現地時間で9時30分、ハバロフスク時間で8時30分、ブラゴヴェシチェンスクに到着する。ここはハバロフスクと1時間の時差、日本とも1時間の時差でロシアの時差と日本の時差はかみ合わないのややこしい。

3 ブラゴヴェシチェンスク

7月11日

◆ブラゴヴェシチェンスクの街

アムール川の一大支流であるゼーヤ川がアムール川にそそぐ合流点に位置するブラゴヴ

ェシチェンスク（漢語表記はブラ哥維什臣斯克で漢語名では海蘭泡）はアムール州の州都ではあるが、人口は 22 万 3 千人と少ない。アムール川対岸の中国領の街黒河が指呼の間に見えるユビレイナヤ・ホテルへチェックイン、ホテルの料金は 1 時間 35 ルーブルと時間単位で計算する。今から 4 泊して 5 日目の 21 時まで合計 106 時間分の滞在費 3,700 ルーブルを支払う。朝食をすませた後に、コピチコ氏は滞在届提出のために公安へ赴き、我々はインターネットカードを買いに郵便局へ出向く。インターネットカードはこの地域でしか使えないので短期滞在では高くつくが、電話が不便なため電子メールが必需品である。ブラゴヴェシチェンスクの街には中国人の団体旅行客が闊歩し、ホテルにも漢語で記した中国人対象の注意書きが張り出されていた。

◆アムール河畔

これまでの史跡探訪で 1990 年と 93 年の 2 度にわたり対岸の黒河を訪れ、黒河の街や黒龍江の川の上からブラゴヴェシチェンスクのテレビ塔やゼーヤ川河口などを遠望したことがあるが、今回はブラゴヴェシチェンスク側から黒河の街を見ることになる。あれから 10 年が過ぎた今、ブラゴヴェシチェンスクの街はさほど変わったとは思えないが、高度成長の一途をたどる中国、黒河の街には当時は余りなかった多数の高層ビルが見え、時には黒河で流す音楽まで聞こえてくる【写真 5-8】。黒河の街はずれに建っていたロシア風建築のイスラム寺院などは今でも残っているのだろうかと思いを返す。コピチコ氏はアルバジン情報を入手すべくブラゴヴェシチェンスクを訪れた今年の夏は、アムール川の川水が少なく川幅の半分ほどは川底を見せていたというが、今は兩岸いっぱい水が流れている。

◆ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館（アムール州郷土誌博物館）

ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館はホテルから徒歩 10 分ほどのレーニン通りにある【写真 5-9】。なかなか立派な建物で 1 階は自然と歴史、2 階は革命史を主題にした展示である。歴史部門では靺鞨とジュルチンの展示に目を引かれる。靺鞨の土器は擦文土器と似通っているようにも思えるがよくわからない。ジュルチンの出土品の鋤や石臼は【写真 5-10】、哈爾濱郊外に位置する金の上京でも似た形の出土品が展示されていたことを思い出させる。明日行く予定のコンスタンチノフカには靺鞨遺跡やジュルチン砦があるとのことなので、そこの出土品であるのかどうかを質したが、博物館の展示品はアムール州のあちこちから集めたものであり、個別の展示品の出土地は特定できないと返答であった。また我々の目指すアルバジン砦の模型【写真 5-11】や絵図【写真 5-12】、砦からの出土品【写真 5-13】も展示されていて、来年の調査への興味を高めてくれる。

4 ヴォイコヴォ村 ノヴォペトロフカ村 ジュルチン砦

7 月 12 日

◆ヴォイコヴォ村付近の発掘現場

ホテルを 8 時に出発して東に走りゼーヤ川を左岸に渡り、トルストフカでペロゴルスクの道と分かれて南下しコンスタンチノフカへ。この間、高低差はほとんどなく、原野、牧草地、麦畑、ジャガイモ畑、ところどころで豆畑が混じるが、圧倒的に原野が多い。コンスタンチノフカから未舗装路でヴォイコヴォ村を過ぎるとアムール川本流に水路でつながっている細長い沼があり、その北側の地でブラゴヴェシチェンスク教育大学歴史学部の学部長ボロティン氏に率いられた学生（大学生と高校生）50 人ほどがテントに寝泊まりして

発掘作業を行っている。この遺跡について、ポロティン氏は以下のような説明をしてくれた。

この遺跡は紀元前5千年の石器時代から8世紀靺鞨時代までが層をなしている。靺鞨時代と判定したのは、出土した手コネ土器に残された焼けこげを炭素14で測定した結果である。この靺鞨は、プレ・マンジュであると想定している。靺鞨の出発点としては、①バイカル湖、②スングリウラ（松花江）の2カ所が考えられるが、私は②を想定している。その理由はスングリウラで類似の土器が発見されていることであり、彼らは人口増加による食料不足が原因でスングリウラ地域から押し出され、南から北に移動してこの付近にもやってきたと考えているという。そしてこれらが混合しながら女真からジュチェル＝アムール・マンジュを形成するが、中国のマンジュもその流れの一つであろう。ジュチェルの中でこの付近に最も遅くまで残っていたグループは1900年までである。その他にチンギスハンの駐屯兵の後裔とも考えられるダウール族がいたが、彼らのほとんどは内モンゴルへ移動した。ただ、その中でも1900年頃までこの附近にいたグループがある。ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館に保管されているダウールのシャーマンの衣装は他所では見ることはできないものであるが、これは彼らが移動した後に墓（ゼーヤ河口付近？）から発掘されたものである【写真5-14】。なお、昔は出土品や遺留品を博物館に寄贈する習慣があったが、寄贈された品々の出土地の特定は多くの場合は困難である。

話を聞いた後、すぐ近くにある発掘現場に赴いた。10m四方の住居遺跡を深さ1mほど掘る予定とのことで、石器と土器の出土品を見せてもらう【写真5-15】。この住居址と類似する住居址はほかにもあり、豚の骨が出土する。また、墓も少なくないとのことである。

◆ノヴォペトロフカの住居址

続いて近くにあるノヴォペトロフカの住居址発掘現場に行く。ここはロシア科学アカデミー・ノヴォシビルスク・シベリア支部考古学民族学研究所所属アルキン氏の指揮の下発掘が行われている。アルキン氏によれば、この遺跡名はノヴォペトロフカ1号遺跡と3号遺跡であり、すでに1960年代に一度調査が行われている、15m四方くらいを単位にして発掘しているが【写真5-16】、紀元前1万年の石器から靺鞨土器までが出土する【写真5-17】、出土品は東京帝国大学が発掘に当たった嫩江河畔の昂昂溪遺跡の出土品と類似しているが、近年の中国の発掘出土情報が入手し得ないので比較することができないとのことであった。折からこの遺跡を共同発掘するという韓国済州文化芸術財団の研究室長の康昌和氏、済州教育大学校地理学教授鄭光中氏などに会った。

◆ジュルチン砦

ジュルチン砦と呼ばれている城址は、ノヴォペトロフカからディムへ向かう道路右側の林の中にある。この城址からは靺鞨の土器や豚の骨が掘り出されているので、旧くから居住地として使われていた場所に築かれた城であろうという。ここが周囲に城壁をめぐらせた城として機能していたのは、炭素測定によっても女真時代1115年までであり、それ以後は城としてではなくジュルチン、ジュチェル、さらにはロシア人が城の内部に居住していた。また洪水の時にノヴォペトロフカの住人が避難して住んでいたこともあるという。道路工事によってもなあって、銅鏡や城門の大型の鍵が出土し、これらの出土品はブラゴヴェシチェンスク教育大学歴史学部博物館に保存しているが、これらの出土品は全て金王朝以前の時代のものであるという。すなわち、この地一帯が金王朝の支配領域に含まれていたことをも否定しているわけである。ただ、この考えは、アムール左岸が歴代の中国王朝の支配が

及ばなかった地域であることを主張するためのものであろう。

高さ 3 m ほどの土塁が残る北側の城壁を東に向かって歩いてみたが【写真 5-18】、途中に馬面とおぼしき屈曲部分や北門址だという切り開きがあり、その先の北東の角から東側に面する土塁が続いている【写真 5-19】。この付近の外側には二重の堀割の跡が残っているが、この堀割はアムール川に続く水路であり、これを使って城と川の間を船が往来していたという。城は周囲 2.5 km ほどあり、ほぼ正方形をなして、北東角のあたりに残る城壁の高さ 5 m、基礎部分の幅は 7～8 m、上部の幅は 2 m ほどである。馬面や北東角には戦闘用の櫓などが建っていた遺構がある。

ソ連時代に古い名称を積極的にロシア名に変えたので、今は古い名称が不明のままとなっているが、調べればわかるであろう。璦琿条約後にも中国人の入植を許可していたので、多数の中国人が残って住んでいたが、1900 年代に入ってから彼らをアムール川右岸に帰した。ただ、1930 年代にも中国人が城壁内で煉瓦工場などを経営していたので、城址内が荒れてしまったなどとの説明を受けた。

この城が位置する一帯は、いわゆる「江東六十四屯」に相当するであろうが、城の規模からするとアムール川左岸にあった黒龍江城すなわち後に右岸に移動した璦琿城の前身、あるいはその衛星城に相当するとも考えられるのだが、詳細は不明のままである。

5 ブラゴヴェシチェンスクから ペロゴルスクへ

7 月 13 日

◆ブラゴヴェシチェンスク教育大学歴史学部博物館

展示室は①20 万年前の旧石器、②新石器、③青銅器文化がなく、いきなり鉄器を伴った土器文化、④そして靺鞨文化と女真文化、⑤ゼーヤ川河口付近に残されていた元～明時代のダウル文化、⑥さらに 1900 年代にかかるジュチュエル文化の墓、人骨と埋葬品に大別され展示されている。小さな展示室に所狭しと出土品が並んでいる【写真 5-20、5-21】。

学生の教育機関である以上当然ではあろうが、ここでも璦琿条約以前に満洲＝清朝の勢力がアムール川左岸に及んだことを認めていない表示である。女真文化の中に金代の鏡が一点、開元通宝、崇寧通宝、宣統通宝と読める銅銭などが展示されている。特異なものは「靺鞨石人」といわれている、兜を被った男の顔の石製彫刻が一点ある【写真 5-22】。この石人は農民が開墾中に発見したもので、届けられないまま長い間漬け物石に使っていたという。なおこの石人についてはボロティン氏の論文がある⁽¹⁾。これとは別に、中国人に聞いたら個人の名前を刻んだ魔よけ石であろうといわれたという石碑が置かれている【写真 5-23】。翌年にかけて読み取ったところ「泰山石敢當」と刻されていて、日本に多く中国にもある、通りに置かれた「石敢當」の一種であると考えられる。とするとこの石碑は江東六十四屯に住んでいた漢人中国人の建てた遺留品であろうか⁽²⁾。

同学部考古学実習室で、ジュルチン砦から発見された鍵を見せていただいた。長さ 50cm 余りある大型で、鉄製のものであるが、彼らが主張するように金代にまで遡るものとは思えない。おそらくジュルチン砦、璦琿城などの城門で使用されていた鍵、あるいは璦琿条約前後に中国人が入植した時に建てた倉庫など大きな建物の鍵ではなかろうか。同博物館

(1) ボロティン（大坊公民訳）「アムール川靺鞨文化の石像」『アジア流域文化論研究』Ⅳ、2008 年 3 月、東北学院大学オープン・リサーチ・センター アジア流域文化論研究プロジェクト、141－145 ページ、を参照。

(2) 本書第 8 章、加藤直人「璦琿条約をめぐる露清関係」を参照。

に展示された靺鞨石人、石敢當、そして考古学実習室のジュルチン砦の鍵など疑問は多いが、興味深く実りのある見学に楽しい一時を過ごした後、2 日間にわたり案内していただいたボロティン氏とお別れしてペロゴルスクへと向かった。

◆ペロゴルスクの街と博物館

出発予定の昼過ぎになり激しい雨が降る。コピチコ氏はペロゴルスクの博物館には自然関係の展示だけで歴史展示は何もないので赴いても無駄だろうというが、悔いを残さないために、また「何もない」ということを確かめる必要があるという私の信念、いうならば従来の方式に従って出向くこととする。ゼーヤ川の橋を越えたあたりで豪雨となり、一度は引き返そうということになったが、キャンセルされて予定した収入が無くなることを恐れたのであろうか、運転手が大丈夫というので、そのまま安全運転で行ってもらった。幸い途中から小雨になり、2 時間をかけてペロゴルスクの街へ到着した。

ペロゴルスクは小さな田舎町である。その町の中心部にある博物館は、野生動物の剥製と鉱石、それに開拓農民の生活品だけの展示で、コピチコ氏がいうとおりに歴史資料は何もなく、あるいはと期待していたエヴェンキヤダウールなどこの地方の少数民族関係の資料もなかった。本当に「何もない」ことを確認して、再び降り出した雨の中をブラゴヴェシチェンスクに戻り、翌日のブレヤ川行きに備えた。

6 ブレヤ川

7 月 14 日

ブレヤ川は漢語で牛満河などと呼ばれるが、この流域にいた人々が南下して松花江流域へと遷住し、清朝のアムール川流域支配と共に新満洲として八旗に編成された記録があり、これを取り上げたことがある⁽³⁾だけに是非見てみたい川である。ブラゴヴェシチェンスクからブレヤ川の岸辺までを往復するとなると優に 200 km を超える距離があるので早朝に出発する。相変わらずの曇り空で、時々激しく雨が降る中ブレヤ川を目指して走る。タンボフカから南東に向かい、ノヴォアレクサンドロフスカの集落を通過する。ここは 1873 年に入植した比較的大きな集落で、この周辺には 1992 年から北朝鮮の人々が大豆栽培を目的に入植した地があり、彼らは醤油を作ってロシア人に売っているとのことであった。イリイノフカ、ミハイロフカなどを通過、この附近になるとゼーヤ川沿いの低湿地帯から次第に離れるようで、川に橋が架かっているものの今はまったく水がなく草地になっている。ベゾゼルノエ付近からブレヤ地区となるが、ブレヤ地区に入るとゼーヤ川とブレヤ川の流域を隔てる標高 250 m 前後の山地となる。その入り口にあるライチヒンスクでは石炭の露天掘りを行っているが、表土を 1 m ほど削ると石炭層が顔を出していて、豊かな埋蔵量がかがわせる。ここから 10 km ほど先のプログレスには、ライチヒンスク産出の石炭を利用した火力発電所があり、発電所の暖かい排水で地域暖房を行い、冬でも凍ることのない湿原の池では魚の養殖を行っているという。

この辺りには橋がなく対岸には渡れないのでブレヤの街まで行っても意味がないと、プログレスの街でブレヤ川がよく見える場所を尋ね、2~30 軒ほどの集落があるマリノフカ村に赴き、村はずれでブレヤ川の右岸に出た。ブレヤ川はここから 20 km ほど下流でアム

(3) 細谷良夫「盛京鑲藍旗新満洲の〔世管佐領執照〕に就いて」『江上波夫教授古稀記念論集歴史編』、山川出版社、1977 年。

ール川に合流するというが、山地を流れ下ってきた流れは速く水量は豊かで、川岸には大きな木が繁茂していて、湿原の中をゆったりと流れるゆっくりと流れるゼーヤ川と相違した景観を見せている【写真 5-24】。

ブレヤ川の中流域には 2007 年完成予定で東洋最大の水力発電所を建設中で、つい先日、1 号タービンが回った記念にプーチン大統領が 500 人の随員を随えてやって来たとのことであった。

ブレヤ河畔で一時を過ごし帰路についたが、帰り道でも雨に降られる。雨の後にはキノコが顔を出すので、道ばたのあちこちでキノコを売っている。ロシア滞在の経験が長い大坊氏は、その当時大量に採って塩漬けや酢漬けにして保存していたという。我々も 1kg 50 ルーブルで購入してホテルの食堂で料理してもらったが、歯触りがよく、なかなかの味であった。ゼーヤ川流域の広大な湿原地帯に入ると、濃紺の野花菖蒲に似たイリスを始めとして様々な花が咲き誇り、今が盛夏であることをあらためて感じた。夕方、ブラゴヴェシチェンスクに帰着したが、街の大通りも水浸しであった。翌日の新聞には博物館のあるレーニン通りも冠水したことを伝えていた。

7 スヴォボードヌイ アルバジン探訪の打ち合わせ

7 月 15 日

今日はブラゴヴェシチェンスクから 3 時間を要するスヴォボードヌイを往復、午後はブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館館長と会ってアルバジンをめぐる情報を聞くと共に今後の協力を要請する、そして夜の列車でハバロフスクへ戻るという強行軍である。

◆スヴォボードヌイへの道

スヴォボードヌイはシベリア鉄道本線とブラゴヴェシチェンスクへの支線が分岐する街で、ここの博物館に少数民族の資料があるとの情報にもとづいて出向いてみることにした。幸い降り続いていた雨も上がったブラゴヴェシチェンスクを朝早く出発する。道はゼーヤ川右岸沿いに北上するが、町を離れてまもなくすると「露中友好公園」がある。この公園は露中友好協定に基づいて、ブラゴヴェシチェンスクには中国の、黒河にはロシアの公園と建物を造ったものだという。公園に万里の長城、ペキンと記された標識と共に牌楼など中国風の建物が造られているが、今は見向きもされないようでペンキで落書きされ敷地は草だらけと荒れ果てていた。

スヴォボードヌイは先日赴いたベロゴルスク同様にゼーヤ川流域に位置するが、ベロゴルスクへはゼーヤの左岸低湿地帯をたどって行ったのに対し、今日はゼーヤの右岸のゼーヤ川とアムール川を分ける標高 300 m あまりの山地をたどる道である。昨日一昨日と走ってきたゼーヤ川流域に広がる湿性の平野の景観とはまったく相違し、大興安嶺の山地を思い出させる光景もしばしばある。

道の両側に続く白樺と松の混成した林は、幹の下半分が焼け焦げ、上半分は葉が茂った状態であった。このような林が 2~30 km あまり続いている。これは今年 5 月頃、雪が消えたばかりの時に、不注意な焚き火や煙草の火が枯れ葉に燃え移った山火事の跡であるという。林は道の両側を中心に湿原の中に点在するだけなので、山全体が燃えた訳ではなかったようである。山火事は、このような人の居住地に近い場所では消火活動も行われるが、無人地帯では消されることもなく何ヶ月も燃え続けるようで、それがハバロフスクに来る

時に飛行機から見えた山火事の煙らしい。

ノヴィンカからゼーヤ川の本流間近を走るが、ノヴォペトロフカ附近にはゼーヤ川を航行する船の港があるという。ナタリイノを過ぎると再び山地に入り、一挙に200mほど高度を上げたところがナタリイノ峠である。ここはゼーヤ川の絶好の展望台となっていて、ゼーヤ川本流の滔々とした流れと、昨日赴いたブレヤ川の山地まで連なる南北で2、300kmはありそうな流域平野＝湿原をのぞむことができる【写真5-25】。こんな道をたどって10時を少しまわってスヴォボードヌイへ到着した。

◆スヴォボードヌイ博物館

スヴォボードヌイは1896年にシベリア鉄道が開通してできた街で、何度か街の名を変えて今のスヴォボードヌイに落ち着いたという。ここには何の産業もない消費都市らしく、街の中には小さなマーケットが見えるだけであった。露天のマーケットが連なる中央通りの一角にある住宅ビルを利用した博物館へ行く。残念ながら1940～80年代の子供の玩具展を開催しているだけで、他の展示はまったくなかった。コピチコ氏の依頼に応じて学芸員のマリーナさんがエヴェンキ族の靴、ウリチ族の服だというものを見せてくれたが、きわめて新しいものばかりであった。地方の博物館が所蔵していた資料は、ペテルブルグやブラゴヴェシチェンスクの博物館に持って行ってしまい、今はほとんど残されていないとのことであった。今日は本来の目的であった博物館の調査というよりは途中のゼーヤ川の景観を堪能した旅であった。

◆アルバジン探訪の打ち合わせ

8時間余りかけてスヴォボードヌイを往復し、帰着後、休む間もなくブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館（アムール州郷土誌博物館）館長エレナさんとお会いして、アルバジン探訪の打ち合わせを行う。彼女の専門は1917～24年の国内戦争時期の歴史と博物館学であり、なぜ我々が時間と費用をかけてアルバジンを訪れようとしているのか理解できないようである。アルバジンはロシアと清朝にとって重要な史跡であること、清朝満洲族の一部がゼーヤ川流域にも住んでいたことなどを説明し、我々の目的を理解してもらうように努める。

我々の説明と希望を聞いたエレナ館長は、以下のようなアドバイスと提案をしてくれた。

アルバジンへの旅は、アルバジンが軍事境界線に位置し軍が駐屯しているので、ここを訪れることは簡単ではない。コピチコ氏から申請を出してもらい、それを私（エレナ館長）の手を通じて国境警備隊に申請し許可を得る必要があるが、駐屯軍は官僚主義的でもあり、彼らが長期の休暇期間に入る以前の5月中には許可を得ておく必要がある。列車を利用することも可能であるが、機能的に各地を訪れるには車を利用の方がよい。車で赴く場合は、ブラゴヴェシチェンスクを出発してアルバジンとスタノヴォイ山脈の麓に位置するティンダをまわって、ブラゴヴェシチェンスクに戻ってくるには10日間が必要である。この経路は永久凍土の地帯が多く、昼は暑いが夜は零度近くまで下がると気温差が激しいので8月がよい（実際に翌年の8月2日、ティンダからブラゴヴェシチェンスクへと帰る自動車の中で寒さに震え上がった）。許可が出たら経路と日程を決めて車と運転手を手配しておく必要がある。

今後、更にコピチコ氏を通じて詳細な詰めを行う必要があるが、ともあれエレナ館長の協力を得ることでアルバジン探訪を実現する見通しが立ったことに安堵した。

残された時間で、郷土誌博物館の収蔵品の中に満洲語で記されたものがあるかなどのこ

とを尋ねてみた。満洲語で記されたものは所蔵していない、1891年に博物館が開設された当時はここにも満洲語の文献があったようだが、スターリン時代にレニングラードやハバロフスク（郷土誌博物館）に移されてしまった、ブラゴヴェシチェンスクを訪れた人の19世紀末から20世紀初め頃に記された紀行文の中には現地人の風習や満洲語の引用があるようだという。いま博物館が所蔵しているエヴェンキ族関係の資料は、博物館の建物が完成した当時、ここにいたドイツの貿易会社がハンプブルグに戻った時、彼らが所有していた資料を博物館に寄贈してくれたものであるとのことであった。

22時過ぎにハバロフスク行きの列車に乗車し、翌16日、15時30分、ハバロフスク駅に到着してブラゴヴェシチェンスクへの調査と予備交渉の旅が終了した。翌17日はアルバジン探訪をめぐりコピチコ氏との打ち合わせとハバロフスク周辺の探索を行い、18日に帰国した。

（細谷良夫）



写真 5-1 ノヴォトロイツコエ遺跡の出土品（1） 写真 5-2 ノヴォトロイツコエ遺跡の出土品（2）



写真 5-3 ハバロフスク博物館展示品・ナナイの生命樹



写真 5-4 ハバロフスク博物館展示品・
チュクチの衣装



写真 5-5 ハバロフスク博物館展示品・
ウデゲイの衣装



写真 5-6 ハバロフスク博物館展示品・
エヴェンキの衣装



写真 5-7 ハバロフスク博物館展示品・
ナナイの衣装



写真 5-8 対岸の黒河の街



写真 5-9 ブラゴヴェシチェンスク
郷土誌博物館の外観



写真 5-10 ブラゴヴェシチェンスク
郷土誌博物館展示品・石臼



写真 5-11 ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館
展示品・アルバジン砦の模型

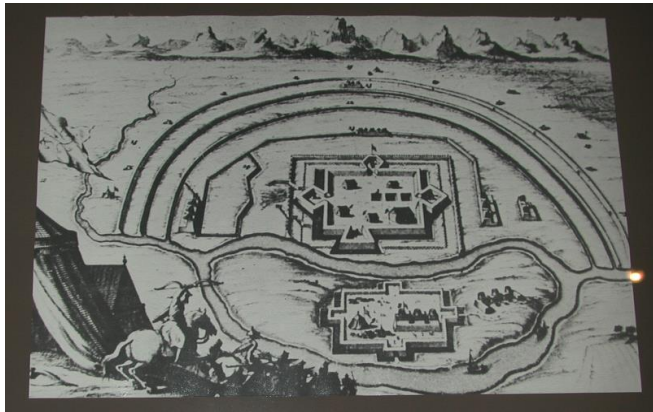


写真 5-12 ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館
展示品・アルバジン砦の図



写真 5-13 ブラゴヴェシチェンスク郷土誌
博物館展示品・アルバジン砦からの出土品



写真 5-14 ブラゴヴェシチェンスク郷土誌
博物館展示品



写真 5-15 ヴォイコヴォ遺跡の出土品



写真 5-16 ノヴォペトロフカ遺跡の発掘現場



写真 5-17 ノヴォペトロフカ遺跡の出土品



写真 5-18 ジュルチン砦の城壁址下から望む



写真 5-19 ジュルチン砦の城壁址



写真 5-20 ブラゴヴェシチェンスク教育大学
歴史学部博物館の展示品（1）



写真 5-21 ブラゴヴェシチェンスク教育大学
歴史学部博物館の展示品（2）



写真 5-22 プラゴヴェシチェンスク大学
博物館の展示品・石人



写真 5-23 プラゴヴェシチェンスク大学
博物館の展示品・石碑



写真 5-24 ブレヤ川の流れ



写真 5-25 ゼーヤ川の流れと流域平原
(2004 年撮影)

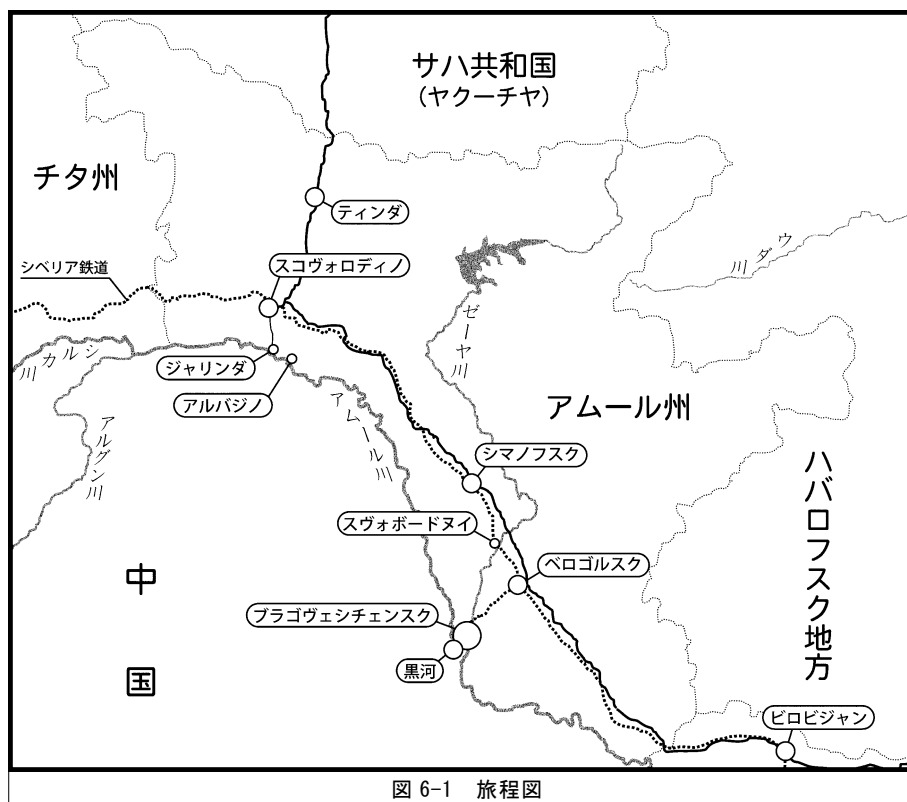
第6章

アムール上流域調査 ―アルバジンとスタノヴォイ山脈― (2004年8月)

はじめに

今回のアムール上流域調査は、2002年度からスタートした科学研究費補助金（基盤研究(B)）「中華帝国の中央と周縁 ―現代東アジアの原型を求めて―」研究代表者：細谷良夫）による活動の一環として行われた。日本側の参加メンバーは、細谷良夫、江夏由樹、加藤直人、中見立夫そして柳澤の5名、ロシア側の協力者で、調査団のリーダー役をつとめてくれたのは、ハバロフスク教育大学国史研究室のコピチコ氏（B. H. Копытко）である。今回の眼目は、何といたっても露清衝突の地、アルバジンの訪問であった。アルバジンは国境沿いの軍管制区であるため、通常は立ち入りが制限されているが、2003年夏に細谷氏と大坊公民氏がコピチコ氏とともにブラゴヴェシチェンスクで予備調査を行った際に、アムール州郷土誌博物館（Амурский областной краеведческий музей）の協力が得られることになり、今回の計画が実現の運びとなったのである。

調査は、コピチコ氏の行き届いた配慮とリーダーシップ、そして現地の方々の熱心な協力に支えられて、予想を超える収穫を収めた。以下、7月23日（金）から8月6日（金）までにわたる毎日の行程と訪問先とを簡潔に記した上、要所で若干詳細なコメントを加えるというスタイルで、調査旅行の概要を紹介する。



1 ハバロフスクとブラゴヴェシチェンスク

2004年7月23日

新潟空港集合。山のような雑貨を抱えた「担ぎ屋」らしきロシア人の姿が目立つ。ダリア航空 310 便に搭乗し、19 時 30 分頃、ほぼ定刻通りにハバロフスク空港着。コピチコ氏と子息のコーリヤ（ニコライ）氏が出迎えてくれ、市の中心、レーニン広場の一角にあるツェントラリナヤ・ホテルに投宿。一泊 1,300 ルーブル（プラス予約金 300 ルーブル）はまず妥当というところか。ただ、ロシアでは、ホテルを予約すると、予約金（броня）を取られることがある。保証金のように後で宿泊料の一部に充当するのではなく、あくまで別立てである。日本の感覚では、予約すれば割引になりそうなものだが、ロシアでは、来るか来ないかわからない客のために部屋を空けておくリスクを宿泊料に上乗せするということらしい。ハバロフスクは、少なくとも市の中心部に関する限り、街路もきれいに整備され、落ち着いた印象である。

7 月 24 日

◆発掘調査現場見学

銀行での両替を済ませてから、チャーターしたワンボックス車で出発。まず、ムラヴィヨフ・アムールスキー通りの突き当たりの公園を訪れ、アムールを見下ろして立つムラヴィヨフの像を見学する。上流方向を眺めると、彼方に大ヘフツィル山脈が横たわっている。その右手には、定かには見えないが、ウスリ川との合流点があるはずである。ついで、コピチコ氏の提案に従い、アムール右岸（南岸）を 20 km ほど遡ったところにある考古学の発掘現場を見に行く。ノヴォトロイツコエという村のあたりから河岸に下り、車を河岸に駐めて藪を掻き分け、13 時少し前に現場着。林の中にテントがいくつも並び、食堂や風呂もあって、ちょっとしたラーゲリができています。コピチコ氏の友人である発掘責任者イーゴリ氏（ハバロフスク地方郷土誌博物館）から説明を聞く。一帯の遺跡はゴンチャルカ（Гончарка）と総称され、時期を異にする数箇所のサイトからなる。現在発掘作業中なのはゴンチャルカ VI で、後期新石器時代のヴォズネセノフスカヤ（Вознесенская）文化のものである【写真 6-1】。発掘現場には、ウラジオストクの大学生たちが実習に来ていた。また、日本人が二人いるということで、紹介してもらった。立命館と早稲田の方であった。日本人は蚊に対する免疫がないので、ときには足が腫れ上がったたりして大変だという。

◆溥儀が抑留されていたビル

市内に引き返し、溥儀が抑留されていた建物を見に行く。建物はディコポリツェフ通り（ул. Дикопольцева）にあり、現在は第 3 病院（Поликлиника №3）になっているが、以前は内務省のもので、奉天の飛行場でソ連軍に逮捕された溥儀は、関東軍の幹部たちとともにしばらくここに住んでいたという。改装はされているが、部分的には当時の建築が残っている【写真 6-2】。なお、今回の調査では、溥儀の通訳をつとめたペルミヤコフ氏（Г. Г. Пермяков）にインタビューする計画もあり、先方に打診したが、高齢で健康もすぐれないとのことで、残念ながら実現しなかった。

7 月 25 日

この日も市内各所を見学。河岸近くにある第 2 次大戦などの戦没者モニュメント、いくつかの教会（いずれも新しいもの）、郊外にある日本人の慰霊碑、アムール大橋などを回る。午後はハバロフスク地方郷土誌博物館（Хабаровский краевой краеведческий музей）を参観。自然科学、考古学、先住民文化、革命史など多くのセクションに分かれた豊富な展示だが、特に強烈に印象に残るものはない。最上階には、1922 年の内戦時の天王山「ヴォ

ロチャエフカ（Волочаевка）の戦い」を描いた大きなパノラマがあった。

7月26日

この日は本来、国立ハバロフスク地方アルヒーヴ（Государственный архив Хабаровского края）を訪問する予定であったが、日本で用意した英文の紹介状が、ロシア文でなければだめだと言われたため、コーリャ氏に翻訳を頼むことにし、アルヒーヴ訪問はブラゴヴェシチェンスクから帰った後に延期する。移動に備えて買出しなどを行い、19時10分頃、ハバロフスク駅からブラゴヴェシチェンスク行き列車で出発。駅前にはハバロフ（Е. П. Хабаров）の銅像があった【写真 6-3】。線路はアムールを渡ると、しばらく川筋から遠く離れる。ユダヤ自治州の首府ビロビジャン（Биробиджан）を過ぎ、日もとっぷりと暮れた頃、ビラ（Бира）駅で、去年買って美味だったから今年も必ず買えとの細谷氏の指示に従い、ホッケの燻製を買い求める。ビラという駅名は、この付近を線路と並行して流れている川の名から来ているが、この川はビロビジャンを経て 向きを変え、アムールに注ぐ。“Биро”は満洲語の bira（川）から来たもので、「吉林九河図」⁽¹⁾には“bijan bira”とある。ビロビジャンはこれがひっくり返ったものだが（ロシア語では“река Амур”のように「川」を先にいうから、その影響か）、川自体の名はなぜか「ビジャン」ではなく「ビラ」となってしまったわけである。沿線はほとんど森と野原ばかりで、農耕地はほとんど見えない。数日後に車でブラゴヴェシチェンスクからスコヴォロディノへ向かったときも、人家の周囲に小さな菜園やジャガイモ畑があるだけで、大規模な耕地はまったく見なかった。かつてアムール河谷はその肥沃さでカザーク（コサック）たちを引きつけたというが、おそらく耕地はコルホーズのような特定の場所に集中しているのだろう。

7月27日

◆ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館で記者会見

10時45分、ブラゴヴェシチェンスク着。アムール州郷土誌博物館長のエレナさん（Е. И. Пастухова）たちの出迎えを受ける。差し回しの車で、まずアムール河岸、ゼーヤ川との合流点近くのドルジバ・ホテルにチェックインする。対岸には黒河の街の外れが見えている。昼食後、博物館に向かい、今後の予定について打ち合わせるが、そこで渡された計画表には、「記者会見」とか「アムール州博物館長会議への出席」など、予期せぬ文字が並んでいる。後になって次第にわかってきたことだが、博物館側では、日本からの「調査団」の訪問に合わせて、アムール州における博物館や文化財保護の重要性を行政や市民に向けてアピールするキャンペーンを打とうという目論見だったようである。14時から記者会見。テレビカメラも入って、ものものしい雰囲気である。日本人がなぜアルバジンに関心をもつのか？ といった質問が主だった。その後博物館の展示を参観。まず階上の特別展示室で、ロシア軍が鹵獲した義和団の旗？や、清代の衣服などを見る。次いで一般展示を見るが、筆者はテレビ取材につかまり、アルバジン関係の展示をあらかじめ見損ねてしまった。

◆ブラゴヴェシチェンスク市内

17時30分、博物館を出て、旧チューリン・カンパニー（Чурин и К^о）の建物、ニコライ

(1)「吉林九河図」（台北・国立故宮博物院所蔵）は、ネルチンスク条約締結直後の1690年（康熙二十九年）にアムール水系を探查した都統ランタン（Langtan）等によって作られたと推定されている。吉田金一「郎談の「吉林九河図」とネルチンスク条約」『東洋学報』62-1・2、1980年、松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006年、25-34頁。同図の複製は、吉田金一『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』東洋文庫近代中国研究センター、1984年、の巻末に付載されている。

皇太子（後のニコライ 2 世）のために建てられた「凱旋門」跡、ゼーヤ川とアムール川の合流点などを見学した後、ホテルに戻る。「凱旋門」は、1891 年、日本から帰国途上の皇太子の上陸を迎えるために、アムール河岸に建てられたもので、目下再建工事が進んでいる。ロシアでは昨今、正教の復興とともに、旧皇室に対する追慕が盛り上がりつつあるが、凱旋門の再建も、そうした動きの一環であろうか。このあたりのアムール川は、兩岸とも平坦で、ところどころに砂浜もあり、水浴をする人々で賑わっている【写真 6-4】。対岸の中国側にも、岸边にマイカーを乗りつけて川遊びをする人の姿が見受けられ、水上には客船が行きかい、のどかな光景である【写真 6-5】。水量は少なく、簡単に泳いで渡れそうである。中ロ国境地帯を 4,000 km にわたって探査された岩下明裕氏によれば、ブラゴヴェシチェンスク―黒河間の貿易は頭打ち状態であるらしいが⁽²⁾、ブラゴヴェの街には中国人の姿が目立つ。博物館では、ガイドに率いられた中国人の団体客を何組も見かけたし、ホテルのロビーもほぼ中国人に占拠されている。生鮮食料品や日用雑貨は、ほとんど中国からの供給に頼っているようである。

2 アルバジンへ

7 月 28 日

7 時前、チャーターしたマイクロバスでホテルを出発。このバスには前日すでにお目にかかっていたが、屋根は赤、側面は白と黄色に塗り分けられて、色とりどりのハングルが書かれ、窓にはピンクのカーテンが下がっているという代物で、幼稚園の送迎バスだったに違いないと噂しあう。一行は、われわれ 6 人の他に、エレーナ館長と博物館のナターシャさん、新聞記者（本業は詩人）のスヴェトラナさん、それに運転手のイーゴリ氏を加えて、総勢 10 名。ルートは、まずブラゴヴェシチェンスクからゼーヤ川に沿って北上し、スヴォボードヌイ（Свободный）からはほぼシベリア鉄道に沿って北西に向かうというもので、宿泊予定地のスコヴォロディノ（Сковородино）まで約 700 km の行程である。

スヴォボードヌイまでの間は、丘陵の裾を縫うような道で、いくつか峠らしきものもあったが、シベリア鉄道沿いになると、森の中のほぼ平坦な道（未舗装部分もある）をひたすら走り続ける。興味深いのは、ブラゴヴェシチェンスクに近いところでは、ポプラ類のような広葉樹もかなり見かけたが、北上するにつれて、カラマツとシラカバがほとんどを占めるようになり、いわゆる「明るいタイガ」（светлая тайга）の様相を示してくることである【写真 6-6】。

ところどころにかなり大きな森林火災の跡を見るが、古い焼け跡では、すでに若いシラカバが育ちつつある。道端には、キキョウ、オミナエシ、ホザキシモツケなど、日本ならば秋を彩る花々が咲き乱れている。沿道にはときたまドライブイン（カフェ）があり、また机を並べてジャガイモやキノコやベリーを売る人の姿を見かけるが、集落らしい集落はほとんどない。20 時 30 分、スコヴォロディノ着。閑散としてはいるが、一応街らしい街で、シベリア鉄道とバム鉄道を結ぶ支線の分岐点をなす、交通の要衝である。旧アルバジン砦の地、現在のアルバジノ（Албазино）村には宿泊施設がないため、今日はここまでで、街外れの簡素なホテルに投宿する。

7 月 29 日

(2) 岩下明裕『中・ロ国境 4000 キロ』角川書店（角川選書 351）、2003 年、184-186 頁。

◆アルバジノ村

9時10分、スコヴォロディノ発。アルバジノへ向かう。約90kmの行程である。大ネヴェル川(Большой Невер)の左岸に沿い、森と湿原を縫う美しい道が続く。途中、軍管制区入口のゲートでしばらく停車する。ゲートを過ぎると、ほどなくアムール河岸のジャリンド(Джалинда)に到着。早速河岸の丘から中国領を眺める。このあたりでは、アムールは兩岸に段丘が迫り、峡谷状をなしている【写真6-7】。対岸には中国側の施設(連峯の埠頭と税関)が見える。ジャリンドは人口約1,500の村だが、港湾設備をもち、スコヴォロディノから貨物用線路も通じていて、対岸の連峯に定期的に貿易船が通っている⁽³⁾。ただし、中国側からの入国は認められていないという。ジャリンドからアムール沿いの道をわずかに下流方向に進み、11時30分頃にアルバジノに着く。

村立博物館で、館長のロバノフ氏(А. Ю. Лобанов)、村長のフィリノフ氏をはじめ、地元の皆さんの出迎えを受ける。博物館はアルバジン砦の遺跡に隣接しており、展示室の他に、19世紀のカザークの住居や物置、蒸し風呂などが復元されている。そのカザークの母屋の一角でまず朝食をご馳走になる。ブラゴヴェシチェンスクのエレナ館長が、出版されたばかりの『アルバジンの聖物』⁽⁴⁾をロバノフ館長に贈呈し、ひとしきり歓談の後、まず展示室を見学する【写真6-8】。

アルバジノ村は人口約600、その8割は、19世紀にアムール北岸がふたたびロシア領となった直後、この地に入植したカザークの子孫だという。ロバノフ氏もフィリノフ氏もカザークである。博物館は、ロバノフ館長の祖母にあたるドロヒナさん(А. Н. Дорохина)が、カザークの生活の記録を後世に残そうと、私財を投じて基礎を築いたものだという。展示室は小さなものだが、アルバジン砦の模型、砦の跡から出土したという砲弾【写真6-9】や、カザークの生活を物語る写真などが並べられている。また、日本軍の鉄甲や、1958年に対岸の中国領が洪水に見舞われた際、アルバジノから贈られた援助に対する、中国共産党呼瑪県委員会からの感謝のペナントもある。変り種は、「海拉爾忠霊塔／昭和十七年八月建」と銘のある鏡【写真6-10】である。年代からしてノモンハン事変と関わりのあるものだろうが、来歴は未詳。

続いて外に出て遺跡を見学する(後述)。さらにカザークの風呂小屋や物置などを見た後、ふたたび母屋で昼食をご馳走になり、16時頃アルバジノを辞去。行きと同じルートをスコヴォロディノに向かう【写真6-11】。途中で小休止すると、ロシア人たちはすぐにタイガに分け入ってベリーを探しはじめる。つられて入ってみると、なるほどコケモモやブルーベリーがあちこちに実っているので、いくつか試食してみる。18時過ぎにスコヴォロディノに帰着。

◆アルバジン砦

まず、アルバジン砦の歴史をあらためてごく簡単に振り返っておこう。アルバジンがはじめて史料に登場するのは1650年のことで、この年、ハバロフの遠征隊は、ダウールの首長アルバザ(Албаза)が放棄した砦を占領し、越冬した。アルバジンの名は、このアルバザに由来する⁽⁵⁾。しかし、間もなく砦はハバロフの指示によって破壊されたという。アル

(3) 岩下、前掲書、155-156頁。

(4) Иеромонах Игнатий (Чигвинцев), *Албазинская святыня*. Влагоевещенск, 2004.

(5) 清側史料ではアルバジンは雅克薩と呼ばれているが、これはエヴェンキ語で(河流が湾曲したところ)にできる)高い河岸のことだという。烏雲達賚(遺稿)『呼倫貝爾歷史地名』内蒙古文化出版社、2003年、50頁、内蒙古自治区鄂温克族研究会・黒龍江省鄂温克族研究会編『鄂温克地名考』民族出版社、2007年、237頁。

バジンがアムール流域におけるロシア側の拠点として重要な意味を持ち始めるのは、1665～66年に、チェルニゴフスキー（Н. Р. Черниговский）の率いるカザークの一隊がこの地に拠って砦を再建してからである。

当初、カザークたちは行政当局からは半独立の状態だったが、1682年には軍政官管区が設置され、翌年には清朝の脅威に備えて砦の強化が進められた。水陸両路で到来した清軍がアルバジンを包囲し、本格的な攻撃を行ったのは、1685年6月のことである（以下、日付はロシア暦による）。3門の大砲しか持たぬ守備隊（450名）は果敢に抵抗したが、間もなく弾薬と弾丸が尽きて降伏を余儀なくされた。清側は彼らがネルチンスクに退去することを許し、間もなく自分たちも撤収した。そこで、軍政官トルブジン（А. Л. Толбузин）は8月にアルバジンに戻り、増援のベイトン中尉（А. И. Бейтон）らとともに破壊された砦を再建した。

清軍の第二次攻囲は1686年7月初旬に始まり、約5か月に及んだ。清側は砦の周囲に土城を築いて完全に包囲したが、守備隊（826名）は頑強に抵抗し、降伏しなかった。12月になると、清軍はロシア側との外交交渉開始を受けた中央からの指示によって停戦し、包囲を緩めたが、両軍の対峙は1689年8月のネルチンスク条約締結まで続いた。

以上のアルバジンをめぐる攻防については、吉田金一氏の大著をはじめとする多くの研究があり⁽⁶⁾、いまさら劇的な新発見があるはずもないのだが、現地に行ってみて、事前に抱いていたイメージとは食い違ったこともいくつかある。まず、予想外だったのは、アルバジン砦の跡が、まさにアルバジノ村の真中にあることであった。もちろん、砦の近くに村と博物館があることは聞いていたが、それはかなり離れたところで、遺跡そのものは荒野の中にぽつんとあるように想像していたのである。実際には、土塁跡を越えるとすぐ村の通りで、牛が数頭寝転んでいるという具合であった。

さて、砦の遺跡は、アムールを見下ろす崖の上にある。城壁の土台と思われる方形の土盛りが残り、それを取り巻く濠の痕跡もかすかに認められる【写真 6-12】。かつてはこの土盛りに沿って、高さ5m以上の木製の塼があったはずである【写真 6-13】。実測はしなかったが、文献によれば、サイズは川に沿った西面が97m、北面が85m、東面が83m、南面が75mである。元来の砦はもっと小さく、28×39mの長方形であったが、上述のように、1683年以降に拡張されて上の大きさになったという。遺跡の西面には鉄条網が張られ、南西角の近くには国境監視塔があるため、そちらを向いて写真を撮らないでほしいと言われた。砦が河岸の崖の上にあったということも、現地を見てはじめて実感できたことで、清軍が船でやってきても、一気に上陸して攻めかかるのは難しかったと思われる。

この遺跡の予備的な発掘は1974年から行われたが、1989年以降、アルテームィエフ氏（А. Р. Артемьев）を中心とするスタッフによって本格的な発掘調査が進められた⁽⁷⁾。最大の

(6) 吉田金一『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』（前掲註（1）参照）

(7) Артемьев, А. Р. *Города и остроги Забайкалья и Приамурья во второй половине XVII-XVIII вв.* Владивосток, 1999, с.101-116. 著者のアルテームィエフ氏は、ウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部歴史学・考古学・民族学研究所（Институт истории, археологии и этнографии на Востоке ДВО РАН）に所属し、多くの古城址の発掘にあたって中心的な役割を果たした方である。本書は、ロシア人によるこの地域の開拓史、先住民との関係、露清関係の推移等に関する概説（随所に一次史料に基づく創見が盛り込まれている）と、個々の城砦・都市の沿革に関する詳細な記述とからなる。図版も充実しており、われわれのような調査旅行を行う者にとって、もっとも頼りになる手引きといえる。氏と直接コンタクトをとり、共同研究を行う計画もあったのだが、2005年末に不慮の死を遂げられたとのことで、慙愧に堪えない。同氏の訃については、中村和之「国際シンポジウム「ヌルカン永寧寺碑文と中世の東北アジア」の開催とアレクサンドル・アルテームィエフ博士の急逝について」『満

発見は、1991年に、西面沿いの一角で半埋葬状態の多数の人骨—守備兵の遺体（57体）が発見されたことで、現在その場所には十字架を頂く亭が建てられ、花が供えられている【写真 6-14】。

◆アルバジンの聖母

アムール州一帯、とくにアルバジノを訪れて感じたのは、地元の人々が、アルバジンの戦いに対して強い思い入れを抱いているということであった。中国側はともかく、ロシア側では、アルバジンの戦いなど遠い昔の出来事として、ほとんど知る人もないのではないかと想像していたので、これはいささか意外であった。こうした思い入れを象徴するのが、「アルバジンの聖物」つまり、イコン「アルバジンの聖母」（Албазинская икона Божией Матери）と「アルバジンのカザーク旗」（Знамя Албазинских казаков）である。このうち、とくに前者について、『アルバジンの聖物』によりつつ簡単に紹介しておこう。「アルバジンの聖母」は、別名を「みことばが肉となる」（Слово Плоть Бысть）といい、1671年にアルバジン砦の4 km 上流に修道院を築いたゲルモゲン長老（старец Гермоген）がもたらしたものである。アルバジン攻防戦の際には、彼もイコンとともに籠城したが、1685年夏、第1次攻囲の後にイコンを携えてこの地を去り、アムール上流のスレテンスク（Сретенск）に移り住んだ。やがてこのイコンは、アルバジン最後まで守った神の恩寵のしるしと見なされるようになり、その後も多くの奇蹟を起こしたと伝えられた。

愛琿・北京条約の締結によってアムール左岸がふたたびロシア領となり、ブラゴヴェシチェンスクが建設されると、奇蹟のイコンを故地に帰そうという声が沸き起こり、スレテンスクの人々も同意して、1868年にイコンはブラゴヴェシチェンスクの主教座教会（聖母受胎告知教会）に安置された。革命後の1938年、イコンは市ソヴィエトの決定によって郷土誌博物館に移管され、展示されることなく眠っていたが、1991年、ニコライ皇太子の訪問100周年を期してふたたび教会の手に戻された。

2003年からは新しい主教座教会（Кафедральный собор）に安置されている。この間、1997年から2003年にかけて、イコンはサハリンからモスクワに至る各地を巡回し、信徒たちの尊崇を集めた。また、このイコンからは多くのコピーが作られ、全国の教会に安置されているという。

後述のように、今回の調査ではイコンの実物を見ることができたが、撮影は許されなかったもので、郷土誌博物館に展示されていたレプリカの写真を掲げておく【写真 6-15】。「アルバジンの旗」は、やはり聖母を描いたものであるが、本物はモスクワのクレムリンの「武器庫」（Оружейная палата）に収蔵されており、郷土誌博物館にはレプリカが展示されている【写真 6-16】⁽⁸⁾。

一方、中国側にとっても、アルバジンの戦いは「反侵略戦争において重大な勝利を得た」⁽⁹⁾歴史的記念碑として、重要な意味をもっている。また、アルバジン攻囲にダウールやソロン（エヴェンキ）などの現地の諸民族が協力したことから、民族団結の象徴という文脈で語られることも多い。たとえば、内モンゴル自治区のエヴェンキ族自治旗にある「鄂温克博物館」では、アルバジン攻囲戦関係の展示がかなりの部分を占めているし、モリンドワ・ダウール族自治旗にあるオープン・ミュージアム「中国達斡爾民族園」には、ほぼ原寸大のアルバジン砦の模型が作られている。このように、アルバジンは今日に至るまで、

族史研究』第5号、2006年、127-130頁、を参照されたい。

(8) なお、アルバジンに関するいま一つの重要文物として、アルバジン軍政官の銀印があり、現在はエルミタージュに保管されているという。

(9) 中国社会科学院近代史研究所『沙俄侵華史』第一巻、人民出版社、1978年、168頁。

ロシア・中国双方の歴史記憶の中で、特別な位置を占める場所なのである。

7月30日

◆スコヴォロディノ地区長と会見

9時、スコヴォロディノ地区政府（Администрация Сковородинского района）で、地区長兼アムール州議会議員のシャリモフ氏（Б. В. Шалимов）と会見。これはエレナ館長のオファーによるもの。アルバジンの歴史的重要性を強調し、行政が博物館にもっと金を出すようはたらきかけてほしいと言われていたので、前の晩に加藤・中見両氏とともに急遽作り上げた原稿を、細谷氏に読んでいただく。シャリモフ氏は、まだ30代と思われる、いかにもテクノクラートといった感じのきびきびした人物である。こちらの話をふんふんと聞いてはいたが、多少とも感銘を受けてくれたかどうかはわからない。その後、政府の向かいにあるビルに開設準備中の博物館を訪問。この街はもともとネヴェルといい、その後何度か変遷があった末に、革命烈士スコヴォロディノの名がつけられたことなどを教わる。13時、スコヴォロディノ発、200km強離れたティンダ（Тында）へ向かって北上する。途中小さな峠を越え、17時頃ティンダ着。ユーノスチ・ホテルにチェックインする。

3 ティンダとスタノヴォイ山脈

7月31日

◆ティンダ

ティンダは、バム鉄道建設の基点の一つとして発展した街である。スタノヴォイ山脈の中腹にあるので、アムール河谷と比べて特に朝晩はかなり冷え込み、長袖のジャケットを着て歩く人の姿が目立つ（この日の最低気温は5℃とのこと）。朝、ホテルを出たところで、スヴェトラナさんが7月28日付の『コムソモリスカヤ・プラウダ』を見せてくれる。中ほどにかなり大きな写真つきで、ブラゴヴェシチェンスクでの記者会見を中心に、われわれの調査旅行に関する記事が出ている。スヴェトラナさん自身の筆になるもので、見出しは“Японцы изучают Албазино”（日本人、アルバジノを調査）。ただ、どういうわけか団長の名が「エナツヨシキ」となっている。話の種にと、早速キオスクで人数分を買い込む。

◆バム歴史博物館

10時からバム歴史博物館（Музей истории БАМа）にてアムール州博物館長会議。エレナ館長が議長をつとめ、一昨日会ったアルバジノのロバノフ館長の姿も見える。われわれにはあまり関係のないことだし、何を話し合っているかもよくわからないので、最初だけ顔を出して失礼し、博物館を参観する。名前のとおり、バム鉄道に関する展示が主である。地図を眺めればわかるように、バム鉄道はこの場所でシベリア鉄道にもっとも接近しているので、まずスコヴォロディノからここまで支線を作って物資を集積し、左右に建設を進めていった。そうしたプロセスが、模型などを用いてわかりやすく示されている。

また、エヴェンキの民具などを展示した一室もあった。

◆スタノヴォイ山脈

12時10分、ティンダ発。スタノヴォイ山脈へ向かう。スタノヴォイ行は元来の計画にはなかったが、せっかくここまで来たのだから、大清帝国最果ての地を一目見ない手はな

いという細谷氏のご意向で、別料金を払うからと運転手を口説きおとしたものである。峠まで100km強の行程である。高度を上げるにつれて、シラカバはほとんどなくなり、カラマツの純林に近くなる。カーブを曲がって視界が開けると、はるかに山稜が望まれる。下方の河谷には、ところどころに金の採掘場がある。

14時頃、峠に到着。道の右手には、色鮮やかに「サハ（ヤクーチヤ）共和国」の標識が立っている【写真6-17】。東方の視界が開け、スタノヴォイの山並みははるかに連なっている【写真6-18】。峠を越えれば、もはやそこは北極海に注ぐレナ川水系の地である。はるけくも来たものと、一同感慨を新たにす。峠の右手はるか下方には、アルダンへ通じる線路が見え、時折ディーゼル機関車がもうもうたる煙を吐き、あえぎあえぎ登っていく【写真6-19】。14時40分頃、ヤナギランの咲き乱れる峠を後にして、ティンダへ戻る。途中ラプリ川（Лапри）の河原で小休止。17時頃、ティンダに帰着。

◆スタノヴォイ山脈と露清国境

われわれが立った峠は、ティンダからアルダンを経てヤクーツクへ抜ける国道56号線がスタノヴォイを越える地点で、まさにネルチンスク条約で定めた往時の露清国境の一角である。ネルチンスク条約は、国境について「……Kerbichi 河の源泉の上にある岩または石の山の頂上から、この山の峰々を経て海に至るまでは両帝国の領土を次のように分つ。即ちこの山の南に発して Sagalien Vla 河に流入する、すべての土地と大小の河川はシナ帝国の領土とし、山の反対側から北に広がる、すべての土地とすべての河はロシア帝国の領土とするが、Vdi 河と、境界として指示された山脈との間にある、海に入る河川と土地は暫く定めまいまにしておく」（ラテン文和訳）⁽¹⁰⁾と述べている。しかし、よく知られているように、条約締結時には双方とも不正確な地図を根拠とするしかなく、現地調査は一切行われなかった。従って、条約にいう「石の山」が何に当たるかについては、古来さまざまな議論がある。

たとえば、松浦茂氏はこれについて、「一般にはスタノヴォイ山脈（外興安嶺）とする説が有力であり、教科書などでも広く採用されている。しかし分水嶺にしかすぎないとする説も存在し、それを無視することはできない」と述べておられる⁽¹¹⁾。しかし、スタノヴォイ山脈の峠に立ち、サハ共和国境の標識を見てあらためて感じたのは、少なくともこの一帯に関する限り、スタノヴォイと分水嶺の関係をあまり複雑に考える必要はないということである。大縮尺の地図を見れば明らかなことだが、この峠の東側では、東西方向に走るスタノヴォイ山脈が、ほぼそのままアムール水系とレナ水系の分水嶺をなし、同時にアムール州とサハ共和国の境界ともなっている。もちろん、実際にはナイフリッジのような明確な一本の稜線があるわけではなく、なだらかな山稜が幾重にも重なりあっているのだから、条約にいう国境、すなわち分水嶺をきれいな一本の線として現在の地図上に描くことは難しいだろう。しかし、スタノヴォイ山脈という名称自体、特定の稜線を指すわけではなく、総称なのだから、大まかな言い方として、国境＝スタノヴォイ山脈と表現することには、問題はないと思われる。

ただし、この峠の西側では、レナ川の支流オリョクマ川の水系がスタノヴォイの南側に回り込んできているため、山脈はもはやアムール水系とレナ水系の分水嶺ではなくなる。従って、条約にいう国境はスタノヴォイから離れることになるが、オリョクマ水系とアムール水系の分水嶺は、必ずしもはっきりした一続きの山稜をなしていないため、かなり複

(10) 吉田金一『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』（註(1)に前掲）、付録457頁。

(11) 松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』（註1に前掲）、28頁。

雑な線とならざるをえない。

一方、東の方をずっと見ていくと、ほぼアムール州とサハ共和国の境界の東端を越えたところで、今度はオホーツク海に直接注ぐウダ川の水系が山脈の南に回りこんでくる。条約では、このウダ川と「境界として指示された山脈」の間の土地が国境未画定として保留されているわけだが、「吉林九河図」等では、アムール水系とレナ水系の分水嶺、つまり現在のスタノヴォイ山脈が、そのままウダ川の南を走るように書かれている。その通りならば話は簡単なのだが、実際には、スタノヴォイはウダ川の南の山脈とはつながっていないので、「境界として指示された山脈」をどこに求めればよいのか、ややこしいことになる。強いていえば、現在のアムール州とハバロフスク地方の境界が、ほぼウダ水系とゼーヤ水系の分水嶺（はっきりした山稜はなしていない）なので、大体その線に沿ってむりやり南側の山脈へつなげるしかなかろう。このように、東西両端の部分ではたしかに複雑な問題があるのだが、少なくとも中間部分については、国境＝スタノヴォイ山脈とする教科書の表現は、おおむね妥当といえるだろう。

8月1日

この日のメインテーマは、ティンダ南郊のペルヴォマイスコエ（Первомайское）村にエヴェンキ人を訪ねることであった。ブラゴヴェ組からはスヴェトラナさんだけが同行。午前中はゆっくり休憩し、13時30分にホテルを出発、まずティンダ駅を見学する。小ぎれいで無機質な駅舎は、いかにもソ連時代の建物という感じである【写真 6-20】。

14時過ぎにペルヴォマイスコエ着、村役場のリュドミラさん、博物館のセルゲイ館長から村の概況について説明を受ける。この村は、ソ連時代の少数民族集住政策によって75年前に生まれたもので、エヴェンキ人はアムール州だけでなく、チタ州やヤクーチヤからも集められたという。総人口は420、エヴェンキ人はうち160人で、他にもいろいろな民族がいる。ちなみに、セルゲイ館長はユダヤ人である。

博物館は小さなものだが、テント（チュム）の模型、毛皮の実物、スキーや橇など種々の民具、彫刻、刺繍、エヴェンキ語教科書など、エヴェンキの生活に関する豊富な展示がある【写真 6-21】。この村では、エヴェンキの民芸品の作り方を子供たちに教え、作品を土産物として売ることを村おこしの方策としており、そのための学校もある。

博物館と学校を見学した後、この村で一番物知りだというアレクサンドラさん（65歳）を訪ね、話を聞く【写真 6-22】。17時頃、ペルヴォマイスコエ村を辞去し、ティンダに戻る。翌日に備えて早めに就寝。

◆アムール州のエヴェンキ人

リュドミラさんによれば、ペルヴォマイスコエに住むエヴェンキ人の姓は Киндыгир、Сологон、Борисов、Макаров、Давыдов、Соломонов、Николаев など。もちろん、最初の2つはエヴェンキ風で、他はロシア風である。小中学校ではエヴェンキ語を教えているが、日常使う人はほとんどいない。エヴェンキ人の中には、トナカイ飼育に従事している人もおり、牧地は州内各地（主に北方山地）にわたっている。狩猟も行われている。

アレクサンドラさんは、1938年にセレムジャ区（Серемджинский район）で生まれた。はじめはDougda（Дугда）、ついでブラゴヴェシチェンスクで教育を受けて会計士となり、ゼーヤ地区で2年間働いた後、1965年に当地に派遣された。孫が2人いて、上の孫は11学年を終え、ティンダの鉄道学校に進学する。この話から、彼女がこの村の建設以来の住民ではなく、いわばインテリとして新たに移ってきた人であることがわかる。彼女の氏族名は Булёт で「筋骨たくましい」という意味である。故郷のセレムジャには、他に Бута、

Одяныなどの氏族がいた。若い頃は氏族外婚の制度があった。「氏族」はエヴェンキ語でテケン(тэкэн)という。「根」の意味である。アイマク(аймаг)という語もあり、「親戚」の意味である。エヴェンキ語は話せる。円錐型のテントはウタン(утан)というが、父親はそれではなく、大きなテント(палатка)に住んでいた。金持ちで、ロシア人の友人を通じて銃・ミシン・粉挽き器などを入手していた。トナカイを飼っていた。他は犬だけで、牛や羊はいなかった。狩猟・漁労も副業として行っていた。男方から女方へ婚資を贈らないと結婚できないので、結婚するためには財産が必要だった。

リュドミラさんとアレクサンドラさんから聞いた内容は大体以上であるが、この日午前中にバム歴史博物館で聞いた話によると、アムール州には、ペルヴォマイスコエの他に、エヴェンキ人の集住する村が2箇所ある。ウスチ・ニュグジャ(Усть-Нюкжа)とウスチ・ウルキマ(Усть-Уркима)で、いずれもティンダの西北にあり、オリョクマ川水系に属する。州内のエヴェンキ人の総人口は約800であるという。

エヴェンキ人は、言うまでもなくロシア極東とシベリアの広大な地域に分散して住んでいるが、アムール州のエヴェンキに関していうと、中国領のエヴェンキ族、とくに根河市のオルグヤ(敖魯古雅)一帯に住むトナカイ・エヴェンキとの関係が想定される。19世紀半ば以前は現在のアムール州一帯はほぼ清の領域だったわけで、彼らの祖先はアムールを越えて自由に往来していたと考えられるからである。

試みに中国側の『鄂温克族社会歴史調査』をひもといてみると、オルグヤのエヴェンキには6つの氏族、①plit'ot'of、②k'altak'ol'of、③solokonof、④kielik'of、⑤solt'oski、⑥kutəlinがあるという⁽¹²⁾。①がБуллёт、③がСологонに対応することは、容易に推測されよう。さらに、同書によれば、solokonof氏族には4つの分枝があつて、その一つが「馬嘎羅夫索羅共」であったというが、これはおそらくМакаров姓と関わりがあるに違いない。この一事をとってみても、ロシア極東や中国東北の先住諸民族について考える場合、現在の国境にとらわれてはならないことが、あらためて痛感される。

8月2日

今日は一気にブラゴヴェシチェンスクまで戻る強行軍のため、4時少し前、まだ真っ暗な中を出発する。ティンダの南の峠で夜が明け、朝靄の中で小休止するが、外の寒さに震え上がる。その後は順調に走り続け、タルダン(Талдан)、シヴァキ(Сиваки)、シマノフスク(Шимановск)を経て、スヴォボードヌイからゼーヤ川沿いの道に入る。途中、ゼーヤ川を見下ろす崖の上で休憩。このあたりでは、アムールよりもむしろゼーヤ河谷の方が広々と開け、絶景である【写真6-23】。斜面にはマツムシソウが一面に咲いている。21時頃ブラゴヴェシチェンスク着。

4 ふたたびブラゴヴェシチェンスクとハバロフスク

8月3日

◆ブラゴヴェシチェンスク教育大学歴史学部展示室

12時、ブラゴヴェシチェンスク教育大学の考古学展示室を見学。夏休み中だが、コピチコ氏のはからいで特別に開けてもらった。ごく小さな展示室だが、石器時代に始まり、靺鞨文化、女真・ジュチェル文化など、時代別にびっしりと文物が並べられている。中国の

(12) 内蒙古自治区編輯組『鄂温克族社会歴史調査』内蒙古人民出版社、1986年、210頁。

銅銭（開元通宝らしきものもある）や陶磁器も目立つ。14-15 世紀の墓葬の再現もある。入口脇には「泰山石敢當」と刻まれた石が無造作に置かれているが、由来はわからない。

◆ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館

13 時、ふたたび郷土誌博物館で記者会見。調査旅行の「成果」と今後の展望を細谷氏に語っていただいた後、あらためて展示をゆっくり見せてもらう。アルバジン砦の模型（写真 6-13 参照）、砦の跡から出土したという釘・焼け焦げた穀物【写真 6-24】などが目を引く。少数民族のコーナーもあり、エヴェンキのシャーマンの衣裳などがある。また、「黒龍江副都統／吉力煩阿巴圖魯／獎賞花翎紀錄一次／吉林長白弟子穆騰額／敬獻／神鐘一口於重壺佰八拾斤／忠義神勇靈佑／関聖大帝廟前序文／……／皇清嘉慶 拾捌年／嘉月吉日敬獻／盛京奉天府／地載門外／小北関／元發鐸爐／金火匠人張士興／丁巳月吉日／成造」という銘文をもつ鐘がある【写真 6-25】⁽¹³⁾。この鐘がもともと現ブラゴヴェシチェンスクの地にあったものだとすると、興味深い資料といえよう。

◆聖母教会

15 時 30 分、聖母教会を訪問。旧カトリック教会を正教会に改めたものである。この訪問は、当地のガヴリール大主教（Архиепископ Гаврил）が、『アルバジンの聖物』に公印を押してわれわれ全員に贈ってくださったので、そのお礼に参上したもの。大主教には会えなかったが、代理の方に謝意を述べて辞去する。長らくお世話になったエレナ館長とも、ここで別れる。ついで新しい主教座教会に向かい、「アルバジンの聖母」の本物を見る。イコノスタスの中ではなく、聖堂内の右手前に独立して安置されている。イコノの通例で、顔の部分だけ残して上から金属の装飾が被せられ、全貌はよくわからないが、よくこれだけきれいに保存されているものと感心する。

21 時過ぎ、ブラゴヴェシチェンスク駅発。夜中にひどい風雨があり、列車の窓から水が漏って荷物がかなり濡れてしまった。

8 月 4 日

16 時頃、ハバロフスク駅着。ふたたびツェントラリナヤ・ホテルに投宿、そのまま休息。

8 月 5 日

◆アルヒーヴ

10 時頃、徒歩でアルヒーヴ着。コーリャ氏が紹介状をロシア語訳してくれたおかげで、今度は無事受け入れてもらえた。しかし、文書の現物の出納は当日では間に合わないとのことで、1 時間ほど目録を見せてもらっただけで辞去する。コレクションの全貌はとてもつかみ切れないが、満洲国の「協和会」関係の文書がかなりあるようだ。このアルヒーヴについては、中見氏が 2005 年 1 月に再訪されているので、いずれ詳細な報告がなされると思う。午後は自由行動。筆者は軍事博物館の野外展示をひとわり参観する。

8 月 6 日

午前中は郵便局で書籍などを発送。モスクワあたりと違って、こちらの郵便局には小包

(13) この鐘については、加藤直人氏による考証（日本大学文理学部人文科学研究所『紀要』第 69 号、2005 年、60-61 頁；本書第 8 章に転載）があり、それによれば、穆騰額は満洲正白旗人で、嘉慶十四（1809）年から同二十四（1819）年まで黒龍江副都統の任にあった。

用の頑丈なビニール袋が用意されており、手続きは意外にスムーズに運んだ。その後ホテルに戻ってコピチコ氏と落ち合い、空港に向かう。翌年の再会を約して機上の人となる。14時10分、離陸。時差帯の設定とサマータイムの関係で、ハバロフスクと新潟では時差が逆転しているため、新潟着もほぼ同じ時刻だった。

むすび

慌ただしくはあったが、とにかくロシア極東の広大さを何がしか実感できた旅だった。地図だけで見ると、一様な土地がはてしなく広がっているようだが、たとえば、ハバロフスクでは日中は蒸し暑く、ノースリーブで歩いている人が多いのに、ティンダではみな長袖を着ているし、ハバロフスク付近では広葉樹が多いのに、北上するにつれてカラマツが圧倒的になってくるといふ具合で、実際の環境は地域ごとに少しずつ異なっている。人文地理の面でも、ハバロフスクでは中国人の姿はほとんど見かけず、むしろ日本との関係が深い印象があったが、ブラゴヴェシチェンスクでは中国パワーが圧倒的で、日本人は珍しい存在である。この地方をめぐってロシア・清朝（中国）・日本の間に展開された複雑な歴史を振り返る場合も、こうした自然／人文地理的環境の多様性に対する十分な理解を前提としなければならないことを痛感する。

【付記】本稿は、『満族史研究』第4号、2005年、239-252頁に「2004年夏アムール紀行―アルバジンとスタノヴォイ山脈」と題して発表した内容に、若干の改訂を加えたものである。写真については大幅に増補してある。

（柳澤明）



写真 6-1 ハバロフスク近郊のゴンチャルカⅥ
遺跡発掘現場



写真 6-2 溥儀が収容されていた旧内務省の建物
(現在は第 3 病院)



写真 6-3 ハバロフスク駅前に立つハバロフ像



写真 6-4 ブラゴヴェシチェンスク市街付近の
アムール河岸



写真 6-5 アムールを行き交う客船と
対岸（中国側）の様子



写真 6-6 スコヴォロディノに近づく、
周囲はタイガの景観となる



写真 6-7 アムール河岸のジャリンダから
対岸の中国領をのぞむ



写真 6-8 アルバジノ村博物館の展示室



写真 6-9 アルバジン砦址から出土したという
砲弾と弾薬入れ



写真 6-10 「海拉爾忠霊塔」と銘のある鏡



写真 6-11 アルバジノースコヴォロディノ間の風景



写真 6-12 アルバジン砦址
(西北角から東面の土塁址を見る)

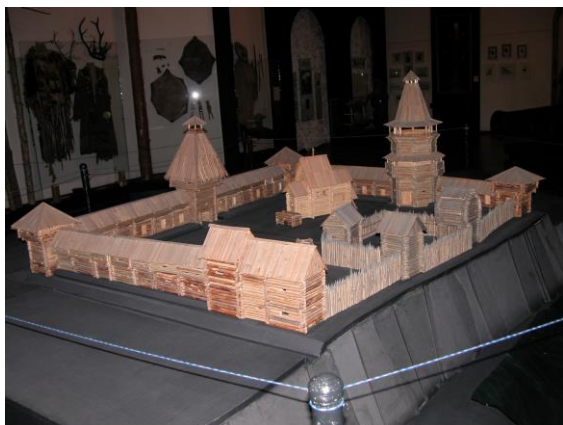


写真 6-13 アルバジン砦の模型
(1682 年以降の状態。アムール州郷土誌博物館)



写真 6-14 ここで 57 人の遺体が発見された



写真 6-15 イコン「アルバジンの聖母子」のレプリカ（アムール州郷土誌博物館）



写真 6-16 「アルバジンの旗」のレプリカ（アムール州郷土誌博物館）



写真 6-17 ティンダ北方、スタノヴォイ山脈の峠上にあるサハ（ヤクーチヤ）共和国境の標識



写真 6-18 峠から東方をのぞむ



写真 6-19 峠の直下をサハ方面へ向かう列車



写真 6-20 ティンダ駅



写真 6-21 エヴェンキ語教科書など
(ペルヴォマイスコエ村博物館)



写真 6-22 アレクサンドラさんを囲んで



写真 6-23 スヴォボードヌー
ブラゴヴェシチェンスク間のゼーヤ川



写真 6-24 アルバジン砦址から出土した
釘・焼け焦げた穀物など



写真 6-25 嘉慶十八年製の釣鐘

第7章

ザバイカル調査 ―ネルチンスクとウラン・ウデー (2005年8月)

はじめに

細谷良夫氏を代表とする「中華帝国の中央と周縁 ―現代東アジアの原型を求めて―」プロジェクトの一行は、2005年夏、ふたたびロシアへ赴いた。今回のルートは、チタ州の州都チタから、ブリヤーチャ共和国のウラン・ウデを経由し、最後はバイカル湖を越えてイルクーツクに至るというもの。中でも最大の目玉は、ネルチンスク訪問である。前年の旅はまさに「アムール上流域調査」と呼ぶにふさわしいものだったが、ネルチンスク付近になると、アムールはすでにシルカと名を変えているし、ウラン・ウデー帯は、もはやアムールではなく、バイカル湖に注ぐセレンガ川の水系に属する。

そこで、今回は、ロシア人が古くからこの地域を指す呼称として使ってきたザバイカルーバイカルの向こうの名をとって、「ザバイカル調査」と呼ぶことにしたい。参加メンバーは前年とほぼ同じで、細谷氏を筆頭とし、江夏由樹、加藤直人、中見立夫という面々であるが、前回不参加の大坊公民氏が加わったことは、細部の計画立案や、ロシア側との交渉をスムーズに運ぶ上で大きな力となった。また、ハバロフスク教育大学のコピチコ氏(B. Н. Копытько)には、今回も準備段階から最後まで、言葉に尽くせないほどのお世話になった。なお、今回の調査に関しては、すでに大坊氏が、美しい写真のたくさん入った紀行をweb上に公開しておられるので⁽¹⁾、なるべく重複を避け、歴史関係の内容に重点をおいてまとめてみたい。

1 ネルチンスクとその周辺

2005年7月25日

前年同様、新潟空港に集合。15時30分発のH8-310便は、ほぼ定刻どおり、現地時間19時20分にハバロフスク空港着。コピチコ氏と、ご子息のコーリャ氏が出迎えてくれる。雨上がりのハバロフスクは蒸し暑く、夕暮れだというのに気温は28℃もあった。コピチコ氏の話では、今年は異常に暑くて、ここ数日の最高気温は30℃を超えているとのこと。おなじみのホテル「ツェントラリナヤ」に投宿。今回は翌朝まで、ごく短い滞在である。40時間近くも列車に乗るので、近くのスーパーマーケットで食糧、水、そしてビールなどを買い込む。

7月26日

9時20分、ハバロフスク駅から急行ノヴォシビルスク行で出発。ピロビジャンなど、なじみになった駅を過ぎて、20時にベロゴルスク着。ここで機関車入れ替えのため、30分ほ

(1) 大坊公民氏のブログ「Samovarの旅」(<http://samovar.sakura.ne.jp/> 2021年9月18日確認)

ど停車する。朝から曇り勝ちで、午後一時雨が降ったが、やがて晴れ上がった。ペロゴルスあたりから、沿線にはカラマツが目立つようになる。

7月27日

8時48分、エロフェイ・パヴロヴィチ駅着。ここがアムール州内の最後の停車駅で、州境で時差帯が変わるので、時計を1時間遅らせる。チタ州に入り、10時にアマザル駅着、しばらく停車【写真7-1】。アマザルとは、言うまでもなく、ネルチンスク条約に規定された国境の解釈をめぐる論争の中で、問題の焦点となった川の名で、線路はここからしばらくアマザル川に沿って続く。17時34分、チェルニシェフスクに停車。ここからしばらく線路はほぼ真南に向かい、やがてシルカ本流に沿って走るようになる。実は、このあたりでシベリア鉄道はネルチンスクのすぐ南をかすめるのだが、停車しないので、いったんチタまで行き、そこから引き返すというプランになったわけである。シルカ川沿いに入ると、沿線には、それまでの森と河谷の繰り返しに代わって、草原が目立つようになってきた。

7月28日

深夜1時17分にチタ着。ザバイカル教育大学（Забайкальский государственный педагогический университет им. Н. Г. Чернышевского）の方々が出迎えてくれた。そのまま、市の中心のレーニン広場の一角にあるホテル「ザバイカリエ」に投宿。わずか数時間の滞在である。

◆ザバイカル教育大学

10時20分、ザバイカル教育大学訪問。「記者会見」に臨んだ後、外事担当学長補佐のワシリエフ氏（Г. Г. Васильев）から大学の概況について説明を受ける。

今回のネルチンスク調査に関して、ザバイカル教育大学が便宜をはかってくれる運びとなったのは、大坊氏がかねてメールのやり取りをしていた、同大学で生物学を専攻するコルスン氏（О. В. Корсун）が仲介の労をとってくださったお陰である。コルスン氏は、本来の専門は昆虫ということだが、ザバイカルの動植物全般に詳しく、ホームページに自分で撮影した野草の写真をたくさん載せているので、趣味を同じくする大坊氏がコンタクトをとってみたところ、熱心に対応してくれたという次第である。そのコルスン氏も同席し、チタ州南部のある山の上で、日本語らしきものが書かれた石を見つけたとあって、写真を見せてくれる。なるほど日本語で、「広島県」とあり、姓名が書かれている。戦後この付近に抑留されていた方が書き残したものに違いない。

ザバイカル教育大学は1938年創立、当初は歴史・ロシア語・物理数学の3学部であったが、現在は12学部4研究所を擁し、学生数12,500人、教職員数約500人という。同席した歴史学部長のクズネツォフ教授（В. Кузнецов）、コスイフ准教授（В. И. Косых）の

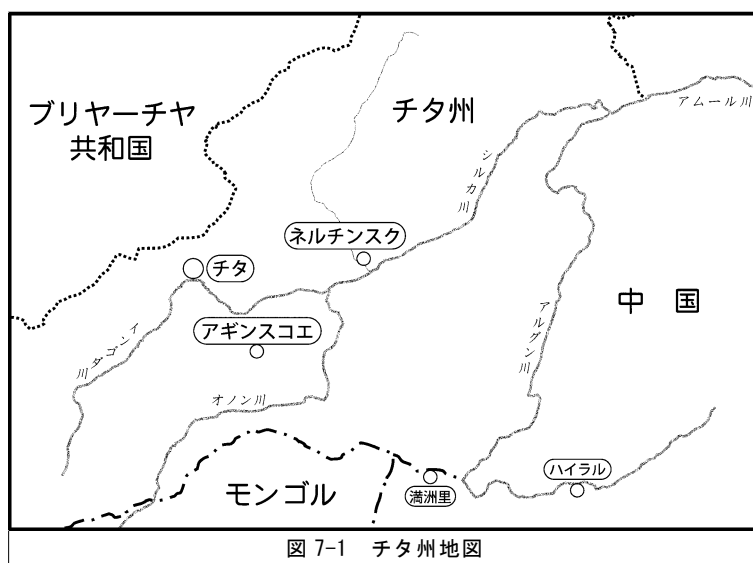


図7-1 チタ州地図

お話によると、日本からの代表团もしばしば訪れるが、ほとんどは日露関係に関わる人たちで、露中関係がらみは初めてとのこと。州内のネルチンスクは、言うまでもなく歴史的に重要な場所であるので、今後機会があれば、日本との共同研究も進めていきたいという。そのお二人の案内で、別の場所にある歴史学部を見学する。1920年代までは女子ギムナジウムだったそうで、当時を偲ばせる内装が残っている。夏休みで大学は閉まっているが、試験の成績が扉に張り出されていて、たくさんの学生が結果を確かめるために集まっていた。

12時40分、ふたたび大学本部を訪れ、第一副学長のカタナエフ氏（И.И.Катанаев）に挨拶する。そのときは気づかなかったが、後でコルスン氏から聞いたところによると、カタナエフというのはエヴェンキ系の姓で、有名なガンティムールの息子のカタナイという人物から出た家柄だという。なるほど、そう言われてあらためて写真を見れば、心なしかエヴェンキ風の顔立ちである。

◆ネルチンスクへ

16時、大学の用意してくれたワンボックス車でネルチンスクへ向け出発。大学からはワシリエフ氏が同行。運転手はバルタ・ナラエフ氏（Б. Нараев）といい、アガ・ブリヤート自治管区出身のブリヤート人である。残念なことに、江夏氏は、列車の中で痛めた腰が悪化し、チタに残留せざるを得なくなった。ネルチンスクへのルートは、チタから M-55 号線を東に 200km ほど走り、そこから右に折れて南下するというもの。丘陵を縫って進む、起伏の多い道である。チタの周辺はだいたい森林で、特にマツが目立ったが、進むにつれて次第に木がまばらになり、草原状を呈してくる。オミナエシやヒエンソウの咲き乱れる丘がいくつもあり、ところどころで止まって写真を撮ったりしていたので、ネルチンスクを見下ろす峠に着いた頃には、もう日が暮れかけていた【写真 7-2】。山稜上には森もあるが、シルカ河谷に続くなだらかな斜面は一面の草原で、ネルチンスクに対して漠然と抱いていた、タイガの中の町というイメージは消し飛んだ。

22時10分、ようやくネルチンスク市街に着く【写真 7-3】。大学からあらかじめ連絡が行っていたお陰で、ネルチンスク地区教育長のニコライ氏（Н. Г. Сахаров）が地区政府の建物で待っていてくれた。そのまますぐに、中心広場の一角にあるレストランで夕食。ニコライ氏と町長のボリス氏ほか数人が同席。ネルチンスクは、2003年に創立350周年を祝ったとのこと（後述）。ネルチンスク地区（Нерчинский район）全体の人口は3.5万人、うちネルチンスクの町に住んでいるのは1.7万人だそうである。しばらく困難な時期が続いたが、ようやく経済も上向きになってきた、という話が印象的だった。ちなみに、日本からの代表团はわれわれが二つめで、最初は領事一行が援助物資の使途調査に来たという。夕食後、町からかなり離れた丘の上にある、もとはピオネールのキャンプだったという施設の中のサウナに案内される。ネルチンスクにはホテルはないが、郊外の団地のような建物の一角が宿泊施設になっていて、4部屋ほどある一ブロックを借り切って宿泊する。

7月29日

◆ネルチンスク地区郷土誌博物館

10時10分、ネルチンスク地区郷土誌博物館（Нерчинский межрайонный краеведческий музей）に向かう。博物館は、地区政府やレストランのある中心広場の一角にあり【写真 7-4】、もとはネルチンスク屈指の大商人であったミハイル・ブーティン（М. Д. Бутин, 1835-1907）の邸宅であった。道を挟んで博物館の向かい側に、屋根にやたらにパラボラアンテナを立てている小さな商店があったが、聞けば中国人の店だという。

こんなところまで進出しているとは、さすがに商魂たくましい。

博物館では、説明を聞きながら、1階の展示室を見学する。展示室の一つである「鏡の間」には、ブーティンがパリから取り寄せたという巨大な鏡が置かれている。展示の内容は、大きくいうと、1)先住民（エヴェンキとブリヤート）に関するもの、2)ネルチンスクの建設と発展に関するもの、3)ブーティン家に関するもの、の3コーナーに分かれていた。先住民関係の展示物は、古い写真やコスチューム、民具などだが、この一帯でエヴェンキ人とブリヤート人の生活圏が重なっていたことが窺われ、なかなか興味深い【写真 7-5】。ネルチンスクの発展史については、旧時のネルチンスク城塞の模型（ネルチンスク条約後のもの）【写真 7-6】や、時代による市街の変遷を示した地図などがあり、大いに参考になった。ただ、「17～18世紀の中国商品」と題したガラスケースには、磚茶などと並んで、下駄や草履など、明らかに日本のものもあり、多少怪しいところがある【写真 7-7】。

ブーティン家関係の古い写真なども数多く展示されている【写真 7-8】。このブーティン家は、18世紀からネルチンスクの有力な家柄だったらしいが、1866年にミハイル・ブーティンが兄とともに「ブーティン兄弟商会」を設立し、製鉄所、製塩所、ワイナリー、多数の金採掘場などを経営し、巨万の富を築いた。彼はネルチンスクの中心街に壮大な邸宅を構えるとともに、教育など地域の振興にも大きな貢献をした。1878年には、サンクト・ペテルブルクから帰国途中の榎本武揚とも会っている。しかし、長期にわたる債権者との争いで事業は次第に傾き、1892年に商会は閉鎖された。ブーティン自身は晩年イルクーツクに住んでいたという⁽²⁾。

◆子供芸術学校

12時過ぎ、博物館を出て、少し離れたところにある子供芸術学校（Детская художественная школа）に案内される。夏休みで生徒はいなかったが、子供たちの作品——水彩画や人形など——が所狭しと並べられていて、校長のナデジダさん（Н. К. Гладкова）が熱心に説明してくれる。

◆ネルチンスク地区長と面会

14時頃、町の中心に戻り、ネルチンスク地区長のペレボエフ氏（А.В.Перебоев）を表敬訪問。細谷団長の挨拶の後、地区長から、目下インフラを整備中であること、今後観光にも力を入れたいことなど、いろいろと話を聞く。

◆ウスペンスキー教会

14時30分頃、博物館のリンマさん（Р.З.Фарманян）の案内で、市街を後にし、ネルチャ川を右岸（西）に渡って、川沿いの道をシルカ川に向かって南下する。川沿いといっても、かなり高台になっていて、対岸のネルチンスク市街を見下ろすことができる。シルカ川を渡り【写真 7-9】、対岸のカリーニノ（Калинино）村にあるウスペンスキー教会（Главная церковь Нерчинского Успенского монастыря）を見学。1653年に、ネルチンスクの起源である小城砦が建設された場所だという。18世紀はじめにウスペンスキー男子修道院が創設され、かつては僧房など多くの付属建築があったというが、いまは1712年建築の石造の聖堂だけが残っている【写真 7-10】。5つの玉ネギ型の小塔をもつ本堂と、鐘楼からなる美しい建物だが、近年補修がなされていないらしく、入口の扉はなくなり、牛の群が入り込ん

(2) ブーティン家の活動については、愛知県立大学「おろしゃ会」会報第10号所載のセルゲイ・ガルキン「ブーチン物語」（<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/~kshiro/orosia11-1.html>）に、詳しい記事がある。

でいた。そこから東に向かってしばらく走り、ウulgチャン（Ургучан）という療養所（サナトリウム）を訪問。地下深くから汲み上げる鉱泉水が売り物ということで、われわれもペットボトルにたっぷり詰め込み、持ち帰ることにする。

そこからネルチンスクに引き返したが、車は市街地で止まらず、そのままネルチャ川に沿う道を上流へと向かう。どこへ行くのかと思ったら、つと切れ込んで河岸の高台に停車。その先の草地で、ニコライ教育長、ボリス町長をはじめ、顔なじみになった面々が、焚き火を起こして待ち受けていた。夕食はここでシャシルイク（バーベキュー）としゃれこもうというわけ。その前に、まず一泳ぎしなければだめだと言われ、恐る恐るネルチャ川に漬かってみる。入ってしまえば、水は心地よい冷たさだが、底が腐葉土？のせいでぬるぬるしていて、足が滑るのが難点である。

◆ネルチンスクの起源と変遷

ネルチンスクの350年―とりわけその前半、18世紀末まで―の歴史は、露清関係の展開と不可分の関係にある。そのことに注意を払いながら、いくつかの文献に基づいて⁽³⁾、ネルチンスクの起源と変遷を簡単にたどってみたい。

1653年秋、エニセイスク軍政官パシュコフ（А. Ф. Пашков）によって派遣された遠征隊の一部が、シルカ川に入り、ネルチャ川との合流点よりやや下流の右（南）岸に小さな砦を築いた。現在ウスペンスキー教会があるあたりで、いまの市街からはかなり離れており、しかもネルチンスクではなくてシルカ砦（またはネリユード砦）と呼ばれていたらしいが、ネルチンスクの人々は、これを町の創始と見なしている。ただし、付近の先住民（ネリユード人）⁽⁴⁾がしきりに敵対的な行動をとったため、早くも翌年、この小城砦は放棄された。

間もなく、あらたにダウリア軍政官に任命されたパシュコフは、沿アムール経営の建て直しを企図して、自ら大規模な遠征に乗り出し、1658年の春から夏にかけて、ネルチャ川の河口近く、本流と分流に挟まれた中州に、あらたな砦を築いた。このネルチンスク砦（Нерчинский острог）が、ネルチンスクという名前の起こりである。しかし、その戦略的重要性にもかかわらず、砦を守る人員の数はわずかで、1670年代を通じて200人に満たなかったという。

1667年、清に投じていたネリユードの首長ガンティムールが、ふたたびネルチンスク付近に戻ってきた。この事件を一つの契機として、露清両国の関係は次第に険悪となり、周知のように、1685年にはアルバジン砦をめぐるついに本格的な武力衝突がおこった。そして1689年、約100隻の兵船と数千の軍勢を伴った清の代表団が乗り込んできて、ネルチンスク条約が締結されることになった。ネルチンスク会議の様相については、吉田金一氏の大著に詳述されているので、贅言を避けるが、清側代表団は、シルカ川南岸に宿営し、会議自体は、シルカ川とネルチンスク砦の間に設置された幕舎で行われたという。条約の調印も、城外のテントで行われた。ただ、会議参加者の残した記録には、ネルチンスク

(3) Артемьев, А. Р. *Города и остроги Забайкалья и Приамурья во второй половине XVII-XVIII вв.*

Владивосток, 1999, с.46-64, Петряев, Е. *Нерчинск: Очерки культуры прошлого*. Чита, 2003（第2版〔初版1959〕）。

(4) ロシア側の当時の記録は、この一帯に住んでいたエヴェンキ（トゥングース）系の人々を、ネリユード（нелюды）と呼んでいる。ちなみに、『エルデニ・イン・トブチ』（蒙古源流）に、チャハルのトゥメン・ジャサクト・ハーンの事蹟として、「ジュルチド〔Jürcid〕、ネリグド〔Neligüd〕、ダウール〔Dagiur〕の三つの言語の種族から貢税を取り」（岡田英弘訳『蒙古源流』刀水書房、2004年、244頁）とあるが、このNeligüdはнелюдに当たるであろう。

砦がネルチャ川の中州にあったことは明記されていないようである。18世紀以降の地図を見る限り、砦の東側の分流はごく細いものなので、注意が払われなかったのかもしれない。なお、条約締結直後に、ロシア側全権大使であったゴロヴィーン（Ф. А. Головин）の指示によって、砦は改築され、面目を一新したという⁽⁵⁾。

条約締結後、ネルチンスクは対清貿易の拠点として一時活況を呈した。当時の貿易路は、ネルチンスクから南東に向かってアルグン川を渡り、大興安嶺を越えてナウン（チチハル）に至るというもので、1675年にネルチンスクを通過したスパファリー大使（Н. Г. Спафарий）も、1693年のイズブラン・イデス（Избрант Идес）も、このルートを通っている。1690年代には、官営隊商がほぼ毎年、このルートを通して北京に送り込まれたので、ネルチンスクには各地から商人と物資が集まり、関税収入が急増した。イデスに随行したアダム・ブランド（А. Бранд）は、ネルチンスクについて、「ここに住むカザークたちは貿易で金持ちになっているが、それは彼らが無税で中国と貿易する権利をもっているからである」と伝えている⁽⁶⁾。

ところが、繁栄は長く続かなかった。1703年に北京に赴いた官営隊商は、モンゴルを経由してセレンギンスクに至るルートで帰国したいと申し立て、清側の同意を取り付けた。これを機に、官営隊商はすべてより近いモンゴル・ルートを通ることになり、ネルチンスクの意義は一気に低下してしまった。それでも、チチハルとの間のローカルな貿易は存続したようで、清側の檔案史料には、ネルチンスクからチチハルに到来したロシア隊商に関する記載が散見する。清政府はこうしたローカル貿易を歓迎せず、1714年（康熙五十三年）、理藩院は、隊商がシベリア総督の証明書を所持していない限り入国を認めないと通達した⁽⁷⁾。しかし、実際には、貿易は規制をかいくぐって続けられ、たとえば方式済『龍沙紀略』は、康熙丙申（五十五）年にチチハルに貿易に来たロシア人が持参した書状に、「一千七百一十六年」と書いてあったと伝えている。記録から明らかなもつとも遅い例では、1727年（雍正五年）、つまりキャフタ条約締結の年に、3グループのロシア隊商（うち一隊は公文書送達为名目）がチチハルに来ている⁽⁸⁾。清側の規制方針にもかかわらず、こうした貿易が存続した経緯については、いろいろと興味深い問題があるのだが、深入りすると長くなるので、別稿に譲ることにしたい。

18世紀前半のネルチンスクは、商工業者や農民の人口が少しずつ増えて、城塞の外にも教会や商店、住宅が広がったものの、上述した貿易ルートの変化もあって、全体としては停滞の時期であった。もともとネルチャ川本流に近くにあった城塞は、川の氾濫でしばしば被害を蒙ったが、補修もろくになされず、1735年頃には、木造の城壁はあちこちで腐ったり倒壊したりしており、ほとんど防衛の役に立たない状態だったという。さらに、1740年代には、伝染病（天然痘）の流行のために、ネルチンスク一帯の人口は激減した（当時、ネルチンスクにはまだ医者もおらず、薬局もなかった）。

なお、1704年には、ネルチンスクの南東約220km、清との国境のアルグン川の近くに「ネルチンスク鋳山」（Нерчинский завод）という官営銀鋳が設置されたが、ネルチンスク

(5) この時の改築にともなって、砦の防御施設はあらためてネルチンスク城塞（Нерчинская крепость）と呼ばれるようになり、周囲を含めた一帯が町（город）となったらしい。

(6) Избрант Идес и Адам Бранд. *Записки о Русском посольстве в Китай (1692-1695)*. Москва, 1967, с.158.

(7) 中国第一歴史檔案館編『清代中俄関係檔案史料選編』第一編、中華書局、1981年、152・153号文書、333-336頁。

(8) 『清代中俄関係檔案史料選編』第一編、209-211号文書、484-490頁。なお、キャフタ条約によって、チチハルの代わりに、アルグン河畔のツルハイトゥが交易場と定められ、税関もツルハイトゥに移設された。しかし、ここでの交易も振るわなかったようである。

の名を冠してはいたものの、行政上はネルチンスクの町とは無関係で、多くの囚人が強制労働のために送り込まれていた。なお、ネルチンスクの周辺には他にも多くの銀鉱が見つかり、さらに19世紀には金も採掘されるようになった。

1750年代になると、「ネルチンスク秘密探検」（Нерчинская секретная экспедиция）なるプロジェクトにともなう、ネルチンスクは活気を取り戻した。このプロジェクトは、シベリア総督ミャトレフ（В. А. Мятлев）の建議に基づくもので、第二次カムチャツカ探検の継承と位置づけられ、アムール水系の探査と、オホーツク海方面への交通路開拓を主たる目標としていた。その本部はネルチンスクにおかれ、もと海軍参事会次席であったソイモノフ（Ф. И. Соймонов）⁽⁹⁾の指揮のもとに、計画は1753年から順次実行に移された。彼はネルチンスクに造船所を設け、また航海学校（Навигацкая школа）を開いて自ら教鞭をとった。この学校では、1755年の開校から1765年の閉校までに約140人が学び、一定の教養と技能を身につけた人材が地域社会に送り出された。また、プロジェクトを支えるため、各地からの移民が奨励された結果、一帯の人口は急増し、多くの農地が開かれた。ネルチンスクの城塞も、この時期に中州北方のやや高い場所に移設された。このように、「秘密探検」は、地域の活性化に寄与したが、本来の目的であったアムール本流の航行は、清側の反発を買ったことから結局実現せず、プロジェクト自体も1765年には中止された。それでも、この間にシルカ川・アルグン川については詳細な探査が行われ、航路図が作られた。

1757年、ロシア政府はブラティシチェフ（В. Ф. Братищев）を北京に派遣し、ロシア船のアムール航行に対する清側の同意を求めた。従来、露清関係史研究の枠組みの中では、ロシア側がこの時期にこうした要求を持ち出した背景について、必ずしも十分な説明がなされていないが、「ネルチンスク秘密探検」と密接に関連していたことは疑いない。「秘密」という名がついているだけあって、総じてこのプロジェクトに関する史料は豊富でなく、踏み込んだ研究も行われていないようだが、19世紀にロシアがアムール北岸を領有するに至る背景を解明していく上でも、今後研究の蓄積が望まれる。

18世紀後半、ネルチンスクは人口・産業・インフラなど、種々の面で着実な発展を見せた。1783年から、ネルチンスクはいくつかの郡（уезд）を合わせた州（область）の中心となった。1792年にはネルチンスクの人口（男女計）は2,500人あまりに達していた。しかし、洪水による被害は、相変わらず悩みの種であった。すでに1787年には、州長官フォン・ガントヴィヒ（К. фон Гантвих）が町の移転の必要性を上申しているが、実際に移転が開始されたのは、1805年のことである。新しい町は、もとの中洲の町の約4km北、ネルチャ川の左岸に作られ、1812年から公式に機能しはじめた。これが、現在のネルチンスク市街の直接の起源である。

7月30日

9時35分、ふたたび博物館を訪れ、前日見る余裕のなかった自然科学系の展示と、2階、3階を参観する。2階は、おおむね革命からソヴィエト時代に関する展示である。3階はもとブーティン家の音楽室だったところで、当時のインテリアの一部が残っていた。また、未展示の「大天使ミハイルのステンドグラス」も見せてもらった。これはミュンヘンで作られたものという。

(9) ソイモノフは、アンナ・ヨアノヴナ女帝の寵臣ピローン（Э. И. Бирон）のために失脚し、1730年代からネルチンスクに住んでいたが、「ネルチンスク秘密探検」後、シベリア総督に就任した。

◆旧ネルチンスクの遺跡

さて、ネルチンスク到着後、こちらから提出した一つの希望は、旧ネルチンスクの遺跡を見学したいということであった。しかし、博物館の方々は、それはネルチャ川の中洲にあったとはいうものの、正確な位置はよくわからないようで、いったんは諦めかけていた。ところが、この日になって、館長のリトヴィンツェフ氏（А. Ю. Литвинцев）が、自分がよく知っているので案内すると言ってくれたので、喜んで車に乗り込む。例のネルチャ川右岸沿いの道路を南下し、中洲の対岸で車を降り、吊り橋を渡って中洲に入る。渡ったところはミハイロフカ（Михайловка）という集落である。牛がたむろしている通りを少し北に歩き、集落をはずれたところで、館長はこのあたりだという。1990年代にアルテミエフ氏の率いる調査団が発掘を行ったのもここだというのが、見たところ何の変哲もない砂地の草原で、遺構らしきものはほとんど残っていない。ただ、少し東よりに小さな城壁状の土盛りがあった。18世紀の稜堡（бастион）の跡だという【写真 7-11】。「ネルチンスク秘密探検」の時期に築かれたものである。とにかくこれが、目に見える唯一の痕跡だった。

◆ガンティムールの丘

市街に戻って昼食後、チタへ向けて帰途につく。ニコライ教育長らの乗った乗用車が先導してくれ、ネルチャ川を渡ってしばらく進んだところで、右手の丘へ登る。「ガンティムールの丘」といい、ネルチンスクの人々は、ここで別れを惜しむならわしなのだという。ヒゴタイなどの咲く草の丘で、ニコライ氏やボリス氏とウォッカで盃を交わし【写真 7-12】、いよいよネルチンスクを後にする。時刻は 13 時 45 分。

◆アギンスキー・ダツァン

帰りは、チタに直行するのではなく、アガ・ブリヤート自治管区のアギンスコエ（Агинское）を経由するルートをとった。シルカ川とシベリア鉄道の北側を並行して走る道路をしばらく進み、シルカの町を過ぎたところで、左（南）に曲がって川を渡る。すでにオノン川との合流点よりも上手なので、シルカ川はインゴダ川と名を変えている。その後、道はほぼ南西に向かって、アガ・ブリヤート自治管区に入り、ハラ・シビリ（Хара-Шибирь）、モゴイトуй（Могойтуй）などの町を通る。モゴイトуйでは、満洲里に続く鉄道の踏み切りが下りていて、長大な貨物列車が通過していった。18 時 20 分、アギンスコエ着。ネルチンスクを出てしばらくは、丘と草原、林と湿地という景観の繰り返しだったが、このあたりになると、草原が大きく開け、やや乾燥した感じになる【写真 7-13】。街にはさすがに、一見してブリヤートという感じの人たちが多い。

アギンスコエに来た一つの目的は、古い仏教寺院（Агинский дацан）を参観することだった。地元のことで、運転手のバルタさんが先に立って案内してくれる。寺の売店でも、試みにモンゴル語で話しかけてみると、なんとなく通じるので、少し嬉しくなる。敷地の奥にある小さな仏堂（弥勒堂 Майтрея дуган というらしい）【写真 7-14】と、修復中の本堂（Цогчен дуган）を見たが、どちらも中に入ることはできなかった。一角にはたくさん僧房があったが、みな木造でコテージ風なのが、いかにもブリヤートらしくておもしろい。時間もおそいので、あまり長居しないことにする。

文献によれば、このアガ寺は、地元有志の寄付を集めて、1816 年に完成した。最初は専門のラマがいなかったが、数年後にモンゴルから招いてきたという⁽¹⁰⁾。興味深いのは、

(10) Нацов, Г. Д. Материалы по ламаизму в Бурятии. Часть II. Улан-Удэ, 1998, с.55-58.

すでに 1764 年に、ザバイカルの仏教の統括者として、キャフタ付近のツォンゴル族出身のダンバ・ダルジャ・ザヤエフ（Дамба Даржа Заяев）が、ロシア政府からパンディト・ハンボ・ラマ（Пандито Хамбо Лама）の称号を授与されていたにもかかわらず、アガ寺は、その直接の管理下ではなく、独自に発展したらしい点である。

街外れのレストラン（庭にモンゴル・ゲルが立ててあった）で夕食後、一路チタへ向かう。道は途中からふたたびインゴダ川とシベリア鉄道に沿うようになり、22 時過ぎ、チタのホテル「ザバイカル」に帰着。

7 月 31 日

◆チタ市街

この日は、コルスン氏の案内で、チタ市街のいくつかの見所を見学した。10 時 15 分にホテルを出発、まず徒歩でチタ州郷土誌博物館（Читинский областной краеведческий музей）へ。自然科学系、人文・歴史系ともなかなか充実した展示で、一々紹介しきれないが、匈奴の城砦址から出土したという龍頭形の礎石？や、遼の城柵のパノラマなどが目を引く。次にタクシーに分乗して「デカブリストの家」博物館（Музей дом декабристов）へ。もとは大天使ミハイル教会（Михайло-Архангельская церковь、1776 年建）といい、チタで唯一現存する 18 世紀の木造建築だという。1825 年の蜂起後、流刑に処せられたデカブリストのうち、7 人がこの付近で暮らしたことから、1985 年に彼らを記念する博物館となった。中には、デカブリストたちの肖像画、日用品などが展示されている⁽¹¹⁾。ちなみに、チタはネルチンスクに比べると遅く開けた町で、1680～90 年代の地図によりやく「筏組み場」（Плотбище）または「村」（слобода）として現れる。1693 年にここを通過したイデスも、「筏組み場の村」と呼んでいる。18 世紀はじめにはチタ砦（Читинский острог）と呼ばれるようになったが、実際には「砦」の名に値するような防御設備はなく、1762 年になっても、人口は 100 人程度だったという⁽¹²⁾。都市として本格的に発展するのは、19 世紀以降のことである。

◆極東共和国政府の建物

午後、ふたたびコルスン氏の案内で、旧極東共和国政府の建物を見に行く【写真 7-15】。その後、加藤・中見両氏は軍事博物館に回り、大坊氏と筆者はコルスン氏の自家用車で南郊の森に向かう。ネルチンスクの草原とは一味違う花々が咲き乱れ、夢中で写真を撮る。周りではときどき、ナキウサギが甲高い声で鳴き交わしていた。

夕食後、22 時 30 分にホテルのロビーに集合、駅に向かう。0 時 45 分、ブラゴヴェシチェンスク発モスクワ行き列車でチタを出発。

2 ウラン・ウデとバイカル湖東岸

8 月 1 日

◆ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所

(11) 流刑地でのデカブリストの状況については、次の論文に詳しい記述がある。佐保雅子「東シベリアのデカブリスト」中京大学社会科学研究所ロシア研究部会編『東シベリアの歴史と文化』成文堂、2005 年、65-94 頁。

(12) Артемьев. Городаиостороги Забайкальяи Приамурья во второй половине XVII-XVIII вв.（前掲註(3)参照）с.83-85.

7時10分、ペトロフスク・ザバイカリスキーに停車。ここがチタ州内最後の停車駅で、間もなくブリヤーチャ共和国に入るので、時計をまた1時間遅らせる。

9時40分、ウラン・ウデ着。中見氏の旧知で、日本にも滞在していたことのある科学アカデミーのスレンハンダさん（С. Сыртыпова）が出迎えてくれた。彼女の案内で、駅から程近いホテル「サガン・モリン」にチェックイン。

休憩、昼食の後、ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所（Институт Монголоведения, Буддологии и Тибетологии СО РАН）を訪問。駅やホテルがあるのは

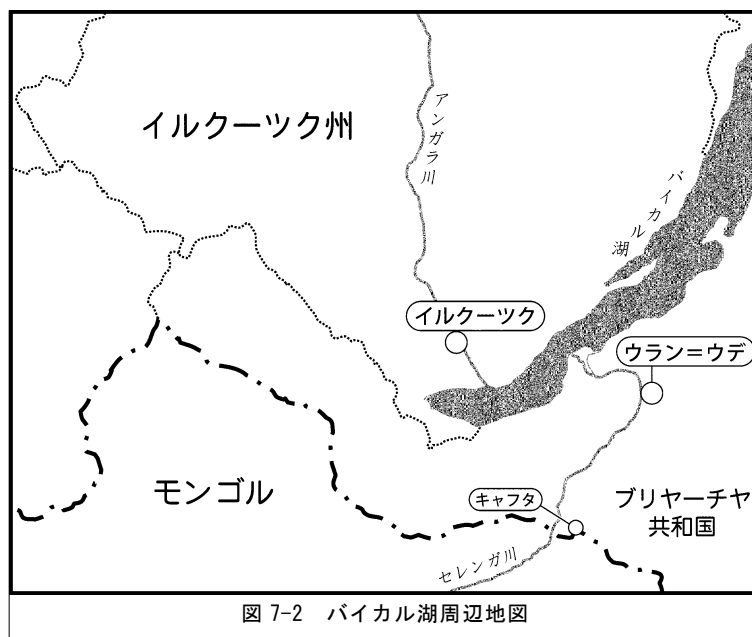


図 7-2 バイカル湖周辺地図

ウダ川の右岸（北）側だが、研究所は左岸（南）側で、やや離れたところである。ちなみに、ウダ川を渡る橋は、この川がセレンガ川に注ぐ付近にあり、橋の東（上流）側に、1665年にウディンスク砦が築かれた跡地がある。道路からでもかすかにそれらしい様子が見える。数日の間に何度も通りかかったのだが、残念ながら下りて見分する暇がなかった。

15時10分、研究所に到着、まず所長のバザロフ氏（Б. В. Базаров）に挨拶する。以前日本でお目にかかったことがある。スレンハンダさん、ヴァンチコワさん（Т. П. Ванчикова）を交えてしばし歓談し、研究所の活動状況などについて話を聞く。その後、別棟の図書館を見学する【写真 7-16】。まずヴァンチコワさんが、いくつかのカタログを前に、所蔵資料の概要を説明してくれる。それによると、ジャムツァラーノ（Ц. Ж. Жамцарано）をはじめとする政治家や宗教関係者の個人フォンドのほか、一般的な文書資料として、19世紀末～20世紀のブリヤートのフォークロア、寺院と政府機関との往復文書、20世紀はじめの民族主義運動などのフォンドがあるという。ついで地下の書庫へ案内される。これも旧知のツイレンピロフ氏（Н. В. Цыремпилов）たちが、あらかじめ資料をいくつか出して待っていてくれた。チベット語の経典などに交じって、モンゴル文キャフタ条約【写真 7-17】、『異域録』のモンゴル語訳などが目を引く（後述）。図書館を出て購買部を覗いた後、研究所を辞去し、やはりスレンハンダさんの案内で、郊外のゲル・レストランで夕食。20時50分、ホテルに帰り着く。

◆モンゴル学・仏教学・チベット学研究所図書館の所蔵資料

この図書館所蔵のモンゴル語写本・版本については、ツイレンピロフ、ヴァンチコワ両氏による詳細なカタログが2004年に東北大学から出版されており⁽¹³⁾、下に紹介する資料

(13) Tsyrempilov, N., Vanchikova, T. (compiled and edited), *Annotated Catalogue of the Collection of Mongolian, Tibetan and Buddhist studies of Siberian Branch of Russian Academy of Science, Center for Northeast Asian Studies*, Tohoku University, Sendai, 2004.

も、このカタログに登録されている。

上述したように、いくつか見せてもらった資料の中で、筆者がもっとも関心を惹かれたのは、キャフタ条約のモンゴル語本（上記カタログ p.123 の 399）であった。これは、全 38 葉（ただし、実際には丁づけの仕方に不統一があり、厳密な数ではない）からなる袋とじの檔冊である。表紙には満文で、中央に monggo/hergen i（以上は細字で割注式に書かれている）juwan hacin i kooli bithe. と、また右端に...（残欠）...uwan biyade monggo jurgan ci benji...（一部欠）oros? kooli?（2 語不鮮明）bithe とある。本文はすべてモンゴル文で、2 つの部分に分かれており、前半は理藩院からハルハ郡王ダンジン・ドルジに送られた文書（雍正五年十月十二日付）である。

この文書は、同年六月二十九日付の議政の議奏（批示は「依議」）の内容を通知するもので、骨子は、ロシアとの間で国境を定めたので、ハルハの者たちが越境して騒動を起こさないよう、厳に取り締まることを命ずるものである。後半はキャフタ条約の本文で、10 箇条しかないが、それは通行条約文の第 11 条——代表者名や調印日を記したいわば「後書き」の部分——を欠くからである。印章は押されていないようなので、もちろん理藩院からダンジン・ドルジに送られた原本ではなかろう。字体等から見て、新しいものではなく、条約直後に各地に配布されたものの一つかと思われるが、この写本自体が元来どこにあったのかを窺い知る手がかりは見出せない。

いずれにせよ、ブリーチャーにあったとは考え難いので、モンゴル（ハルハ）のどこかで採集されたものではなかろうか。内容から見ても、この檔冊は種々の意味で興味深い問題を含んでいる。中でも気になるのは日付の問題で、檔冊に記された議奏の日付（六月二十九日）が誤りでないとすると、それは 1727 年 8 月 16 日（ユリウス暦では 8 月 5 日）に当たる。この時点では、ブラ条約はまだ調印されていない。また、理藩院文書の日付である十月十二日の時点でも、ブラ条約を組み込んだ全 11 箇条のキャフタ条約に関しては、テキストの最終確定をめぐって双方の間になお折衝が続けられており、条文交換は行われていないのだが、それにもかかわらず、清政府は現地モンゴル人に対して、キャフタ条約の内容を遵守するよう命じていたことになる。また、従来キャフタ条約の同時代のモンゴル語テキストというものは寡聞にして知らないで、その意味でもこの檔冊は貴重である。ただし、ブラ条約に関しては公式のモンゴル語条約文が存在するのだが、ロシア側の公刊した『露中条約集』⁽¹⁴⁾ 所載のテキストと対照してみると、この檔冊の該当部分（第 3 条）とはかなり異なっている。こうした点も、今後追究する価値があるだろう。

いまひとつ興味深かったのは、モンゴル語訳『異域録』（カタログ p.43 の 110）である。これも冊子体で、表紙には“Путешествие Тульшени по Сибири / I Манчжурский текст / II Монгольский текст”とあるが、後補されたものであろう。本体 1 葉目の裏には、書きかけの地図（異域録輿図を写そうとしたもの）があり、2 葉目からは満文テキストである。冒頭行に“lakcaha jecen de takūraha babe ejehe bithe dergi debtelin”（異域録上巻）とあり、その後続く文字をざっと見た限りでは、通行の『異域録』満文本の序と異なるところはない。25 葉目にモンゴル語で“yaġar orun u jiruy”（地図）とあるが、文字だけで地図自体はない。次の葉からモンゴル文テキストが始まり、満文からのほぼ忠実な訳と思われるが、行間の随所に修正の書き込みがある。時間の関係で全体を確認していないのであるが、分量からみて、全訳とは考えられない。『異域録』の蒙文本というものは従来知られていないから、これはもともと満蒙合璧であったものを筆写したのではなく、おそらく満文テキストを筆写した人物が、それをモンゴル語に訳したのであろう。修正の書き込みが見られる

(14) Министерство иностранных дел. *Сборник договоров России с Китаем, 1689-1881*. СПб., 1889.

ことも、そのことを裏書きするように思われるが、もちろん、さらに精査しなければ明確な結論は出せない。

他にもいろいろ見せてもらったのだが、とにかく時間がなくてゆっくり調べることができず、残念でならない。次の機会に期したい。

8月2日

◆ザバイカル諸民族民族誌博物館

9時20分、ホテル発。今日はスレンハンダさんとツイレンピロフ氏の案内で、郊外のザバイカル諸民族民族誌博物館（Этнографический музей народов Забайкалья）を見学した後、バイカル湖東岸を訪れる計画である。

民族誌博物館は、ブリヤート共和国文化庁が運営する野外博物館で、広大な敷地の中に、先住民やロシア人のさまざまな住居・建築物が展示されている。エヴェンキの円錐型テント（чум）も目に付くが、とくに印象的なのは、ゲルを模して八角形（六角形の場合もあるらしい）に組んだブリヤートの丸太小屋である【写真 7-18】。モンゴル様式とロシア様式の折衷ともいえるこうした住居が、いつごろから作られ始め、どのように変遷していったのか、機会があればもう少し探求してみたいものである。また、同じブリヤートの住居でも、四角形の小屋で、中の家具だけがブリヤート風のものとか、普通のフェルトのゲルもある。そのほか、初期のロシア人の住宅、流刑囚を泊める留置所のついた宿場、古儀式派（старообрядцы）の村などがある⁽¹⁵⁾。いずれも外観だけでなくインテリアも整えられていて、中に入れる建物もある。

総じてなかなか充実した展示だが、平日のせいか訪れる人は少なく、閑散としていた。ゆっくり見学したかったが、先が長いので、適当に切り上げてふたたび車中の人となる。

◆バイカル湖東岸

バイカル湖に向かう M-55 号線は、大体セレンガ川左岸に沿っているが、われわれの目指す湖岸リゾートは右岸側にあるので、途中で右折し、川を渡ることになる。ところが、河岸まで来ると、なんと橋がない。橋脚は川の中に立っているのだが、上の道路は空中でぷつぷつと切れたまま、つながっていないのである。聞けば、予算がなくて工事が打ち切られたらしい。もちろん、川岸には平底の渡し船が待っていて、10台ほどの車を載せてピストン輸送をしている【写真 7-19】⁽¹⁶⁾。

14時15分頃、エンヘルク（Энхэлук）付近の湖岸に到着。朝から曇りがちで、ときどき雨も降っていたのだが、この頃からすっかり晴れ上がり、すばらしい眺望である。ただし対岸は見えない。湖岸はずっと小石交じりの砂浜が続き、水着を着た人たちが思い思いに寝そべったり泳いだりしていて、日本の海水浴場のような【写真 7-20】。「海の家」みたいなものもあり、名産のオムリ（омуль）のフライなどが食べられる。しばし泳いだりボートに乗ったりして遊んだ後、17時15分に帰路につく。途中夕食をとって、21時頃ホテルに帰着。

8月3日

8時40分、スレンハンダさんとともにホテルを出発、郵便局を経て、10時20分にふた

(15) ザバイカルの古儀式派は、セメイスキエ（семейские）と総称され、18世紀にポーランド方面から移住してきたらしい。宮崎衣澄「シベリアの古儀式派——アルタイ、ザバイカルを中心に——」（『東シベリアの歴史と文化』〔注 11 に前掲〕228-247 頁）参照。

(16) その後来日したツイレンピロフ氏によると、この橋は現在では開通しているとのことである。

たびモンゴル学・仏教学・チベット学研究所を訪れ、バザロフ所長と会談。この日の話は、来年キャフタ方面を訪問する計画についての打ち合わせが主だった。

◆イヴォルギンスキー・ダツァン

研究所を後にし、やはりスレンハンダさんのアテンドで、西郊のイヴォルギ寺（Иволгинский дацан）に向かう。12時過ぎに到着。この寺は、全ロシアの仏教教団の長である第24代パンディト・ハンボ・ラマ、ダンバ・アユシェフ（Дамба Аюшеев）の座所である。文献によれば、ブリヤートの仏教は、1727年のブラ条約（キャフタ条約）締結以前は、独立した組織をもっていたわけではなく、チベット、モンゴルの仏教界と深く結びついていた。しかし、条約後、ロシア政府は、国境をまたぐラマの往来を抑えるため、独自の教団組織を育成する方針をとる。1741年、皇帝エリザヴェータは、勅令によって仏教を「公認」とするとともに、公認ラマの定員を150とし、その全員にロシア帝国への忠誠を誓わせた。さらに1764年、エカテリーナ2世の治世に、ザバイカルの仏教を統括するパンディト・ハンボ・ラマの職位が設けられたことは、前述の通りである。初代パンディト・ハンボ・ラマとなったダンバ・ダルジャ・ザヤエフは、若い頃にモンゴルのダー・フレー（庫倫）とラサのゴマン学堂で学んだといわれ、座所はキャフタ近傍のツォンゴル寺（Цонгольский дацан、別名 Хилгантуй дацан）にあった。その後歴代の座所はしばしば変遷し、現在のイヴォルギ寺は、1946年にパンディト・ハンボ・ラマの称号が復活した後にあらたに建立されたものである⁽¹⁷⁾。寺そのものは、草原の中に大小さまざまな堂宇や、例によってコテージ風の僧房が立ち並び、色合いは美しいが、一部は工事中で、何となく雑然とした感じである【写真7-21】。一つ一つの建物の名前や由来について詳しく聞く時間はなかったが、現在50人ほどのラマと150人ほどの学生がおり、なかにはハカス、カルムイク、トゥヴァ、ヤクートの出身者もいるという。ダラムサーラから来たチベット僧や、モンゴルから来た人もいるとのこと。

◆ブリヤーチャ歴史博物館

門前の小食堂で昼食をとった後、15時頃帰路につく。途中、有名な匈奴の環濠集落（городище）址の側を通るが、時間がなく見学できなかった。16時頃、市内に戻ってブリヤーチャ歴史博物館（Музей истории Бурятии им. М. Н. Хангалова）を訪問。オチロワ館長（Ц. В. Очирова）から概況の説明を受けた後、まず特別展「茶の道」（Путь чая）を参観。「茶の道」といっても、貿易ではなく、茶の伝播した東洋諸国の芸術がメインテーマらしい。時間がないので急いで切り上げ、常設展を見る。3階は仏教とチベット医学関係、2階はブリヤート史関係だが、とくに2階には、古い文書や写真の展示が多く、筆者にとっては興味深かった。複製もあるが、1728年のキャフタ条約交換直後にセレンギンスクから出されたブリヤート人の越境禁止等に関する文書【写真7-22】、キャフタ貿易に関する1739年の勅令（印刷）、ブリヤートの族長任命に関する1740年の勅令などは、紙質や印章からみてオリジナルらしい。急いで何枚か写真を撮らせてもらう。そのほか、「ザバイカル・ステップ議会」（Забайкальские Степные Думы）の議員たちの写真、1891年にこの地を巡行したニコライ皇太子とブリヤートの有力者たちが写った記念写真なども展示されていた。

18時30分、市内のレストラン“Модерн Номад”（新遊牧民）で、ヴァンチコワさん、スレンハンダさんを交えて夕食。ウランバートルに本店があるという洒落た店で、大変な

(17) Чимитдоржин. Г. Г.: *Институт Пандито Хамбо Лам 1764-2004гг.* Улан-Удэ, 2004.

賑わいだった。その後、レーニン通りの歩行者天国を散策。モンゴル領事館、共産主義無名戦士の碑などを見る。22 時、まだ明るさの残る中、ウラン・ウデ始発の 125 番列車でイルクーツクに向け出発。

3 イルクーツク

8 月 4 日

◆イルクーツク市内

イルクーツクでは、とくに現地の研究機関と連絡をとることもなく、踏み込んだ調査は行わなかった。なるべく簡潔に書くことにする。6 時 15 分、イルクーツク到着。パートル通りのホテル「アンガラ」にチェックイン。午前中は休息に当て、ホテル内の旅行会社のオフィスで、翌日のバイカル湖ツアーを予約する。往復の車と、貸し切り船での 1 時間の湖上遊覧を含めて、5 時間で計 5,500 ルーブルというお値段である。13 時、ホテル発、レーニン通りのピザ店で簡単に昼食を済ませた後、徒歩でアンガラ川へ向かう。河岸に出ると、アレクサンドル 3 世の像、旧イルクーツク総督府の白い建物（белая дома）などがある（現在はイルクーツク大学の施設）。ついで、近くにあるイルクーツク州郷土誌博物館歴史部（Иркутский областной краеведческий музей: Отдел истории）を見学。エヴェンキ、トファラル、ブリヤートの服装や民具、初期のロシア人の武器や服装、黒貂の毛皮、イルクーツクの発展史に関する文書のコピーや写真などが展示されている。15 時 40 分頃、博物館を出て、思い思いに本屋などを回る。ホテルでふたたび集合して夕食をとり、それぞれの部屋に引き取る。

8 月 5 日

8 時 25 分、旅行会社差し回しのマイクロバスで出発。前日ツアーを予約したときに、カウンターで応対してくれたナデーシャさんが、自らガイドとして同行。湖畔のリストヴァンカ（Листвянка）までは、起伏などお構いなしに、ほぼ直線状に森を貫く道である。道々、イルクーツクの現況、バイカル湖の概況などを説明してもらう。9 時 20 分、湖畔に到着、アンガラ川流出口を一瞥した後【写真 7-23】、バイカル湖博物館（Байкальский музей ВСФ СО РАН）を大急ぎで見学。生きたバイカルアザラシに初めてお目にかかる。

10 時、小さなクルーザーに乗り込み、湖上遊覧に出発。湖岸に沿って北東に向かい、また戻ってくるというルートである。予想はしていたが、西岸は切り立った崖が続き、対岸のセレンガ河口一帯の湿地と砂浜という景観とは対照的である【写真 7-24】。湖岸に戻って土産物などを見た後、11 時 20 分、リフトで湖岸の展望台に上がる。空気がかすんでいて、とても対岸までは見えない。

13 時頃、湖岸からイルクーツク方面へ少し戻ったところのアンガラ河畔にある木造建築博物館「タリツィ」（Музей Тальцы）に到着。ウラン・ウデ近郊の野外博物館と似たようなものだが、17 世紀のイリムスク砦（Илимский острог）の門塔と城壁の一部がそっくり移築されているのが圧巻である【写真 7-25】。その他、例によってブリヤートの八角形の丸太小屋などもある。14 時 35 分、中央市場の前で車を降り、買い物などをしながらホテルに戻る。18 時 30 分、ホテル近くのレストランで夕食。レーニン広場一帯を散策しながら、21 時頃ホテルに戻る。

8 月 6 日

7時55分、タクシー2台に分乗して空港に向かう。10時50分、離陸。飛行ルートは、途中までほぼインゴダ、シルカ、アムールに沿っているので、オノン、アルグン、ゼーヤ、ブレヤなどの河流を確認することができた。驚いたのは、一面の森林の中に、灸を据えたように点々と巨大な火災跡があることで、中にはまだ盛んに煙を上げているところもある。日本でもときどき話題になるが、その規模の大きさを実感する。15時20分、無事に新潟空港に到着。さすがに蒸し暑さがシベリアとは違う。ここで解散し、それぞれに帰途につく。

むすび

短期間であちこち駆け回ったので、全体を簡潔に総括することは難しいが、とくに印象に残ったことを挙げてみると、まず、ネルチンスクを含むシルカ河谷一帯が、想像以上にステップ的な景観を示していたことが、一つの驚きであった。前年訪れたアルバジンの周辺が基本的にタイガであったのとは、劇的なコントラストである。こうした自然環境の変化が、おそらくはトゥングース的文化とモンゴルの文化の間の遷移とも、大きな意味で対応しているのだろうと感じられた。

また、ネルチンスクが、ロシア人のザバイカル進出の初期においては、政治・経済の両面で中核的な位置を占めていたにもかかわらず、その後大きく発展することなく、こじんまりした町として現在に至っているのはなぜかということも、考えさせられた。その一つの要因は、前に触れたように、やはり対中国貿易拠点の変化に求められるだろう。18世紀以降になると、ザバイカル東部の主要な産業は、むしろ金銀の採掘をはじめとする鉱業に移行していくが、それはネルチンスクの町自体にはさしたる潤いをもたらさなかった。その理由についても考えてみる必要があるであろう。

一方、ブリヤーチャでは、常識に属することかもしれないが、八角形の丸太小屋とか、チベットやモンゴルのものとは微妙に雰囲気の違い寺院とか、越境を禁止する官庁の通達などを見るにつけ、ブラーキャフタ条約による国境画定が、ブリヤーチャという「地域」、そしてブリヤートという「民族」の形成の決定的な契機となったことを、あらためて認識させられた。

【付記】本稿は、『満族史研究』第5号、2006年、85-105頁に「2005年夏ザバイカル紀行―ネルチンスクとウラン＝ウデー」と題して発表した内容に、若干の改訂を加えたものである。写真については大幅に増補してある。

（柳澤明）



写真 7-1 シベリア鉄道・アマザル駅



写真 7-2 チターネルチンスク間の風景。
この丘を下るとネルチンスクがある。



写真 7-3 ネルチンスクの街外れの家並み



写真 7-4 ネルチンスク地区郷土誌博物館
(旧ブーティン邸)



写真 7-5 エヴェンキ人の魚皮製上着（右）と
ブリヤート人の上着・長靴（左）



写真 7-6 旧ネルチンスク城塞の模型



写真 7-7 17～18 世紀の中国商品？



写真 7-8 大商人ミハイル・ブーティン
(後列向かって左)



写真 7-9 ネルチャ川合流点付近のシルカ川
(上流から下流をのぞむ)

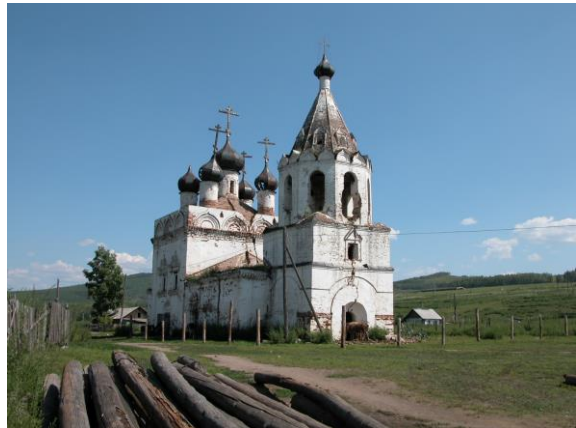


写真 7-10 シルカ川南岸にある 1712 年建築の
ウスペンスキー教会



写真 7-11 旧ネルチンスクの稜堡址（18 世紀）



写真 7-12 ネルチンスク西郊の
「ガンティムールの丘」にて



写真 7-13 アギンスコエの街並みをのぞむ



写真 7-14 アギンスコエのダツァン

（仏教寺院）の弥勒堂



写真 7-15 チタの旧極東共和国政府の建物



写真 7-16 ウラン・ウデの科学アカデミー図書館

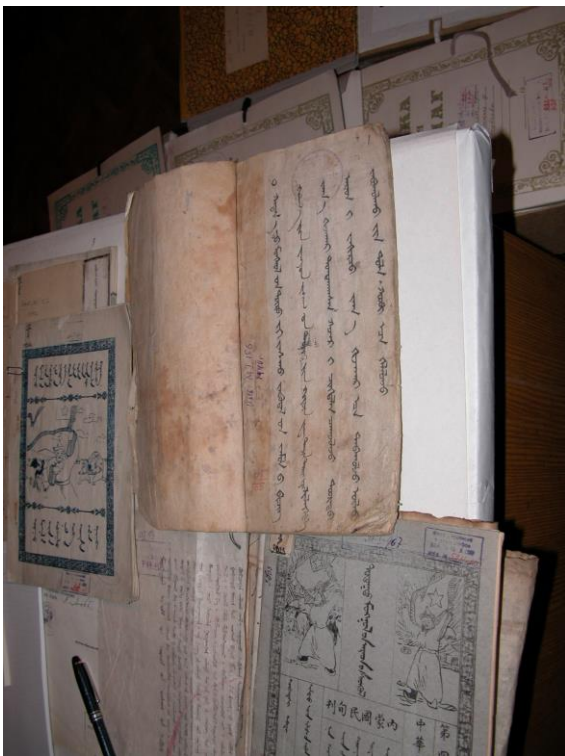


写真 7-17 モンゴル文キャフタ条約

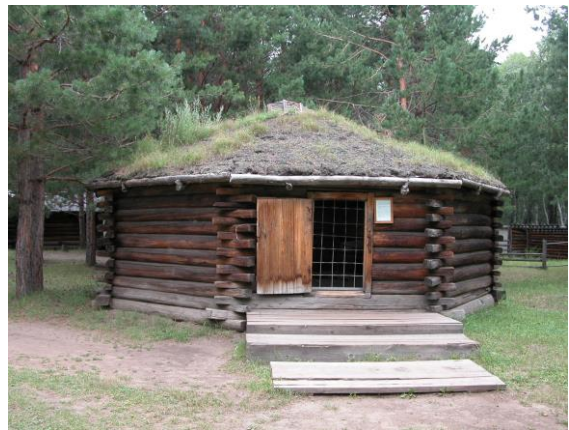


写真 7-18 ブリヤート人のゲル型丸太小屋
（ザバイカル諸民族民族誌博物館）



写真 7-19 ウラン・ウデ・バイカル湖間の
セレンガ川の渡し場



写真 7-20 バイカル湖東岸・エンヘルク



写真 7-21 イヴォルギのダツァン（仏教寺院）

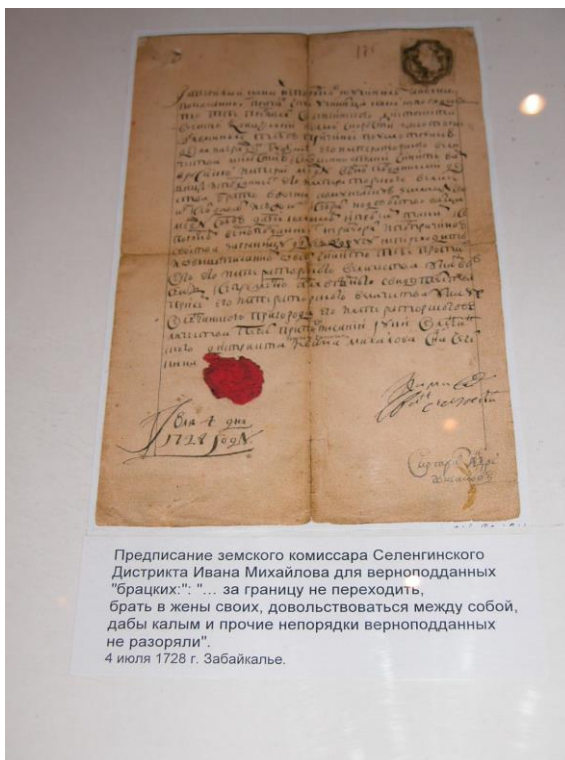


写真 7-22 ブリヤート人の清領への越境禁止等に関する 1728 年の文書（ブリヤーチヤ歴史博物館）



写真 7-23 バイカル湖・アンガラ川流出口付近



写真 7-24 バイカル湖西岸の崖



写真 7-25 移築されたイリムスク砦の門塔（木造建築博物館「タリツィ」）

第 8 章

ブラゴヴェシチェンスクの鐘 —江東六十四屯の遺物をめぐって—

はじめに

太平天国の活動による疲弊と第二次アヘン戦争によって、清朝は外交交渉の面でも弱体化し、1858 年には、派兵せず条約改正交渉だけに参加したロシアに対してかなりの領土割譲を含む条約の締結を余儀なくされた。^{アイフン}璦琿条約である。17 世紀後半に締結されたネルチンスク条約によって画定された露清国境は、南に大きく変更され、基本的にアムール川（黒龍江）がその役割を果たすことになった。

しかしながら、ロシア領となったアムール川左岸に、旗人の入植者を含めて、そのまま多くの人々が農業などを生業として住み続けた。これらの遺留民の居住する地は、条約によってアムール川右岸に移された璦琿城からみて、黒龍江東岸に位置するので、「江東六十四屯」（この屯数の当否について今は問わない）と呼称された。

1900 年 7 月、義和団に対処するため出兵したロシア軍によって、それら「江東六十四屯」の旧清朝所属の住民は、その大部分がアムール川右岸すなわち清朝領内に退去させられるか、または殺害されるという事件が起こった。中国ではこれを「江東六十四屯惨案」と呼び、対ソ戦略、愛国主義、そして国威発揚の装置として用いてきたが、今までその実態はほとんど不明であった。

筆者は、2004 年 7 月 23 日より 8 月 6 日まで、ロシア極東の清朝関係史料調査を実施した。その結果、現在「江東六十四屯」地区が所属するアムール州の州都ブラゴヴェシチェンスクにおいて、その関係資料をいくつか知ることができた。以下はその概要である。

1 ブラゴヴェシチェンスク教育大学考古学博物館

アムール川をはさんで、中国黒龍江省黒河市をのぞむブラゴヴェシチェンスクはアムール州の州都であり、現在でも中ロ貿易の重要な拠点として位置づけられている。ブラゴヴェシチェンスク教育大学は、同地における数少ない高等教育機関のひとつであり、考古学講座を有している関係で 2 階に考古学博物館が設けられている。同博物館は、25 m²ぐらいの部屋一室しかなく「陳列室」と言った方がよいかもしれない。

博物館の入口には、高さ約 80 cm の白色の花崗岩を用いた石敢當が置かれている。その表面に漢字を用いて「泰山石敢當」と刻されている。「石敢當」とは、道の辻などに設置される小型石碑で、現在でも中国各地、我が国でも沖縄県などにみられる風習である。収集地などの記載はなく、説明もなされていないので詳細な点は不明であるが、アムール州内、ブラゴヴェシチェンスク近郊からもたらされたもののようである。基本的に石材の確保および刻字には多額の費用を要したと思われるので、おそらく「江東六十四屯」、とくに璦

琿条約によるアムール川右岸移設以前の琿琿城等の大屯の街角に置かれていたものであろう。その他、展示物の中に 19 世紀後半のものと思われる中国陶磁がいくつかある。これらの陶磁も詳細については解説がなされていないが、ブラゴヴェシチェンスク近郊から出土したもので、おそらく「江東六十四屯」地区からもたらされたものであると考えられる。

2 ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館

ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館は、自然、歴史、文化を総合的に展示するアムール州を代表する博物館である。この博物館のメインは露清外交の出発点となったアルバジン攻防戦の遺物展示である。それは、同攻防戦のもつ歴史的意味、そしてその結果締結されたネルチンスク条約に対する極東ロシア人の意識、すなわちロシア人が先に無主の地に進出したのに清朝がそれを阻害したという考えがここにあらわれている。今回、軍事管制区にあるアルバジン城、現在のアルバジノ村への入境が特別に許可され、実際に同地で調査を実施した。そのことについては、本書第 6 章、柳澤明「アムール上流域調査 ―アルバジンとスタノヴォイ山脈―（2004 年 8 月）」を参照いただきたい。

さて、同博物館の 1 階展示室から 2 階展示室へと向かう階段下に、高さ 80 cm ほどの鉄製の鐘が置かれている。説明や解説などはなにもなく、どういう経緯でこの鐘が博物館に所蔵されるようになったのかはあきらかではない。その鐘の銘文は以下のようなものである（□…部分は判読不明部分）【写真 8-1】。

黒龍江副都統
吉力頗阿巴圖魯
獎賞花翎紀錄一次
吉林長白弟子穆騰額
敬献
神鐘一口於重壹佰八拾斤
忠義神勇靈佑
関聖大帝廟前序文
盖聞
天地無迹感而遂通

至聖維靈求之斯應況
関聖大帝 光赫赫在
人身目者哉
弟子
自登仕以來屢蒙
皇恩歷抵顯宦皆
神功默佑之力也
豈敢復有希冀哉但
方蒞任他郷而二親
迫在桑榆爰日之誠
寔難自己為此叩祈

□□黙佑

弟子

□父（父？）母同登期願共躋

□壽則爰日之誠

有所紓益感

神功於無窮矣

皇清嘉慶 拾捌年

喜月吉日

敬献

盛京奉天府

地載門外

小北関

元發鐸爐

金火匠人張士興

丁巳月吉日

成造

すなわち、この鉄製の鐘は、嘉慶十八年（1813年）七月、瑯瑯城が黒龍江左岸にあったころ、黒龍江副都統ムテンゲ（穆騰額、Mutengge）によって、その町にあった関帝廟に寄進されたものであり、製造は瀋陽地載門外の張士興によるものであった。ムテンゲとは、グワルギヤ（瓜爾佳、Guwalgiya）氏、満洲正白旗人で、嘉慶十四年（1809年）に黒龍江副都統、同二十四年に阿勒楚喀副都統に任じられた人物である。

鐘がつくられた嘉慶十八年、清朝は天理教徒の乱に対応を迫られている時期であった。そのための救援部隊が黒龍江城（瑯瑯城）からも送られることになった。結果、翌年それら黒龍江地方から送られた討伐隊は天理教徒の首領の一人李文成を敗死させるなど多大な成果をあげ、ムテンゲ自身も恩賞を受けている（『黒龍江志稿』卷三十一、武備志、兵事）。また、ムテンゲが黒龍江副都統に任命された1809年は、まさに間宮林蔵が黒龍江下流域の「偵察」を行った年である。また、ロシアの極東進出もますますその速度をはやめ、清朝は逆に衰退への道をたどる、いわば転換点ともいうべき時代であった。

かつての清朝の領土、現ロシア・アムール州の州都ブラゴヴェシチェンスク教育大学考古学博物館に保管される「泰山石敢當」等、また同市郷土誌博物館に所蔵されるムテンゲの寄進した関帝廟の「鉄鐘」は、今までこの地が置かれた政治状況の中でまったくその存在すら知られていなかった。突然登場したこれら「歴史遺物」は、清朝史上、ひいては中ソ関係史上重要な意味をもつものと考えてよいであろう。

（加藤直人）



写真 8-1 ブラゴヴェシチェンスク郷土誌博物館保管鉄製の鐘の銘文（部分）

第9章

アムール河口からサハリンへ（2011年8月）

はじめに

2000年、ロシア科学アカデミーの船をチャーターして、アムール川（中・下流域）を実際に下り調査を実施した。その調査の概要については、別途公開をしている（本書第4章、細谷良夫「アムール川下流域の旅（2000年8月）」を参照）。本稿は、その調査を受けるかたちで2011年8月にアムール下流域からサハリンにかけて現地踏査を実施した際の記録である。本調査は、東北アジアにおける交易路（陸路・水路）による交流が、現地先住「民族」や自然環境といった条件によってどのようにいかに規定されていたのか、また、その交易システムを中核とした現地社会構造はどのように形成され、継承・展開されていったのかという問題について検討することを目的として実施された。また、本研究は、科学研究費補助金（基盤研究B「18-19世紀北・東北アジアにおける交易路と交易システムの研究」研究代表者：加藤直人・日本大学文理学部・教授）を受けて実施されたものである。

今回の調査では、上記の目的のほか、2000年の調査で得られた情報の再確認と経年変化の状況、かつアムール河口からサハリンへの交通路および交通手段の確認等を対象とする目標も含んでいたが、結果的に、サハリン北部の北樺太石油株式会社等、我が国の戦前権益企業の現状を含む、サハリンにおける近代日本の産業遺産の跡を確認することにもなった。

現地踏査の参加者は、科研メンバーの加藤直人（日本大学）、江夏由樹（一橋大学）、華立（大阪経済法科大学）、柳澤明（早稲田大学）、松重充浩（日本大学）、楠木賢道（筑波大学）、杉山清彦（東京大学）、広川佐保（新潟大学）、そして、研究遂行のための情報提供者としてこの地域を研究する村上勝彦（東京経済大学）を加えた9名である（所属はいずれも調査時点のもの）。

1 アムール川下行とニコラエフスク

2011年8月22日

13時30分、成田空港にてウラジオストク航空XF8830便にチェックイン。15時15分、搭乗。機内は満席。15時37分、動きだし、15時50分、離陸。順調に飛行し、17時56分、ハバロフスク空港に着陸した（現地時間19時56分。以下、現地時間）。夕食後、20時38分、インツーリストホテルに到着する。

8月23日

10時、歩いて、ホテル周辺の「史跡」等を回る。まずレーニン運動公園。ここは以前魚市場があり、中ソ友好時代の50年代まで、中国からビザなしで魚を売りに来ていたという。公園入口の門には、いまだに鎌とハンマー、星といったソ連時代のマークが残って

いる。ここには入らずに、アムール川の方に向かって歩く。10時18分、小さな碑が立てられていたので、今回の調査に通訳兼案内者として同行したロシア人に聞くと、チカーロフ В. П. Чкалов という名の飛行士の記念碑だという。かれは仲間2人とロシア製ツポレフの АНТ-25 機で、モスクワからアメリカまで無着陸で飛んだのだという。当時、それは世界記録だったが、証明できなかったため、その栄誉はフランス人に持って行かれたとのこと。

10時35分、展望台に。ここからはアムールの流れがよく見える。天気もよく、中国方面の山並みまではっきりと見える。この展望台の前に立つのが、ムラヴィヨフ・アムールスキー Н. Н. Муравьев-Амурский の像である【写真 9-1】。1891年に立てられたが、やがてレーニン像に変わり、のちにまたアムールスキーに変わったという。ロシアの政治の流れを示すようでもしろい。それを証明するように、最近、ハバロフスクでは大きなロシア教会の建築が相次いでいる。

11時10分、地方誌博物館前に置かれた大砲を見学。17世紀の砲も並べられているが、実物かどうかは不明。そのあと同博物館に入る。展示は以前見たときとなんら変わっていない。ただ、新館ができていて、1階が主としてハバロフスク地区の生物、鉱物等を取り扱う自然史博物館のかたち、2階は、子供たちが昔のロシア人住居に入ることができるように工夫された「体験型」の展示がなされている。夏休み中とて親子連れの来場が多かった。次いで、近くにある軍事史博物館に行き、外に展示されたミグ 17 ジェット戦闘機、自走砲、戦車等を見る。

13時20分、同館を出る。昼食後、14時55分、溥儀が以前収容されていた建物（現在、市第3医院）に着く【写真 9-2】。ここも以前来たことがあるが、大きく変化したところは見当たらなかった。15時15分、出発。15時30分、日本人墓地に着く。ハバロフスク市の中心墓地内にあり、のちに立てられた日本語の墓石もみられる。15時45分、出発。16時5分、シベリア鉄道のアムール鉄橋に着く。橋の下には、古い鉄橋の一部と蒸気機関車や古い客車などが展示されている。橋を往復して当地のアムール川の全容を見る。この鉄橋は長さ 3,900m あるという。市内に戻り、レーニン広場に面した書店でハバロフスク地方南東部の詳細地図を購入する。

ホテルに戻り、18時42分、チェックアウト。夕食後、駅に向かう。ハバロフスク駅前には以前よりかなり整備されたが、ハバロフの像は以前のままであった。跨線橋を渡って3番線へ、コムソモリスク・ナ・アムーレ Комсомольск-на-Амуре 行きの夜行 667 番列車の第11号車7号席に乗る。4人1室のコンパートメント。2番線には以前乗ったことがあるウラジオストク行き特急オケアン号が停車している。20時45分、出発。

8月24日

7時、コムソモリスク・ナ・アムーレ駅に着く【写真 9-3】。アムール川沿いの鉄道はここが終着となる。7時15分、マイクロバスに乗り、7時20分、ヴォスホード Восход ホテルに着く（10年前に船で来たときには、このようなきれいなホテルはなかった気がする）。われわれの列車には、同じ車両（11号車）に、日本の某省関係者とその荷物が積まれていたが、おそらく、シベリア抑留犠牲者関係のものであろう。このホテルで昼食を積み、これから乗る船のチケットをもらう。波止場に向かう途中、日本人抑留犠牲者鎮魂の碑にお参りをする【写真 9-4】。

7時50分、港に着く【写真 9-5】。このあたりはあまり変化しておらず、10年前を思い出す。8時5分、水中翼船に乗りこむ【写真 9-6】。ここからニコラエフスク・ナ・アムーレ Николаевск-на-Амуре（以下、ニコラエフスク）まで、船賃は2,600ルーブルとい

う高額であるが、途中で降りる人を含め、満席であった。

8時28分、出航。船はきわめて快調に進む。そのスピードは、以前、科学アカデミーの船（ラドガ号 Ладога）をチャーターして調査をしたときは雲泥の差である。アカデミーの船でアムールを下っていたとき、颯爽として走るこの水中翼船の姿を羨望の気持ちでながめたことを思い出した。なつかしい景色をみながら、10時55分ごろ、ディリンスキー Дыринский 中州（1809年に間宮林蔵が清朝官員と会った「デレン」の地と想定される）を過ぎ、11時36分、キセリョーフカ Киселёвка に停船。次いで12時5分、ツインメルマノフカ Циммермановка に停船する。ここでは浮棧橋が村のはずれに設けられている。おそらく、船の喫水が関係しているのであろう。

13時10分、ソフィースク Софийск に停船。やがて、アムールは新旧の水路に分かれる。新アムール川に入った我々が水中翼船は、13時45分、マリインスコエ Мариинское の浮棧橋に着く直前にキジ湖の西端をかすめる。キジ湖は水深が浅く、10年前も中に入ることができなかった。14時30分、ブラヴァ Булава、15時25分、ボゴロツコエ Богородское に停船。10年前にも調査したこの地では、かなりの乗り降りがあった。このあたり街は、この水中翼船（と普通定期船）以外に外部との交通手段がない。16時34分、スサーニノ Сусанино、17時5分、懐かしのティル Тыл に着く【写真9-7】。このティルには明代に永寧寺が建てられ、その碑文（現在、ウラジオストク郷土誌博物館等蔵）が、河沿いに聳える崖上に立てられていた。この碑は間宮林蔵も実際に船上から確認している。10年前はその地に立って調査を行ったが、今回は、定期船での移動ゆえに上陸することができず、河の上から写真だけ撮る。17時44分、タフタ Тахта、18時32分、最後の停船場インノケンティエフカ Иннокентьевка に着く。ここでかなりの人々が降りる。

19時45分、ニコラエフスクの水中翼船専用棧橋に到着【写真9-8】。僚船がすでに停泊していたので、その横に着け、僚船内を横切って棧橋に降りる【写真9-9】。20時10分、セヴェル・ホテル Гостиница "Север"に到着。

8月25日

街は10年前ととりたてて大きな変化はみられないが、新しい商店やレストラン等が作られるなど、町が活性化しているような気がする。筆者（加藤）は、体調不良のため調査に参加できなかったが、当日の調査については、杉山氏よりいただいたデータおよび参加者の方々の情報によると、以下のようであった。

9時20分、まず車で市街を北から見下ろすスタート・スキー場に上った。10時に山を下り、同10分に市役所前の郷土誌博物館に着く。本郷土誌博物館の建物は尼港事件の時に焼け残った3棟の建物のひとつで、以前は映画館であり、事件後に島田商会の店舗となった。島田商会時代に2階を増築したので、1階が煉瓦造、2階が木造であるという。予め同館訪問を伝達していたので、地元紙の記者が日本学者団来訪ということで取材に来ていた。図録などを購入後、ナターリヤ Наталья Генриховна Гребенник 女史の解説で見学する。1階の展示スペースは小さく、剥製など自然科学の1室のみであった。2階は歴史・民族で、ニコラエフスク市ティル地区のヌルカン永寧寺の発掘資料も展示されており、パネルには故アルテミエフ博士の写真もあった。パネルが主だが1920年の尼港事件のコーナーもあった。

13時30分にいったんバスで出発、近くのアルメニア料理レストラン・エレブニで昼食。14時30分に店を出て郷土誌博物館近くにまた戻り、近隣の北方民族文化センターを訪ねた。まずセミナー室でウリチ人のイリーナ女史から魚皮細工についてのレクチャー

を受ける。魚皮なめしは本来ナナイ・ニヴフ Нивх (ニヴヒ) の領分で、それも近年廃れたため、習得・復興したとのこと。ついで小さな展示室を見学し、こちらはニヴフ人の館員アレクサンドラ女史の説明を聞いた。ニコラエフスク地区はもはやナナイではなくニヴフの地域のため、展示も説明も基本的にニヴフに関するものだった。ただし、展示のほとんどはパネルか模型・近作である。

1 時間ほどの見学で 15 時 45 分に出、16 時に近くの日本領事館跡に移動。尼港事件で石田領事一家以下追い詰められた日本人が自決を遂げた惨劇の舞台である。今は何もない代りに別のものも建っていないが、国防省の土地になっている。今回は、朝から案内していただいたエレナ女史（元博物館員・教師）が予めアレンジしてくれていたため見学に問題はなかった。

16 時 15 分にもう一つの事件前の建築である 3 階建ての洋館に移動する。建物にはめ込まれたパネルによれば、「1920 年 3 月に、この地域にソヴィエト政権を確立するための会議が行われた建物」らしい。同 30 分には事件時の日本軍兵舎に行く。この兵舎はもとロシア軍の施設として建てられたもので、1918 年に干涉軍として入った日本軍に明け渡され、兵舎として使用されていた。いずれも煉瓦造りの立派な建物で、今も偉容を誇っているのは驚きである。同 45 分に三度博物館前に戻り、今度は浜手を散策。市の建設者・提督ネヴェリスコイの上陸地に建てられたという記念碑やネヴェリスコイの銅像をはじめ、いくつかの記念碑・モニュメントがあった。小さい町なので、実は今日の見学地もスキー場を除いてバスがなくても回れる範囲で、17 時 45 分に歩いてホテルに戻った。

8 月 26 日

8 時 40 分、出発。ニコラエフスクから東に向かって進む。9 時 4 分、パトハ Патха 川に着く。鮭の類やチョウザメが上ってくるらしい。この時期、夥しい数の産卵を終えたカラフトマスが川岸にたくさん打ち上げられ、異臭を放っている。ここは連合国干涉戦争のときに日本軍が占領したところであるという。

9 時 10 分、出発。途中の川でカラフトマスの遡上を見る。ここは、10 年前に来て、やはりカラフトマスの遡上（絨毯のように見えた）を見たところであった。峠を越えて、10 時 15 分、オゼルパーフ Озерпах 村に着く【写真 9-10】。ここも以前来たところで、前回の調査の終着地であった。11 時ごろ、全員救命胴衣（ハバロフスクからはるばると持ってきた）を着けて、2 艘の小さなモーターボートに分乗する【写真 9-11】。この付近の水深はかなり浅いようで、大規模な刺し網漁が行われている【写真 9-12】。岬をいくつか周り、11 時 35 分ごろ、プイル Пуир 村に着く【写真 9-13】。

この村はもと漁業コルホーズで、現在は組合を結成して生産を行っている。ただ、今年は漁期の末まであと 1 ヶ月に迫っているのに、まだ鮭・鱒漁の許可が出ないのだという（鮭・鱒以外の魚種、たとえば鯰等の漁については個人漁獲が許され、その制限はないが、生業として成り立たない）。国家が管理する漁獲量の割り当てが、投機集団の手の中にあり、その関係で許可がおりないのだろうという。通常であれば、この村の漁獲量は、許されているのは刺し網だけであるが、500～1,000 トンにのぼるという。モーターボートで通り過ぎた「刺し網」も、この村のものであろう。

プイルはニヴフ人の村で、現在でも人口 280 人のうち約 30%を占めるという。着船したところから 5 分ほど歩き、組合のドミトリーに着く【写真 9-14】。2 階に落ち着く。

昼食後、プイル村を散策することにする。男の子たちがわれわれについてきて、景色の良いところを案内してくれるという。崖上の見晴らしのよいところを 3 箇所連れて行って

くれた。そのひとつからは、遠くサハリンの姿が見える。

16時10分、村に戻り、その中心なる公民館（文化センター）に着く。なかには簡単なニヴフ民族衣装、手芸品等がならべられている【写真 9-15】。そのひとつに、蝦夷錦の断片があった【写真 9-16】。近隣の老婦人から寄贈されたとのこと。これはなかなか貴重なものである。30分ほどそこにいて、近くの宿舎に引き揚げる。

19時17分、夕食。宿の主人に何か書いてくれと頼まれ、楠木氏に教えていただいた康熙の『皇輿全覧図』にこの村の名前が載っていることなどを記す。宿舎（組合のドミトリ）のベッドは、例のロシア製のグニャグニャ。たまらず、床に寝具をおろして直に寝ることにする。11時すぎに就寝。

2 韃靼海峡横断とオハの町

8月27日

7時起床。夜来の雨もあがり、朝靄が出ている。荷物を整理し、9時、救命胴衣をつけて、港（といっても船着き場）に行く。小型モーターボートが3台ならんでいる【写真 9-17】。その1台にバゲージを積み、その餘の2台に5人ずつ乗り込む（乗り込む前に落水したときの笛を吹く訓練をする）。操縦するのはデルスウ・ウザーラのような風貌のおそらくニヴフ人。

9時30分、われわれの船を先頭に出発。朝靄も晴れ、風もなく天気も良好。まずアムール川の流れを横断（淡水）【写真 9-18】、やがて水に泡が浮いてきて塩の香りがするようになる。これが間宮海峡、すなわち海の水が入っているところである。約1時間かかるといわれていたが、時速約37kmから38kmで快適に進み、10時15分、わずか45分でサハリン島の西岸ルポロヴォ Луполово 村の砂浜に着く【写真 9-19】。

この地は、間宮林蔵が到達した北限で、『東韃地方紀行』では、ナニヨー村と記されている。モーターボートの船長が、近年日本人が立てた碑文に案内してくれる。海岸からすこし登ったところに花崗岩のきわめて小さな碑があり、間宮林蔵の顕彰が記されていた【写真 9-20】。

上陸地点に戻ると、巨大な6輪野外トラック「カマズ Камаз」をバスに改造したもの（どうやら普通にバスとして使われているらしい）が砂浜に降りてくる【写真 9-21】。この「バス」に乗って、10時50分、出発。天気はすこぶる良いがきわめて蒸し暑い。「バス」には、当然冷房などではなく、天井のベンチレータを開けて暑さをしのぐ。サハリン北部の土壤は多く砂地で、水はけもよくないようで、昨夜の雨の影響かいたるところで水たまりができています。それをよけるように「バス」は走るが、右に左に、上に下に揺れに揺れる。時に細い道に入り、天井のベンチレータから葉っぱが入ってきたり、枝が窓に激しくこすれたりするなど、とんでもない移動である。以前、中国極北のオロチョン人の村大楊樹に行ったときに、やはりデコボコ道で苦労したが、今回はその比ではない。走るスピードは人が歩くよりすこし速い程度である。

12時30分、10分ほど休憩。道の脇に生えている松の実、コケモモ、シクシャ шикша（日本のガンコウランに近い種類）などをつまむ。足下には青白い色をしたトナカイ苔が広がっている。すこし走って12時55分、溪流に出る。ピャーヌイ・クリューチ（酔っぱらいの泉）である【写真 9-22】。色は鉍物質か植物質かわからないが黒河付近を流れる黒龍江の水のように黒い。魚の姿は確認できなかった。ウォッカの瓶がかなり転がっていたところを見ると、ここは運転手または道路工事人夫たちの格好の憩いの場であったので

あろう。ルポロヴォ村からの道は改修中であるのか建設途中（または放棄？）であるのかはわからないが、溪流には通渠が設けられ、一部道路と覚しき土盛りもできている。また、現道路の脇には電柱（通信線？）がうち捨てられている。

15 時 30 分、揺られに揺られてそろそろ我慢の限界に近づいたとき、南北縦貫道とぶつかった。ここで休憩をとる。いままで 5 時間近く走って 2～3 台の車しか出会わなかったのに、ここではランドクルーザーが砂煙を上げて高速で南に下っていく。15 時 55 分、出発。ここからはすこし道もましになる。ただやはり路面はかなり荒れている。

17 時 45 分、石油の採掘場所にさしかかる。石油を汲み上げる機械（中国東北ではこの機械を「叩頭機」と呼ぶ）が音を立てて上下に動いている【写真 9-23】。現在動力は電気モーターを用いている。設置されたばかりのようで、「叩頭機」の周りには溝が掘られ、水がたまっている。近くにはガス井戸もあり、最近この地域が資源開発の対象となっているようである。オハ Оха の街に入るすこし前から道の整備が進み、やがて舗装道路となる。

小さな町をいくつか過ぎ、19 時 5 分、オハの街に入る。19 時 12 分、8 時間以上の悪路との戦いをともにした「バス」を降りる。夕食後の 21 時ごろ、サテリット・ホテル Гостиница “САТеллит” に到着。外見は普通の集合住宅と何の変わるどころはなく、看板がなければホテルとは気がつかない。このホテルは、“САТеллит” という名前からわかるように、“CAT” すなわちサハリン航空の関連企業である。

8 月 28 日

9 時 15 分、出発。オハ市第 6 学校の先生がガイドとして市内各地の説明をしてくれる。

オハの名の起こりであるが、先生の話では、これに関しては 2 つの伝説があるという。1 つは次のようである。オハの街には、ニヴフ、オロキ、ウィルタ、エヴェンキやトゥングース人などが住んでいたが、そのエヴェンキがトナカイを飼っていて、その内 1 頭が原油の湧いているところで足が抜けなくなった。オハとはエヴェンキ語で「悪い」ところという意味だという。この説をとるとオハは満洲語でいう「ehe」ということになるだろう……加藤。第 2 の説は、トナカイ遊牧民がお湯を沸かそうとしたところ、水がくさくて飲めない、それで「オハ（悪い）」といった。第 1 と第 2 に共通するのは、オハが「悪い」という言葉からきたということである。「悪水」といったところが語源なのかもしれない。

ホテルのすぐ近くに元レーニン広場（現在は石油採掘業者広場）がある。巨大なディスプレイでは、朝のニュースが放映されている。ただ、見る人は誰もいない。広場の前には森があり、その先には文化宮がある。この森と文化宮の間に「ひっそり」とレーニンの像が立っている。シベリアはいまでも共産党の力が強いのか、それとも古き時代への郷愁なのか、ハバロフスク、ニコラエフスク、ここオハ等、レーニン像が数多く残されている。ちなみに広場の名は変わったが、この広場を横切る通りの名称は「レーニン通り」として残っている。説明していただいた先生の話では、現在のオハ市の人口は約 25,000 人。以前は 50,000 人を越えていたが、1995 年 5 月 28 日に巨大な地震（ネフチェゴルスク Нефтегорск 大地震）があり、死者 2,800 名をはじめとして、街は大きな被害を受けた。その結果、避難と称してハバロフスク等のところに出て帰ってこないものも多かったという。当時の仮設住宅（かなり立派なカナダ製）が現在も使用されるなど、その地震の傷跡は深い。ちなみにニヴフ人は市内に 1,200 人住んでいるという。

先生の話では、この地で石油が発見されたのは、実は偶然であったという。1882 年、ニコラエフスクにあったイワノフ商会（主に毛皮を取り扱っていた）の社員であったヤクト人のフィリップ・パヴロフが、この地を調査していて、シャマンが黒い水を使って火

を燃え上がらせているのを見た。この黒い水が石油であることを知ったパヴロフは、ニコラエフスクにレポートを送った。石油の採掘には国の許可が必要であったが、イワノフはパヴロフの報告を受けて申請をした。ただ、その2年後イワノフは亡くなり、親戚のゾートフが1887年に許可を得ることになった。この年、当時のサハリンの中心地アレクサンドルフスク・サハリンスキー-Александровск-Сахалинский にあった犯罪人収容所の所長レーニンバウムもサンクトペテルブルグに行き、この申請を行ったが果たせなかった。ただ、石油は思ったほどとれず、1925年まで事業としては成立しなかった。この地にロシア革命の影響が及んだのは1925年ごろである。

1929年から1944年まで、この油田は日本が利権を有すことになった。日本の石油企業（北樺太石油）が採掘を行い、チェス盤（碁盤の目）のように区画を区切って作業を実施した。これにはロシア人労働者だけでなく、朝鮮人労働者も参加した（朝鮮人たちの居住区もあった）。第2次世界大戦のさなか、ソ連領北サハリンでこのような日本人による石油採掘が行われていたこと自体、きわめて興味深いことである。ロシア人がオハに入ってくる場合、ウルクト湾を経由することが多く、いまはほとんど人が住んでいないがこの場所にダーミルという街が作られた。この街では、1934年でも、テント生活をするロシア人も多く、シツツェヴァヤ通り（「布（更紗）」通り）と呼ばれた。

10時40分、火力発電所の近く（天然ガスで発電をしている）、オハの街に入るところに大きなモニュメントが作られている。ここからは現在石油を採掘しているところがよく見える。実は、この場所は、オハでもっとも古く採掘が開始されたところで、日本の北樺太石油株式会社が権益をもとに事業を展開していた場所である。モニュメントの向かいの丘には同社の事務所が立っていたという（木造のためいまはなにも残っていない）。ロシア国旗の色に塗られた発電所の横を通り、現存するもっとも古い油井に向かう。10時50分、1910年に掘られたというポンプに着く【写真9-24】。現在は、復元された高さ4.8mの木造建屋のなかに保存されている。青く塗られた小さなポンプは、現在でも封印を解けば、石油が噴出するはずであるとのこと。ポンプの深さはわずか13m。地表からきわめて浅いところで石油層があることがわかる。この周りは小さな谷で、1本の小川が流れている。河の土手からは石油がにじみ出しており、流れる水にも原油が浮いている【写真9-25】。1928年には6,000トンの採掘量があったとのことである。11時15分、そこを出てすこし走ったところで停まる。いまでも原油がわき出しているところである。

ここから車で2分、11時23分に鉄道の跡に着く。以前、1960年代にオハとノーグリキ Ноглики の間に軽便鉄道が敷かれていた。1995年のネフチェゴルスク大地震で大きな被害を受け、一部区間で動いてはいたが、1年前にすべて廃止された（4年前までレールがあったというが、現在は枕木だけが残るのみである）。営業当時はスピードが遅く、我々が調査に用いた車のドライバーの話では、1980年代、子供のころにこの「軽便」に乗ったが、お茶をいれるのに、一旦列車から飛び降りて雪をすくい、再び飛び乗って沸かして飲んだとのこと。真偽の程は不明であるが、世界一遅い列車としてギネスブックに登録されていたこともあるらしい。オハからサハリン東北部の町ノーグリキまでの260kmを2日かけて走ったという（現在、定期バスであれば6時間、ランドクルーザーであれば4時間で到着する）。もとのオハ駅の近くに蒸気機関車が1台展示されている【写真9-26】。線路の幅は狭く、特別につくられた車輛であることがわかる。スピードよりも牽引力重視の4動輪の機関車で、1952年、戦後にロシアで作られたものである。

11時40分、出発。11時42分、ウルクト湾がみえるところで停車。写真を撮る。すぐに出発。11時52分、1995年ネフチェゴルスク大地震の慰霊碑に着く。ここは以前学校で、地震のあと、2001年に慰霊碑とその隣に石油会社の寄付によりロシア教会が建てら

れた【写真 9-27】。教会ではちょうど日曜日のミサが行われており、多数の女性信者が集まっていた（女性の礼拝時間だったのかもしれない）。地震の起こった 5 月 28 日には、慰霊の会があるという。12 時 3 分、出発。12 時 10 分、ホテルに着く。荷物をピックアップして最終的に整理。13 時、ホテルをチェックアウト。

13 時 10 分、昨日夕食をとったレストランで昼食。食事中、店の女主人がこんなものがあるといくつかの資料と写真を持ってきてくれた。彼女の母方のおじボリス・アンドレエヴィチ・セミョーノフ Борис Андреевич Семёнов 氏の資料で、彼が 1938-39 年に日本の北樺太石油株式会社に営業として勤務していたときの在職証明書【写真 9-28】、給与手帳【写真 9-29】、写真、のちにレニングラード攻防戦に加わり行方不明（戦死）となった通知書【写真 9-30】（三角形に折られている。一般的にソ連では当時このように伝達されたという）等であった。資料のひとつには、北樺太石油株式会社と「片山清次」という日本語のゴム印が捺されていた【写真 9-31】。

片山清次は、明治 18 年（1885）12 月 1 日生まれ。海軍機関学校第 16 期。以後、同校卒業後は機関畑を歩き、大正 13 年（1924）には、戦艦比叡の機関長（海軍機関中佐）、昭和 9 年（1934）に、佐世保軍需部長（海軍少将）に補せられ、昭和 11 年 12 月 22 日に予備役に投ぜられた。『帝史編纂資料（その 1）』（帝史資料蒐集小委員会編、1959 年）によれば、北樺太石油株式会社の取締役社長は代々海軍の将官で、常務取締役も、ほとんどが海軍の将官であった。片山は 1941 年 6 月 23 日から逝去する 1944 年 4 月 30 日までの約 3 年間、同社の常務を務めていた（野田富男「燃料国策と石油資源開発 ―北樺太石油株式会社と帝国石油株式会社―」『経済学研究』第 70 巻第 4・5 合併号、2004 年 4 月、九州大学経済学会）。

14 時 25 分、レストランを出て、14 時 38 分、オハ市博物館に着く。女性館長が案内をしてくれる。午前中、ガイドの話によると、日本仏寺の梵鐘があるとの話であったが、実際にみると半鐘であった。「東京市／梅田製」とある【写真 9-32】。館長に対し、この鐘は火災等の発生を近隣に周知させるための鐘であると説明した。入口近くに置かれた大きなロシア正教式釣り鐘は、ヤロスラヴリ Ярославль で教会用に作られたものであるが、宗教的な行為が禁じられたソ連時代、サハリンでは港で「半鐘」として用いられたのだという【写真 9-33】。歴史、民族展示室では、当地方に暮らす人々の用いていた道具、丸木舟、宗教的な器具、熊祭り用の木の太鼓等が展示されている。なかでも、数枚の「乾隆通宝」はこの地と清朝との関わりを考える上できわめて興味深い。1 枚のみ満文の面が展示されており、「yuwan boo」すなわち「宝源局」の製造であることがわかる。来館記念のバッジをもらい、外に出る。

15 時 10 分、出発。オホーツク海へと向かう。いくつかのラグーンがあり（すでに海との出口が塞がれて湖化したものもある）そのひとつを越えると海に面した崖の上に出る。トーテムポールのような木が 1 本立つ丘からは遠く北サハリン最北端のシュミット岬の山々が見える【写真 9-34】。ドライバーによれば、このようにきれいに見える日は少ないのだという。16 時 5 分、出発。16 時 30 分、南の町外れにあるオハ空港に着く。もと軍用空港であったらしいが、現在は民間に開放され、サハリン航空がハバロフスク、ユージュノサハリンスク等へ運航している。

17 時 7 分、サハリン航空 XF0782 便にチェックイン。17 時 44 分、離陸。眼下にはオホーツク海と樹海がひろがる。ルポロヴォ村からオハに向かう際に通った道などが見える。途中ノーグリキを過ぎたところから雲がかかりはじめ、下界の視界を遮るようになる。19 時 28 分、ユージュノサハリンスク空港に着陸。19 時 38 分、空港の外に出る。ここで、函館高専の中村和之氏に紹介いただいたシェガイ・チャマン（徐載萬）氏という日本語が堪

能な韓国系ロシア人の方が我々を待っておられ、案内をお願いすることになった。

シェガイ氏も含めて一緒にマイクロバスで宿泊先のガガーリンホテルに向かう。シェガイ氏は豊原の師範学校を卒業し、中学校で地理の教員をしていたという。20時30分、ホテルに到着。

3 ユージュノサハリンスク

8月29日

9時10分、出発。9時38分、勝利広場。T-34型戦車が正面に飾られ、両脇を2台の野砲が固めている典型的な戦勝記念広場である。次いで旧樺太神社に向かう。ちょうどこの日、対日戦の勝利を記念して、旧神社前では、新兵たちのパレード（訓練？）が行われていた。9時45分、樺太神社跡に着く【写真 9-35】。このあたりは鬱蒼とした森林であるが、以前は王子製紙が一次林を伐採してはげ山になっていたらしい。たしかに昔の同神社の写真をみると森林はみられない。現在の森林は、王子製紙の技師が植林したものであるという。唐松、榎松等の北方系針葉樹のほかに、ドイツからヨーロッパ唐檜を移植したらしい。現在はかなり成長したその唐檜の姿がみられる。神社は戦後ソ連によって完全に破壊され、その廃墟の前には一棟の立派なビルが建っている。その通称「フルシチョフの家」は、ソ連時代の高級官僚宿泊所であったという【写真 9-36】。現在は、水産会社のオフィスとして利用されている。雑草が生い茂る神社跡の左奥には泉が湧いており、ここに水を汲みに来る人がいるようである。その泉の上にはコンクリート製の小さな校倉造りの建物が残っている【写真 9-37】。神社の旧宝物殿であるという。

10時14分、出発。10時17分、樺太護国神社跡に到着する【写真 9-38】。現在は市立病院の裏にあり、病院の敷地を経由してでなければ行くことができない。伝染病隔離病棟の裏、森に囲まれて、以前狛犬が置かれていた台が2つ見える【写真 9-39】。この狛犬は、現在サハリン郷土誌博物館の玄関脇に保存されている。当時の階段を上り、藪こぎをして奥に進むと、コンクリートの土台があらわれる。規模はそれほど大きくないが、かなり立派な社である。コンクリートのほかに、社殿には花崗岩が建築資材として利用されている。終戦後2〜3年後にソ連軍によって破壊されたという。10時47分、旧樺太神社参道までくると、パレード訓練はまだ続いていた。旧樺太神社参道脇には、チェチェンやアフガニスタンで戦死した本市出身者の祈念碑が建てられている。

10時58分、出発。11時10分、旧樺太守備隊司令官邸に着く【写真 9-40】。木造2階建ての洋館で現在は緑色にペイントされている。日本時代のままであるという。今は、ユージュノサハリンスク市軍裁判所として使用されている。

11時28分、出発。旧真岡通り（現サハリン通り）西にある西大橋に行く【写真 9-41】。鈴谷川にかかるこの橋は、日本時代につくられ、鉄とコンクリートでできている。このあたりがロシア人最初の入植の村ができたところで、そのたもとには、1882年にウラジミロフカ村が建設されたという碑が建てられている。11時51分、出発。11時57分、ユージュノサハリンスク市最大の繁華街にある旧拓殖銀行ビルに着く【写真 9-42】。終戦後、1995年まで国立ユージュノサハリンスク銀行として用いられてきたが、建物の価値に気づき保存が決定した。数年の修理計画、作業ののち現在は美術館として機能している。

12時10分、出発。10時19分、レーニン像にほど近い旧豊原駅（ユージュノサハリンスク駅）に着く【写真 9-43】。高速道路が発達していないサハリンでは、鉄道と飛行機

が地方を結ぶ大きな動脈である。ただ、時刻表をみると、同駅発の列車が1日7本と数はそれほど多くない【写真 9-44】。駅にはキオスクがあり、韓国のものでなく、日本の食品なども売られているのはおもしろい。サハリンの鉄道は狭軌で、ロシアの機関車はそのまま使うことができない。ソ連占領後、満洲から機関車を持ってきたが、満洲は標準軌なので使用できなかったという話を現地で聞いた。駅前には戦後日本から輸入した D51 型蒸気機関車第 22 号機が静態保存されている【写真 9-45】。また、駅構内の一角には、ソ連製の旧型蒸気機関車や、日本製ラッセル車、日本から寄贈されたキハ 58 型ディーゼルカー【写真 9-46】などが展示されている。

12 時 52 分、出発。12 時 56 分、旧豊原市役所庁舎に着く【写真 9-47】。意外に質素な木造 2 階建ての建物は、ピンク色に塗られ、現在はビジネスビルとして用いられている。14 時 25 分、旧樺太医専の建物に着く【写真 9-48】。現在は軍人病院とのこと。戦前日本の医専の建物が残っているのはきわめて珍しいのではないかと思われる。14 時 32 分、出発。14 時 40 分、町外れにあるサハリン国立大学 Сахалинский государственный университет に着く【写真 9-49】。この考古教育博物館にお邪魔する。ここは、考古学専攻の学生を教育するために作られた博物館で、研究活動も同時に展開しており、すでに活動開始から 3 年になるという。館長のワシリエフスキー A. Васильевский 教授に、杉山氏から『満族史研究』第 8 号（サハリン在住研究者の発表報告を掲載）を、私から同誌の第 9 号（最新号）を寄贈した。ここには先土器時代、新石器時代、青銅器時代等の遺物のほか、山丹貿易関係の資料や中国銭（宋代のもの）などが展示されており、小さいが充実した内容を有する博物館であった。

15 時 35 分、出発。15 時 54 分、ホテル近くのスーパーショップへ。ここで「2008 年版：サハリン州地図」Сахалинская область, общегеографическая карта、『真岡・ホルムスク写真集』Память города, Маока-Холмск を購入。16 時 14 分、店を出て、近くにあるガガーリン公園（旧豊原公園）に行く【写真 9-50】。きょうは月曜日だが、夏休み終了前の駆け込みか、結構子供連れが多い。公園の中心にはかなり大きな池がある。戦前、王子製紙グループが中心となり、中心を流れる溪流を堰き止めて作った人造池で、往事は「王子が池」と呼ばれていた。池の畔、戦前からある一本松の近くに、日本語で「王子が池」と刻された碑が立てられている【写真 9-51】。天然ガスプロジェクトの関係の業務でサハリンに滞在された大坊公民氏のブログ「Samovar の旅」（<http://samovar.sakura.ne.jp/> 2021 年 9 月 18 日確認）によれば、この碑文は倒れてしかも左部分が割れていたとのことである。今回、われわれがみたものは、割れた部分が接着され、台座の上に立てられている姿であった。この数年のうちに修復されたのであろう。石碑の裏面には池の由来が書いてあり、王子製紙グループ 3 社の寄付によって作られたことがわかる。碑文の最後に「昭和十一年八月豊原町長高橋弥太郎」の文字が見える。

16 時 50 分、出発。17 時 3 分、マーケット（中央市場）に行く。観光客（といっても数少ないが）が、海産物等を物色している。杉山氏と市場近くにあるゴローヴニン Головин, В. М. の胸像を見に行く【写真 9-52】。17 時 44 分、市場を出る。17 時 47 分、昼に見た駅近くの鉄道記念物展示場に着くもすでに閉まっており、外からの見学となった。

8 月 30 日

7 時 40 分、起床。荷物を最終的に整理し、9 時 45 分、チェックアウトして出発。10 時、サハリン郷土誌博物館に着く【写真 9-53】。和洋折衷のこの建物は、1937 年に完成した旧樺太庁博物館で、長春の関東軍司令部とよく似ている。本来は 11 時開館だが、特

別料金を支払い、早く開けてもらった。入り口脇にある狛犬は、昨日調査した護国神社に置かれていたもので、ドアには菊の紋章がデザインされている。ソ連時代、またロシアでこのようなものを作るわけがないので、日本時代からの残存であろう。博物館の展示は、動植物、流刑人とその施設、考古、歴史、「民族」、ソ連時代、現在のサハリン（石油、天然ガス等の資源豊かな島とその開発）がわかりやすく解説されている【写真 9-54】。博物館のガイドも要領よく説明をしてくれる。われわれは主として、「民族」と歴史の展示に時間をさいた。

11時、外に出ると、日本の95式軽戦車の姿が見える【写真 9-55】。砲身はすでに破壊されているが、かなり完全なかたちで残っている。ただ、かなり派手な迷彩にペイントされている。また、戦車の近くにセメント作りの「奉安殿」があった【写真 9-56】。おそらくどこかからここへ移築されたものであろうが、ご真影を納めたこの施設は日本国内ではなかなか見ることができなくなってしまった。外地にこの施設が残されているのは興味深い。

11時10分、出発。11時30分、空港に着く。ウラジオストク航空 XF8815 便にチェックイン。13時2分、搭乗。乗客はきわめて少なく、30人ほどしかいない。13時32分、離陸。東北上空ごろから雲が晴れ、福島原発の上を通過して南下する。ユージュノサハリンスクは稚内とさほど変わらない距離にあるので、飛行機は国内線なみの時間で成田に近づく。15時32分（日本時間 13時32分）、成田空港に着陸した。

（加藤直人）

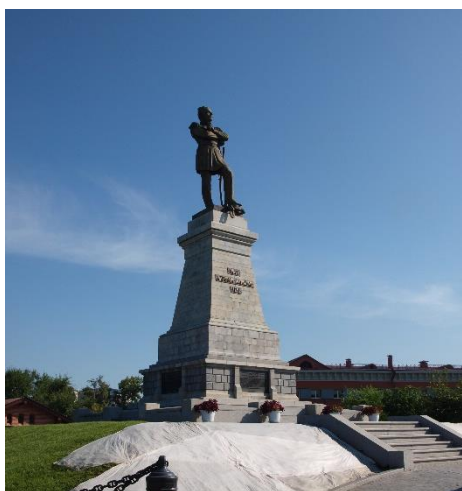


写真 9-1 ムラヴィヨフ・アムールスキの像



写真 9-2 溥儀が収容されていた市第 3 医院



写真 9-3 コムソモリスク・ナ・アムール駅



写真 9-4 日本人抑留犠牲者鎮魂の碑



写真 9-5 コムソモリスク・ナ・アムール港



写真 9-6 水中翼船（2000 年撮影）



写真 9-7 ティルの断崖遠望



写真 9-8 船着き場に停泊する水中翼船



写真 9-9 栈橋近くにある錨と
ネヴェリスコイの像



写真 9-10 アムール河口に位置するオゼルパーフ村



写真 9-11 オゼルパーフ村から乗った
モーターボート



写真 9-12 大規模な刺し網



写真 9-13 プイル村全景



写真 9-14 宿泊した漁業組合のドミトリー



写真 9-15 文化センターの民族衣装展示



写真 9-16 文化センターに展示されている蝦夷錦



写真 9-17 靺鞨海峡横断に用いたモーターボート



写真 9-18 靺鞨海峡を疾走するモーターボート



写真 9-19 サハリンに着岸。
遠くに対岸のプイル村方面が見える



写真 9-20 間宮林蔵到達最北端の地碑



写真 9-21 カマズのバス



写真 9-22 ピアンヌイ・クリューチ



写真 9-23 オハ近郊で石油を汲み上げる「叩頭機」



写真 9-24 オハ現存最古の油井



写真 9-25 原油の浮く小川



写真 9-26 オハ・ノークリキ間の軽便鉄道用機関

車

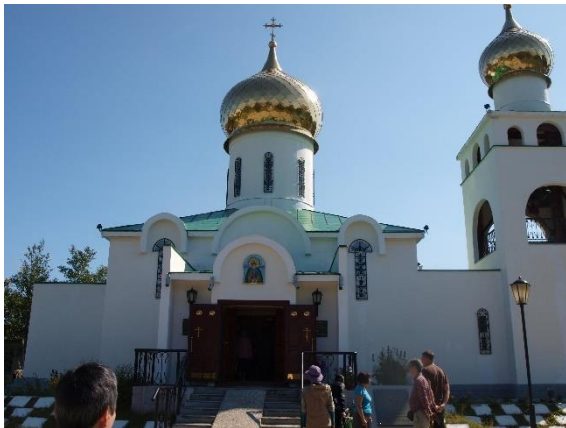


写真 9-27 地震犠牲者慰霊の教会



写真 9-28 北樺太石油株式会社の在職証明書

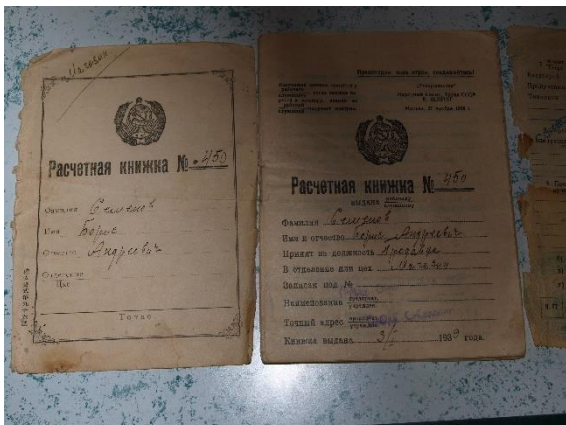


写真 9-29 北樺太石油株式会社の給与手帳

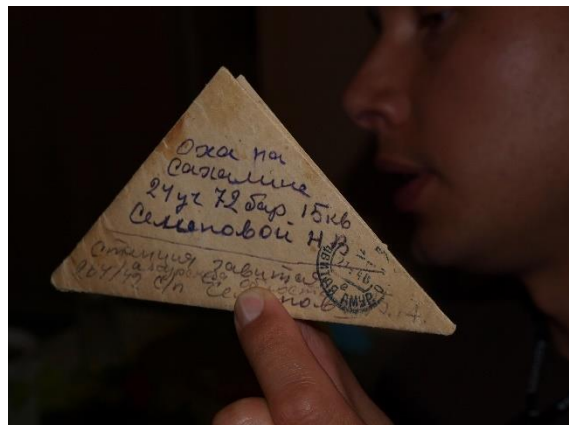


写真 9-30 行方不明の通知書

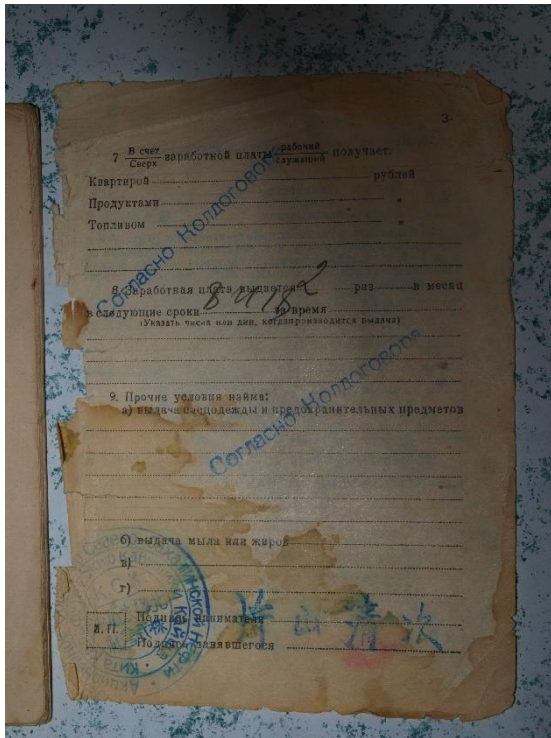


写真 9-31 片山清次名のゴム印が押された
給与手帳の一部



写真 9-32 オハ市博物館に残る「半鐘」



写真 9-33 ロシア正教式釣り鐘



写真 9-34 遠くシュミット岬方面を望む



写真 9-35 樺太神社跡



写真 9-36 「フルシチョフの家」



写真 9-37 樺太神社の旧宝物殿



写真 9-38 樺太護国神社跡



写真 9-39 樺太護国神社の狛犬が置かれていた台



写真 9-40 旧樺太守備隊司令官邸



写真 9-41 日本時代建設の西大橋



写真 9-42 旧拓殖銀行ビル



写真 9-43 ユージュノサハリンスク駅

РАСПИСАНИЕ ДВИЖЕНИЯ ПАССАЖИРСКИХ ПОЕЗДОВ			
Номер поезда	Станция отправления	Время отправления	Станция назначения
1	ЮЖНО-САХАЛИНСК	20-30	НОГЛИКИ
967	ЮЖНО-САХАЛИНСК	08-50	ТЫМОВСК
601	ЮЖНО-САХАЛИНСК	15-20	НОГЛИКИ
121	ЮЖНО-САХАЛИНСК	18-20	ТОМАРИ
6121	ЮЖНО-САХАЛИНСК	17-35	БЫКОВ
6001	ЮЖНО-САХАЛИНСК	08-20	НОВО-ДЕРЕВЕНСКАЯ
6003	ЮЖНО-САХАЛИНСК	16-00	НОВО-ДЕРЕВЕНСКАЯ

写真 9-44 ユージュノサハリンスク駅時刻表



写真 9-45 D51 型機関車。1949 年に日本から輸入した 30 両のうちの 1 両（第 22 号機）



写真 9-46 JR 東海から寄贈された旧キハ 58 493 気動車



写真 9-47 旧豊原市役所庁舎



写真 9-48 旧樺太医学専門学校



写真 9-49 サハリン国立大学



写真 9-50 ガガーリン公園



写真 9-51 王子が池の碑



写真 9-52 ゴローヴニンの胸像



写真 9-53 サハリン郷土誌博物館



写真 9-54 日本・ソ連の国境界碑



写真 9-55 旧日本軍 95 式軽戦車



写真 9-56 博物館敷地に移設された奉安殿

著者略歴

細谷 良夫 (ほそや よしお)

1935 年生、公益財団法人東洋文庫研究員、東北学院大学名誉教授

主要編著書：『鑲紅旗檔 乾隆朝Ⅱ』東洋文庫、1993 年（共編）。『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』山川出版社、2008 年。

主要論文：「布山総兵官考」『神田信夫先生古稀記念論集 清朝と東アジア』山川出版社、1992 年。「烏真超哈（八旗漢軍）の固山（旗）」『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院、1994 年。「清朝中期の八旗漢軍の再編成」『清代中国の諸問題』山川出版社、1995 年。

加藤 直人 (かとう なおと)

1951 年生、公益財団法人東洋文庫研究員、日本大学名誉教授

主要著書：『清代文書資料の研究』汲古書院、2016 年。

主要論文：「清代起居注の研究」『東方学』第 57 輯、1979 年。「八旗の記録が如何に史書となったか」『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』山川出版社、2008 年。

柳澤 明 (やなぎさわ あきら)

1961 年生、公益財団法人東洋文庫研究員、早稲田大学文学学術院教授

主要編著書：『内国史院檔 天聰五年』Ⅰ・Ⅱ、東洋文庫、2011・2013 年（共訳注）。

主要論文：「17～19 世紀の露清外交と媒介言語」『北東アジア研究』別冊 3、2017 年。「キャフタにおける清朝の「官営隊商」について—“bederge 回子”の活動—」『史滴』36、2014 年。

清朝の史跡をめぐってⅡ—アムール流域篇—

2022 年 3 月 15 日

非売品

著 者	細谷 良夫
発行者	東京都文京区本駒込 2-28-21 公益財団法人 東洋文庫 畔柳 信雄
印刷者	東京都新宿区東五軒町 3-19 モリモト印刷株式会社
発行所	東京都文京区本駒込 2-28-21 公益財団法人 東洋文庫

本書は公益財団法人東洋文庫に対する 2021 年度文部科学省補助金の一部によって刊行されたものである。

ISBN 978-4-8097-0311-9